

2024年度

大学院シラバス

情報コミュニケーション研究科

明治大学大学院

明治大学校歌

明治大学校歌

児玉花外

作詩

山田耕筰

作曲

一

白雲なびく駿河台

眉秀でたる若人が

撞くや時代の暁の鐘

文化の潮みちびきて

遂げし維新の栄になふ

明治その名ぞ吾等が母校

明治その名ぞ吾等が母校

二

権利自由の揺籃の

歴史は古く今もなほ

強き光に輝けり

独立自治の旗翳し

高き理想の道を行く

我等が健児の意気をば知るや

我等が健児の意気をば知るや

三

靈峰不二を仰ぎつつ

刻苦研鑽他念なき

我等に燃ゆる希望あり

いでや東亜の一角に

時代の夢を破るべく

正義の鐘を打ちて鳴らさむ

正義の鐘を打ちて鳴らさむ

目 次

2024 年度大学院学年暦・行事予定	2
授業時間割	3
人材養成その他教育研究上の目的	4
「入学者受入」、「教育課程編成・実施」、「学位授与」方針	5
修士学位取得のためのガイドライン	8
博士学位取得のためのガイドライン	11
履修登録について	15
科目ナンバリングについて	17
他大学大学院の聴講について	18
博士前期課程	
修了要件、履修にあたっての注意事項	21
授業科目及び担当者	22
シラバス	29
博士後期課程	
修了要件、学位請求までのプロセス	139
授業科目及び担当者	140
シラバス	142
交通遅延発生時の授業等の措置について	162
大規模地震等災害発生時の対応について	162
大地震発生時の避難マニュアル（駿河台キャンパス）[学生用]	165

◎2024年度 大学院学年暦・行事予定（2024年4月～2025年3月）

<春学期>

時間割・履修関連書類配布	2024年 4月1日(月)～
【学生証有効期限・通学区間】証明(学生証裏面シール)更新	
各研究科新年度ガイダンス	
入学式	4月7日(日)
授業開始	4月10日(水)
研究論集提出締切日(9月発刊分)	4月11日(木)15:00まで
履修届・履修計画書提出(M・D)	4月16日(火)～4月18日(木)
WEB履修登録(Mのみ)	4月16日(火)13:00～4月18日(木)9:00
個人別時間割表公開	4月20日(土)～4月23日(火)
履修修正期間	4月20日(土)～4月23日(火)
休日授業実施日	4月29日(月)[昭和の日]
臨時休業(休講)日	5月1日(水)・5月2日(木)
研究論集予備登録(2月発刊分)	6月24日(月)～6月28日(金)15:00
休日授業実施日	7月15日(月)[海の日]
授業終了日	7月22日(月)
夏季休業	8月1日(木)～9月19日(木)
研究論集発刊	9月6日(金)

※予定は変更されることがあります。変更や詳細については、Oh-o! Meiji等でお知らせします。

<秋学期>

授業開始	9月20日(金)
履修修正期間	9月20日(金)～9月26日(木)
研究論集提出締切日(2月発刊分)	9月20日(金)15:00まで
休日授業実施日	9月23日(月)[振替休日]
修士論文予備登録	10月1日(火)10:00～10月4日(金)15:00
休日授業実施日	10月14日(月)[スポーツの日]
大学祭週間(全日休講)	10月31日(木)～11月6日(水)
創立記念祝日	11月1日(金)
大学祭(明大祭・生明祭)	11月2日(土)～11月4日(月)
休日授業実施日	11月23日(土)[勤労感謝の日]
臨時休業(休講)日	12月24日(火)
冬季休業	2025年 12月25日(水)～1月7日(火)
修士論文提出日	1月8日(水)10:00～1月10日(金)15:00
創立記念日	1月17日(金)
臨時休業(休講)日	1月18日(土)
授業終了	1月23日(木)
修士論文面接試験	2月1日(土)
研究論集発刊	2月28日(金)
修了通知	3月初旬
研究論集予備登録(9月発刊分)	3月10日(月)～3月14日(金)15:00
修了式	3月26日(水)

※予定は変更されることがあります。変更や詳細については、Oh-o! Meiji等でお知らせします。

◎授業時間割

〔全キャンパス共通〕

学部・大学院

専門職大学院（法務研究科、会計専門職研究科）

【月～土曜日】

時 限	時 間 帯
1 時 限	9：00～10：40
2 時 限	10：50～12：30
3 時 限	13：30～15：10
4 時 限	15：20～17：00
5 時 限	17：10～18：50
6 時 限	19：00～20：40

※経営学研究科博士前期課程マネジメントコースは平日夜間および土曜日に授業を実施しています。
授業時間は下記の表のとおりとなります。（土曜日は上記の表の時間帯です。）

時 限	時 間 帯
マネジメント 1 時限(M 1 時限)	18：00～19：40
マネジメント 2 時限(M 2 時限)	19：50～21：30

〔駿河台キャンパス〕

専門職大学院（ガバナンス研究科、グローバル・ビジネス研究科）

【月～金曜日】

時 限	時 間 帯
1 時 限	9：00～10：30
2 時 限	10：40～12：10
3 時 限	13：00～14：30
4 時 限	14：40～16：10
5 時 限	16：20～17：50
6 時 限	18：55～20：25
7 時 限	20：30～22：00

※ガバナンス研究科、グローバル・ビジネス研究科の平日授業は90分で授業を実施します。

人材養成その他教育研究上の目的

〔情報コミュニケーション研究科〕

高度情報社会の進展に伴い社会や社会が抱える問題は複雑化の一途をたどっているにもかかわらず、アカデミズムは、それに対する十分に有効な処方箋を提示するには至っていない。情報コミュニケーション研究科では、各分野の専門家が問題意識や提案を持ち寄り、「情報コミュニケーション」という視点から、複雑化した高度情報社会を様々な角度から検討した後に再び自己の専門領域にフィードバックできる「場」を創設することを目的とする。すなわち、教育の面においても研究の面においても「パラダイム転換型」又は「パラダイム創出型」の研究科となることを目指す。

【情報コミュニケーション学専攻】

高度情報社会の諸課題に取り組むために、情報コミュニケーション学専攻では、既存の専門研究によっては全体像がとらえきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準を持った研究者や実務家の養成・輩出を目指す。そのために、専門的なディシプリンの習得と並行して、早い段階から学生を研究プロジェクトに参画させ具体的な問題への学際的アプローチを実践させる。博士前期課程では、そうした学際的・領域横断的な視野と高度な専門的知識を有する人材を養成し、研究者に限らず社会に活躍しうる社会人の養成も目指す。博士後期課程では、それぞれの研究分野の更なる深化を図りつつ、学際的・領域横断的な視野をもって自らの専門分野で活躍できる研究者を養成する。

明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

「入学者受入」、「教育課程編成・実施」、「学位授与」方針

【入学者受入方針】

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程は、既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった 21 世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる判断基準を有する実務家の育成を目指し、また研究者育成の基礎となるこれらの方法論と知識の獲得をはかります。このため、本研究科では主に次のような資質や意欲を持つ学生を積極的に受け入れます。

- (1) 学部で学んだ情報コミュニケーション学をより高度に発展・展開したいと希望する者。
- (2) 自分の問題意識との関係で、従来の学問体系を踏まえて、さらに学際性を修得したいと考えている者。
- (3) すでに公務員として行政に携わっている者、NGO・NPO、民間企業等の各種団体に属する者をはじめとする社会人で、自己の職業上の体験から、問題の本質を見極めたい、あるいは少しでも実際に生かし役立てることのできる解決法を探りたいと希望し、当研究科を修了した後にその成果を再び自己の職業に生かしたいと考えている者。

以上の求める学生像に基づき、学内選考入学試験、一般入学試験、外国人留学生入学試験、社会人特別入学試験、3年早期卒業予定者入学試験を実施し、入学者選抜を行いません。

なお、修得しておくべき知識等の内容・水準は以下のとおり求めます。

- (1) 人文・社会分野や自然科学における研究活動に必要な基礎的な知識。
- (2) 学際的な分野に取り組める柔軟な思考力及び広い視野。

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程は、既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった 21 世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもった研究者や実務家の育成を目指しています。このため、本研究科では主に次のような資質や意欲を持つ学生を積極的に受け入れます。

- (1) 21 世紀の諸問題に関心を持ち、学際的・領域横断的に把握・定式化する意欲があり、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる技能を有すると認められる者。
- (2) 「情報コミュニケーション」という視座を理解し、複雑化した高度情報社会への処方箋や問題意識を研究科の「場」に持ち寄って、スタッフや他の学生とともに、パラダイムの転換や創出に果敢に挑戦しようとする気概にあふれ、協調したコミュニケーションが実践できる者。

以上の求める学生像に基づき、一般入学試験、外国人留学生入学試験を実施し、入学者選抜を行いません。

なお、修得しておくべき知識等の内容・水準は以下のとおり求めます。

- (1) 博士前期課程の教育・研究を通して、博士後期課程での研究活動を行なえる十分な研究能力及び応用的な知識。
- (2) 博士論文執筆に向けて必要となる理論的及び実証的な分析力。

【教育課程編成・実施方針】

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程の教育理念・目標である、新しい学際性・学域横断性に基づいた教育研究を実現するために、以下に示す方針に基づきカリキュラムを編成しています。

- (1) 本研究科が目指す学際性は、社会科学・人文科学の融合を基盤とした上で、自然科学との協働を構築し得る教育・研究環境によって保証されます。このため本研究科で設けられる講義科目群は、社会、文化、人間の3つの伝統的研究領域をもとに、情報、メディア、コミュニケーションの3つの専門領域にわたり横断的に配置され、先進的な学際空間が形成されています。
- (2) 知識を応用し総合的に問題解決や政策立案ができる能力を育てるための、基礎的なリテラシーやスキル、特定の研究分野で要求される技能の習得や資格の取得を支援するための研究サポート・プログラムを設置します。

以上の教育プログラムを通して、大学院生に専門的な知識を教授し、また、指導教員と副指導教員の連携による指導を行ないます。

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程では、本研究科博士前期課程の教育理念・目的に加え、「先端研究」「ネットワーク化」の2点を重点課題とし、「学際」研究を具体化するために、以下に示す方針に基づきカリキュラムを編成しています。

- (1) 本研究科が目指す学際性は、社会科学・人文科学の融合を基盤とした上で、自然科学との協働を構築し得る教育・研究環境によって保証されます。このため本研究科で設けられる講義科目群は、社会、文化、人間の3つの伝統的研究領域をもとに、情報、メディア、コミュニケーションの3つの専門領域にわたり横断的に配置され、先進的な学際空間が形成されています。
- (2) 研究者として自立するために必要な基礎的なリテラシーやスキル、特定の研究分野で要求される技能の習得や資格の取得を支援するための研究サポート・プログラムを設置します。

【学位授与方針】

【博士前期課程】

情報コミュニケーション研究科博士前期課程は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に問題解決できる研究者や実務家を輩出することを目指しています。この人材養成目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、かつ、学業成績ならびに学位論文から、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対し修士（情報コミュニケーション学）の学位を授与します。

- (1) 既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもつことのできる資質や能力。
- (2) 高度に専門的な業務に従事するために必要な研究能力及びその基礎となる学識。

【博士後期課程】

情報コミュニケーション研究科博士後期課程は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に問題解決できる研究者や実務家を輩出することを目指しています。この人材養成目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、かつ、学業成績ならびに学位論文から、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対し博士（情報コミュニケーション学）の学位を授与します。

既存の専門研究によっては全体像が捉えきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準をもつことのできる高度の資質や能力。

明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

修士学位取得のためのガイドライン

【本研究科で授与する学位】

情報コミュニケーション学専攻 修士（情報コミュニケーション学）
Master of Information and Communication

【修士学位請求の要件】

在学期間

本研究科博士前期課程に2年次以上在学し、所定の研究指導を受けていること。

単位要件

- (1) 本研究科の博士前期課程においては、32単位以上を修得しなければならない。
- (2) 指導教員が担当する専修科目12単位（講義2科目4単位、演習4科目8単位）を必修とする。
- (3) 専修科目のほか、本研究科の授業科目の中から12単位以上を修得しなければならない。
- (4) 本研究科の授業科目のほか、他研究科（専門職学位課程を含む）及び単位互換協定による他大学大学院の授業科目は、10単位を限度として修了に必要な単位数に含めることができる。
- (5) 研究科間共通科目は、4単位を限度として修了に必要な単位数に含めることができる。
- (6) 上記に定める単位を修得し、その成績が平均「B」以上でなければならない。

研究指導

以下に掲げる本研究科学位請求までのプロセスを経ている者とする。

【学位請求までのプロセス】

研究指導体制

博士前期課程では、修士論文の完成・提出を目的とする。

学生は毎年次、指導教員の担当する「専門演習」（1年次、春学期・秋学期各2単位）、「特論演習」（2年次、同）を履修し、研究報告等を重ねることで、各自の研究計画が具体化されていく。また、指導教員と研究計画に基づいた履修計画を立て講義科目を履修することにより、研究内容への理解が深まっていく。さらに、研究サポート演習科目の履修は、研究方法論の修得を可能にする。

各年次におけるプロセスは以下のとおりである。

1年次

(1) 指導教員・副指導教員決定

大学院入学後、出願時に志望した指導教員と相談のうえ、2名以内の副指導教員を選定することができる。希望する場合は、7月中旬に届け出ることとする。

2年次

(1) 修士論文作成計画書・研究計画中間報告書の提出

2年次の4月に、指導教員に修士論文テーマ、論文構成、参考文献表等の「修士論文作成計画書」を提出する。また、指導教員に「研究計画中間報告書」を提出し、面談を行う。

(2) 中間発表会の実施及びフィードバック

所定の時期に中間報告書に基づいた中間発表会を実施する。また、中間発表会の結果について、1～2週間後、聴講教員からのフィードバックを行う。

【修士論文に求められる要件】

本研究科の修士の学位論文は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握し、相応の質・量、内容・水準を備え、以下の点に留意したものでなければならない。

- (1) 研究目的・研究意義
- (2) 論文の独創性
- (3) 研究テーマの学問的意義・適切性
- (4) 論文の体系性
- (5) 先行研究の調査
- (6) 理論的分析・実証的分析
- (7) 論旨・主張の統合性と一貫性
- (8) 研究倫理の遵守
- (9) 形式的要件

【修士学位請求論文等の提出書類・提出期日】 ※詳細は「修士学位請求論文」等の作成・提出要領参照

予備登録

- (1) 予備登録時期は論文提出年度の10月上旬とする。
- (2) 論文提出予定者は、必ず指導教員と相談のうえ、論文題名（仮題でも可）を登録すること。
- (3) 予備登録時に「論文作成・提出要領」の他、「修士学位請求書」及び論文用「扉（表紙）」をホームページからダウンロードすること。

論文提出

- (1) 論文提出時期は論文提出年度の1月上旬とする。
- (2) 詳細は「論文作成・提出要領」にて確認すること。
- (3) 論文提出受付は、指定提出日・指定時間内のみとする。提出締め切り時間経過後は、理由の如何を問わず受け付けられないので、十分注意すること。

提出書類等

- (1) 「修士学位請求書」 【本学所定様式】
必要事項を記入のうえ、指導教員の承認印をうけ提出すること。
※この請求書に記載された論文題名を正とする。
なお、論文題名に副題がある場合は、ダッシュ（－）で最初と最後を括ること。
- (2) 「修士学位請求論文」（下記①～④により完成されたもの）
 - ①用紙：A4判
図表・資料もA4判で作成すること。
 - ②字数：原則として40,000字以上（指導教員の指示に従うこと。）
※必ずページ番号を付すこと。
 - ③書式：制限なし（指導教員の指示に従うこと。）
※縦書きの場合は2段組にする等、読みやすいよう配慮すること。（論文要旨も同じ）
 - ④論文用「扉（表紙）」
必要事項を記入のうえ、論文の表紙とすること。
- (3) 「修士学位請求論文要旨」
A4判、3,000字程度で作成し、表紙には論文題名、所属研究科名・専攻名・氏名等を明記すること。

【学位審査の概要】

指導教員による承認

修士学位を請求しようとする者は、修士論文提出要件を満たし、指導教員から当該論文の内容・水準・形式について確認及び指導を受け、指導教員が修士学位請求に十分な水準であるとの判断をした場合に、論文を提出することができる。

研究科委員会での受理

研究科委員会は、学位請求論文に対して受理を決定し、主査1名及び副査2名以上（副査には他研究科・他大学等の研究者を選定することがある）の審査委員を選出し、審査委員会を設置する。

審査委員会による面接試問

- (1) 審査委員会は、当該学位請求論文を中心としてこれに関連ある科目について、試問の方法により審査を行う。審査終了後、審査委員会は研究科委員会に合否の提案とその理由を記した審査結果報告書を提出する。
- (2) 面接試問は論文提出年度の2月上旬に実施する。

研究科委員会の合否判定

研究科委員会は審査委員会からの報告をもとに、審議のうえ合否を決定する。研究科委員会で合格と認められた者には、修士学位が授与される。

【合否判定後の論文の取扱いについて】

審査に合格した論文は、本学大学院で保管し、教育・研究のために活用する。

明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

博士学位取得のためのガイドライン

【本研究科で授与される学位】

情報コミュニケーション学専攻

博士（情報コミュニケーション学）

Doctor of Information and Communication

【博士学位請求の要件】

在学期間

- (1) 本研究科博士後期課程に3年以上（見込を含む）在学し、所定の研究指導を受けていること。
- (2) 本研究科博士後期課程に3年以上在学し、所定の研究指導を受けた後退学した者にあつては、博士後期課程入学の日から起算して8年以内に限り、研究科委員会の許可を得て再入学し、課程博士の学位を請求できるものとする。

単位要件

- (1) 指導教員による必要な研究指導を受けなければならない。
- (2) 必要な単位数を修得し、博士論文の審査に合格しなければならない。
- (3) 「研究論文指導」12単位、「情報コミュニケーション学学際研究」12単位の計24単位を必修とする。

研究業績

情報コミュニケーション研究科の『情報コミュニケーション研究論集』などに論文を計3本以上掲載されること。原則としてその内の1本は、学外の査読付学術雑誌とし、博士学位請求論文に関連する学術論文であること。

研究倫理教育の受講

本学が定める研究倫理教育を受講していること。

研究指導

以下に掲げる本研究科学位請求までのプロセスを経ているものとする。

【学位請求までのプロセス】

研究指導

入学時に決定している指導教員が研究指導の責任を負う。

指導教員による必要な研究指導を受けたうえ、博士学位請求論文を作成する。

- (1) 第1年次
 - ①博士前期課程で学んだ基礎知識及び入学時に決定した指導教員の助言に基づき、博士学位請求論文作成のための3カ年の研究計画を立てる。
 - ②学生は学際共同研究プロジェクトに、事前に提出された研究計画書に基づいて指導教員の指導のもと参加できる。
- (2) 第2年次
 - ①学年はじめの所定の時期までに「博士論文作成計画書」を指導教員の許可を受け本研究科に提出する。同計画書には、博士論文のテーマ、問題設定とアプローチ方法、論文執筆に向けた作業工程等を記載するものとする。

②学年はじめの所定の時期までに「研究計画中間報告書」を指導教員の許可を受け本研究科に提出する。指導教員は、学生の研究計画の到達状況を確認し、面談を行うものとする。

(3) 第3年次（留籍者含む）

①博士学位請求予定者は、学年はじめの所定の時期までに「博士学位請求予備登録票」および「研究計画最終報告書」を指導教員の許可を受け本研究科に毎年次提出する。指導教員は、学生の研究計画の到達状況を確認し、面談を行うものとする。

②当該年度に博士学位の請求をしない者は、学年はじめの所定の時期までに「博士論文執筆計画書」を指導教員の許可を受け本研究科に提出する。同計画書には、博士論文のテーマ、問題設定とアプローチ方法、論文執筆に向けた作業工程等を記載するものとする。

③博士学位請求予定者は、所定の時期に実施される事前報告会で、学位請求論文内容を報告する。教員、学外研究者、大学院生等からコメントを受け、論文内容をより深化させるものとする。

④博士論文提出資格を承認された学生は、所定の時期までに、学位請求論文を提出する。

【博士論文に求められる要件】

本研究科の博士の学位論文は、21世紀の諸問題を、学際的・複数領域横断的に把握・定式化し、有効な学問・政策的ポートフォリオを自ら案出できる資質や能力をもつものと認められなければならない。また、相応の質・量、内容・水準を備え、以下の点に留意したものでなければならない。

- (1) 研究目的・研究意義
- (2) 論文の独創性
- (3) 研究テーマの学問的意義・適切性
- (4) 論文の体系性
- (5) 先行研究の調査
- (6) 理論的分析・実証的分析
- (7) 論旨・主張の統合性と一貫性
- (8) 研究倫理の遵守
- (9) 形式的要件

【博士学位請求時の提出書類・提出期日等】

提出書類

(1) 学位請求論文

(2) 論文要旨

A4判、4000字程度（英文の場合、1000ワード程度）

(3) 学位請求書※指導教員の署名を得ること。

【本学所定様式】

論文題名は邦文には英文訳を、欧文には邦文訳を付すこと。

（欧文が英文以外の場合、英文訳も付すこと。）

(4) 履歴書

【本学所定様式】

(5) 業績書

【本学所定様式】

(6) 業績書に記載した研究業績に関する資料

(注) 上記の提出書類に加え、「明治大学学術成果リポジトリ登録・公開許諾書」を所定の方法で提出しなければならない。

提出期日等

- (1) 提出期日：4月1日～10月末日
- (2) 提出先：大学院事務室情報コミュニケーション研究科
- (3) 審査手数料：不要

【学位審査の概要】

指導教員による承認

博士学位を請求しようとする者は、博士論文提出資格を満たし、指導教員から当該論文の内容・水準・形式について確認及び指導を受け、指導教員が博士学位請求に十分な水準であると判断をした場合に、論文を提出することができる。

研究科委員会による受理審査

研究科執行部は提出された学位請求論文について、提出資格と当該論文の形式要件について確認を行う。研究科執行部が提出資格と論文の形式要件を満たすと判断した場合、研究科委員会を開催し、当該論文の受理について指導教員からの推薦をもとに審査し、受理の可否を決定する。

審査委員による本審査

研究科委員会は、学位請求論文としての受理を決定した論文に対して、主査1名及び副査2名以上の審査委員を選出する。

審査委員は、当該学位請求論文を中心としてこれに関連ある科目について、試問の方法により審査を行う。審査終了後、審査委員は研究科委員会に可否の提案とその理由を記した審査結果報告書を提出する。なお、審査委員による審査期間は概ね6ヶ月を標準とする。

学内機関による審査

研究科委員会は審査委員からの報告をもとに審議のうえ投票により可否を決定する。研究科委員会で合格と認められた者は、大学院委員会の承認を経て、博士学位が授与される。

【学位審査等に関わる教員の責務】

審査委員の構成と責務

審査委員は、指導教員のほか、当該論文に関連ある科目の担当教員2名以上（審査のため必要がある場合は、研究科委員会の議を経て、講師又は他の大学院若しくは研究所等の教員等の協力を求めることがある）により構成し、厳正なる学位審査に努めるものとする。

各教員の責務

各教員は、研究科委員会における審査において、当該論文を公正かつ客観的に評価し、当該学位の水準を保つよう努めるものとする。

【博士学位論文の公表】

審査要旨の公表

博士学位が授与された場合は、当該論文の内容の要旨及び審査結果の要旨をインターネットの利用により公表する。

学位論文の公表

博士学位論文は、本学学位規程第22条に準拠してこれを公表しなければならない。

明治大学学位規程 第22条

本大学において博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与された日から1年以内に、明治大学審査学位論文と明記して、当該学位論文の全文を公表するものとする。ただし、当該博士の学位を授与される前に、既に公表したときは、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位を授与された者は、やむを得ない事由がある場合には、本大学の承認を受けて、当該学位論文の全文に代えて、その内容を要約したものを公表することができる。この場合において、本大学は、その論文の全文を、求めに応じ、閲覧に供するものとする。

3 前2項の規定による公表は、本大学の定めるところに従って、インターネットの利用により行うものとする。

※ 「やむを得ない事由がある場合」とは、客観的に見てやむを得ない特別な理由があると本大学が承認した場合をいう。

例 ① 博士論文が、立体形状による表現を含む等の理由により、インターネットの利用により公表することができない内容を含む場合

② 博士論文が、著作権保護、個人情報保護等の理由により、博士の学位を授与された日から1年を超えてインターネットの利用により公表することができない内容を含む場合

③ 出版刊行、多重公表を禁止する学術ジャーナルへの掲載、特許の申請等との関係で、インターネットの利用による博士論文の全文の公表により博士の学位を授与された者にとって明らかな不利益が、博士学位を授与された日から1年を超えて生じる場合

なお、これらの場合においても、やむを得ない事由が解消された際には、速やかに博士論文全文をインターネットで公開しなければならない。

※ 博士学位論文提出にあたり、学位請求者は博士学位論文をインターネットにより公表することについての著作権関係上の諸問題を解消しておかなければならない。

例 ○ 刊行物の場合、出版社の了解を得ておくこと。

○ 引用の図版・写真がある場合、著作権者の同意を得ておくこと。

※ 博士学位論文が、特許などの申請に関連する場合、同申請手続きについては論文提出前に行っておかなければならない。なお、手続き方法等について不明な場合は、指導教員の指示を受けた後、各キャンパスの研究知財事務室に相談すること。

本学及び国立国会図書館における公表

- ・ 博士学位論文の要旨及び全文は「明治大学学術成果リポジトリ」により公表される。
- ・ 明治大学学術成果リポジトリにより公表された博士学位論文の要旨及び全文のデータは、国立国会図書館において利用に供される。

履修登録について

- 1 履修登録 毎年度初めの所定の時期に、履修科目の登録を行う必要があります。この登録を正しく行わなかった場合、受講した科目の単位が認定されないので、注意してください。
- 2 履修計画書の提出 各自の研究計画に基づき、研究指導教員と相談の上、WEBによる履修登録とは別途に履修計画書を提出してください。
- 3 履修登録方法
 - (1) ガイダンス時に、時間割表、履修計画書を受け取ってください。
 - (2) 博士前期課程はWEBにより、博士後期課程は専用の届出用紙により、所定の期間に履修登録を行ってください。なお、WEBによる履修登録の詳細はWEB履修登録要領を参照してください。
 - (3) 履修登録期間後の科目の追加、変更、取消は認められません。
 - (4) 病気その他やむを得ぬ理由によって履修登録期間に手続きができない場合は、事前に大学院事務室まで連絡してください。
 - (5) 所定の単位を取得した者は、履修登録の必要はありません。
 - (6) 履修登録後、個人別時間割表を各自 Oh-o! Meiji システムから、所定の期間に確認してください。この期間を過ぎると修正することはできません。なお、修正は次の場合に限り認めます。その他の場合については、大学院事務室で相談してください。
 - 登録科目の誤り
 - エラーメッセージ記載事項
 - 修了要件不足
 - (7) 他研究科履修をしようとする者は、大学院事務室で該当する研究科の時間割等を確認してください。所属研究科以外の時間割等は、配布できません。
 - (8) 他大学の授業科目を履修する場合は、「他大学大学院の履修の手続」に従ってください。
- 4 個人別時間割表 履修登録後、4月下旬に Oh-o! Meiji システムで配信します。必ず確認してください。
- 5 履修登録スケジュール

履修計画書・時間割表の配布	……………	4月初旬
WEB履修登録・履修計画書の提出	……………	4月中旬
個人別時間割表の確認	……………	4月下旬
履修登録不備の修正	……………	4月下旬
秋学期開講科目履修修正の受付	……………	9月下旬

履修登録スケジュール

各研究科別新入生ガイダンス **4月上旬** ※研究科の日程を確認のうえ出席すること

- 履修計画書・授業時間割表・履修の手引き等の受領、各種事務説明

博士前期課程・修士課程

博士後期課程

指導教員と履修計画について相談のうえ、履修計画書を作成・提出する（締切：4月中旬）

※博士前期課程在籍者は、履修計画書の提出のみでは履修登録を行ったことにはなりません。以下のとおり、履修計画書に記載した科目をシステムに登録する作業が必要です。
※各手続きの日程は、ガイダンス等案内のある「WEB履修登録要領」を参照すること。

※博士後期課程在籍者は履修計画書の他に、「履修届」も提出する必要があります。（商学研究科、教養デザイン研究科を除く。）

※博士後期課程在籍者はWEB履修登録をする必要はありません。

WEB履修登録システムを用いて履修登録を行う

- 登録するのは当該年度に履修する科目のみ
- 明治大学のホームページ上からWEB履修登録ページにアクセス
(携帯電話・スマートフォンは不可)

WEB履修非対応科目を登録する（該当者のみ）

- 「WEB履修非対応科目履修届」を別途作成のうえ提出する
- WEB履修非対応科目（例）
- ・WEBで該当曜日時限に表示されなかった科目
 - ・研究科で履修が認められている学部設置科目

登録期限
4月中旬

個人別時間割表を確認する（4月下旬）

- Oh-o! Meijiシステムの個人別時間割表から、履修科目が正しく登録できているか必ず確認する

履修エラー等がある場合

履修エラー等がなかった場合

履修登録を修正する（4月下旬）

- 履修修正願を別途作成する
- 履修修正期間中に提出する

履修計画書の記載科目が正しく登録できているかを必ず確認！

履修修正後の個人別時間割表を確認する（4月下旬）

- Oh-o! Meijiシステムの個人別時間割表から、登録にエラーがないかを確認する

履修登録完了

科目ナンバリングについて

2020年度のシラバスから、本学の科目ナンバリング制度による科目ナンバーを、各授業科目シラバスに付番しています。この科目ナンバリング導入の目的、概要及び構造については以下のとおりです。

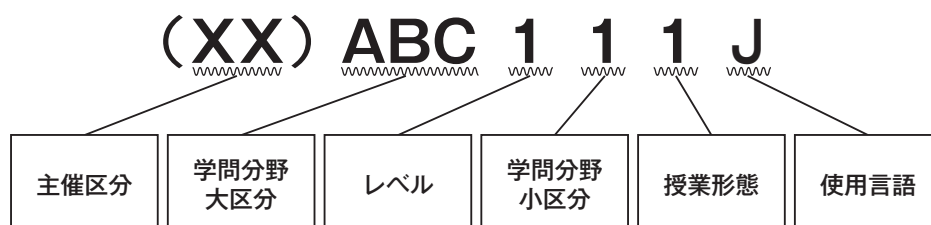
科目ナンバリング導入の目的

明治大学が開講する全ての授業科目を「学問分野」・「レベル」等で分類し、各々に科目ナンバーを付番することで、授業科目個々の学問的位置づけを示すことにより学生の計画的な学修への一助とすること、海外の大学との連携を容易とするためのツールとすること等を目的としています。

明治大学科目ナンバリングの概要及び構造

本大学が開講する全ての授業科目に、以下の科目ナンバリングコード定義に基づき、科目ナンバーを付番します。

<科目ナンバーの構造>



<各ナンバリングコードの定義>

- ① 主催区分コード
当該科目を開講する主催機関（学部・研究科・共通など）をアルファベット2文字で示しています。
- ② 学問分野 大区分コード
学問分野を本学が大きく区分した中で、当該科目が分類される学問分野をアルファベット3文字で示しています。
- ③ レベルコード
当該科目のレベルを数字1文字で示しています。
- ④ 学問分野小区分
本学が大区分として分類した学問分野の中で、さらに分類される分野を小区分として数字1文字で示しています。
- ⑤ 授業形態コード
当該授業の実施形態を数字1文字で示しています。
- ⑥ 使用言語コード
当該授業の教授における使用言語を英字1文字で示しています。

<各コードの詳細>

各ナンバリングコードの詳細及び他学部等の開講科目の科目ナンバーについては、本学ホームページ又は Oh-o! Meiji システムにて確認ください。

<科目ナンバーの例>

(IC) SOC 5 3 1 J

情報コミュニケーション研究科/社会学/大学院（修士・専門職）基礎的な内容の科目/社会システム/講義/日本語
※ 情報コミュニケーション研究科が設置する、社会学—社会システム分野の科目で、日本語により行われる大学院（修士・専門職）レベルの基礎的な内容の科目という意味。

以 上

他大学大学院の聴講について

他大学院との学術的提携・交流を促進し、教育・研究の充実をはかることを目的として、「首都大学院コンソーシアム」を設けています。

他大学大学院科目履修に関わる本学の受付期間 ～4月23日（火）

希望者は大学院事務室にて手続方法を確認してください。また、受入大学の受付期間について各自で確認し、その指示に従ってください。

1. 大学院特別聴講学生制度（単位互換制度）

大学院学生が研究上の必要から、他の大学院（特別聴講学生に関する協定を締結した大学院）に設置されている授業科目を履修して、その履修した単位を所属する大学院に、修了に必要な単位として認定する制度のことです。

現在、情報コミュニケーション研究科では首都大学院コンソーシアムに加盟しています。

2. 「首都大学院コンソーシアム」

詳細は研究科ホームページを参照してください。

情報コミュニケーション研究科

博士前期課程

(授業科目・担当者及び履修方法)

I 修了要件

1. 本研究科の博士前期課程においては、2年以上在学し、32単位以上を修得しなければならない。
2. 指導教員が担当する専修科目12単位（講義2科目4単位、演習4科目8単位）を必修とする。
3. 専修科目（12単位）のほか、本研究科の授業科目の中から12単位以上を修得しなければならない。
4. 専門演習・特論演習の履修は、専修科目としての演習のみ履修することができる。ただし、指導教員及び当該演習科目担当教員の承認を受けた場合は、その他の専門演習・特論演習を4単位を限度として修得することができる。
5. 本研究科の授業科目のほか、指導教員及び当該授業科目担当教員の承認を受けた場合は、他研究科（専門職学位課程を含む）及び単位互換協定による他大学大学院の授業科目を10単位を限度として、修了に必要な単位数に含めることができる。
6. 研究科間共通科目は、指導教員が必要と認める場合には、4単位を限度として、修了に必要な単位数に含めることができる。
7. 単位の修得に際しては、1年次で20単位以上24単位以内を履修することを標準とする。標準とされる履修単位を例示すると次のとおりとなる。

年次	区分	必修	選択	計
		専修科目	講義・演習・研究サポート演習	
第1年次		講義4、演習4	12	20
第2年次		演習4	8	12
計		12	20	32

8. 修士学位請求論文は、指導教員による必要な「研究指導」を受けたうえ、専修科目によって作成・提出するものとする。

II 履修にあたっての注意事項

1. 1年次のはじめに、指導教員の指導のもとに各自の履修・研究計画を立て、2ヵ年分の履修計画書（指導教員の承認欄あり）を提出すること。なお、WEB履修には当該年度の履修科目のみ登録すること。
2. 希望があれば、指導教員の指導のもと、2名以内の副指導教員を選定することができる。その場合には、1年次の7月中旬に届け出ることとする。
3. 修士学位請求論文を提出する者は、2年次のはじめに、「修士論文作成計画書」及び「研究計画中間報告書」を指導教員に提出し、指導教員との面談を行うものとする。また、所定の時期に中間発表を行ったうえ、10月上旬論文題名を予備登録すること。
4. 標準的履修方法は上述のとおり例示したが、各年度4～8単位程度多めに履修することが望ましい。

2018年度以降入学

授業科目及び担当者

※〔M〕はメディア授業科目

(1) 情報・社会系

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
専門演習(公共政策)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(経済学)塚原康博	
専門演習(公共政策)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(経済学)塚原康博	
専門演習(メディア技術と社会)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
専門演習(メディア技術と社会)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
専門演習(情報科学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(工学)山崎浩二	
専門演習(情報科学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(工学)山崎浩二	
専門演習(知的財産法)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)今村哲也	
専門演習(知的財産法)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)今村哲也	
専門演習(現代政治学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)清原聖子	
専門演習(現代政治学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)清原聖子	
専門演習(国際関係論)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(政治学)鈴木健人	2024年度開講せず
専門演習(国際関係論)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(政治学)鈴木健人	2024年度開講せず
専門演習(組織社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術)竹中克久	
専門演習(組織社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術)竹中克久	
専門演習(現代型犯罪と刑法)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)阿部力也	
専門演習(現代型犯罪と刑法)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)阿部力也	
専門演習(経済社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(社会学)中里裕美	
専門演習(経済社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(社会学)中里裕美	
専門演習(開発経済学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術)島田剛	
専門演習(開発経済学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術)島田剛	
専門演習(イノベーションの実証分析)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(経済学)山内勇	
専門演習(イノベーションの実証分析)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(経済学)山内勇	
専門演習(学校社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(教育学)鈴木雅博	
専門演習(学校社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(教育学)鈴木雅博	
専門演習(災害社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(社会情報学)小林秀行	
専門演習(災害社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(社会情報学)小林秀行	
特論演習(公共政策)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(経済学)塚原康博	
特論演習(公共政策)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(経済学)塚原康博	
特論演習(メディア技術と社会)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
特論演習(メディア技術と社会)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
特論演習(情報科学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(工学)山崎浩二	
特論演習(情報科学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(工学)山崎浩二	
特論演習(知的財産法)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)今村哲也	
特論演習(知的財産法)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)今村哲也	
特論演習(現代政治学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)清原聖子	
特論演習(現代政治学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)清原聖子	
特論演習(国際関係論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(政治学)鈴木健人	
特論演習(国際関係論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(政治学)鈴木健人	
特論演習(組織社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術)竹中克久	
特論演習(組織社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術)竹中克久	
特論演習(現代型犯罪と刑法)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学)阿部力也	
特論演習(現代型犯罪と刑法)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学)阿部力也	
専門演習(経済社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(社会学)中里裕美	
専門演習(経済社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(社会学)中里裕美	

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
特論演習(開発経済学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 島田 剛	
特論演習(開発経済学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 島田 剛	
特論演習(イノベーションの実証分析)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇	
特論演習(イノベーションの実証分析)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇	
特論演習(学校社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博	
特論演習(学校社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博	
特論演習(災害社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 ^{博士} (社会情報学) 小林 秀行	
特論演習(災害社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 ^{博士} (社会情報学) 小林 秀行	
専門研究(行動経済学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 ^{博士} (情報コミュニケーション学) 後藤 晶	
専門研究(行動経済学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 ^{博士} (情報コミュニケーション学) 後藤 晶	
専門研究(公共政策)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博	
専門研究(公共政策)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博	
専門研究(メディア技術と社会)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 大黒 岳彦	
専門研究(メディア技術と社会)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 大黒 岳彦	
専門研究(情報科学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二	
専門研究(情報科学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二	
専門研究(知的財産法)Ⅰ[M]	講2	○		—	専任教授 博士(法学) 今村 哲也	
専門研究(知的財産法)Ⅱ[M]	講2		○	—	専任教授 博士(法学) 今村 哲也	
専門研究(国際関係論)Ⅰ	講2	—		—	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人	2024年度開講せず
専門研究(国際関係論)Ⅱ	講2		—	—	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人	2024年度開講せず
専門研究(現代政治学)Ⅰ[M]	講2	○		—	専任教授 博士(法学) 清原 聖子	
専門研究(現代政治学)Ⅱ[M]	講2		○	—	専任教授 博士(法学) 清原 聖子	
専門研究(開発経済学)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(学術) 島田 剛	
専門研究(開発経済学)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(学術) 島田 剛	
専門研究(組織社会学)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(学術) 竹中 克久	
専門研究(組織社会学)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(学術) 竹中 克久	
専門研究(現代型犯罪と刑法)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(法学) 阿部 力也	
専門研究(現代型犯罪と刑法)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(法学) 阿部 力也	
専門研究(経済社会学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美	
専門研究(経済社会学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美	
専門研究(憲法史)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(法学) 田村 理	
専門研究(憲法史)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(法学) 田村 理	
専門研究(イノベーションの実証分析)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇	
専門研究(イノベーションの実証分析)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇	
専門研究(学校社会学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博	
専門研究(学校社会学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博	
専門研究(災害社会学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 ^{博士} (社会情報学) 小林 秀行	
専門研究(災害社会学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 ^{博士} (社会情報学) 小林 秀行	
専門研究(環境行政法)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 清水 昌紀	
専門研究(環境行政法)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 清水 昌紀	
専門研究(ジャーナリズム論)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(法学) 大石 裕	
専門研究(ジャーナリズム論)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(法学) 大石 裕	
専門研究(社会システム論)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(社会学) 赤堀 三郎	
専門研究(社会システム論)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(社会学) 赤堀 三郎	
専門研究(情報法)Ⅰ	講2		—	—		2024年度開講せず
専門研究(情報法)Ⅱ	講2		—	—		2024年度開講せず
専門研究(科学と社会)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(学術) 坂野 徹	
専門研究(科学と社会)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(学術) 坂野 徹	

(2) メディア・文化系

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
専門演習(社会文化史)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(文学) 須田 努	
専門演習(社会文化史)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(文学) 須田 努	
専門演習(メディア社会史)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 江下 雅之	
専門演習(メディア社会史)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 江下 雅之	
専門演習(比較文学・比較文化)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	2024年度開講せず
専門演習(比較文学・比較文化)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	2024年度開講せず
専門演習(表象文化論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
専門演習(表象文化論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
専門演習(ジェンダー論)Ⅰ	演2	—		○	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
専門演習(ジェンダー論)Ⅱ	演2		—	○	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
専門演習(超域文化論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	
専門演習(超域文化論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	
専門演習(宗教と政治)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之	
専門演習(宗教と政治)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之	
専門演習(演劇学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
専門演習(演劇学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
特論演習(社会文化史)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(文学) 須田 努	
特論演習(社会文化史)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(文学) 須田 努	
特論演習(メディア社会史)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 江下 雅之	
特論演習(メディア社会史)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 江下 雅之	
特論演習(比較文学・比較文化)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	2024年度開講せず
特論演習(比較文学・比較文化)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	2024年度開講せず
特論演習(表象文化論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
特論演習(表象文化論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
特論演習(ジェンダー論)Ⅰ	演2	—		○	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
特論演習(ジェンダー論)Ⅱ	演2		—	○	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
特論演習(超域文化論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	
特論演習(超域文化論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	
特論演習(宗教と政治)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之	
特論演習(宗教と政治)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之	
特論演習(演劇学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
特論演習(演劇学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
専門研究(社会文化史)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(文学) 須田 努	
専門研究(社会文化史)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(文学) 須田 努	
専門研究(メディア社会史)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 江下 雅之	
専門研究(メディア社会史)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 江下 雅之	
専門研究(比較文学・比較文化)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	
専門研究(比較文学・比較文化)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭	
専門研究(表象文化論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
専門研究(表象文化論)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(学術) 波照間 永子	
専門研究(ジェンダー論)Ⅰ	講2	—		—	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
専門研究(ジェンダー論)Ⅱ	講2		—	—	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美	2024年度開講せず
専門研究(超域文化論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	
専門研究(超域文化論)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子	

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
専門研究(宗教と政治)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士 (地域研究) 横田 貴之	
専門研究(宗教と政治)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士 (地域研究) 横田 貴之	
専門研究(都市・空間論)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 南後 由和	
専門研究(都市・空間論)Ⅱ	講2		—	—	専任准教授 南後 由和	2024年度開講せず
専門研究(演劇学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
専門研究(演劇学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之	
専門研究(マルチ・カルチャリズム)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士 (人間科学) 時安 邦治	
専門研究(マルチ・カルチャリズム)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士 (人間科学) 時安 邦治	
専門研究(科学史・科学哲学)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 愼 蒼健	
専門研究(科学史・科学哲学)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 愼 蒼健	

(3) 人間・コミュニケーション系

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
専門演習(組織コミュニケーション論)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	2024年度開講せず
専門演習(組織コミュニケーション論)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	2024年度開講せず
専門演習(認知情報論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
専門演習(認知情報論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
専門演習(説得コミュニケーション論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
専門演習(説得コミュニケーション論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
専門演習(家族社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	
専門演習(家族社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	
専門演習(異文化間コミュニケーション)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 根 橋 玲 子	
専門演習(異文化間コミュニケーション)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 根 橋 玲 子	
専門演習(生命論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(薬学) 岩 渕 輝	
専門演習(生命論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(薬学) 岩 渕 輝	
専門演習(人類学と意識科学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 蛭 川 立	
専門演習(人類学と意識科学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 蛭 川 立	
専門演習(現代思想論)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 宮 本 真 也	2024年度開講せず
専門演習(現代思想論)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 宮 本 真 也	2024年度開講せず
専門演習(社会心理学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(教育学) 脇 本 竜太郎	
専門演習(社会心理学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(教育学) 脇 本 竜太郎	
特論演習(組織コミュニケーション論)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	2024年度開講せず
特論演習(組織コミュニケーション論)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	2024年度開講せず
特論演習(認知情報論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
特論演習(認知情報論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
特論演習(説得コミュニケーション論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
特論演習(説得コミュニケーション論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
特論演習(家族社会学)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	
特論演習(家族社会学)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	
特論演習(異文化間コミュニケーション)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 根 橋 玲 子	
特論演習(異文化間コミュニケーション)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 根 橋 玲 子	
特論演習(生命論)Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(薬学) 岩 渕 輝	
特論演習(生命論)Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(薬学) 岩 渕 輝	
特論演習(人類学と意識科学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 蛭 川 立	
特論演習(人類学と意識科学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 蛭 川 立	
特論演習(現代思想論)Ⅰ	演2	—		○	専任教授 宮 本 真 也	2024年度開講せず
特論演習(現代思想論)Ⅱ	演2		—	○	専任教授 宮 本 真 也	2024年度開講せず
特論演習(社会心理学)Ⅰ	演2	○		○	専任准教授 博士(教育学) 脇 本 竜太郎	
特論演習(社会心理学)Ⅱ	演2		○	○	専任准教授 博士(教育学) 脇 本 竜太郎	
専門研究(組織コミュニケーション論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	
専門研究(組織コミュニケーション論)Ⅱ	講2		—	—	専任教授 博士(学術) 山口 生 史	2024年度開講せず
専門研究(認知情報論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
専門研究(認知情報論)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(工学) 石 川 幹 人	
専門研究(説得コミュニケーション論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
専門研究(説得コミュニケーション論)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 Ph.D. 鈴 木 健	
専門研究(家族社会学)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	
専門研究(家族社会学)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(人間科学) 施 利 平	

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
専門研究(異文化間コミュニケーション)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 Ph.D. 根橋玲子	
専門研究(異文化間コミュニケーション)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 Ph.D. 根橋玲子	
専門研究(生命論)Ⅰ	講2	○		—	専任教授 博士(薬学) 岩渕輝	
専門研究(生命論)Ⅱ	講2		○	—	専任教授 博士(薬学) 岩渕輝	
専門研究(人類学と意識科学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 蛭川立	
専門研究(人類学と意識科学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 蛭川立	
専門研究(現代思想論)Ⅰ	講2	—		—	専任教授 宮本真也	2024年度開講せず
専門研究(現代思想論)Ⅱ	講2		—	—	専任教授 宮本真也	2024年度開講せず
専門研究(社会心理学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 博士(教育学) 脇本竜太郎	
専門研究(社会心理学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 博士(教育学) 脇本竜太郎	
専門研究(言語学)Ⅰ	講2	○		—	専任准教授 Ph.D. 坂本祐太	
専門研究(言語学)Ⅱ	講2		○	—	専任准教授 Ph.D. 坂本祐太	
専門研究(社会的人間論)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(社会学) 出口剛司	
専門研究(社会的人間論)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(社会学) 出口剛司	
専門研究(公共圏・親密圏コミュニケーション)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(社会学) 横山陸	
専門研究(公共圏・親密圏コミュニケーション)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(社会学) 横山陸	
専門研究(心理学の哲学)Ⅰ	講2	○		—	兼任講師 博士(学術) 田中彰吾	
専門研究(心理学の哲学)Ⅱ	講2		○	—	兼任講師 博士(学術) 田中彰吾	

(4) 研究サポート演習

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
研究サポート演習(集約型外国文献講読英語)I	演2	—		—		2024年度開講せず
研究サポート演習(集約型外国文献講読英語)II	演2		—	—		2024年度開講せず
研究サポート演習(集約型外国文献講読ドイツ語)I[M]	演2	—		—	専任教授 宮本真也	2024年度開講せず
研究サポート演習(集約型外国文献講読ドイツ語)II[M]	演2		—	—	専任教授 宮本真也	2024年度開講せず
研究サポート演習(集約型外国文献講読フランス語)I	演2	—		—	専任教授 <small>博士 (言語文化学)</small> 高馬京子	2024年度開講せず
研究サポート演習(集約型外国文献講読フランス語)II	演2		—	—	専任教授 <small>博士 (言語文化学)</small> 高馬京子	2024年度開講せず
研究サポート演習(フィールド・アプローチ)I	演2	○		—	兼任講師 佐藤壮広	
研究サポート演習(フィールド・アプローチ)I	演2	○		—	兼任講師 <small>博士 (ジャーナリズム)</small> 永井健太郎	
研究サポート演習(フィールド・アプローチ)II	演2		○	—	専任准教授 蛭川立	
研究サポート演習(アカデミック・ライティング)I	演2	○		—	兼任講師 清水瑞久	
研究サポート演習(アカデミック・ライティング)II	演2		○	—	兼任講師 清水瑞久	
研究サポート演習(専門社会調査)A	演2	○		—	兼任講師 小山慎治	
研究サポート演習(専門社会調査)B	演2		○	—	兼任講師 小山慎治	
研究サポート演習(専門社会調査)C	演2		○	—	兼任講師 <small>博士 (人間科学)</small> 鶴若麻理	

科目ナンバー：(IC) ECN552J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(公共政策) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習は、修士論文の作成に向けた助走の時期に当たるので、修士論文のテーマ探しに役立ちそうな公共政策に関連する先行研究を幅広く取り上げる。公共政策が存在するためには、社会に問題が発生していることが前提となるので、現代社会の諸問題も適宜取り上げる。授業の流れとしては、現代社会の諸問題、公共政策とは、公共政策の方法論、公共政策のサイクル、公共政策と国民性、公共政策とインターネットなどを取り上げる。とりわけ、公共政策のサイクルのうち、政策決定過程およびそこに登場する主体に焦点を当てる。授業は、講義、文献の輪読、質疑応答、討論、レポートの提出などを組み合わせて行う。
本演習を通じて、学生が現代社会の社会問題および公共政策全般に関する理解と知識を深めること、および修士論文のテーマを見つけることを目的とする。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：現代社会の諸問題
- 第3回：公共政策とは
- 第4回：公共政策と方法論
- 第5回：公共政策と情報コミュニケーション
- 第6回：公共政策のサイクル
- 第7回：投票者
- 第8回：政治家
- 第9回：官僚
- 第10回：マスメディア
- 第11回：国民
- 第12回：日本人の国民性
- 第13回：国民性と民主主義
- 第14回：インターネットと公共政策

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

授業を受ける当たっては、参考書の該当箇所に目を通しておくこと。また、授業終了後は、ノートを見直し、理解できない点がある場合は、参考書を読み直したり、教員へ質問をすること。

教科書

使用しない。

参考書

- 『問題解決のコミュニケーション』鈴木健人・鈴木健・塚原康博編著(白桃書房)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏑田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

授業中の質疑応答(50%)とレポート(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN552J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(公共政策) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習は、修士論文の作成に向けた助走の時期に当たるので、公共政策の政策効果に関する先行研究を幅広く取り上げ、さらに修士論文で役立ちそうな統計解析の手法を学ぶ。具体的には、公共政策の政策効果を資源配分の効率性や所得分配の公平性などの観点から学び、重回帰分析などの量的なデータを扱う統計解析の手法やロジット分析などの質的なデータを扱う統計解析の手法を学ぶ。授業は、講義、文献の輪読、質疑応答、討論、レポートの提出などを組み合わせて行う。
本演習を通じて、学生が公共政策のうち政策効果に関する理解と知識を深め、データの解析に不可欠な統計解析の手法を身につけることを目的とする。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：公共政策と政策効果
- 第3回：公共政策と資源配分の効率性
- 第4回：公共政策と所得分配の公平性
- 第5回：公共政策と景気の安定性
- 第6回：公共政策と分析方法
- 第7回：統計解析の利点と限界
- 第8回：既存のデータと解析
- 第9回：社会調査
- 第10回：量的なデータの統計解析1
- 第11回：量的なデータの統計解析2
- 第12回：量的なデータの統計解析3
- 第13回：質的なデータの統計解析1
- 第14回：質的なデータの統計解析2

履修上の注意

研究に対する関心と強い研究意欲が要求される。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業を受ける当たっては、参考書の該当箇所に目を通しておくこと。また、授業終了後は、ノートを見直し、理解できない点がある場合は、参考書を読み直したり、教員へ質問をすること。

教科書

使用しない。

参考書

- 『SPSSでやさしく学ぶ統計解析』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSでやさしく学ぶアンケート処理』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる統計処理の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる多変量データ解析の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏑田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

平常点(50%)とレポート(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC532J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習（メディア技術と社会）Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

まずメディア論の概要を解説したあと、メディア論の基礎的な文献を読みながら、各自のメディアについての問題関心の所在と、分析に際しての方法論やアングルを限取っていく作業に時間を費やすことになる。使用するテキストはできる限り「メディア」概念の幅広さを実感できるものを選びたいと思っている。実際には受講者の希望を容れながら決めたいが例えばベイトソンの『精神の生態学』やルーマンの『マスメディアの現実』などを考えている。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 文献講読1-1
- 第3回 文献講読1-2
- 第4回 文献講読1-3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読2-1
- 第7回 文献講読2-2
- 第8回 文献講読2-3
- 第9回 総合討論2
- 第10回 参加者による研究課題との関連での討議
- 第11回 文献講読3-1
- 第12回 文献講読3-2
- 第13回 文献講読3-3
- 第14回 総合討論・まとめ

*授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

基本的には講読の授業になるので、積極的な参加姿勢が受講者には求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々​​の指示に従ってください。

教科書

初回に受講者と相談の上決める。

参考書

授業のなかでその都度指示する。

成績評価の方法

発表(50%)授業への参加および貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC532J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習（メディア技術と社会）Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

Ⅱは、Ⅰでの作業を受けつつ引き続き、受講者の問題意識を研ぎ澄まし、自らの「メディア」観の彫琢、そして対象分析のアングルや切り口の決定に資するような運営を目指す。実際にはⅡは一年時後期に配当されることになるため、ここでは各自がそれぞれ検討するテキストを選択し、その概要説明、問題点の抽出、自らの見解の対置、論点をめぐっての討論、という四つのプロセスを繰り返しながら、相互に問題意識を高め合うことを目指す。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 文献講読1-1
- 第3回 文献講読1-2
- 第4回 文献講読1-3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読2-1
- 第7回 文献講読2-2
- 第8回 文献講読2-3
- 第9回 総合討論2
- 第10回 参加者による研究課題との関連での討議
- 第11回 文献講読3-1
- 第12回 文献講読3-2
- 第13回 文献講読3-3
- 第14回 総合討論・まとめ

*授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

基本的には講読の授業になるので、積極的な参加姿勢が受講者には求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々​​の指示に従ってください。

教科書

初回に受講者と相談の上決める。

参考書

授業のなかでその都度指示する。

成績評価の方法

発表(50%)授業への参加および貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) INF512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(情報科学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

現代の情報社会を支えるコンピュータに対する理解を深めるため、コンピュータの基礎理論であるブール代数および論理関数について学習する。

授業内容

- 第1回 数学的基礎
- 第2回 基本演算
- 第3回 ブール代数1
- 第4回 ブール代数2
- 第5回 論理関数
- 第6回 論理関数の表現－真理値表
- 第7回 論理関数の表現－カルノー図
- 第8回 論理関数の表現－BDD
- 第9回 論理式の展開
- 第10回 論理関数の性質－双対関数、単調関数
- 第11回 論理関数の性質－線形関数、対象関数
- 第12回 論理関数の性質－しきい値関数、同族性
- 第13回 論理関数の単純化1
- 第14回 論理関数の単純化2

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

科目ナンバー：(IC) INF512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(情報科学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

コンピュータに対する理解をさらに深めるため、コンピュータを構成する論理回路の設計技法について学習する。具体的には、組合せ回路、順序回路の設計技術を学習し、さらに近年の論理合成技術について概説する。

授業内容

- 第1回 論理関数
- 第2回 論理ゲート
- 第3回 2段論理回路
- 第4回 多段論理回路
- 第5回 組合せ論理回路の設計
- 第6回 順序回路
- 第7回 状態遷移図
- 第8回 フリップフロップ
- 第9回 順序回路の単純化
- 第10回 順序回路の設計
- 第11回 非同期順序回路
- 第12回 ゲートアレイ
- 第13回 論理合成
- 第14回 ハードウェア記述言語

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

科目ナンバー：(IC) LAW572J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(知的財産法) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

本演習では、知的財産法のさまざまな分野のなかで、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。各院生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究方法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ インTRODクシヨン
 - 第2回 文献講読1
 - 第3回 文献講読2
 - 第4回 文献講読3
 - 第5回 総合討論1
 - 第6回 文献講読4
 - 第7回 文献講読5
 - 第8回 文献講読6
 - 第9回 総合討論2
 - 第10回 研究課題の討議
 - 第11回 文献研究の検証1
 - 第12回 文献研究の検証2
 - 第13回 文献研究の検証3
 - 第14回 総合討論3
- *授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。報告担当以外の学生も、討論に参加する。

準備学習(予習・復習等)の内容

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。その際、報告資料は、事前に提出する。報告する学生は十分に準備をする必要があるとともに、報告担当以外の学生も、討論のために、報告資料を読み込む必要がある。

教科書

とくに指定しない。

参考書

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) LAW572J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(知的財産法) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

本演習では、知的財産法のさまざまな分野のなかで、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。各院生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究方法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ インTRODクシヨン
 - 第2回 文献講読1
 - 第3回 文献講読2
 - 第4回 文献講読3
 - 第5回 総合討論1
 - 第6回 文献講読4
 - 第7回 文献講読5
 - 第8回 文献講読6
 - 第9回 総合討論2
 - 第10回 研究課題の討議
 - 第11回 文献研究の検証1
 - 第12回 文献研究の検証2
 - 第13回 文献研究の検証3
 - 第14回 総合討論3
- *授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。報告担当以外の学生も、討論に参加する。

準備学習(予習・復習等)の内容

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。その際、報告資料は、事前に提出する。報告する学生は十分に準備をする必要があるとともに、報告担当以外の学生も、討論のために、報告資料を読み込む必要がある。

教科書

とくに指定しない。

参考書

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) POL512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(現代政治学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原	聖子

授業の概要・到達目標

本演習は、現代アメリカ政治に関する修士論文を執筆しようとする1年生を対象とする。授業の到達目標は、研究の方法論や資料収集の方法を理解し、修士論文を執筆する土台作りを行うことである。春学期は、履修者が修士論文執筆において必要となる基本的な文献や資料を輪読し、複数の書評レポートを作成する。使用する文献は、履修者の研究計画を聞いた上で、担当教員から指示する。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン、今後の進め方について(対面)
- 第2回 研究テーマ相談、文献紹介(リアルタイム配信)
- 第3回 文献講読1 (対面)
- 第4回 文献講読2 (リアルタイム配信)
- 第5回 文献講読3 (対面)
- 第6回 文献講読4 (リアルタイム配信)
- 第7回 研究の方法論・資料収集の方法 (対面)
- 第8回 文献講読5 (リアルタイム配信)
- 第9回 文献講読6 (対面)
- 第10回 文献講読7 (リアルタイム配信)
- 第11回 ゲストスピーカー (対面)
- 第12回 研究計画発表1 (リアルタイム配信)
- 第13回 研究計画発表2 (対面)
- 第14回 aのみ、まとめ (リアルタイム配信)

* 授業内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

修士論文執筆に向けた授業であるので、履修者の積極的な参加が不可欠である。無断欠席は認めない。また、英語の文献や資料を読むことが多いため、英語力、特に読解力が必要である。担当教員の講義科目および春学期に大学院研究科間共通科目、学際系総合研究Aも履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

今回の授業までに指示された文献を読んでおくこと。報告に当たっている場合は、レジュメあるいはスライドを印刷して教室で配布すること。

教科書

初回に履修者と相談の上決める。

参考書

授業の中でその都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(30%)、授業での報告・発表(30%)、書評レポート(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) POL512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(現代政治学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原	聖子

授業の概要・到達目標

本演習では、現代アメリカ政治に関する修士論文を執筆しようとする1年生を対象とする。本授業の到達目標は、研究の方法論や資料収集の方法を理解し、修士論文を執筆する土台作りを行うことである。秋学期には各自が研究計画に沿って、主体的に文献収集を行い、研究の進捗状況を報告し、担当教員や他の履修者からのフィードバックを受けながら、リサーチペーパーを作成することで、翌年度の修士論文執筆の準備を進める。

授業内容

- 第1回 研究進捗状況の発表と今後の進め方について(対面)
- 第2回 リサーチペーパーのテーマ相談、資料収集方法について(リアルタイム配信)
- 第3回 文献講読1 (対面)
- 第4回 文献講読2 (リアルタイム配信)
- 第5回 文献講読3 (対面)
- 第6回 文献講読4 (リアルタイム配信)
- 第7回 文献講読5 (対面)
- 第8回 文献講読6 (リアルタイム配信)
- 第9回 文献講読7 (対面)
- 第10回 リサーチペーパーの進捗報告1 (リアルタイム配信)
- 第11回 リサーチペーパーの進捗報告2 (対面)
- 第12回 リサーチペーパーの進捗報告3 (リアルタイム配信)
- 第13回 リサーチペーパーの進捗報告4 (対面)
- 第14回 aのみ、まとめ (リアルタイム配信)

* 授業内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

修士論文執筆に向けた授業であるので、履修者の積極的な参加が不可欠である。無断欠席は認めない。また、英語の文献や資料を読むことが多いため、英語力、特に読解力が必要である。担当教員の講義科目および春学期に大学院研究科間共通科目、学際系総合研究Aも履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

今回の授業までに指示された文献を読んでおくこと。報告に当たっている場合は、レジュメあるいはスライドを印刷して教室で配布すること。

翌年の修士論文執筆に向けて準備を進めるため、履修者は秋学期の早い段階から計画通りに各自の研究を進め、学期末には修論研究要旨を完成させること。

教科書

初回に履修者と相談の上決める。

参考書

授業の中でその都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(30%)、授業での報告・発表(30%)、修論研究要旨(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) POL532J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(国際関係論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

国際関係論に関する重要な理論を研究し、それに基づいて修士論文が執筆できるようにする。具体的には、現実主義理論(モーゲンソー)、新現実主義理論(ウオルツ、ミアシャイマー)、政策決定論(アリソン)、同盟理論(スナイダー)、政治体制論(ハンチントン)の中から修士論文のテーマに沿った理論を選択し、個別に研究を深める。

従来からある有力な理論か、先端的な理論の枠組みを活用しながら、修士論文の執筆に生かす。

授業内容

- 第1回 国際関係論に関する理論の紹介。学生との相談
- 第2回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(1)
- 第3回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(2)
- 第4回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(3)
- 第5回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(4)
- 第6回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(5)
- 第7回 それまでの理解の確認と研究テーマとの整合性に関する検討(1)
- 第8回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(6)
- 第9回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(7)
- 第10回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(8)
- 第11回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(9)
- 第12回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(10)
- 第13回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(11)
- 第14回 それまでの理解の確認と研究テーマとの整合性に関する検討(2)

履修上の注意

かなり大量に高度の内容を持つ英文もしくは邦語文献を読破するので、十分な読解力があること。外国からの留学生は十分な日本語読解能力を持っていること。

準備学習(予習・復習等)の内容

大学院ですでに一度は鈴木氏の授業を受けたことがあることが望ましい。

教科書

未定。学生の研究テーマに沿って決める。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に行ったり、授業終了後にOh-ol Meijiで講評を連絡する。

成績評価の方法

毎回のゼミでの発言と期末試験に代わるレポート、もしくは書きかけの修士論文の内容で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) POL532J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(国際関係論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

国際関係論に関する重要な理論を研究し、それに基づいて修士論文が執筆できるようにする。具体的には、現実主義理論(モーゲンソー)、新現実主義理論(ウオルツ、ミアシャイマー)、政策決定論(アリソン)、同盟理論(スナイダー)、政治体制論(ハンチントン)の中から修士論文のテーマに沿った理論を選択し、個別に研究を深める。

従来からある有力な理論か、先端的な理論の枠組みを活用しながら、修士論文の執筆に生かす。

授業内容

- 第1回 国際関係論に関する理論の紹介。学生との相談
- 第2回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(1)
- 第3回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(2)
- 第4回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(3)
- 第5回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(4)
- 第6回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(5)
- 第7回 それまでの理解の確認と研究テーマとの整合性に関する検討(1)
- 第8回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(6)
- 第9回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(7)
- 第10回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(8)
- 第11回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(9)
- 第12回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(10)
- 第13回 学生の研究テーマに沿った理論の読解(11)
- 第14回 それまでの理解の確認と研究テーマとの整合性に関する検討(2)

履修上の注意

専門演習(国際関係論) Iを履修済みであること。かなり大量に高度の内容を持つ英文もしくは邦語文献を読破するので、十分な読解力があること。外国からの留学生は十分な日本語読解能力を持っていること。

準備学習(予習・復習等)の内容

大学院ですでに一度は鈴木氏の授業を受けたことがあることが望ましい。

教科書

未定。学生の研究テーマに沿って決める。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に行ったり、授業終了後にOh-ol Meijiで講評を連絡する。

成績評価の方法

毎回のゼミでの発言と期末試験に代わるレポート、もしくは書きかけの修士論文の内容で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（組織社会学）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

組織社会学に関連する論文・専門書を輪読することにより、文献調査能力を高め、修士論文作成のための視点を獲得する。
参加学生によって文献を決定するが、チェスター・バーナードをはじめとした古典を主たる候補とする。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
 - 第2回 文献講読1-1
 - 第3回 文献講読1-2
 - 第4回 文献講読1-3
 - 第5回 ディスカッション1
 - 第6回 文献講読2-1
 - 第7回 文献講読2-2
 - 第8回 文献講読2-3
 - 第9回 ディスカッション2
 - 第10回 中間発表
 - 第11回 文献講読3-1
 - 第12回 文献講読3-2
 - 第13回 文献講読3-3
 - 第14回 ディスカッション・まとめ
- *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

学部レベルの「組織論」の知識を有していることが望ましい。
組織社会学を通じて、自身の修士論文を完成させようとする強い意欲を持って履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

あらかじめ文献を精読し、発表者は担当箇所についてレジュメを準備するほか、聴講者は指定されたフォーマットに書評を記入して授業に臨むこと。

教科書

『経営者の役割』チェスター・I・バーナード、山本安次郎他訳、ダイヤモンド社。
その他、履修者の希望により追加する。

参考書

特に使用する予定はないが、テーマに応じて指示する場合もある。

課題に対するフィードバックの方法

講義中に行う。

成績評価の方法

報告(50%)、ディスカッション(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（組織社会学）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

組織社会学に関連する論文・専門書を輪読することにより、文献調査能力を高め、修士論文作成のための視点を獲得する。
参加学生によって文献を決定するが、エドガー・H・シャインやギデオンのクンダをはじめとした組織文化に関わるものを主たる候補とする。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
 - 第2回 文献講読1-1
 - 第3回 文献講読1-2
 - 第4回 文献講読1-3
 - 第5回 ディスカッション1
 - 第6回 文献講読2-1
 - 第7回 文献講読2-2
 - 第8回 文献講読2-3
 - 第9回 ディスカッション2
 - 第10回 中間発表
 - 第11回 文献講読3-1
 - 第12回 文献講読3-2
 - 第13回 文献講読3-3
 - 第14回 ディスカッション・まとめ
- *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

学部レベルの「組織論」の知識を有していることが望ましい。
組織社会学を通じて、自身の修士論文を完成させようとする強い意欲を持って履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

あらかじめ文献を精読し、発表者は担当箇所についてレジュメを準備するほか、聴講者は指定されたフォーマットに書評を記入して授業に臨むこと。

教科書

『組織文化とリーダーシップ』エドガー・H・シャイン著、梅津祐良・横山哲夫訳、白桃書房。
『洗脳するマネジメント——企業文化を操作せよ』ギデオンのクンダ著、樫村志保訳・金井嘉宏解説・監修、日経BP社。

参考書

特に使用する予定はないが、テーマに応じて指示する場合もある。

課題に対するフィードバックの方法

講義中に行う。

成績評価の方法

報告(50%)、ディスカッション(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) LAW552J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（現代型犯罪と刑法）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（法学）	阿部	力也

授業の概要・到達目標

本演習では、「刑法」の様々な分野のなかで（受講生の関心によっては犯罪学・刑事政策的なテーマも含む）、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③判例・実務の状況を的確に把握しているか、④必要に応じて比較法的手法への言及が的確になされているか、これらについてのポイントを指摘して、各受講者の研究能力（いいかえると論文作成に関する基本事項）を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読4
- 第7回 文献講読5
- 第8回 文献講読6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の討論1
- 第11回 研究課題の討論2
- 第12回 総合討論3
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

講読中心の授業となるので、受講生の積極的な参加姿勢が要求される。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で指定された文献の事前講読を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が要請される。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

授業において、その都度、事前に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

演習科目ということから、課題（テーマ）については、授業回ごとと受講者との相互性（質疑応答）を重視しながら丁寧に回答したいと考えている。

成績評価の方法

報告(50%)、授業参加および貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) LAW552J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（現代型犯罪と刑法）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（法学）	阿部	力也

授業の概要・到達目標

本演習では、「刑法」の様々な分野のなかで（受講生の関心によっては犯罪学・刑事政策的なテーマも含む）、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③判例・実務の状況を的確に把握しているか、④必要に応じて比較法的手法への言及が的確になされているか、これらについてのポイントを指摘して、各受講者の研究能力（いいかえると論文作成に関する基本事項）を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読4
- 第7回 文献講読5
- 第8回 文献講読6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の討論1
- 第11回 研究課題の討論2
- 第12回 総合討論3
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

講読中心の授業となるので、受講生の積極的な参加姿勢が要求される。なお、専門演習Iとは異なった文献を扱うことになるので注意して欲しい。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で指定された文献の事前講読を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が要請される。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

授業において、その都度、事前に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

演習科目ということから、課題（テーマ）については、授業回ごとと受講者との相互性（質疑応答）を重視しながら丁寧に回答したいと考えている。

成績評価の方法

報告(50%)、授業参加および貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(経済社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

本演習では、経済社会学のなかで受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。本演習の到達目標は、修士論文作成にむけて各受講生の研究能力の基礎を養うことである。春学期は、修士論文の執筆において必要となる先行研究を精読し、当該分野における自己の研究の位置づけを探りつつ具体的な研究テーマの設定と調査方法の検討、調査計画の策定を行う。秋学期は、各自が設定テーマについて、その実証的な検証方法にかんする理解を深め、分析手法の習得ならびにデータ分析をすすめる。

授業内容

- 第1回 aのみ イントロダクション
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読4
- 第7回 文献講読5
- 第8回 文献講読6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の検討1
- 第11回 研究課題の検討2
- 第12回 総合討論3
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論:まとめ

履修上の注意

修士論文執筆にむけた授業であるので、履修者の積極的な参加が不可欠である。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回の指示された文献を読んでおくこと。

教科書

受講生と相談の上、決定する。

参考書

授業において、その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(50%)・レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(経済社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

本演習では、経済社会学のなかで受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。本演習の到達目標は、修士論文作成にむけて各受講生の研究能力の基礎を養うことである。春学期は、修士論文の執筆において必要となる先行研究を精読し、当該分野における自己の研究の位置づけを探りつつ具体的な研究テーマの設定と調査方法の検討、調査計画の策定を行う。秋学期は、各自が設定テーマについて、その実証的な検証方法にかんする理解を深め、分析手法の習得ならびにデータ分析をすすめる。

授業内容

- 第1回 aのみ イントロダクション
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 文献講読4
- 第6回 文献講読5
- 第7回 研究課題と仮説の設定1
- 第8回 研究課題と仮説の設定2
- 第9回 データ分析1
- 第10回 データ分析2
- 第11回 データ分析3
- 第12回 総合討論2
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論:まとめ

履修上の注意

修士論文執筆にむけた授業であるので、履修者の積極的な参加が不可欠である。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読やデータの分析などを十分に行うこと。

教科書

受講生と相談の上、決定する。

参考書

授業の中でその都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(50%)・レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN542J			
情報・社会系	備考		
科目名	専門演習(開発経済学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本演習では、開発経済学の中で受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③計量分析などの研究手法を身につけているか、これらについてのポイントを指摘して、各受講者の研究能力(いいかえると論文作成に関する基本事項)を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 Literature Review 1
- 第3回 Literature Review 2
- 第4回 Literature Review 3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 Literature Review 4
- 第7回 Literature Review 5
- 第8回 Literature Review 6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の討論1
- 第11回 研究課題の討論2
- 第12回 総合討論3
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

Literature Review中心の授業となるので、受講生の積極的な参加姿勢が要求される。また、エクセル、Stataなどによる分析に習熟していることが求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が必要になる。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

・島田剛(2023)「ミクロ経済学への招待」、新世社

成績評価の方法

報告(50%)、授業参加および貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN542J			
情報・社会系	備考		
科目名	専門演習(開発経済学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本演習では、開発経済学の中で受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③計量分析などの研究手法を身につけているか、これらについてのポイントを指摘して、各受講者の研究能力(いいかえると論文作成に関する基本事項)を涵養することを目標とする。

なお、専門演習IIはLiterature Reviewが中心であるが、専門演習IIではデータ分析が中心となる。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 Literature Review 1
- 第3回 Literature Review 2
- 第4回 Literature Review 3
- 第5回 データ分析結果報告 1
- 第6回 データ分析結果報告 2
- 第7回 データ分析結果報告 3
- 第8回 データ分析結果報告 4
- 第9回 総合討論1
- 第10回 研究課題の討論1
- 第11回 研究課題の討論2
- 第12回 総合討論2
- 第13回 研究計画の発表
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

Data分析中心の授業となるので、受講生の積極的な参加姿勢が要求される。また、エクセル、Stataなどによる分析に習熟していることが求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読、データ分析を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が必要になる。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

・島田剛(2023)「ミクロ経済学への招待」、新世社

成績評価の方法

報告(50%)、授業参加および貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN542J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（イノベーションの実証分析）Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士（経済学）山内 勇		

授業の概要・到達目標

この授業では、イノベーションに関連するテーマで実証的な修士論文を作成するうえで必要となる分析スキルの習得を目的とする。
春学期は、関連する先行研究を精読し、具体的な研究テーマを設定することが到達目標となる。なお、研究テーマの設定にあたっては、検証可能なオリジナルの仮説を設定することになる。その際、検証可能性の確認のため、ある程度データの収集・整理を行う必要もある。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：先行研究のまとめと発展可能性1
- 第3回：先行研究のまとめと発展可能性2
- 第4回：先行研究のまとめと発展可能性3
- 第5回：先行研究のまとめと発展可能性4
- 第6回：仮説の設定と検証可能性の確認1
- 第7回：仮説の設定と検証可能性の確認2
- 第8回：仮説の設定と検証可能性の確認3
- 第9回：仮説の設定と検証可能性の確認4
- 第10回：単純集計による仮説検証1
- 第11回：単純集計による仮説検証2
- 第12回：分析手法の検討1
- 第13回：分析手法の検討2
- 第14回：最終報告

履修上の注意

履修者は学期末に研究レポートを提出することになる。
この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン(双方向型)で実施することもある。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習：発表に向けた準備をすること。
復習：ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

指定しない。
(必要な文献については授業中に適宜指示する。)

参考書

安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。
加藤雅俊著『スタートアップの経済学』有斐閣、2021。
牧兼充著『イノベーターのためのサイエンスとテクノロジーの経営学』東洋経済新報社、2022。
B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010。

課題に対するフィードバックの方法

報告に対し毎回授業中にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(40%)、授業への貢献(20%)、レポート(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN542J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習（イノベーションの実証分析）Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士（経済学）山内 勇		

授業の概要・到達目標

この授業では、イノベーションに関連するテーマで実証的な修士論文を作成するうえで必要となる分析スキルの習得を目的とする。
秋学期は、各自が設定した研究テーマについて、その実証的な検証方法について理解を深めることが到達目標となる。特に、経済学的な因果の特定手法を使えるようになることが求められる。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：先行研究のまとめと発展可能性
- 第3回：仮説の設定と検証可能性の確認
- 第4回：単純集計による仮説検証
- 第5回：分析手法の検討
- 第6回：因果特定方法の検討1
- 第7回：因果特定方法の検討2
- 第8回：因果特定方法の検討3
- 第9回：因果特定方法の検討4
- 第10回：因果特定方法の適用1
- 第11回：因果特定方法の適用2
- 第12回：因果特定方法の適用3
- 第13回：因果特定方法の適用4
- 第14回：最終報告

履修上の注意

春学期の「専門演習（イノベーションの実証分析）Ⅰ」を履修しておくこと。
履修者は学期末に研究レポートを提出することになる。
この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン(双方向型)で実施することもある。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習：発表に向けた準備をすること。
復習：ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

指定しない。
(必要な文献については授業中に適宜指示する。)

参考書

安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。
加藤雅俊著『スタートアップの経済学』有斐閣、2021。
牧兼充著『イノベーターのためのサイエンスとテクノロジーの経営学』東洋経済新報社、2022。
B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010。

課題に対するフィードバックの方法

報告に対し毎回授業中にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(40%)、授業への貢献(20%)、レポート(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) EDU512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(学校社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

本演習は学校を対象とした研究を進める上で必要となる基礎知識を身につけることを目的とする。受講者には、専門書および学会誌論文を対象としたテキスト批評を行うことで、当該研究分野の「土地勘」を養い、自らの研究テーマと先行研究の位置関係が把握できるようになることが求められる。

【到達目標】

- ・種々の先行研究に学び、それを批判的に検討することができる。
- ・自らの研究テーマを先行研究と関連づけて設定することができる。

授業内容

- 第1回 イントロダクション (aのみ)、受講者の研究テーマについて発表、テキスト批評の分担作成
- 第2回 先行研究の批判的検討の方法(1)
- 第3回 先行研究の批判的検討の方法(2)
- 第4回 文献講読(1)
- 第5回 文献講読(2)
- 第6回 文献講読(3)
- 第7回 文献講読(4)
- 第8回 文献講読(5)
- 第9回 文献講読(6)
- 第10回 文献講読(7)
- 第11回 文献講読(8)
- 第12回 文献講読(9)
- 第13回 文献講読(10)
- 第14回 修士論文のテーマ設定に向けて

履修上の注意

検討文献は原則としてこちらで指定するが、受講者の問題関心等に応じて変更する可能性がある。報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

専門研究(学校社会学I)をあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当でない時も、必ず文献を精読し、自分なりの論点をもってゼミに臨むこと。

教科書

特に定めない。

参考書

適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

発表時のレポート(70%)ならびに議論への貢献度(30%)。

その他

科目ナンバー：(IC) EDU512J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(学校社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

本演習は、受講者が学校を対象とした研究を進める上で必要となる専門知識および方法論を身につけ、修士論文の研究計画を立案することを目的とする。受講者には、自らの研究テーマに関連する専門書および学会誌論文を対象としたテキスト批評を行うことで、当該研究分野の知識・方法論を身につけ、適切な研究計画を立案することが求められる。

【到達目標】

- ・種々の先行研究に学び、それを批判的に検討することができる。
- ・自らの研究テーマを先行研究と関連づけて設定することができる。
- ・自らの研究テーマに適した研究方法を設定することができる。
- ・研究の対象・方法・目的を明確にした研究計画を立てることができる。

授業内容

- 第1回 イントロダクション (aのみ)、受講者の研究テーマについて発表、テキスト批評等の分担作成。
- 第2回 文献講読(1)
- 第3回 文献講読(2)
- 第4回 文献講読(3)
- 第5回 文献講読(4)
- 第6回 文献講読(5)
- 第7回 修士論文研究計画の発表(1)
- 第8回 修士論文研究計画の発表(2)
- 第9回 文献講読(6)
- 第10回 文献講読(7)
- 第11回 文献講読(8)
- 第12回 文献講読(9)
- 第13回 修士論文序章案の発表(1)
- 第14回 修士論文序章案の発表(2)

履修上の注意

検討文献は受講者の問題関心等に応じて決定する。報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

専門研究(学校社会学II)をあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当でない時も、必ず文献を精読し、自分なりの論点をもってゼミに臨むこと。

教科書

特に定めない。

参考書

適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

発表時のレポート(70%)ならびに議論への貢献度(30%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SSS542J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(災害社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の執筆に向けて関連分野の知識を獲得し、自らの研究構想を改めて練り上げることを目的とする。到達目標は、①関連分野に関する最先端の知識を獲得すること、②自身の研究構想を改めて作成することの2点となる。受講生はまず課題文献に向きあうことから始め、後半では自身の研究領域に関する先行研究にあたり、その内容について報告を行う。

授業内容

- 第01回 イン트로ダクション
- 第02回 研究構想・計画の報告(1)
- 第03回 課題文献の検討(1)
- 第04回 課題文献の検討(2)
- 第05回 課題文献の検討(3)
- 第06回 課題文献の検討(4)
- 第07回 課題文献の検討(5)
- 第08回 課題文献の検討(6)
- 第09回 研究構想・計画の報告(2)
- 第10回 先行研究の検討(1)
- 第11回 先行研究の検討(2)
- 第12回 先行研究の検討(3)
- 第13回 先行研究の検討(4)
- 第14回 研究構想・計画の報告(3)

履修上の注意

受講生の進捗状況に応じて講義内容・スケジュールは適宜変更する。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表準備は入念に行うこと。
発表の際に受けたコメント、指導教員から出された課題については、十分に対応を行うこと。

教科書

必要に応じて指示する。

参考書

必要に応じて指示する。

成績評価の方法

研究報告 50% レポート 50%

その他

最先端の研究動向に触れる意味で、秋季に開催される「災害情報学会」「災害復興学会」「地域安全学会」「自然災害学会」の大会のうち、少なくとも2大会への参加を必須とする。

科目ナンバー：(IC) SSS542J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門演習(災害社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の執筆に向けて関連分野の知識を獲得し、自らの研究構想を改めて練り上げることを目的とする。到達目標は、自身の研究構想をもとに修士論文の全体像を具体的に描くこととする。受講生はまず春学期からの継続として課題文献に向きあうことから始め、後半ではそれをもとに修士論文の全体像を検討し、その内容について報告を行う。

授業内容

- 第01回 イン트로ダクション
- 第02回 先行研究の検討(1)
- 第03回 先行研究の検討(2)
- 第04回 先行研究の検討(3)
- 第05回 先行研究の検討(4)
- 第06回 先行研究の検討(5)
- 第07回 修士論文の全体像の検討(1)
- 第08回 修士論文の全体像の検討(2)
- 第09回 調査・分析手法の検討(1)
- 第10回 調査・分析手法の検討(2)
- 第11回 調査・分析手法の検討(3)
- 第12回 調査・分析手法の検討(4)
- 第13回 研究構想・計画の検討(1)
- 第14回 研究構想・計画の検討(2)

履修上の注意

受講生の進捗状況に応じて講義内容・スケジュールは適宜変更する。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表準備は入念に行うこと。
発表の際に受けたコメント、指導教員から出された課題については、十分に対応を行うこと。

教科書

必要に応じて指示する。

参考書

必要に応じて指示する。

成績評価の方法

研究報告 50% レポート 50%

その他

最先端の研究動向に触れる意味で、秋季に開催される「災害情報学会」「災害復興学会」「地域安全学会」「自然災害学会」の大会のうち、少なくとも2大会への参加を必須とする。

科目ナンバー：(IC) ECN652J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(公共政策) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習は、修士論文の作成に備えた準備段階と位置づけられる。とりわけ、本演習では、先行研究のサーベイを重視し、研究テーマ、研究の方法、研究の流れを確定させる。本演習の目的は、修士論文の作成に当たり、問題意識は適切か、研究の意義は何か、既存の研究に比べた新たな研究の貢献は何か、使用する研究方法は適切かを学生に考えてもらうことである。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究テーマの検討1
- 第3回：研究テーマの検討2
- 第4回：研究方法の検討1
- 第5回：研究方法の検討2
- 第6回：研究の流れの検討1
- 第7回：研究の流れの検討2
- 第8回：先行研究のサーベイ1
- 第9回：先行研究のサーベイ2
- 第10回：先行研究のサーベイ3
- 第11回：先行研究のサーベイ4
- 第12回：先行研究のサーベイ5
- 第13回：研究テーマの再検討
- 第14回：研究方法の再検討

履修上の注意

研究に対する関心と強い研究意欲が要求される。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で教員が指示したこと(先行研究のサーベイなど)を行っておくこと。また、授業を受けてわからない点は参考書等で調べたり、教員への質問により解決しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『SPSSでやさしく学ぶ統計解析』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSでやさしく学ぶアンケート処理』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる統計処理の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる多変量データ解析の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『問題解決のコミュニケーション』鈴木健人・鈴木健・塚原康博編著(白桃書房)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏑田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。

成績評価の方法

平常点(先行研究や分析結果の報告と質疑応答)により100%評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN652J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(公共政策) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習では、修士論文で取り上げる研究テーマ、研究方法、研究の流れを完全に確定させ、調査で使用する質問票を作成し、その回答を統計学的手法を使って解析して修士論文を完成させる。

本演習を通じ、論文作成に不可欠な要素、すなわち、問題意識、研究の意義、研究の貢献、研究方法、論理一貫性、注の付け方や参考文献のあげ方などを学生に身につけてもらう。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：研究テーマの決定
- 第2回：研究方法の決定
- 第3回：研究の流れの決定
- 第4回：調査対象の確定
- 第5回：質問票の作成1
- 第6回：質問票の作成2
- 第7回：データの解析と検証1
- 第8回：データの解析と検証2
- 第9回：データの解析と検証3
- 第10回：データの解析と検証4
- 第11回：論文の作成指導1
- 第12回：論文の作成指導2
- 第13回：論文の作成指導3
- 第14回：論文の作成指導4

履修上の注意

研究に対する関心と強い研究意欲が要求される。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で教員が指示したこと(データの解析、論文の作成など)を行っておくこと。また、授業を受けてわからない点は参考書等で調べたり、教員への質問により解決しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『SPSSでやさしく学ぶ統計解析』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSでやさしく学ぶアンケート処理』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる統計処理の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる多変量データ解析の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『問題解決のコミュニケーション』鈴木健人・鈴木健・塚原康博編著(白桃書房)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏑田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。

成績評価の方法

平常点(質問票の作成、統計解析、論文作成)により100%評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC632J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（メディア技術と社会）Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

特論演習は二年時に配当されることになるが、基本的には修士論文の指導に宛てられる。春学期配当のⅠでは、各自が設定したテーマに基づきながら二回の発表を行ってもらう。一回目は「なぜそのテーマを選んだのか」という問題意識の所在の発表および当該テーマについての従来の既存研究の現況の報告を求める。二回目は一回目の発表を踏まえた上で自らの研究視角の独自性・独創性と研究の進捗状況の中間報告を求め、また他の受講者のコメントを以後の研究に活かす。

授業内容

- 第1回 インTRODクッション
- 第2回 研究計画報告1
- 第3回 文献報告1
- 第4回 文献報告2
- 第5回 文献報告3
- 第6回 研究成果発表2
- 第7回 研究成果発表3
- 第8回 文献報告4
- 第9回 文献報告5
- 第10回 文献報告6
- 第11回 研究成果発表4
- 第12回 文献報告7
- 第13回 文献報告8
- 第14回 まとめ・秋学期への展望

*授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

自らの問題意識を常に言葉で定式化する努力を欠かさないこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の授業時に指示する。

教科書

特になし。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC632J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（メディア技術と社会）Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

Ⅱは実質的には修士論文を執筆しながらの個別指導になる。各自が執筆過程にある論文を持参し、疑問点や問題点を自ら開示し、また他の受講者とそれを共有する。その上で教員をも含めた論理の飛躍や事実認識についての問題点を詳細に洗い出していきたい。また他の受講者の発表を聴くことで、自らの論文の問題点に気づくこともあろうと思われる。論文完成後には、相互に完成した論文を互読し、討論を行う中で反省点や今後の研究への展望をも議論したい。

授業内容

- 第1回 インTRODクッション
- 第2回 研究計画報告1
- 第3回 文献報告1
- 第4回 文献報告2
- 第5回 文献報告3
- 第6回 研究成果発表2
- 第7回 研究成果発表3
- 第8回 文献報告4
- 第9回 文献報告5
- 第10回 文献報告6
- 第11回 研究成果発表4
- 第12回 文献報告7
- 第13回 文献報告8
- 第14回 まとめ・論文完成への展望

*授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

自らの問題意識を常に言葉で定式化する努力を欠かさないこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々指示に従ってください。

教科書

特になし。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) INF612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(情報科学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

現代ではコンピュータは様々な場面で利用されており、その信頼性は高いことが期待されている。本講では、コンピュータを構成する論理回路の検査技術を概説し、現在のコンピュータの信頼性について理解することを目的とする。

授業内容

- 第1回 論理回路の検査
- 第2回 故障モデル
- 第3回 故障シミュレーション
- 第4回 テストパターン生成手法1
- 第5回 テストパターン生成手法2
- 第6回 テストパターン生成手法3
- 第7回 テストパターン圧縮手法
- 第8回 テスト容易化設計1
- 第9回 テスト容易化設計2
- 第10回 故障診断手法1
- 第11回 故障診断手法2
- 第12回 故障診断手法3
- 第13回 遅延故障の検査手法
- 第14回 今後の論理回路の検査技術

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

科目ナンバー：(IC) INF612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(情報科学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

現代ではコンピュータは様々な場面で利用されており、その信頼性は高いことが期待されている。本講では、コンピュータの信頼性を確保するための各種の技術を概説し、現在のコンピュータの信頼性について理解することを目的とする。

授業内容

- 第1回 コンピュータの信頼性
- 第2回 フォールトアボイダンス
- 第3回 フォールトトレランス1
- 第4回 フォールトトレランス2
- 第5回 誤り検出・訂正技術1
- 第6回 誤り検出・訂正技術2
- 第7回 冗長構成1
- 第8回 冗長構成2
- 第9回 回復処理
- 第10回 データの保護
- 第11回 システム診断
- 第12回 自己診断機能
- 第13回 ソフトウェアの信頼性1
- 第14回 ソフトウェアの信頼性2

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

科目ナンバー：(IC) LAW672J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(知的財産法) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

研究計画にしたがって、進捗状況を報告し、疑問点や問題点について紹介するとともに、他の受講者とそれを共有する。教員から、報告内容について、問題点等を指摘する。これらのプロセスを通して、論文を完成に近づけていく。

授業内容

第1回 インTRODククシヨクン
 第2回 研究計画の報告
 第3回 文献報告1
 第4回 文献報告2
 第5回 文献報告3
 第6回 研究成果発表1
 第7回 研究成果発表2
 第8回 文献報告4
 第9回 文献報告5
 第10回 文献報告6
 第11回 研究成果発表3
 第12回 文献報告7
 第13回 文献報告8
 第14回 まとめ・論文完成への展望
 *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

特になし。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定した文献を読み、理解した点や疑問点を説明できるようにしておくこと。

教科書

特になし。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) LAW672J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(知的財産法) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

論文を完成するために、研究計画にしたがって、進捗状況を報告し、疑問点や問題点について紹介するとともに、他の受講者とそれを共有する。教員から、報告内容について、問題点等を指摘する。これらのプロセスを通して、論文を完成に近づけていく。

授業内容

第1回 インTRODククシヨクン
 第2回 研究計画報告
 第3回 文献報告1
 第4回 文献報告2
 第5回 文献報告3
 第6回 研究成果発表1
 第7回 研究成果発表2
 第8回 文献報告4
 第9回 文献報告5
 第10回 文献報告6
 第11回 研究成果発表3
 第12回 文献報告7
 第13回 文献報告8
 第14回 まとめ・論文完成への展望
 *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

特になし。

準備学習(予習・復習等)の内容

その都度の指示にしたがうこと。

教科書

特になし。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) POL612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(現代政治学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本特論演習は、現代アメリカ政治に関する修士論文を執筆しようとする2年生を対象とする。春学期には、1年次に進めた研究を基に、各自が設定した研究テーマを進展させ、毎月1回程度の頻度で発表を行う。担当教員からフィードバックを受け、他の履修者からのコメントを活かして、修士論文の中間報告会に向けて準備を進めていく。

授業内容

- 第1回 インTROダクション、今後の授業の進め方について (対面)
 - 第2回 研究計画報告 (リアルタイム配信)
 - 第3回 文献報告1 (対面)
 - 第4回 文献報告2 (リアルタイム配信)
 - 第5回 文献報告3 (対面)
 - 第6回 研究中間発表1 (リアルタイム配信)
 - 第7回 研究中間発表2 (対面)
 - 第8回 文献報告4 (リアルタイム配信)
 - 第9回 文献報告5 (対面)
 - 第10回 文献報告6 (リアルタイム配信)
 - 第11回 ゲストスピーカー (対面)
 - 第12回 修士論文中間報告会に向けて発表1 (リアルタイム配信)
 - 第13回 修士論文中間報告会に向けて発表2 (対面)
 - 第14回 aのみ、まとめ (リアルタイム配信)
- *授業内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

修士論文執筆に向けた授業であるため、各自の研究テーマに関して必要な文献、資料等を自ら積極的にリサーチし、授業で報告する姿勢が求められる。修士論文の資料収集には英語力が不可欠である。無断欠席は認めない。

本授業では、修士論文執筆のため研究科以外の研究者や院生とのディスカッションを重視するため、Zoomによるリアルタイム配信授業を一部取り入れる。Zoomのミーティング情報は該当回の前々日までに授業のお知らせで通知するので確認すること。教員への連絡先を初回授業で通知する。

準備学習(予習・復習等)の内容

資料や先行研究を整理する過程で修士論文執筆用ノートを作成すること。担当教員から勧められた研究会などがある際には、国内外の関連する研究者とのディスカッションに積極的に参加し、修士論文執筆に役立ててほしい。

教科書

特になし。

参考書

その都度紹介する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、報告・貢献度(30%)、修士論文中間発表レポート(20%)

その他

科目ナンバー：(IC) POL612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(現代政治学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本特論演習では、現代アメリカ政治に関する修士論文の個別指導が中心となる。秋学期は、夏休み中に各自が進めた研究の進捗状況の報告から始まる。以後は、隔週程度の頻度で、執筆途中の修士論文の原稿を持参し、進捗状況を報告して、担当教員からのフィードバックを受け、論理の飛躍などの問題点や疑問点を確認していく。また、他の履修生や他大学大学院の院生、あるいは、ゲストスピーカーとの議論を経て、より良い論文完成へと結びつけていくことが目標である。

授業内容

- 第1回 修士論文進捗状況の発表 (対面)
 - 第2回 文献報告1 (リアルタイム配信)
 - 第3回 文献報告2 (対面)
 - 第4回 文献報告3 (リアルタイム配信)
 - 第5回 研究成果発表1 (対面)
 - 第6回 研究成果発表2 (リアルタイム配信)
 - 第7回 研究成果発表3 (対面)
 - 第8回 ゲストスピーカー1 (リアルタイム配信)
 - 第9回 研究成果発表4 (対面)
 - 第10回 研究成果発表5 (リアルタイム配信)
 - 第11回 研究成果発表6 (対面)
 - 第12回 ゲストスピーカー2 (リアルタイム配信)
 - 第13回 研究完成発表 (対面)
 - 第14回 aのみ、まとめ (リアルタイム配信)
- *授業内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

修士論文執筆に向けた授業であるため、各自の研究テーマに関して必要な文献、資料等を自ら積極的にリサーチし、授業で報告する姿勢が求められる。修士論文の資料収集には英語力が不可欠である。無断欠席は認めない。

本授業では、修士論文執筆のため研究科以外の研究者や院生とのディスカッションを重視するため、Zoomによるリアルタイム配信授業を一部取り入れる。Zoomのミーティング情報は該当回の前々日までに授業のお知らせで通知するので確認すること。教員への連絡先を初回授業で通知する。

準備学習(予習・復習等)の内容

資料や先行研究を整理する過程で修士論文執筆用ノートを作成すること。担当教員から勧められた研究会などがある際には、国内外の関連する研究者とのディスカッションに積極的に参加し、修士論文執筆に役立ててほしい。

教科書

特になし。

参考書

その都度紹介する。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、報告・貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) POL632J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(国際関係論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

学生の修士論文のテーマに沿って論文指導を行う。修士論文の第1草稿を完成させる。

授業内容

- 第1回 修士論文のテーマの確認
- 第2回 修士論文の執筆指導1
- 第3回 修士論文の執筆指導2
- 第4回 修士論文の執筆指導3
- 第5回 修士論文の執筆指導4
- 第6回 修士論文の執筆指導5
- 第7回 修士論文のテーマの再確認。変更がある場合にはここで変更する。
- 第8回 修士論文の執筆指導6
- 第9回 修士論文の執筆指導7
- 第10回 修士論文の執筆指導8
- 第11回 修士論文の執筆指導9
- 第12回 修士論文の執筆指導10
- 第13回 修士論文の執筆指導11
- 第14回 修士論文第1草稿の完成

履修上の注意

修士論文のテーマについて学生は十分吟味し、指導教授の承認を受けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

大学院で鈴木教授の授業に参加したことがあることが望ましい。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

成績評価の方法

修士論文の進捗の度合いに応じて評価する。

その他

特になし。

指導テーマ

特になし。

進行計画

特になし。

科目ナンバー：(IC) POL632J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(国際関係論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

学生の修士論文のテーマに沿って論文指導を行う。修士論文を完成させる。

授業内容

- 第1回 修士論文のテーマの確認
- 第2回 修士論文の執筆指導1
- 第3回 修士論文の執筆指導2
- 第4回 修士論文の執筆指導3
- 第5回 修士論文の執筆指導4
- 第6回 修士論文の執筆指導5
- 第7回 修士論文のテーマの再確認。変更がある場合にはここで最終的に変更する。これ以降の変更は認めない。
- 第8回 修士論文の執筆指導6
- 第9回 修士論文の執筆指導7
- 第10回 修士論文の執筆指導8
- 第11回 修士論文の第2草稿完成
- 第12回 修士論文の執筆指導9
- 第13回 修士論文の執筆指導10
- 第14回 修士論文の完成

履修上の注意

修士論文のテーマについて学生は十分吟味し、指導教授の承認を受けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

特論演習(国際関係論) Iを履修済みであること。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

成績評価の方法

修士論文で評価する。

その他

特になし。

指導テーマ

特になし。

進行計画

特になし。

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(組織社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

本演習では、修士論文の作成のための準備を整えることにある。以下の3点を重点的に進める。

1. 研究テーマの設定
2. 先行研究の調査
3. 分析手法の検討

最終的には20000字程度の論文を執筆することを目標とする。

授業内容

- 第1回 (aのみ) イントロダクション
- 第2回 研究テーマの設定 I
- 第3回 研究テーマの設定 II
- 第4回 先行研究の調査 I
- 第5回 先行研究の調査 II
- 第6回 先行研究の調査 III
- 第7回 先行研究の調査 IV
- 第8回 先行研究の調査 V
- 第9回 先行研究の調査 VI
- 第10回 分析手法の検討 I
- 第11回 分析手法の検討 II
- 第12回 研究発表 I
- 第13回 研究発表 II
- 第14回 研究テーマ・先行研究・分析手法の再検討

履修上の注意

強い研究意欲に基づき、論理的思考により研究対象を分析する能力が求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で教員が指示したことを行い、文献調査など十分に準備をしてから授業にのぞむこと。

教科書

『組織の理論社会学』竹中克久、(文眞堂)

参考書

特に使用する予定はないが、テーマに応じて指示する場合もある。

課題に対するフィードバックの方法

毎ゼミごとに行う。

成績評価の方法

研究発表(50%)、最終成果物(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(組織社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

本演習では、修士論文の作成のための準備を洗練させ、執筆にとりかかる。

春学期に行った、研究テーマの設定、先行研究の調査、分析手法の検討に基づいて研究発表を行い、最終的には40000字程度の論文を執筆することを目標とする。

授業内容

- 第1回 (aのみ) イントロダクション
- 第2回 研究テーマの再設定 I
- 第3回 研究テーマの再設定 II
- 第4回 先行研究の調査 I
- 第5回 先行研究の調査 II
- 第6回 先行研究の調査 III
- 第7回 先行研究の調査 IV
- 第8回 分析手法の再検討 I
- 第9回 分析手法の再検討 II
- 第10回 独創性の確立 I
- 第11回 独創性の確立 II
- 第12回 研究発表 I
- 第13回 研究発表 II
- 第14回 研究テーマ・先行研究・分析手法・独創性の再検討

履修上の注意

強い研究意欲に基づき、論理的思考により研究対象を分析する能力が求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で教員が指示したことを行い、文献調査など十分に準備をしてから授業にのぞむこと。

教科書

『組織の理論社会学』竹中克久、(文眞堂)

参考書

特に使用する予定はないが、テーマに応じて指示する場合もある。

課題に対するフィードバックの方法

毎ゼミごとに行う。

成績評価の方法

研究発表(50%)、最終成果物(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) LAW652J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習（現代型犯罪と刑法）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（法学）	阿部 力也	

授業の概要・到達目標

各受講生の研究計画に従って、その進捗状況を報告してもらい、問題点あるいは疑問点を共有することとしたい。担当教員からは、各報告内容について、適宜、アドバイスをしていく。この相互性を通じて論文の完成を目指すことを目標とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 研究計画の報告
- 第3回 文献報告1
- 第4回 文献報告2
- 第5回 文献報告3
- 第6回 研究発表1
- 第7回 研究発表2
- 第8回 文献報告4
- 第9回 文献報告5
- 第10回 文献報告6
- 第11回 研究発表3
- 第12回 文献報告7
- 第13回 文献報告8
- 第14回 まとめ・論文完成に向けた総括

履修上の注意

とくになし。

準備学習（予習・復習等）の内容

各受講生の研究計画に沿った文献を徹底的に読み込み、問題点・疑問点を整理して授業に臨むこと。

教科書

とくに指定しない。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加度(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) LAW652J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習（現代型犯罪と刑法）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（法学）	阿部 力也	

授業の概要・到達目標

各受講生の研究計画に従った研究状況を報告してもらう。問題点・疑問点を整理し、担当教員および各受講生でそれらを検討し、一定の方向性を見出すことで、論文の完成を目指すことが目標となる。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 研究計画の報告
- 第3回 文献報告1
- 第4回 文献報告2
- 第5回 文献報告3
- 第6回 研究発表1
- 第7回 研究発表2
- 第8回 文献報告4
- 第9回 文献報告5
- 第10回 文献報告6
- 第11回 研究発表3
- 第12回 文献報告7
- 第13回 文献報告8
- 第14回 まとめ・論文内容の精度を高めるための討論

履修上の注意

とくになし。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究計画に沿った文献を徹底的に読み込んで欲しい。問題点・疑問点を整理し、授業に臨むこと。

教科書

とくに指定はしない。

参考書

その都度指示する。

成績評価の方法

授業への参加度(50%)、貢献度(50%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(経済社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

本特論演習 I は、経済社会学に関する修士論文を執筆しようとする2年生を対象とする。各受講生が1年時に設定したテーマ・研究計画にそって、社会調査データを収集・分析し、修士論文の全体像が分かる状態(草稿)まで完成させることが目標となる。

授業内容

- 第1回 aのみ イントロダクション
- 第2回 研究テーマの確認
- 第3回 先行研究と論文の位置づけ1
- 第4回 先行研究と論文の位置づけ2
- 第5回 先行研究と論文の位置づけ3
- 第6回 仮説・検証方法の確認1
- 第7回 仮説・検証方法の確認2
- 第8回 総合討論
- 第9回 データ収集・分析1
- 第10回 データ収集・分析2
- 第11回 データ収集・分析3
- 第12回 データ収集・分析4
- 第13回 進捗報告
- 第14回 修論完成にむけた総括・まとめ

履修上の注意

修士論文作成のための授業であり、各自のテーマに基づいた進捗報告が中心となる。また、基本的には対面で実施するが、履修者との相談の上、オンラインで実施することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読やデータ分析などを十分に行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業において、その都度紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(50%)・レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(経済社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

本特論演習 II は、経済社会学に関する修士論文の個別指導が中心となる。授業は、各受講生が執筆過程の修士論文の進捗報告を行い、その内容についてディスカッションする形式で進める。各受講生が研究計画にそって、社会調査データを収集・分析し、修士論文を完成させることが目標となる。

授業内容

- 第1回 aのみ イントロダクション
- 第2回 研究計画報告
- 第3回 データ分析報告1
- 第4回 データ分析報告2
- 第5回 データ分析報告3
- 第6回 修論報告1
- 第7回 修論報告2
- 第8回 修論報告3
- 第9回 総合討論
- 第10回 修論報告1
- 第11回 修論報告2
- 第12回 修論報告3
- 第13回 成果報告
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

修士論文作成のための授業であり、各自のテーマに基づいた進捗報告が中心となる。また、基本的には対面で実施するが、履修者との相談の上、オンラインで実施することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読やデータ分析などを十分に行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業において、その都度紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

修士論文の成果(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(開発経済学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本演習では、開発経済学の中で受講生がこれから研究しようとするテーマについて修士論文作成のための能力を養成する。

具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③計量分析などの研究手法を身につけているか、これらについてのポイントを指導を行う。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 Literature Review 1
- 第3回 Literature Review 2
- 第4回 Literature Review 3
- 第5回 ゼミ員各自の修論構想報告1
- 第6回 ゼミ員各自の修論構想報告2
- 第7回 ゼミ員各自の修論構想報告3
- 第8回 ゼミ員各自の修論構想報告4
- 第9回 総合討論
- 第10回 Data分析報告1
- 第11回 Data分析報告2
- 第12回 Data分析報告3
- 第13回 Data分析報告4
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

修論作成のための準備期間であり、各自のテーマに基づいた報告(プレゼン)が中心となる。なお、エクセル、Stataなどによる分析に習熟していることが求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読、データ分析を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が必要になる。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

授業において、その都度、事前に指示する。

成績評価の方法

報告(50%)、授業参加および貢献度(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(開発経済学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本演習では、開発経済学についての受講生の修士論文作成のための総合力を養成する。

具体的には、各受講生の研究の現状報告のなかで、①的確に問題を把握しているか、②先行研究を的確に把握しているか、③計量分析などの研究手法を身につけているか、これらについてのポイントを指導を行う。

授業内容

- 第1回 aのみイントロダクション
- 第2回 Data分析報告1
- 第3回 Data分析報告2
- 第4回 Data分析報告3
- 第5回 Data分析報告4
- 第6回 修論報告1
- 第7回 修論報告2
- 第8回 修論報告3
- 第9回 総合討論
- 第10回 修論報告1
- 第11回 修論報告2
- 第12回 修論報告3
- 第13回 修論報告4
- 第14回 総合討論・まとめ

履修上の注意

修論作成のための準備期間であり、各自のテーマに基づいた報告(プレゼン)が中心となる。なお、エクセル、Stataなどによる分析に習熟していることが求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で指定された文献の事前講読、データ分析を十分にしておくこと。受講生が個別テーマを割り当てられた場合には、担当報告に向けた十分な準備が必要になる。

教科書

受講者と相談の上、決定することとする。

参考書

授業において、その都度、事前に指示する。

成績評価の方法

修論の成果(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習（イノベーションの実証分析）Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士（経済学）山内 勇		

授業の概要・到達目標

この授業では、イノベーションに関連する経済学的な実証論文を作成することを目的としている。先行研究に基づきオリジナルの仮説を設定し、データを集め厳密な検証を行うことが求められる。春学期の最終回までに、粗い形でも仮説の検証ができ、論文の全体像が分かる状態になっていることが目標である。授業は履修者の報告に基づくディスカッション形式で進める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究テーマ
- 第3回：先行研究の紹介と論文の位置付け1
- 第4回：先行研究の紹介と論文の位置付け2
- 第5回：仮説と検証方法1
- 第6回：分析手法と結果の解釈1
- 第7回：分析手法と結果の解釈2
- 第8回：仮説と検証方法2
- 第9回：追加データの取得1
- 第10回：追加データの取得2
- 第11回：分析手法と結果の解釈3
- 第12回：分析手法と結果の解釈4
- 第13回：全体の整合性の確認
- 第14回：最終報告

履修上の注意

履修者は学期末に研究レポートを提出することになる。この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン（双方向型）で実施することもある。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習：発表に向けた準備をすること。
復習：ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

指定しない。
(必要な文献については授業中に適宜指示する。)

参考書

安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。
加藤雅俊著『スタートアップの経済学』有斐閣、2021。
牧兼充著『イノベーターのためのサイエンスとテクノロジーの経営学』東洋経済新報社、2022。
B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010。

課題に対するフィードバックの方法

報告に対し毎回授業中にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(40%)、授業への貢献(20%)、レポート(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習（イノベーションの実証分析）Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士（経済学）山内 勇		

授業の概要・到達目標

この授業では、イノベーションに関連する経済学的な実証論文を作成することを目的としている。先行研究に基づきオリジナルの仮説を設定し、データを集め厳密な検証を行うことが求められる。授業は履修者の報告に基づくディスカッション形式で進める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究テーマ・論文の位置付け
- 第3回：分析結果の報告
- 第4回：分析の修正と結果報告1
- 第5回：分析の修正と結果報告2
- 第6回：分析の修正と結果報告3
- 第7回：中間報告(論文の目的・主要な分析結果)
- 第8回：論文報告(先行研究と論文の位置付け) 1
- 第9回：論文報告(先行研究と論文の位置付け) 2
- 第10回：論文報告(仮説と検証方法) 1
- 第11回：論文報告(仮説と検証方法) 2
- 第12回：論文報告(分析結果と結論) 1
- 第13回：論文報告(分析結果と結論) 2
- 第14回：最終報告

履修上の注意

春学期の「特論演習（イノベーションの実証分析）Ⅰ」を履修しておくこと。
この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン（双方向型）で実施することもある。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習：発表に向けた準備をすること。
復習：ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

指定しない。
(必要な文献については授業中に適宜指示する。)

参考書

安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。
加藤雅俊著『スタートアップの経済学』有斐閣、2021。
牧兼充著『イノベーターのためのサイエンスとテクノロジーの経営学』東洋経済新報社、2022。
B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010。

課題に対するフィードバックの方法

報告に対し毎回授業中にフィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(40%)、授業への貢献(20%)、論文(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) EDU612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(学校社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

本演習は、学校を対象とした修士論文執筆に対し、指導・助言することを目的とする。

受講者には、①研究計画を立案すること、②計画に従って研究を進め、進捗状況を報告すること、③先行研究に立ち返りながら、研究計画を再検討すること、④研究遂行上の課題・疑問点について教員およびゼミ生との議論を参考にしつつ、論文完成をめざすことが求められる。

授業内容

- 第1回 インTRODakション(aのみ)
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 修士論文序章案の発表(1)
- 第4回 修士論文序章案の発表(2)
- 第5回 文献講読(1)
- 第6回 文献講読(2)
- 第7回 文献講読(3)
- 第8回 研究の経過報告(1)
- 第9回 研究の経過報告(2)
- 第10回 文献講読(4)
- 第11回 文献講読(5)
- 第12回 修士論文中間報告会準備(1)
- 第13回 修士論文中間報告会準備(2)
- 第14回 研究の経過報告(3)・まとめ

履修上の注意

検討文献は受講者が自らの問題関心・研究テーマに応じてリサーチし、準備・共有する。報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当でない時も、必ず文献を精読し、自分なりの論点をもってゼミに臨むこと。

教科書

特に定めない。

参考書

適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

発表時のレポート(70%)ならびに議論への貢献度(30%)。

その他

科目ナンバー：(IC) EDU612J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(学校社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

本演習は、学校を対象とした修士論文執筆に対し、指導・助言することを目的とする。

受講者には、研究計画に沿って研究を進め、修論草稿を発表すること、教員およびゼミ生との議論を経て、論文完成をめざすことが求められる。

授業内容

- 第1回 インTRODakション(aのみ)
- 第2回 研究の経過報告(1)
- 第3回 研究の経過報告(2)
- 第4回 研究の経過報告(3)
- 第5回 研究の経過報告(4)
- 第6回 研究の経過報告(5)
- 第7回 研究の経過報告(6)
- 第8回 研究の経過報告(7)
- 第9回 研究の経過報告(8)
- 第10回 研究の経過報告(9)
- 第11回 研究の経過報告(10)
- 第12回 修士論文発表(1)
- 第13回 修士論文発表(2)
- 第14回 まとめ・総合討議

履修上の注意

報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

自らの研究に取り組むのはもちろんのこと、他者の研究にもしっかりと向き合い、積極的に議論に参加すること。

教科書

特に定めない。

参考書

適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

修士論文(100%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SSS642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(災害社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の執筆を目標として、そのための研究指導を行う。到達目標は、①仮説の確定、②調査・分析方法の確定、③修士論文の全体像の確定の3点となる。受講生はこれまでの演習科目における成果を基盤として執筆作業に取り組み、都度、その進捗状況についての報告を行う。

授業内容

- 第01回 インTRODakシヨN
- 第02回 研究構想・計画の確認
- 第03回 先行研究の整理(1)
- 第04回 先行研究の整理(2)
- 第05回 研究報告(1)
- 第06回 仮説の確定(1)
- 第07回 仮説の確定(2)
- 第08回 研究報告(2)
- 第09回 調査・分析の検討(1)
- 第10回 調査・分析の検討(2)
- 第11回 研究報告(3)
- 第12回 調査・分析の検討(3)
- 第13回 修士論文の全体像の検討(1)
- 第14回 研究報告(4)

履修上の注意

受講生の進捗状況に応じて講義内容・スケジュールは適宜変更する。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表準備は入念に行うこと。
発表の際に受けたコメント、指導教員から出された課題については、十分に対応を行うこと。

教科書

必要に応じて指示する。

参考書

必要に応じて指示する。

成績評価の方法

研究報告 50% レポート 50%

その他

秋季に開催される「災害情報学会大会」もしくは「災害復興学会大会」での研究発表を推奨する。

科目ナンバー：(IC) SSS642J			
情報・社会系		備考	
科目名	特論演習(災害社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の執筆を目標として、そのための研究指導を行う。したがって、到達目標は修士論文の執筆・提出である。受講生はこれまでの演習科目における成果を基盤として執筆作業に取り組み、都度、その進捗状況についての報告を行う。

授業内容

- 第01回 インTRODakシヨN
- 第02回 研究構想・計画の確認
- 第03回 タイトル・章立て・要旨の執筆(1)
- 第04回 タイトル・章立て・要旨の執筆(2)
- 第05回 研究報告(1)
- 第06回 執筆作業(1)
- 第07回 執筆作業(2)
- 第08回 執筆作業(3)
- 第09回 執筆作業(4)
- 第10回 研究報告(2)
- 第11回 執筆作業(5)
- 第12回 執筆作業(6)
- 第13回 執筆作業(7)
- 第14回 修士論文の確認

履修上の注意

受講生の進捗状況に応じて講義内容・スケジュールは適宜変更する。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表は修士論文の原稿を用いて行うため、その準備をしっかりと行うこと。
発表の際に受けたコメント、指導教員から出された課題については、十分に対応を行うこと。

教科書

必要に応じて指示する。

参考書

必要に応じて指示する。

成績評価の方法

修士論文執筆 100%

その他

秋季に開催される「災害情報学会大会」もしくは「災害復興学会大会」での研究発表を推奨する。

科目ナンバー：(IC) ECN511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(行動経済学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(経済学) 後藤 晶		

授業の概要・到達目標

標準的な経済学の基盤にある合理的人間観について再検討し、より現実的な人間観に基づき経済学を再構築しようとするのが行動経済学の目的です。現実の人間の観察や実験により、現実の人間には合理的な点もあれば、一見非合理的に見えるような点もあります。昨今、社会ではこのような現実の人間の理解に基づいた経済学が求められています。

専門研究(行動経済学) Iでは、行動経済学の基礎概念と分析手法について講義します。特に、行動経済学は多様なデータに接する機会が多く、データの捉え方に関する基本的な理解があれば、その学習はより充実したものとなると考えています。そのために、社会科学・人文科学系の学問に携わる学生として求められる基本的な因果推論の考え方についても紹介・議論する予定です(初学者も大歓迎です)。そして、行動経済学の諸概念や基本的な考え方を紹介し、現状と成果、将来性について検討します。最終的には、行動経済学の基礎概念の理解と分析ツールの習得を目標とします。

授業内容

- 第1回：経済学における合理性概念の再検討
 - 第2回：行動経済学とデータ(1)データの誤差
 - 第3回：行動経済学とデータ(2)定型データと非定型データ
 - 第4回：行動経済学とデータ(3)機械学習
 - 第5回：行動経済学とデータ(4)ランダム化比較実験
 - 第6回：行動経済学とデータ(5)因果推論
 - 第7回：フレーミング効果
 - 第8回：ヒューリスティクスとバイアス
 - 第9回：プロスペクト理論(1)基本的な考え方
 - 第10回：プロスペクト理論(2)損失回避性とその発展
 - 第11回：社会選好
 - 第12回：時間選好
 - 第13回：神経経済学と行動経済学
 - 第14回：進化心理学と行動経済学
- ※ただし、受講状況に応じて内容は変化することがあります。

履修上の注意

日頃から日常生活や社会の中に、行動経済学の知見から説明できる現象がないか探してみてください。さらには、なぜそのような事象が発生するのか考えてみてください。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講者が自分の考えを整理し、受講者間の意見交換が重要です。十分な予習と意見の整理をしてから授業に臨んでください。

教科書

- 山田典一(著)『データ分析に必須の知識・考え方 認知バイアス入門：分析の全工程に発生するバイアス その背景・対処法まで完全網羅』(2023年, ソシム)
- 江崎貴裕(著)『データ分析のための数理モデル入門：本質を捉えた分析のために』(2020年, ソシム)
- 江崎貴裕(著)『分析者のためのデータ解釈学入門：データの本質をとらえる技術』(2020年, ソシム)
- 杉山聡(著)『本質を捉えたデータ分析のための分析モデル入門：統計モデル、深層学習、強化学習等 用途・特徴から原理まで一気通貫!』(2022年, ソシム)
- 川越敏司(著)『「意思決定」の科学 なぜ、それを選ぶのか』(2020年, 講談社)その他、教員が適宜資料を用意する予定です。

参考書

- 友野典男(著)『行動経済学－経済は「感情」で動いている』(2006年, 光文社)
- 室岡健志(著)『行動経済学』(2023年, 日本評論社)
- Wilkinson, N. and M. Klaes (2017) "An introduction to Behavioral Economics", Red Globe Press.
- Cartwright, E. (2018) "Behavioral Economics 3rd edition", Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

毎回の講義の中でディスカッションとコメントを行います。また、提出された課題にはコメントをして返します。

成績評価の方法

リアクションペーパー:20%, 授業への貢献度:40%, レポート:40%

【成績評価の方法の詳細】

リアクションペーパー：毎回の講義後に振り返りのためのリアクションペーパーを課します。
 授業への貢献度：ディスカッションへの参加状況を評価します。
 レポート：最後にこの講義を通じて考えた研究計画についてレポートしてもらう予定です。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(行動経済学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(経済学) 後藤 晶		

授業の概要・到達目標

行動経済学に関わる研究は昨今急激に発展しています。特に、その経済社会への応用は、我が国をはじめ多くの国で実践的に用いられています。行動経済学は現実の人間に基づいた経済学であると言えますが、社会における問題解決や政策もまた、現実の人間に基づくべきであるという考え方が受け入れられてつあります。特に、EBPM(Evidence Based Policy Making)の発展の広がりとともに、行政からも国・地方自治体を問わずに注目を浴びているのが現状です。また、(不適切な形も含めて)企業からも同様に注目を浴びています。

専門研究(行動経済学) IIでは、行動経済学を用いることで、経済・社会における問題解決がどのように行われているのか検討します。はじめに、ナッジやプーストをはじめとする諸概念や基本的な考え方を紹介します。そして、国内外の実際の問題解決や政策への適用例について講義します。最終的には、行動経済学の知見を活用したさまざまな問題解決・政策手法を理解し、新たな問題解決・政策の提案ができるようになることが目標です。

授業内容

- 第1回：行動経済学と標準的経済学による問題解決・政策の展開
 - 第2回：行動経済学の諸概念を振り返る
 - 第3回：行動経済学による問題解決手法の基礎
 - 第4回：ナッジとは何か
 - 第5回：日本におけるナッジの状況
 - 第6回：EBPMとナッジ
 - 第7回：ナッジを計画する枠組み(1) FEASTフレームワーク
 - 第8回：ナッジを計画する枠組み(2) BASICアプローチ
 - 第9回：問題解決手法としてのナッジ(1)初期設定
 - 第10回：問題解決手法としてのナッジ(2)情報開示
 - 第11回：問題解決手法としてのナッジ(3)フレーミング効果
 - 第12回：問題解決手法としてのナッジ(4)簡素化
 - 第13回：問題解決手法としてのナッジ(5)：社会的証明・同調性
 - 第14回：ナッジの課題：倫理的課題とその周辺
- ※ただし、受講状況に応じて内容は変化することがあります。

履修上の注意

日頃から行動経済学の観点から日常生活や社会における課題を考えてみましょう。行動経済学の方でそれらの問題を解決できないか考えてみてください。

準備学習(予習・復習等)の内容

春学期開講の専門研究(行動経済学) Iを履修するか、参考文献に掲げた文献をよく読み、行動経済学の基礎知識をある程度身につけてからこの講義を受講することを望みます。

教科書

- キャス・サンステイーン, ルチア・ライシュ(著)『データで見る行動経済学：全世界大規模調査で見てきた「ナッジの真実」』(2020年, 日経BP社)
- リチャード・セイラー, キャス・サンステイーン(著)『実践行動経済学 完全版』(2022年, 日経BP社)
- キャス・サンステイーン(著)『入門・行動科学と公共政策』(2021年, 勁草書房)
- 依田高典(著)『データサイエンスの経済学 調査・実験、因果推論・機械学習が拓く行動経済学』(2023年, 岩波書店)

参考書

- 友野典男(著)『行動経済学－経済は「感情」で動いている』(2006年, 光文社)
- ダニエル・カーネマン(著)『ファスト&スロー』(2012年, 早川書房)
- リチャード・セイラー(著)『行動経済学の逆襲』(2019年, 早川書房)
- 川越敏司(著)『「意思決定」の科学 なぜ、それを選ぶのか』(2020年, 講談社)

課題に対するフィードバックの方法

毎回の講義の中でディスカッションとコメントを行います。また、提出された課題にはコメントをして返します。

成績評価の方法

リアクションペーパー:20%, 授業への貢献度:40%, レポート:40%

【成績評価の方法の詳細】

リアクションペーパー：毎回の講義後に振り返りのためのリアクションペーパーを課します。
 授業への貢献度：ディスカッションへの参加状況を評価します。
 レポート：最後にこの講義を通じて考えた研究計画についてレポートしてもらう予定です。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(公共政策) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本研究科は、現代社会の諸問題に学際的・複数領域横断的にアプローチでき、現代社会の問題を発見し、それを分析し、解決できる人材の輩出を目標としている。現代の日本は、自由主義社会であり、社会にとって必要な財やサービスの多くは民間の市場を通じて供給される。それゆえ、現代社会では、民間の市場が大きな役割を果たすが、これがうまく機能しない場合があり、「市場の失敗」と呼ばれる現象が発生している。市場の失敗を解決するために、政府が市場に介入することが正当化されている。本講義では、経済学のアプローチを用いて、資源配分機能、所得分配機能、経済安定化機能の観点から、現在の自由主義社会における政府の役割について論じる。なお、政府の介入がかえって自体を悪化させる「政府の失敗」も発生しており、これについても言及する。

本講義では、公共政策のうち、支出政策や租税政策に焦点を絞って論じるが、そのときどきで発生している重要な時事問題も適宜取り上げる。

本講義は、現代社会における諸問題がなぜ発生したのかを受講生が理解し、それらの諸問題の原因は何か、そしてそれを解決するにはどうしたらよいかを受講生が論理的に考察する能力を身につけることを目指している。

授業内容

具体的な授業の内容は、以下のとおりである。

- 第1回：市場の有効性
- 第2回：効率的な資源配分と市場の失敗
- 第3回：公平な所得分配と市場の失敗
- 第4回：租税原則
- 第5回：租税における公平性と効率性
- 第6回：消費税の理論分析
- 第7回：現実の消費税
- 第8回：所得税の理論分析
- 第9回：現実の所得税
- 第10回：公共財の理論分析
- 第11回：現実の公共財
- 第12回：外部性
- 第13回：自然独占
- 第14回：財政赤字のメリット・デメリット

履修上の注意

現代の社会問題とその解決策についての関心とそれへの学習意欲が要求される。授業中の質疑応答では、積極的に発言すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業を受ける当たっては、参考書の該当箇所に目を通しておくこと。社会問題を取り上げた新聞記事にも目を通しておくこと。また、授業終了後は、ノートを見直し、理解できない点がある場合は、参考書を読み直したり、教員へ質問をすること。

教科書

使用しない。

参考書

- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(見洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鎌田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

授業での質疑応答(50%)およびレポート(50%)により評価する予定である。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(公共政策) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本研究科は、現代社会の諸問題に学際的・複数領域横断的にアプローチでき、現代社会の問題を発見し、それを分析し、解決できる人材の輩出を目標としている。現代の日本は、自由主義社会であり、社会にとって必要な財やサービスの多くは民間の市場を通じて供給される。それゆえ、現代社会では、民間の市場が大きな役割を果たすが、これがうまく機能しない場合があり、「市場の失敗」と呼ばれる現象が発生している。市場の失敗を解決するために、政府が市場に介入することが正当化されている。本講義では、経済学的手法を用いて、資源配分機能、所得分配機能、経済安定化機能の観点から、現在の自由主義社会における政府の役割について論じる。なお、政府の介入がかえって自体を悪化させる「政府の失敗」も発生しており、これについても言及する。

本講義では、公共政策のうち、社会保障政策や地方政府の政策に焦点を絞って論じるが、そのときどきの重要な時事問題も適宜取り上げることにしたい。

本講義は、現代社会における諸問題がなぜ発生したのかを受講生が理解し、それらの諸問題の原因は何か、そしてそれを解決するにはどうしたらよいかを受講生が論理的に考察する能力を身につけることを目指している。

授業内容

具体的な授業の内容は、以下のとおりである。

- 第1回：市場の有効性
- 第2回：市場の失敗
- 第3回：高齢社会と介護政策
- 第4回：財政方式と年金政策
- 第5回：世代間の公平と年金政策
- 第6回：医療政策の経済分析
- 第7回：現実の医療政策
- 第8回：国と地方の役割分担
- 第9回：地方分権の意義
- 第10回：地方政府と支出政策
- 第11回：地方政府と租税政策
- 第12回：政府間関係と国庫支出金政策
- 第13回：政府間関係と地方交付税政策
- 第14回：財政赤字と地方債政策

履修上の注意

現代の社会問題とその解決策についての関心とそれへの学習意欲が要求される。授業中の質疑応答では、積極的に発言すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業を受ける当たっては、参考書の該当箇所に目を通しておくこと。社会問題を取り上げた新聞記事にも目を通しておくこと。また、授業終了後は、ノートを見直し、理解できない点がある場合は、参考書を読み直したり、教員へ質問をすること。

教科書

使用しない。

参考書

- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(見洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鎌田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

授業中の質疑応答(50%)およびレポート(50%)により評価する予定である。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究（メディア技術と社会）Ⅰ		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 大黒 岳彦		

授業の概要・到達目標

春学期は、「メディア」という概念の多義性や曖昧さ、幅広さとともに、その根本義を解明するところから始める。その上で「メディア論」という1940年代に創始されたディシプリンの概念史を、トロント学派(イニス・マクルーハン・ハヴロック・オング)、ベンヤミン、キットラー、ドブレ、デリダと辿ったあと、ルーマンの社会システム論を四種のメディアから構成される一つの独自の「メディア理論」として解釈するところまでを講義する。

授業内容

- 第1回 メディアとは何か？
 - 第2回 「小包みの比喻」
 - 第3回 トロント学派のメディア観(1)
 - 第4回 トロント学派のメディア観(2)
 - 第5回 トロント学派のメディア観(3)
 - 第6回 トロント学派のメディア観(4)
 - 第7回 トロント学派のメディア観(まとめ)
 - 第8回 ベンヤミンのメディア観(1)
 - 第9回 ベンヤミンのメディア観(2)
 - 第10回 ベンヤミンのメディア観(3)
 - 第11回 ベンヤミンのメディア観(まとめ)
 - 第12回 マスメディアというメディア(1)
 - 第13回 マスメディアというメディア(2)
 - 第14回 マスメディアというメディア(まとめ)
- *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

できる限り秋学期に開講される「専門研究（メディア技術と社会）Ⅱ」も受講されたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々指示に従ってください。

教科書

『メディアの哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』(NTT出版)

参考書

授業のなかでその都度指示する。

成績評価の方法

レポート。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究（メディア技術と社会）Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 大黒 岳彦		

授業の概要・到達目標

秋学期では、春学期の講義を踏まえつつ、まずルーマンのマスメディア・システムの理論に沿いながら「マスメディア」というメディアの特性を考えていきたい。またルーマンの社会システム論では見落とされている「身体」という格別なメディアが社会の構成にあたってどのような役割を果たしているのかについても考えることで、社会構成主義の新しい道を探っていきたい。秋学期では受講者の問題意識をも随時と取り込みつつヒューリスティックな授業構成にしたいと思っている。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN
 - 第2回 社会システム論とは何か？(1)
 - 第3回 社会システム論とは何か？(2)
 - 第4回 社会システム論とは何か？(3)
 - 第5回 ハーバマスとルーマン
 - 第6回 パーソNZとルーマン
 - 第7回 社会システム論におけるメディアの位置
 - 第8回 4つのメディア概念
 - 第9回 伝播メディア
 - 第10回 象徴的一般化メディア
 - 第11回 メディア/形式
 - 第12回 マスメディア
 - 第13回 ルーマン社会システム論の課題
 - 第14回 身体メディア
- *授業内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

春学期の「専門研究（メディア技術と社会）Ⅰ」を受講していることが望ましいが、受講の条件ではない。

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々指示に従ってください。

教科書

『メディアの哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』(NTT出版)

参考書

授業のなかでその都度指示する。

成績評価の方法

レポート。

その他

科目ナンバー：(IC) INF511J			
情報・社会系	備考		
科目名	専門研究(情報科学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

情報技術の発達により多種多様なサービスが提供されるようになってきている。一方、大規模複雑化の進む情報システムには、ソフト的・ハード的な不具合の増加、システム障害時に影響が及ぶ範囲や被害の度合いの拡大、ハイテク犯罪の危険性などの問題がある。これらの問題に対応するには、情報システムの仕組みを理解することも重要である。本講義は、コンピュータのハード、ソフトおよびインターネットの仕組みについて理解を深めることを目的とする。

授業内容

- 第1回：講義の概要
- 第2回：コンピュータの動作原理
- 第3回：コンピュータにおける情報処理
- 第4回：ソフトウェアとは
- 第5回：ソフトウェア開発1
- 第6回：ソフトウェア開発2
- 第7回：OSとは
- 第8回：インターネットの仕組み
- 第9回：電子メールの仕組み
- 第10回：クラウドとは
- 第11回：暗号
- 第12回：機械学習(1)
- 第13回：機械学習(2)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) INF511J			
情報・社会系	備考		
科目名	専門研究(情報科学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(工学) 山崎 浩二		

授業の概要・到達目標

技術の進歩により我々の生活は益々便利に、快適になってきている。しかしその一方で、今までにはなかった新たな危険の発生、事故や障害発生時の被害の拡大などの負の側面もある。今後、より高度化していく社会においては、リスクの諸要因を十分に理解し、それを適切に管理することが重要である。本講義では安全の概念、および事故の発生する要因とその対策について理解を深めることで、これからの社会で必要とされる安全に対する基本的な知識を獲得することを目的とする。

授業内容

- 第1回：講義の概要
- 第2回：安全とは
- 第3回：安全を守るには
- 第4回：安全の技術
- 第5回：リスクコミュニケーション
- 第6回：事故の事例
- 第7回：バグの事例
- 第8回：マルウェア
- 第9回：サイバー攻撃1
- 第10回：サイバー攻撃2
- 第11回：ICの検査法
- 第12回：誤った計算
- 第13回：電話の信頼性
- 第14回：まとめ

履修上の注意

特になし

準備学習(予習・復習等)の内容

Oh-o! Meiji上の授業資料に事前に目を通しておくこと。復習として、授業資料を読み直し、不明な点は授業で質問すること。

教科書

別途指示する

参考書

別途指示する

成績評価の方法

平常点(40%)、レポート(60%)で評価する

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) LAW576J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(知的財産法) I [M]		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学) 今村 哲也		

授業の概要・到達目標

授業概要：具体的な授業内容は、参加者の属性や要望に応じて柔軟に対応するが、さしあたり、著作権法を中心に、知的財産に関する最近の社会的事件について、討議をしながら解説をする。対象とする社会的事件については、教員および学生が選択したものを用いる。

授業の到達目標：本授業は、参加者が、知的財産をめぐる最近の事象から各自の知見を得るとともに、知的財産法の基本的な考え方を会得することができるようにする。

授業内容

この講義はすべてZoomを使ってライブ授業(リアルタイム配信)で行う。

- 第1回 本講義の目的と概要の説明
- 第2回 事案の検討(1)
- 第3回 事案の検討(2)
- 第4回 事案の検討(3)
- 第5回 事案の検討(4)
- 第6回 事案の検討(5)
- 第7回 事案の検討(6)
- 第8回 事案の検討(7)
- 第9回 事案の検討(8)
- 第10回 事案の検討(9)
- 第11回 事案の検討(10)
- 第12回 事案の検討(11)
- 第13回 事案の検討(12)
- 第14回 事案の検討(13)

履修上の注意

この授業はメディア授業科目として開講される。授業はすべて、Zoomを使ってライブ授業(リアルタイム配信)で行う。また、Oh-ol Meijiクラスウェブのディスカッション機能を活用し、意見交換の場を設ける。教員への質問・相談窓口として、専用メールアドレスを履修者に通知する(ただし、授業の内容に関する質問は、ディスカッション機能で行うこと)。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として指定した資料の該当箇所を事前に読了・視聴することを求める。講義では、次回までに読むべき資料をその都度指示するので、それらを準備学習として読んでおくこと。予習には90分程度かかると想定される。

教科書

必要な資料は、その都度配布する。

参考書

中山信弘『著作権法』(有斐閣・第3版・2020)

成績評価の方法

授業への参加度：50%。授業への参加度は、(1)自らの報告内容と、(2)他人の報告に対する意見・質疑内容で評価する。レポート：50%。学期末までに提出するレポートを評価の対象とする。

※対面形式での試験は行わない。

その他

クラスウェブのディスカッションを機能を活用し、講師および学生同士の意見交換の場を設ける。

科目ナンバー：(IC) LAW576J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(知的財産法) II [M]		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学) 今村 哲也		

授業の概要・到達目標

授業概要：具体的な授業内容は、参加者の属性や要望に応じて柔軟に対応するが、知的財産に関する最近の社会的事件について、討議をしながら解説をする(専門研究(知的財産法) I では著作権を中心にしたが、II ではより幅広く取り上げる)。対象とする社会的事件については、教員および学生が選択したものを用いる。

授業の到達目標：本授業は、参加者が、知的財産をめぐる最近の事象から各自の知見を得るとともに、知的財産法の基本的な考え方を会得することができるようにする。

授業内容

この講義はすべてZoomを使ってライブ授業(リアルタイム配信)で行う。

- 第1回 本講義の目的と概要の説明
- 第2回 事案の検討(1)
- 第3回 事案の検討(2)
- 第4回 事案の検討(3)
- 第5回 事案の検討(4)
- 第6回 事案の検討(5)
- 第7回 事案の検討(6)
- 第8回 事案の検討(7)
- 第9回 事案の検討(8)
- 第10回 事案の検討(9)
- 第11回 事案の検討(10)
- 第12回 事案の検討(11)
- 第13回 事案の検討(12)
- 第14回 事案の検討(13)

履修上の注意

この授業はメディア授業科目として開講される。授業はすべて、Zoomを使ってライブ授業(リアルタイム配信)で行う。また、Oh-ol Meijiクラスウェブのディスカッション機能を活用し、意見交換の場を設ける。教員への質問・相談窓口として、専用メールアドレスを履修者に通知する(ただし、授業の内容に関する質問は、ディスカッション機能で行うこと)。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として指定した資料の該当箇所を事前に読了・視聴することを求める。講義では、次回までに読むべき資料をその都度指示するので、それらを準備学習として読んでおくこと。予習には90分程度かかると想定される。

教科書

必要な資料は、その都度配布する。

参考書

必要な資料は、その都度配布する。

成績評価の方法

授業への参加度：50%。授業への参加度は、(1)自らの報告内容と、(2)他人の報告に対する意見・質疑内容で評価する。レポート：50%。学期末までに提出するレポートを評価の対象とする。

※対面形式での試験は行わない。

その他

クラスウェブのディスカッションを機能を活用し、講師および学生同士の意見交換の場を設ける。

科目ナンバー：(IC) POL531J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(国際関係論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

専門的で高度な内容を学習して修士論文を書くための準備となるような授業を行う。国際関係論について必要不可欠の理論を英語文献を通じて学び、国際関係史の視点から一次史料を読解し分析する方法を学習する。政治学や国際関係論に関連する古典を読み基礎力を養う。

授業内容

- 第1回 インTRODakション(前半のみ)
- 第2回 国際関係の理論(1)
- 第3回 国際関係の理論(2)
- 第4回 国際関係の理論(3)
- 第5回 国際関係の理論(4)
- 第6回 国際関係史のための一次史料読解(1)
- 第7回 国際関係史のための一次史料読解(2)
- 第8回 国際関係史のための一次史料読解(3)
- 第9回 国際関係史のための一次史料読解(4)
- 第10回 国際関係史のための一次史料読解(5)
- 第11回 政治学古典読解(1)
- 第12回 政治学古典読解(2)
- 第13回 政治学古典読解(3)
- 第14回 政治学古典読解(4)

履修上の注意

学生の研究テーマに合わせて、優先的に学ぶべき理論や、一次史料読解の対象となる時代を決定するので、研究したいテーマの概要をまとめておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で紹介した内容については、文献等で調べておくこと。

教科書

未定。学生の研究テーマに応じて決定する。

参考書

未定。学生の研究テーマに応じて決定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に行ったり、授業終了後にOh-o! Meijiで講評を連絡する。

成績評価の方法

期末にレポートなどは課さない。平素の授業の中で積極的に参加しているか否か(50%)、また理論や史料の理解度がどの程度か(50%)を総合的に判断して成績評価をする。

その他

国際関係に関する研究テーマを持つ学生はもちろんのこと、直接国際関係に関係のない研究テーマを持つ学生も歓迎する。

科目ナンバー：(IC) POL531J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(国際関係論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

冷戦史を素材にして国際関係の理論的・歴史的側面を研究する。(1)ジョージ・F・ケナンの「封じ込め」構想を素材にして、現実主義と国家戦略の問題を学習する。(2)米英同盟を素材にして、帝国論、同盟理論などを学習する。(3)国際安全保障や国家戦略に関する英語文献を読解し基本的な概念を学ぶ。最後に米英の世界戦略を参考にして日本の世界戦略について考察する。

授業内容

- 第1回 インTRODakション(前半のみ)
- 第2回 冷戦史の概要
- 第3回 ケナンの「封じ込め」構想の問題点(1)
- 第4回 ケナンの「封じ込め」構想の問題点(2)
- 第5回 ケナンの「封じ込め」構想の問題点(3)
- 第6回 ケナンの「封じ込め」構想の問題点(4)
- 第7回 米英同盟の問題点(1)
- 第8回 米英同盟の問題点(2)
- 第9回 米英同盟の問題点(3)
- 第10回 米英同盟の問題点(4)
- 第11回 国際安全保障と国家戦略(1)
- 第12回 国際安全保障と国家戦略(2)
- 第13回 国際安全保障と国家戦略(3)
- 第14回 日本の世界戦略について

履修上の注意

国際関係論 I (専門研究) を履修していることが望ましい。同科目を履修していない学生も履修して良いが、そのような学生が多い場合には基本的な学習を3回程度行う予定。その場合には学生のニーズに合わせて授業内容を変更する。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で紹介した内容については、文献等で調べておくこと。

教科書

鈴木健人『「封じ込め」構想と米国世界戦略』 溪水社、平成14年。
 その他は授業開始のあと指示する。一次史料を配布してその読解を試みる場合もある。

参考書

授業開始のあと指示する。一次史料を配布してその分析を試みる場合もある。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に行ったり、授業終了後にOh-o! Meijiで講評を連絡する。

成績評価の方法

平素の授業の中で問題に対する理解度を判定し評価する。期末試験はとくに実施しない予定。

その他

かなりの分量の日本語文献や英語文献を読む予定なので、事前にある程度まで読解力を養っておくことが望ましい。

科目ナンバー：(IC) POL516J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(現代政治学) I [M]		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本授業は、アメリカ政治とメディアの最新の傾向について分析することを目標とする。メディアはアメリカの選挙キャンペーンにおいてどのような役割を果たしてきたのだろうか。インターネットやソーシャルメディアはアメリカ政治をどのように変えていくのだろうか。アメリカにおけるメディア環境はどのように変化してきたのだろうか。また本授業の狙いは、政治とメディアについて日米比較研究の視野を育てていくことにある。

授業内容

- 第1回：aのみ、イントロダクション (リアルタイム配信)
- 第2回：文献講読1 (リアルタイム配信)
- 第3回：文献講読2 (リアルタイム配信)
- 第4回：文献講読3 (リアルタイム配信)
- 第5回：文献講読4 (リアルタイム配信)
- 第6回：文献講読5 (リアルタイム配信)
- 第7回：文献講読6 (リアルタイム配信)
- 第8回：文献講読7 (リアルタイム配信)
- 第9回：文献講読8 (リアルタイム配信)
- 第10回：文献講読9 (リアルタイム配信)
- 第11回：文献講読10 (リアルタイム配信)
- 第12回：文献講読11 (リアルタイム配信)
- 第13回：研究発表1 (リアルタイム配信)
- 第14回：研究発表2、まとめ (リアルタイム配信)

*授業の内容や順番は、必要に応じて変更の可能性がある。

履修上の注意

本授業はメディア授業であり、Zoomによるリアルタイム配信で行う。各回のZoomのミーティング情報は前々日までにクラスウェブの「授業のお知らせ」により連絡するので、確認すること。教員のメールアドレスを通知するので、履修者は教員と連絡できる。使用テキストは英語文献であるため、英語の読解力が必要である。主に、各回の報告の担当に当たった者が内容をまとめたレジュメを作成し、発表する形式とする。ディスカッションに積極的に参加する姿勢が求められる。履修を希望する場合は、授業の進め方について説明があるため、初回授業に出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

報告に当たっている場合は、事前にレジュメを作成して準備すること。授業中に発表者は画面共有により、スライド(あるいはレジュメ)を用いて発表する。スライド(あるいはレジュメ)は授業前に教員にメールで提出すること。ディスカッションを重視するため、報告の担当に当たってなくても、事前に教科書の該当箇所を読んで、専門用語を辞書等で調べておくことが望ましい。リアルタイムの授業時間内に十分なディスカッション時間をとるが、授業時間以外にもクラスウェブのディスカッション機能を使った意見交換を行うことがあるので、積極的にディスカッションに参加してほしい。2024年11月のアメリカ大統領選挙に向けて、メディアやソーシャルメディアからの情報収集に日ごろから努め、授業中にディスカッションに役立つことが求められる。

教科書

『アメリカ公共放送の歴史—多様性社会における人知の共有をめざして』志村浩一郎、明石書店(2020年)

参考書

- 『教養としてのアメリカ研究』清原聖子(編著)、大学教育出版(2021年)
- 『アメリカ政治の地殻変動—分極化の行方』久保文明、中山俊宏、山岸敬和、梅川健(編著)、東京大学出版会(2021年)
- 『東大塾現代アメリカ講義—トランプのアメリカを読む』矢口祐人(編著)、東京大学出版会(2020年)
- 『メディアが動かすアメリカ政治—民主政治とジャーナリズム』渡辺将人、ちくま新書(2020年)
- 『現代アメリカ政治とメディア』前嶋和弘、山脇岳志、津山恵子(編著)、東洋経済新報社(2019年)
- 『ネット選挙が変える政治と社会—日米韓に見る新たな「公共圏」の姿』清原聖子、前嶋和弘(編著)、慶應義塾大学出版会(2013年)
- 『インターネットが変える選挙—日米比較と日本の展望』清原聖子、前嶋和弘(編著)、慶應義塾大学出版会(2011年)
- その他、授業の中で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、授業での報告・発表(50%)

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) POL516J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(現代政治学) II [M]		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本授業は、アメリカにおける政治とソーシャルメディアの最新の傾向について分析することを目標とする。オンライン上では紛れもなく集団分極化が起きている。オンラインの集団分極化はアメリカ政治にどのような影響を与えているのか。そして、コミュニケーション政策に関してどのような問題を提起するのだろうか。また本授業の狙いは、政治とソーシャルメディアについて日米比較研究の視野を育てていくことにある。

授業内容

- 第1回：aのみ、イントロダクション (リアルタイム配信)
- 第2回：文献講読1 (リアルタイム配信)
- 第3回：文献講読2 (リアルタイム配信)
- 第4回：文献講読3 (リアルタイム配信)
- 第5回：文献講読4 (リアルタイム配信)
- 第6回：文献講読5 (リアルタイム配信)
- 第7回：文献講読6 (リアルタイム配信)
- 第8回：文献講読7 (リアルタイム配信)
- 第9回：文献講読8 (リアルタイム配信)
- 第10回：文献講読9 (リアルタイム配信)
- 第11回：文献講読10 (リアルタイム配信)
- 第12回：文献講読11 (リアルタイム配信)
- 第13回：研究発表1 (リアルタイム配信)
- 第14回：研究発表2、まとめ (リアルタイム配信)

*授業の内容や順番は、必要に応じて変更の可能性がある。

履修上の注意

本授業はメディア授業であり、Zoomによるリアルタイム配信で行う。各回のZoomのミーティング情報は前々日までにクラスウェブの「授業のお知らせ」により連絡するので、確認すること。教員のメールアドレスを通知するので、履修者は教員と連絡できる。春学期に同名科目「I」を履修していることが望ましいが、秋学期のみ履修も可能である。主に、各回の報告の担当に当たった者が内容をまとめたレジュメを作成し、発表する形式とする。ディスカッションに積極的に参加する姿勢が求められる。履修を希望する場合は、授業の進め方について説明があるため、初回授業に出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

報告に当たっている場合は、事前にレジュメを作成して準備すること。授業中に発表者は画面共有により、スライド(あるいはレジュメ)を用いて発表する。スライド(あるいはレジュメ)は授業前に教員にメールで提出すること。ディスカッションを重視するため、報告の担当に当たってなくても、事前に教科書の該当箇所を読んで、コメントを考慮しておくこと。リアルタイムの授業時間内に十分なディスカッション時間をとるが、授業時間以外にもクラスウェブのディスカッション機能を使った意見交換を行うことがあるので、積極的にディスカッションに参加してほしい。2024年11月のアメリカ大統領選挙に向けて、メディアやソーシャルメディアからの情報収集に日ごろから努め、授業中にディスカッションに役立つことが求められる。

教科書

『フェイクニュースの生態系』藤代裕之(編著)、青弓社(2021年)、『フェイクニュースに震撼する民主主義—日米韓の国際比較研究』清原聖子(編著)、大学教育出版(2019年)

参考書

- 『ソーシャルメディア解体全書—フェイクニュース、ネット炎上、情報の偏り』山口真一、勁草書房(2022年)
- 『ネット分断への処方箋』田中辰雄、勁草書房(2022年)
- 『ネット企業はなぜ免責されるのか—言論の自由と通信品位法230条』ジェフ・コセフ(著)、小田嶋由美子(訳)、長島光一(監修)、みすず書房(2021年)
- 『教養としてのアメリカ研究』清原聖子(編著)、大学教育出版(2021年)
- 『アメリカ政治の地殻変動—分極化の行方』久保文明、中山俊宏、山岸敬和、梅川健(編著)、東京大学出版会(2021年)
- 『メディアが動かすアメリカ—民主政治とジャーナリズム』渡辺将人、ちくま書房(2020年)
- 『操られる民主主義—デジタル・テクノロジーはいかにして社会を破壊するか』ジェイミー・パートレット(著)、秋山勝(訳)、草思社文庫(2020年)
- 『#リパブリック：インターネットは民主主義になにをもたらすのか』キャス・サンスティーン(著)、伊達尚美(翻訳)、勁草書房(2018年)
- その他、授業内で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(50%)、授業での報告・発表(50%)

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) ECN541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(開発経済学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本講義の目的は開発経済について、国連のSDGs(持続可能な開発目標)や日本のODA(政府開発援助)などによる具体的なプロジェクトを取り上げつつ、理論的、実証的、政策的観点から分析する能力を養うことである。

グローバル化とともに世界的な格差が拡大している。そのような中で、経済発展を促進し格差を解消するためには、どのような政策、プロジェクトを行うべきかを分析する能力を深めなければならない。

授業では理論的部分のみならず、具体的な事例を取り上げることができるだけ具体的政策を見る眼を養う。また、講義に加え学生は履修者は毎回、文献レビュー(要約、文献の学術上の意義、弱点、政策的含意)を作成し、その上で議論も行う。授業を通じて学生はレポートをまとめ、それを発表する。

(到達目標)

グローバル経済に関する問題や政策についての論理的に理解し、政策を見る眼を養い、自分の言葉で説明できるようにする。望ましい政策、プロジェクトを選択するための分析能力を身につける。

授業内容

- 第1回：a イントロダクション — グローバリゼーションと格差
- 第2回：地球規模の課題とSDGs
- 第3回：国際協力の潮流
- 第4回：経済協力とは何か
- 第5回：インパクト評価手法
- 第6回：国際貿易がもたらす利益と不利益
- 第7回：重力モデル、リカード・モデル-比較優位と貿易
- 第8回：産業はどのように発展するか?
- 第9回：カイゼンと産業開発
- 第10回：国際協力プロジェクトとは何か?
- 第11回：経済性評価(EIRR, FIRR)の手法
- 第12回：日本の経済発展と途上国
- 第13回：これからの国際協力
- 第14回：プレゼンテーション

履修上の注意

- ・ミクロ経済学、マクロ経済学を履修していることが望ましい。履修していない場合には、スティグリッツ「入門経済学第4版」(東洋経済新報社)を必要に応じて参照すること。
- ・現実の経済に強い関心を持っていること。
- ・講義に加え学生は履修者は毎回、文献レビュー(要約、文献の学術上の意義、弱点、政策的含意)を作成し、その上で議論も行う。授業を通じて学生はレポートをまとめ、それを発表する。

準備学習(予習・復習等)の内容

参考文献リストをよく読み。自分自身の関心に近い研究テーマを自分自身で設定しておくこと。

教科書

テキストは指定せず、履修者の関心に即して、最新文献、必須文献をその都度紹介していく。

参考書

- ・島田剛(2023)「ミクロ経済学への招待」、新世社
 - ・澤田康幸(2004)「基礎コース 国際経済学」、新世社
 - ・園部哲史・大塚啓二郎(2004)「産業発展のルーツと戦略」、知泉書房
 - ・Paul Krugman, Maurice Obstfeld, Marc J. Melitz. 2012. International Economics - Theory and Policy (ninth edition). Essex: Pearson.
 - ・Lin, J. and Chang, H.J. (2009). Should industrial policy in developing countries conform to comparative advantage or defy it? A debate between Justin Lin and Ha-Joon Chang. Development Policy Review, 27(5), 483-502.
 - ・Bruhn, M., Karlan, D., and Schoar, A. (2010). What capital is missing in developing countries? American Economic Review, May 2010: 629-633.
 - ・Hausmann, R., Rodrik, D., and Velasco, A. (2005). Growth Diagnosis. Boston: The John Kennedy School of Government, Harvard University.
 - ・Knack, Stephen, and Philip Keefer. 1997. "Does social capital have an economic payoff? A cross-country investigation." The Quarterly journal of economics: 1251-1288.
 - ・Gennerster, Rachel. and Kudzai Takavarasha. 2013. Running Randomized Evaluations a Practical Guide. Princeton University Press.
- その他の参考文献は、テーマに合わせて、随時紹介する

成績評価の方法

レポート60%、授業への参加度40%(クラスでの議論の質)

その他

科目ナンバー：(IC) ECN541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(開発経済学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

本講義の目的は開発経済について、国連のSDGs(持続可能な開発目標)や日本のODA(政府開発援助)などによる具体的なプロジェクトを取り上げつつ、理論的、実証的、政策的観点から分析する能力を養うことである。

グローバル化とともに世界的な格差が拡大している。そのような中で、経済発展を促進し格差を解消するためには、どのような政策、プロジェクトを行うべきかを分析する能力を深めなければならない。

授業では理論的部分のみならず、具体的な事例を取り上げることができるだけ具体的政策を見る眼を養う。また、講義に加え学生は履修者は毎回、文献レビュー(要約、文献の学術上の意義、弱点、政策的含意)を作成し、その上で議論も行う。授業を通じて学生はレポートをまとめ、それを発表する。

(到達目標)

グローバル経済に関する問題や政策についての論理的に理解し、政策を見る眼を養い、自分の言葉で説明できるようにする。望ましい政策、プロジェクトを選択するための分析能力を身につける。

授業内容

- 第1回：a イントロダクション — 世界的な経済格差
- 第2回：国際金融と国際収支
- 第3回：国際金融と為替
- 第4回：為替制度と経済 — 固定相場制と途上国
- 第5回：経済成長
- 第6回：経済成長とAIなどの労働代替技術
- 第7回：経済成長と環境問題、グローバル化
- 第8回：新しい開発思想 — 人間開発と人間の安全保障
- 第9回：教育と経済発展 — 人的資本
- 第10回：人のつながりと経済 — 社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)
- 第11回：世界銀行・IMFと構造調整融資
- 第12回：インパクト分析手法I
- 第13回：インパクト分析手法II
- 第14回：プレゼンテーション

履修上の注意

- ・ミクロ経済学、マクロ経済学を履修していることが望ましい。履修していない場合には、スティグリッツ「入門経済学第4版」(東洋経済新報社)を必要に応じて参照すること。
- ・現実の経済に強い関心を持っていること。
- ・講義に加え学生は履修者は毎回、文献レビュー(要約、文献の学術上の意義、弱点、政策的含意)を作成し、その上で議論も行う。授業を通じて学生はレポートをまとめ、それを発表する。

準備学習(予習・復習等)の内容

参考文献リストをよく読み。自分自身の関心に近い研究テーマを自分自身で設定しておくこと。

教科書

テキストは指定せず、履修者の関心に即して、最新文献、必須文献をその都度紹介していく。

参考書

- ・島田剛(2023)「ミクロ経済学への招待」、新世社
 - ・澤田康幸(2004)「基礎コース 国際経済学」、新世社
 - ・園部哲史・大塚啓二郎(2004)「産業発展のルーツと戦略」、知泉書房
 - ・Paul Krugman, Maurice Obstfeld, Marc J. Melitz. 2012. International Economics - Theory and Policy (ninth edition). Essex: Pearson.
 - ・Lin, J. and Chang, H.J. (2009). Should industrial policy in developing countries conform to comparative advantage or defy it? A debate between Justin Lin and Ha-Joon Chang. Development Policy Review, 27(5), 483-502.
 - ・Bruhn, M., Karlan, D., and Schoar, A. (2010). What capital is missing in developing countries? American Economic Review, May 2010: 629-633.
 - ・Hausmann, R., Rodrik, D., and Velasco, A. (2005). Growth Diagnosis. Boston: The John Kennedy School of Government, Harvard University.
 - ・Knack, Stephen, and Philip Keefer. 1997. "Does social capital have an economic payoff? A cross-country investigation." The Quarterly journal of economics: 1251-1288.
 - ・Gennerster, Rachel. and Kudzai Takavarasha. 2013. Running Randomized Evaluations a Practical Guide. Princeton University Press.
- その他の参考文献は、テーマに合わせて、随時紹介する

成績評価の方法

レポート60%、授業への参加度40%(クラスでの議論の質)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(組織社会学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

現代の高度情報社会では社会や個人のレベルにとどまらず、組織レベルの分析が不可欠である。また、その組織は企業組織に限定されず、病院、学校、あるいは刑務所といった非営利組織も対象となる。本科目では、Mary Jo Hatchら世界の最前線にある組織研究について理解を深めるとともに、個人の研究関心にあわせた個人研究・プレゼンテーションを行ってゆく。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン:組織社会学とは
- 第2回 文献講読Ⅰ なぜ組織論を学ぶのか? /組織論の歴史
- 第3回 文献講読Ⅱ 組織論の歴史
- 第4回 文献講読Ⅲ 組織と環境の関係
- 第5回 文献講読Ⅳ 組織の社会構造
- 第6回 文献講読Ⅴ テクノロジー
- 第7回 研究発表Ⅵ 組織文化
- 第8回 研究発表Ⅶ 組織の物的構造
- 第9回 研究発表Ⅷ 組織のパワー、コントロール、コンフリクト
- 第10回 研究発表Ⅸ 理論と実践
- 第11回 文献講読Ⅹ 組織論における将来有望な新しいアイデア
- 第12回 個人研究発表Ⅰ
- 第13回 個人研究発表Ⅱ
- 第14回 個人研究発表Ⅲ

履修上の注意

組織と社会学における知識が必要となる。教科書・参考書は熟読してから参加することが必須となる。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を輪読するが、事前に該当箇所を熟読してから授業に臨むこと。また、担当箇所についてディスカッションしたいテーマを用意しておくこと。

教科書

メアリー・ジョー・ハッチ(2017)『Hatch組織論：多様なパースペクティブ』同文館出版。

参考書

竹中克久(2013)『組織の理論社会学：コミュニケーション・社会・人間』文眞堂。

課題に対するフィードバックの方法

講義中に行う。

成績評価の方法

平常点30%、研究発表70%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(組織社会学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

現代社会の組織について理解するために、Karl E. Weickの文献を精読する。予定している文献としては『組織化の社会心理学』『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』の2冊である。これらの精読を通じて、Weick理論の斬新さと組織研究における位置づけを理解する。また、そこで獲得した知識をいかして、個人の研究関心に基づいた研究発表を行う。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン
- 第2回 文献講読『組織化の社会心理学』Ⅰ
- 第3回 文献講読『組織化の社会心理学』Ⅱ
- 第4回 文献講読『組織化の社会心理学』Ⅲ
- 第5回 文献講読『組織化の社会心理学』Ⅳ
- 第6回 文献講読『組織化の社会心理学』Ⅴ
- 第7回 文献講読『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』Ⅰ
- 第8回 文献講読『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』Ⅱ
- 第9回 文献講読『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』Ⅲ
- 第10回 文献講読『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』Ⅳ
- 第11回 文献講読『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』Ⅴ
- 第12回 個人研究発表Ⅰ
- 第13回 個人研究発表Ⅱ
- 第14回 個人研究発表Ⅲ

履修上の注意

組織と社会学における知識が必要となる。教科書・参考書は熟読してから参加することが必須となる。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を輪読するが、事前に該当箇所を熟読してから授業に臨むこと。また、担当箇所についてディスカッションしたいテーマを用意しておくこと。

教科書

カール・E・ワイク(1997)『組織化の社会心理学』文眞堂。
カール・E・ワイク(2001)『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』文眞堂

参考書

竹中克久(2013)『組織の理論社会学：コミュニケーション・社会・人間』文眞堂。

課題に対するフィードバックの方法

講義中に行う。

成績評価の方法

平常点30%、研究発表70%

その他

科目ナンバー：(IC) LAW551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(現代型犯罪と刑法) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	阿部	力也

授業の概要・到達目標

犯罪と刑罰に関する「法規」の基本的事項の整理・検討・考察を授業の目的とする。

「社会」と「個人」、あるいは「個人」と「個人」とのむすびつきは様々な形で現れると解されるが、反価値的に捉えられる現れ方(マイナスのイメージ)の一つが「犯罪」ということになるだろうか。報道等をつづけて、いろいろな形で知り得るであろうし、実際に被害に遭うかもしれないし、自身が行ってしまふかもしれない犯罪。しかし、犯罪は「現象」それ自体として取り上げて法的には意味をなさない。法的に理解される犯罪とは、各刑罰法規に規定される「違法行為」として確認されるものにかざられる(殺人罪、窃盗罪、放火罪など)。その違法行為を否定する作用を持つのが「刑罰」である。つまり、刑罰を科される犯罪とは刑罰を科されるに値する行為であり、その行為は法的に規定されているということである。たとえば刑法第199条は「人を殺した者は、死刑、無期、または5年以上の有期徒刑の刑に処する」と規定されている。それを前提とすると、違法な行為をカタログ的に規定し、それに対応する刑罰を規定しているのが「刑法」ということになるわけである。

授業においては、犯罪をあくまでも法的に考察することに主眼が置かれ、刑法を解釈した結果としての犯罪を検討することになる。

この授業では、基本的な事項の考察が重要になるといえるので、できるだけ分かり易い事例を取り上げながら(場合によっては有名な事件。たとえば電車内乗客襲撃事件など)、受講生のみなさんに少しでも「刑法」という法律に興味・関心を持ってもらうことが、この授業の到達目標ということになる。

授業内容

- 第1回：犯罪事実と犯罪論①
- 第2回：犯罪事実と犯罪論②
- 第3回：変容する財産犯①
- 第4回：変容する財産犯②
- 第5回：国家・社会に脅威を与える犯罪行為
- 第6回：個人の私生活領域に脅威を与える犯罪行為
- 第7回：現代型犯罪の特徴とは何か?
- 第8回：通説的な犯罪論の体系について
- 第9回：構成要件の基本概念
- 第10回：構成要件の機能
- 第11回：違法論における対立①
- 第12回：違法論における対立②
- 第13回：責任論の構造
- 第14回：総括として～現代型犯罪に対応する犯罪論の展開はあり得るのか?

履修上の注意

とくに法律学(刑法)を勉強してきた経験などを要求するものではない。ただし個別的なテーマに関連して、予習(判例・学説の動向が各受講者において事前に整理されていなければならない)が必要とされるのは間違いない。この点には注意を要する。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に、テーマごとに作成されたレジュメを配布するので、該当箇所を目を通して授業に臨んでもらいたい。復習としては、授業内で簡単なレポートの作成、あるいはその回に関連したテーマについて次回に簡単な報告を求められる場合があるので、それに対応した次週が望まれる。

教科書

とくに必要はないが、開講時にレジュメを配布する。

参考書

有名な事件の裁判例を随時取り上げてみたい。テーマに応じて基本的な文献を指示することとした。

課題に対するフィードバックの方法

大学院の授業という利点を生かして、各回ごとに履修者のみなさんの疑問点に対しては、丁寧に回答するように心がけたい(その時間をかならず設定することとします)。

成績評価の方法

個別テーマについて各受講者に分担してもらうので、その報告(60%)を基本的な成績評価の対象とし、その他は授業態度(20%)、講義での発言(20%)などで評価する。

その他

テーマによっては、外国法の動向も視野に収めることとしたい。もし受講者のみなさんの希望があれば、基本的な外書を読むことも(輪読)可能である。

科目ナンバー：(IC) LAW551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(現代型犯罪と刑法) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	阿部	力也

授業の概要・到達目標

新しいタイプの犯罪が現出している(たとえば経済・商取引の領域、環境犯罪というカテゴリーの登場など)。このように問題分析の視角を設定することが許されるとすれば、新しいタイプの違法行為をどのように規制していくべきか、このことへ一定の回答を得るためには、現代型の犯罪とよばれるいくつかの事案を素材としてその特徴を把握し、そのうえで従来の犯罪論の体系に内在する問題性を指摘することに帰結するはずである。

従来型・古典的な犯罪論の理解では、新しい犯罪に対応できていない(その意味では限界に達している?)とすれば、現代型犯罪に対応するために刑法をどのように運用すべきかなのかを考える必要性が生じる。社会統制の手段としての刑法の任務からすれば、新しい犯罪への対応を放置したままにすることは許されないわけである。社会の変化は犯罪の質をも変えるのかもしれない。変化する社会と変化する犯罪、それを規制するための法もまた変化することになるのか否か、このことへ一定の回答を与えることが本講義の課題ということになるだろう。

春学期と同様に個別のテーマにおける我が国の判例・学説の基本的なスタンスを理解することに主眼を置く。それをふまえて個別のテーマに内在する問題点を指摘することによって、個別的テーマについての理解を深めていくことにする。以下に簡単に前期で扱う講義テーマを掲記しておく。

授業内容

- 第1回：犯罪論の体系とは?
- 第2回：構成要件論の問題点①(とくに因果関係論を集中的に)
- 第3回：構成要件論の問題点②
- 第4回：違法論の問題点①(人的不法論と物的不法論の対立)
- 第5回：違法論の問題点②
- 第6回：責任論の問題点(規範的責任論の徹底とその限界)
- 第7回：現代型犯罪の特徴の1つとしての共犯現象
- 第8回：共同正犯①
- 第9回：共同正犯②
- 第10回：狭義の共犯
- 第11回：財産犯の重要問題
- 第12回：社会に脅威を与える犯罪行為(偽造犯罪、放火犯罪など)
- 第13回：暴かれる個人の私生活領域(ネット犯罪の特徴)
- 第14回：総括・現代型犯罪と現代型犯罪論の構築

履修上の注意

春学期と同様に個別的なテーマに関連して予習(やはり判例・学説の動向が各受講者において事前に整理されていなければならない)が必要とされる。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に配布されたレジュメの各回のテーマに当たる箇所を目を通して授業に臨んで欲しい。その回のテーマについて、さらに受講生に次回報告を求められる場合もあるので、その場合には、適宜学習して授業に臨んで欲しい。

教科書

とくに必要はない。各回、レジュメを配布する。

参考書

有名な事件の裁判例を随時取り上げてみたい。テーマに応じた基本的な文献については随時指示する。

課題に対するフィードバックの方法

大学院の授業という利点を生かして、各回ごと履修者の皆さんの疑問点には丁寧に回答したいと考えている(そのための時間をかならず確保するようにしたい)。

成績評価の方法

個別テーマについて各受講者に分担してもらうので、その報告(60%)を基本的な成績評価の対象とし、その他は授業態度(20%)、講義での発言(20%)などで評価する。

その他

希望があれば、簡単な外国の文献を読む(輪読)ことも可能である。

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(経済社会学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

本専門研究では、1980年代にM.グラノヴェッターが「新しい経済社会学」と称し社会学の専門領域として復活した経済社会学——経済と社会は有機的に相互に結びつき、あたかもそれらが別の現象であるかのように分析することはできないと主張する——の視点と分析用具を習得することを目的に、基礎的な文献の輪読とディスカッションを行う。

経済社会学 I では、経済社会学の基礎概念の習得、ならびに「新しい経済社会学」の概念枠組みを用いて日本の経済活動を分析したいいくつかの実証研究論文(具体的には、貨幣や生命保険、労働市場のジョブマッチング過程等)を精読し、受講生自らが関心をもつ経済活動の理解に社会学的視点を活用できるようになることが最終的な到達目標となる。

授業内容

- 第1回 aのみ:イントロダクション
- 第2回 経済社会学の視点、社会と経済の関係(教科書1,2章)
- 第3回 文化と経済(教科書3章~5章)
- 第4回 ネットワークと経済(教科書6,7章)
- 第5回 ネットワークと経済(教科書8,9章)
- 第6回 生命保険と貨幣—ゼライザーの経済社会学(1)
- 第7回 生命保険と貨幣—ゼライザーの経済社会学(2)
- 第8回 労働市場とジョブマッチング過程—グラノヴェッターの経済社会学(1)
- 第9回 労働市場とジョブマッチング過程—グラノヴェッターの経済社会学(2)
- 第10回 エスニック企業家・夫婦間の勢力と4つの資本(1)
- 第11回 エスニック企業家・夫婦間の勢力と4つの資本(2)
- 第12回 受講生による研究発表(1)
- 第13回 受講生による研究発表(2)
- 第14回 受講生による研究発表(3)

履修上の注意

受講生の人数等により、授業内容は変更することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として、毎週、教科書及び配布する資料の該当部分をよく読んで授業に参加すること。

教科書

渡辺深(2002)『経済社会学のすすめ』八千代出版。
 渡辺深編(2008)『新しい経済社会学—日本の経済現象の社会学的分析』上智大学出版。
 マーク・グラノヴェッター著・渡辺深訳(2019)『社会と経済：枠組みと原則』ミネルヴァ書房。

参考書

テーマごとに適宜授業中に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内やOh-ol Meiji を活用して行う。

成績評価の方法

報告を含む授業への貢献度(50%)、レポート(50%)

その他

授業の状況等により、数回リアルタイム配信型の授業を実施することがあります。

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(経済社会学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 中里 裕美		

授業の概要・到達目標

経済社会学 II では、とくに社会ネットワークの役割・影響に焦点を置き、その経済ならびに広く社会現象との関わりについて理解することを目的として、まず社会ネットワークに関する基礎文献(Granovetter, Burt, Coleman, Wellman等の論文を含む)を精読し、現在までの研究成果を把握する。

また、社会ネットワークの構造を把握するための社会調査の方法論、およびその分析ツールとしてのネットワーク分析に関する基礎的概念や実際の指標の求め方(中心性、密度、クラスター係数等)についても習得することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ:イントロダクション
- 第2回 ネットワーク分析とは
- 第3回 ネットワークのデータとモデル
- 第4回 ネットワーク分析の応用研究(1)
- 第5回 ネットワーク分析の応用研究(2)
- 第6回 ネットワーク現象としての社会(1)
- 第7回 ネットワーク現象としての社会(2)
- 第8回 ネットワーク現象としての社会(3)
- 第9回 各自の研究関心領域との接合についての中間報告
- 第10回 ネットワーク調査・分析実習(1)
- 第11回 ネットワーク調査・分析実習(2)
- 第12回 データ収集、作成、分析など(1)
- 第13回 データ収集、作成、分析など(2)
- 第14回 成果報告会

履修上の注意

受講生の人数等により、授業内容は変更することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として、毎週、教科書及び配布する資料の該当部分をよく読んで授業に参加すること。

教科書

安田雪(1997)『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』新曜社。
 野沢慎司編・監訳(2006)『リーディングスネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房。
 平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦土著(2010)『社会ネットワークのリサーチ・メソッド』ミネルヴァ書房。

参考書

テーマごとに適宜授業中に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内やOh-ol Meiji を活用して行う。

成績評価の方法

報告を含む授業への貢献度(50%)、レポート(50%)

その他

本授業ではネットワーク指標を求めるうえで、パーシクな数学の計算をしてもらいます。また、ネットワーク分析実習の際には、事前にソフトウェア(UCINET)を導入したWindowsが使用できるノートPCを準備してもらう予定です。なお、授業の状況等により、数回リアルタイム配信型の授業を実施することがあります。

科目ナンバー：(IC) LAW521J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(憲法史) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	田村 理	

授業の概要・到達目標

フランス革命史学の泰斗George Lefebvreの古典的名著 La Grande Peur de 1789 (A. Colin, 1932)を丁寧に講読します。

憲法学は、普通の人々と国家権力の関係を論ずる学問です。洋の東西も時代も問わず、普通の人々は陰謀論に共鳴してそれを拡散し、国家権力のあり方すなわち政治に大きな影響を与えます。それはインターネットやSNSが発展した現代特有のことではありません。

La Grande Peur = 大恐怖とは、1789年7月14日のバスティーユ牢獄襲撃に影響を受けつつ、フランス農村の全土に広がった一大パニックです。「貴族が野盗を雇って襲ってくる」という「貴族の陰謀」論は、わずか数カ所の起点からフランス全土に広がり、全国的な農民暴動の連鎖を引き起こしました。

ルフェーブルは、このような陰謀論がなぜ生じ、なぜどのように拡散したのか、その現象と原因を解き明かし、それが中央の政治に与えた影響と意義を含めてフランス革命全体の構造の中で論じました。この本を読み込むことで、陰謀論の背景にある共通の意識構造、拡散の仕組み、政治との関係を分析し、考える方法の基礎を学びます。

この授業では、フランス革命に与えた陰謀論に学びつつ、フランス革命の全体像の中にそれを理解することを目指します。そのために、La Grande Peur de 1789 の前半(「PREMIERE PARTIE : LES CAMPANGES EN 1789 1789年の農村」、 「DEUXIEME PARTIE : LE COMLOT ARISTOCRATIQUE 貴族の陰謀」)を丁寧に読みます。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 フランス革命と陰謀論
- 第3回 フランス革命の構造
- 第4回 フランス革命の憲法学的意義
- 第5回 「序章」を読む
- 第6回 「第1章 1789年の農村」を読む①「飢饉」「恐怖」
- 第7回 「第1章 1789年の農村」を読む②「暴動」「フランス革命の開始と農民の最初の反乱」
- 第8回 「第1章 1789年の農村」を読む③「民衆の武装と最初の恐怖」
- 第9回 「第2章 貴族の陰謀」を読む①「バリと陰謀」「ニュースの伝播」
- 第10回 「第2章 貴族の陰謀」を読む②「陰謀への地方の反応(1)都市」
- 第11回 「第2章 貴族の陰謀」を読む③「陰謀への地方の反応(2)農村」
- 第12回 「第2章 貴族の陰謀」を読む④「農民の反乱」
- 第13回 「第2章 貴族の陰謀」を読む⑤「野盗の恐怖」
- 第14回 まとめと課題

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

読解力のレベルは問いませんが、しっかり丁寧にテキストの該当箇所を読み、理解をする努力をして授業に望んでください。

また、既に読んで学んだ知識は必ずそれ以降の授業で必要とされますので、テキストの予習の前にそれまで読んだ箇所をざっとでかまいませんので読み返してください。

教科書

George Lefebvre, La Grande Peur de 1789 (A.Colin, 1932)

参考書

柴田三千雄『フランス革命』(岩波現代文庫・2007年)
G.ルフェーブル(高橋幸八郎・柴田三千雄・遅塚忠躬訳)『1789年 フランス革命序論』(岩波文庫・1998年)

成績評価の方法

授業中への参加とその質を70%。
各自の研究テーマと授業内容を結びつけたレポート30%。

その他

科目ナンバー：(IC) LAW521J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(憲法史) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(法学)	田村 理	

授業の概要・到達目標

フランス革命史学の泰斗George Lefebvreの古典的名著 La Grande Peur de 1789 (A. Colin, 1932)を丁寧に講読します。

憲法学は、普通の人々と国家権力の関係を論ずる学問です。洋の東西も時代も問わず、普通の人々は陰謀論に共鳴しそれを拡散し、国家権力のあり方すなわち政治に大きな影響を与えます。それはインターネットやSNSが発展した現代特有のことではありません。

La Grande Peur = 大恐怖とは、1789年7月14日のバスティーユ牢獄襲撃に影響を受けつつ、フランス農村の全土に広がった一大パニックです。「貴族が野盗を雇って襲ってくる」という「貴族の陰謀」論は、わずか数カ所の起点からフランス全土に広がり、全国的な農民暴動の連鎖を引き起こしました。

ルフェーブルは、このような陰謀論がなぜ生じ、なぜどのように拡散したのか、その現象と原因を解き明かし、それが中央の政治に与えた影響と意義を含めてフランス革命全体の構造の中で論じました。この本を読み込むことで、陰謀論の背景にある共通の意識構造、拡散の仕組み、政治との関係を分析し、考える方法の基礎を学びます。

この授業では、La Grande Peur de 1789 の後半、TROISIEME PARTIE : LA GRANDE PEUR 大恐怖」、 「CONCLUSION 結論」を丁寧に読みます。それをふまえて、陰謀論の生まれる条件、伝播の仕組み、政治との関係と影響等についてまとめ、私たちがそこから学ぶべきことを考え、憲法史を分析する視点と方法を身につけることを目指します。

授業内容

- 第1回：「第3章 大恐怖」を読む①「大恐怖の性質」
- 第2回：「第3章 大恐怖」を読む②「最初のパニック」
- 第3回：「第3章 大恐怖」を読む③「パニックの伝播」
- 第4回：「第3章 大恐怖」を読む④「情報伝達のパニック」
- 第5回：「第3章 大恐怖」を読む⑤「中継」
- 第6回：「第3章 大恐怖」を読む⑥「大恐怖の展開」
- 第7回：「第3章 大恐怖」を読む⑦「その後の恐怖」
- 第8回：「第3章 大恐怖」を読む⑧「大恐怖の帰結」
- 第9回：「結論」を読む
- 第10回：陰謀論の生まれる条件を考える
- 第11回：陰謀論が広まる仕組みを考える
- 第12回：陰謀論が政治に与える影響を考える
- 第13回：陰謀論を利用する政治
- 第14回：まとめと総括

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

読解力のレベルは問いませんが、しっかり丁寧にテキストの該当箇所を読み、理解をする努力をして授業に望んでください。

また、既に読んで学んだ知識は必ずそれ以降の授業で必要とされますので、テキストの予習の前にそれまで読んだ箇所をざっとでかまいませんので読み返してください。

教科書

George Lefebvre, La Grande Peur de 1789 (A.Colin, 1932)

参考書

柴田三千雄『フランス革命』(岩波現代文庫・2007年)
G.ルフェーブル(高橋幸八郎・柴田三千雄・遅塚忠躬訳)『1789年 フランス革命序論』(岩波文庫・1998年)

成績評価の方法

授業中への参加とその質を70%。
各自の研究テーマと授業内容を結びつけたレポート30%。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (イノベーションの実証分析) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇		

授業の概要・到達目標

イノベーションは企業や国の成長の源泉であり、そのメカニズムの理解は極めて重要である。また、近年では、エビデンスベースの意思決定が重視されており、学術的研究にとどまらず政策立案や経営判断の場においても、実証分析の活用は広がってきている。
この授業では、イノベーションに関する経済学的な実証研究の方法を学ぶ。春学期は、実証研究の考え方について理解を深めるとともに、近年のイノベーションに関する先行研究をレビューする。
これらを通じて、分析対象となるイノベーション・プロセスのメカニズムを把握し、それを検証可能な仮説に落とし込んだうえで、適切な実証分析手法を選択・利用できるスキルを身に付けることが、本授業の到達目標である。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 仮説設定の考え方
- 第3回 回帰分析
- 第4回 因果の特定(差の差の分析)
- 第5回 因果の特定(操作変数、回帰不連続デザイン)
- 第6回 文献講読(資金制約)・分析テーマの検討1
- 第7回 文献講読(労働・スキル)・分析テーマの検討2
- 第8回 文献講読(スピルオーバー)・データ収集・概観1
- 第9回 文献講読(知的財産)・データ収集・概観2
- 第10回 文献講読(競争・市場構造)・分析結果報告1
- 第11回 文献講読(経済成長・貿易)・分析結果報告2
- 第12回 文献講読(ネットワーク)・分析結果報告3
- 第13回 学期末レポート報告1
- 第14回 学期末レポート報告2

履修上の注意

秋学期の「イノベーションの実証分析II」も併せて履修することが望ましい。
履修者は学期末に研究レポートを提出することになる。
この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン(双方向型)で実施することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習: 指定した論文や議論に必要な先行研究等を読み、概要を理解しておくこと。また発表者はスライドを用意すること。
復習: ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

授業の初回に読むべき論文リストを提示する。

参考書

安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。
B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010.

課題に対するフィードバックの方法

授業時間中に適宜フィードバックを行う。

成績評価の方法

報告内容(30%)、授業への貢献(30%)、レポート(40%)
※授業への貢献は、他の発表者へのコメント・質問、ディスカッションへの参加状況等で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ECN541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (イノベーションの実証分析) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(経済学) 山内 勇		

授業の概要・到達目標

この授業では、イノベーションに関する経済学的な実証研究の方法について学ぶ。秋学期は、自分で研究テーマを設定し、それに関連する先行研究をレビューするとともに、実際に統計ソフト(stataやR等)を利用した実証分析を行う。
それにより、テーマの発見、検証可能な仮説の設定、データの収集・接続・加工、分析という一連の論文執筆プロセスに必要なスキルを身に付けることを目標としている。
なお、秋学期は春学期の内容を発展させたものとなるため、「イノベーションの実証分析I」も併せて履修していることが望ましい。

授業内容

- 第1回 INTRODUCTION
- 第2回 研究の流れ
- 第3回 分析テーマの設定1、関連研究報告1
- 第4回 分析テーマの設定2、関連研究報告2
- 第5回 データ収集・概観1、関連研究報告3
- 第6回 データ収集・概観2、関連研究報告4
- 第7回 分析手法の検討1、関連研究報告5
- 第8回 分析手法の検討2、関連研究報告6
- 第9回 分析結果とその検討1
- 第10回 分析結果とその検討2
- 第11回 分析結果とその検討(フィードバックの反映) 1
- 第12回 分析結果とその検討(フィードバックの反映) 2
- 第13回 学期末レポート報告1
- 第14回 学期末レポート報告2

履修上の注意

「イノベーションの実証分析I」を履修していることが望ましい。
履修者は学期末に研究レポートを提出することになる。
この授業は原則対面で実施するが、履修者との相談のうえオンライン(双方向型)で実施することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習: 指定した論文や議論に必要な先行研究等を読み、概要を理解しておくこと。また発表者はスライドを用意すること。
復習: ゼミでの報告内容、議論・コメントを整理し、次の報告にいかすこと。

教科書

授業の初回に論文リストを提示する。

参考書

B. Hall and N. Rosenberg (eds.), Economics of Innovation, vol 1 & 2, Handbooks in economics, North-Holland, 2010。
B. Depoorter and P.S. Menell (eds.), Research Handbook on the Economics of Intellectual Property Law, vol 1 & 2, 2019。
安井翔太著『効果検証入門』技術評論社、2020。

成績評価の方法

報告内容(30%)、授業への貢献(30%)、レポート(40%)
※授業への貢献は、他の発表者へのコメント・質問、ディスカッションへの参加状況等で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) EDU511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(学校社会学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

教育行政学・教育経営学における学校組織研究においては、学校の意思決定権限の所在ならびに組織構造・管理手法に対する立場の相違から、時に激しい論争を生みながらさまざまな論考が蓄積されてきた。それらは主に、学校組織が法令による管理対象である点を強調する立場(法規制論)、専門職である教師や親・子どもによる民主的な学校づくりを強調する立場(民主化論)、一般経営学の知見を学校組織に応用する立場(経営論)から取り組まれていた。他方で、社会学的なアプローチからは、教師の組織行動を文化的側面から読み解くことや学校組織におけるアクター間のマイクロ・ポリティクスを描き出すことが試みられてきた。

本講義では、これらのアプローチによる諸研究を読み解きながら、学校組織における制度・文化・教師間の関係性を理解することを目的とする。

【到達目標】

規範論的・社会学的アプローチによる学校組織研究を精読することで、学校組織における制度・文化・教師間の関係性を理解することができる。

授業内容

- 第1回 イントロダクション(aのみ)
- 第2回 教育権論争と学校組織
- 第3回 単層・重層構造論争
- 第4回 職員会議論争
- 第5回 教師=専門職論
- 第6回 経営者としての校長
- 第7回 学校組織マネジメント
- 第8回 学校経営におけるアカウンタビリティ
- 第9回 学校組織におけるマイクロ・ポリティクス
- 第10回 「ストリート・レベルの官僚制」としての学校
- 第11回 緩やかに結合された組織としての学校
- 第12回 学校組織のエスノグラフィー
- 第13回 教員文化と学校組織
- 第14回 まとめ:学校組織研究が見落としてきたもの

履修上の注意

報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者は検討文献のテキスト批評(要約・問題提起・論考を内容としたレジュメ作成)を行う。他の受講者も必ず文献を精読し、自分なりの論点をもってゼミに臨むこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

『学校組織の解剖学——実践のなかの制度と文化』鈴木雅博(勁草書房)2022年。
その他、適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

担当回での報告および報告レジュメ(70%)、授業への参加態度・発言(30%)。

その他

科目ナンバー：(IC) EDU511J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(学校社会学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 鈴木 雅博		

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

従来の学校組織研究では、望ましい組織形態や運営方法を模索・主張する規範的研究や、教師の組織行動を規定する文化的要因に迫ろうとする社会学的研究が蓄積されてきた。これらは、教師を組織をめぐる制度や文化に従う存在として位置づけてきたが、教師たちは実践のなかで制度や文化をそれとして達成する存在でもある。エスノメソドロジーは、このような実践を可能にしている人びとの方法と能力を明らかにする研究アプローチである。本講義では、エスノメソドロジーによる経験的研究を輪読することで、教師たちが実践のなかで学校組織をめぐる制度や文化をまさにそのようなものとして成し遂げる、その方法と能力について理解することを目的とする。

【到達目標】

エスノメソドロジーの研究アプローチを理解し、学校組織における教師たちの実践の方法と、実践を可能にしているかれらの能力について理解することができる。

授業内容

- 第1回 イントロダクション(aのみ)
- 第2回 学校組織研究が「見落としてきたもの」
- 第3回 エスノメソドロジー素描(1):インデックス性の不可避と因果論の困難/メンバーの方法・能力への着目/成員カテゴリー化装置
- 第4回 エスノメソドロジー素描(2):構築主義とエスノメソドロジーの差異/エスノメソドロジーの無関心・方法の固有の妥当性要請/エスノメソドロジーにおける観察とインタビュー
- 第5回 調査の対象と方法
- 第6回 民主制のなかの官僚制/官僚制のなかの民主制
- 第7回 「説明責任」を語ること
- 第8回 先議者規範と沈黙のなかの/としての組織
- 第9回 「荒れ」を語ること(1):「荒れ」に関する知識の共有/「荒れた中学(区)」という知識/「荒れ」と共同歩調の因果論
- 第10回 「荒れ」を語ること(2):経験・リスクとしての「荒れ」/「荒れ」と共同歩調の因果論を語ること
- 第11回 「新任者である」ことをすること
- 第12回 曖昧な校則と厳格な指導
- 第13回 時間外勤務をめぐる解釈実践
- 第14回 組織から距離をとること

履修上の注意

報告の割り当てをするので、初回講義には必ず出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者は検討文献のテキスト批評(要約・問題提起・論考を内容としたレジュメ作成)を行う。他の受講者も必ず文献を精読し、自分なりの論点をもってゼミに臨むこと。

教科書

『学校組織の解剖学——実践のなかの制度と文化』鈴木雅博(勁草書房)2022年。

参考書

適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

担当回での報告および報告レジュメ(70%)、授業への参加態度・発言(30%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SSS541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(災害社会学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本講義の目的は、自然災害に関する基礎的な知識、とりわけ社会科学の視点からの知識を獲得し、災害の全体像を理解することにある。災害は災害対策、早期警戒、救助・救命、復旧・復興、慰霊・継承といったように、長期的な推移(災害過程)を描く現象であるが、各局面における目的・課題は性質が大きく異なるため、必要となる知識もそれに応じて差異がある。一方、現実の被災地において災害は各局面を一連の過程として経験するのであり、ある局面の対応の成否が、次の局面における対応の成否に大きく影響を与えることもある。近年の災害研究では、これらの局面ごとに知識を習得したうえで、その局面間の接続を試み、もって被害軽減に資することが目指されている。講義では災害の各局面を順を追って理解するとともに、災害を研究するとはどのような問いの立て方がありうるかということとを学んでいく。具体的な進め方としては、担当教員が用意する課題文献および映像資料(講義動画)を用いて進める。各単元について資料解説・話題提供の役割が割り振られ、受講者は映像資料を用いて事前学習を行ったうえで、単元ごとに指定された役割についてそれぞれ報告を行う。その後は、ディスカッションによって講義を進める。また、受講者には1回以上のフィールド調査を課す。これは、たとえば災害に関連する博物館や教育施設などの見学、災害という視点をもったまちあるきなどで構わないが、実社会において自らの視角を通して「災害」に触れることを求めるものである。到達目標は①災害の全体像の理解、②災害研究の基礎知識の獲得、③災害研究における問いの立て方の理解の3点とする。

授業内容

- 第01回 イントロダクション
- 第02回 課題文献に関する議論(1)
- 第03回 課題文献に関する議論(2)
- 第04回 課題文献に関する議論(3)
- 第05回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(1)
- 第06回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(2)
- 第07回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(3)
- 第08回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(4)
- 第09回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(5)
- 第10回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(6)
- 第11回 映像資料(講義動画)に関する報告・ディスカッション(7)
- 第12回 フィールド調査の検討
- 第13回 フィールド調査の報告(1)
- 第14回 フィールド調査の報告(2)

*受講者の希望にあわせ適宜、調整を行います

履修上の注意

講義では積極的な議論への参加が求められます。議論への参加がみられない場合、発表や課題の実施状況にかかわらず「不可」と判定することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習：報告資料は講義動画・課題文献をもとにして、参考書なども併せて十分に検討しながら自らの理解・考えを示すこと。
 復習：講義における報告・ディスカッションのなかで浮き彫りになった自身の疑問について、さらに学習を進めること

教科書

特になし

参考書

松崎晴俊(監修)・長谷川公一(監修)・田中重好(監修)・黒田由彦(編)・横田尚俊(編)・大矢根淳(編)、2019、『被災地から未来を考える(2)防災と支援 - 成熟した市民社会に向けて』有斐閣
 関谷直也、2021、『災害情報 東日本大震災からの教訓』東京大学出版会
 中村功、2021、『災害情報と避難 - その理論と実際 -』見洋書房
 Havidan Rodriguez, ed.・Enrico L. Quarantelli, ed.・Russell Dynes, ed., 2007, "Handbook of Disaster Research First Edition"
 Havidan Rodriguez, ed.・William Donner, ed.・Joseph E. Trainor, ed., 2018, "Handbook of Disaster Research Second Edition"

課題に対するフィードバックの方法

フィードバックについては、主としてOh-ol Meiji上で全体向けに行う。

成績評価の方法

講義への参加 60% 期末レポート課題 40%

その他

科目ナンバー：(IC) SSS541J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(災害社会学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会情報学) 小林 秀行		

授業の概要・到達目標

本講義は春学期の「専門研究(災害社会学) I」における議論をより発展させたものであり、災害を情報という視点から捉え、その実態や課題を学ぶことを目的としている。災害における情報としては、一般にはたとえば自然現象のモニタリングの高度化や、それを用いた早期警戒情報システムの整備などが知られているが、人びとの生活を支えるということも考えたとき、復旧・復興や慰霊・継承などにおいても、情報をどのように伝えるかということは重要な問題として理解されている。講義ではこのような情報という視点から捉えた災害について、課題文献を通して学んでいく。具体的な進め方としては、担当教員が用意する課題文献および映像資料(講義動画)を用いて進める。各単元について資料解説・話題提供の役割が割り振られ、受講者は映像資料を用いて事前学習を行ったうえで、単元ごとに指定された役割についてそれぞれ報告を行う。その後は、ディスカッションによって講義を進める。また、受講者には1回以上のフィールド調査を課す。これは、たとえば災害に関連する博物館や教育施設などの見学、災害という視点をもったまちあるきなどで構わないが、実社会において自らの視角を通して「災害」に触れることを求めるものである。到達目標は①災害における「情報」の多様性の理解、②災害研究の基礎知識の獲得、③災害研究における問いの立て方の理解の3点とする。

授業内容

- 第01回 イントロダクション
- 第02回 映像資料(講義動画)に関する報告・議論(1)
- 第03回 映像資料(講義動画)に関する報告・議論(2)
- 第04回 映像資料(講義動画)に関する報告・議論(3)
- 第05回 映像資料(講義動画)に関する報告・議論(4)
- 第06回 課題文献に関する議論(1)
- 第07回 課題文献に関する議論(2)
- 第08回 課題文献に関する議論(3)
- 第09回 課題文献に関する議論(4)
- 第10回 課題文献に関する議論(5)
- 第11回 課題文献に関する議論(6)
- 第12回 フィールド調査の検討
- 第13回 フィールド調査の報告(1)
- 第14回 フィールド調査の報告(2)

*受講者の希望にあわせ適宜、調整を行います

履修上の注意

講義では積極的な議論への参加が求められます。議論への参加がみられない場合、発表や課題の実施状況にかかわらず「不可」と判定することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習：報告資料は講義動画・課題文献をもとにして、参考書なども併せて十分に検討しながら自らの理解・考えを示すこと。
 復習：講義における報告・議論のなかで浮き彫りになった自身の疑問について、さらに学習を進めること。

教科書

特になし

参考書

松崎晴俊(監修)・長谷川公一(監修)・田中重好(監修)・長谷川公一(監修)・吉野英岐(編)・加藤真義(編)、2019、『被災地から未来を考える(3) 震災復興と展望 - 持続可能な地域社会をめざして』有斐閣
 清水展・木村周平、2015、『災害対応の地域研究5 新しい人間、新しい社会:復興の物語を再創造する』京都大学出版会
 吉原直樹、2021、『震災復興の地域社会学:大熊町の10年』白水社
 小林秀行、2020、『初動期大規模災害復興の実証的研究』東信堂
 饗庭伸(著)・青井哲人(著)・池田浩敬(著)・石博督和(著)・岡村健太郎(著)・木村周平(著)・辻本侑生(著)・山岸剛(写真)、2019、『津波のあいだ、生きられた村』鹿島出版会
 宮前良平、2020、『復興のための記憶論:野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー』大阪大学出版会
 水出幸輝、2019、『(災)後の記憶史:メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』人文書院
 Havidan Rodriguez, ed.・Enrico L. Quarantelli, ed.・Russell Dynes, ed., 2007, "Handbook of Disaster Research First Edition"
 Havidan Rodriguez, ed.・William Donner, ed.・Joseph E. Trainor, ed., 2018, "Handbook of Disaster Research Second Edition"

課題に対するフィードバックの方法

フィードバックについては、主としてOh-ol Meiji上で全体向けに行う。

成績評価の方法

課題文献の発表 60% 期末レポート課題 40%

その他

科目ナンバー：(IC) LAW571J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(環境行政法) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授		清水 晶紀

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

環境行政法に関わる諸問題を検討します。本年度は、2022年に最高裁判決が出た福島原発事故国家賠償訴訟を題材に、規制権限不行使に対する法的統制理論を検討したいと考えています。ただし、受講生の希望によっては、上記テーマに加えて、異なるテーマを検討することも、外国法研究を行うことも考えています。いずれにしても、本授業では、伝統的な法律学の議論に加え、隣接諸科学との関係を踏まえた包括的な検討を行っていく予定です。受講生はこの点を常に意識して授業に取り組んでください。なお、本授業は、受講生による報告と討論を前提として運営されることを付言しておきます。

【到達目標】

- ・環境行政法の基礎知識を踏まえて適切な問題設定ができること
- ・環境行政法の基礎知識を前提として応用的な議論を行えること
- ・難解な理論をかみ砕いて説明できること

授業内容

詳細は受講生と相談のうえ決定しますが、現時点では以下の通りの進行を考えています。

1. オリエンテーション
2. 法学研究の手法と法律・判例・文献の調査方法(講義)
3. 福島原発事故国家賠償訴訟の論点と環境行政法の基礎知識(講義)
4. 生業訴訟仙台高裁判決(仙台高判令2・9・30判時2484号185頁)の検討①(論点の抽出)
5. 生業訴訟仙台高裁判決の検討②(論点の分析)
6. 群馬訴訟東京高裁判決(東京高判令3・1・21訟月67巻10号1379頁)の検討①(論点の抽出)
7. 群馬訴訟東京高裁判決の検討②(論点の分析)
8. ゲスト講義
9. 千葉訴訟東京高裁判決(東京高判令3・2・19 LEX/DB25591877)の検討①(論点の抽出)
10. 千葉訴訟東京高裁判決の検討②(論点の分析)
11. 愛媛訴訟高松高裁判決(高松高判令3・9・29裁判所HP)の検討①(論点の抽出)
12. 愛媛訴訟高松高裁判決の検討②(論点の分析)
13. 中間まとめ(最高裁判決以前の四判決の比較検討)
14. 現地視察

履修上の注意

本授業は、受講生が行政法の既習者であることを前提としています。未習者で本授業の履修を希望される方は、事前にご相談ください。

準備学習(予習・復習等)の内容

下記参考図書やその他の書籍を利用して予習復習に取り組んでください。詳細については初回授業で案内します。

教科書

福島原発事故国家賠償訴訟の各判決(各判決文については、配布、ないし入手方法を指示します。)

参考書

淡路=吉村=除本編『福島原発事故賠償の研究』(日本評論社、2015年)
 吉村=下山=大坂=除本編『原発事故被害回復の法と政策』(日本評論社、2018年)
 山下竜一編『原発再稼働と公法』(日本評論社、2021年)
 清水晶紀『環境リスクと行政の不作為』(信山社、2024年)
 『環境と公害』誌各号の特集記事
 など

課題に対するフィードバックの方法

授業内で適宜フィードバックします。

成績評価の方法

報告内容(40%)、議論への参加状況(30%)、レポート内容(30%)を総合的に評価します。

その他

受講者数に応じて、運営スタイル(1回の報告者数、報告と議論の時間配分など)は柔軟に変更します。ゲスト講義・現地視察等を組み込み、理論と実務の架橋を図りたいと考えています。なお、一部の日程についてメディア授業を行う可能性があります。

科目ナンバー：(IC) LAW571J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(環境行政法) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授		清水 晶紀

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

環境行政法に関わる諸問題を検討します。本年度は、2022年に最高裁判決が出た福島原発事故国家賠償訴訟を題材に、規制権限不行使に対する法的統制理論を検討したいと考えています。ただし、受講生の希望によっては、上記テーマに加えて、異なるテーマを検討することも、外国法研究を行うことも考えています。いずれにしても、本授業では、伝統的な法律学の議論に加え、隣接諸科学との関係を踏まえた包括的な検討を行っていく予定です。受講生はこの点を常に意識して授業に取り組んでください。なお、本授業は、受講生による報告と討論を前提として運営されることを付言しておきます。

【到達目標】

- ・環境行政法の基礎知識を踏まえて適切な問題設定ができること
- ・環境行政法の基礎知識を前提として応用的な議論を行えること
- ・難解な理論をかみ砕いて説明できること

授業内容

詳細は受講生と相談のうえ決定しますが、現時点では以下の通りの進行を考えています。

1. オリエンテーション
2. 福島原発事故国家賠償訴訟の論点と環境行政法の基礎知識(講義)
3. 最高裁判決(最判令4・6・17民集76巻5号955頁)の検討①(論点の抽出)
4. 最高裁判決の検討②(論点の分析)
5. 最高裁判決をめぐるメディア報道の検討
6. いわき市民訴訟仙台高裁判決(仙台高判令5・3・10裁判所HP)の検討①(論点の抽出)
7. いわき市民訴訟仙台高裁判決の検討②(論点の分析)
8. ゲスト講義
9. 愛知岐阜静岡訴訟名古屋高裁判決(名古屋高判令5・11・22判例集未登載)の検討①(論点の抽出)
10. 愛知岐阜静岡名古屋高裁判決の検討②(論点の分析)
11. 中間まとめ(最高裁判決以降の三判決の比較検討)
12. 訪問調査準備
13. 訪問調査
14. 規制権限不行使に対する法的統制理論の検討(環境行政法理論への示唆)

履修上の注意

本授業は、受講生が行政法の既習者であることを前提としています。未習者で本授業の履修を希望される方は、事前にご相談ください。

準備学習(予習・復習等)の内容

下記参考図書やその他の書籍を利用して予習復習に取り組んでください。詳細については初回授業で案内します。

教科書

福島原発事故国家賠償訴訟の各判決(各判決文については、配布、ないし入手方法を指示します。)

参考書

淡路=吉村=除本編『福島原発事故賠償の研究』(日本評論社、2015年)
 吉村=下山=大坂=除本編『原発事故被害回復の法と政策』(日本評論社、2018年)
 山下竜一編『原発再稼働と公法』(日本評論社、2021年)
 清水晶紀『環境リスクと行政の不作為』(信山社、2024年)
 『環境と公害』誌各号の特集記事
 など

課題に対するフィードバックの方法

授業内で適宜フィードバックします。

成績評価の方法

報告内容(40%)、議論への参加状況(30%)、レポート内容(30%)を総合的に評価します。

その他

受講者数に応じて、運営スタイル(1回の報告者数、報告と議論の時間配分など)は柔軟に変更します。ゲスト講義・訪問調査等を組み込み、理論と実務の架橋を図りたいと考えています。なお、一部の日程についてメディア授業を行う可能性があります。

科目ナンバー：(IC) COM551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (ジャーナリズム論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(法学)		大石 裕

授業の概要・到達目標

コミュニケーション論、政治コミュニケーション論に関する理解を深めることを通じて、ジャーナリズムに関して考えるための理論、モデルなどを学ぶことを主たる目的とする。この授業では、歴史的視点を重視することにした。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 コミュニケーションの基礎概念(1)
- 第3回 コミュニケーションの基礎概念(2)
- 第4回 コミュニケーションと社会構造(1)
- 第5回 コミュニケーションと社会構造(2)
- 第6回 近代社会とマス・コミュニケーション
- 第7回 マス・コミュニケーションの効果・影響モデルの変遷(1)
- 第8回 マス・コミュニケーションの効果・影響モデルの変遷(2)
- 第9回 政治コミュニケーション論の展開(1)
- 第10回 政治コミュニケーション論の展開(2)
- 第11回 ジャーナリズムの自由と責任(1)
- 第12回 ジャーナリズムの自由と責任(2)
- 第13回 ジャーナリズムの自由と責任(3)
- 第14回 全体のまとめ

履修上の注意

ジャーナリズムに関心を持ち、授業中は積極的に発言してください。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を読み、その概要に関して、少しでも理解しておくようにして下さい。

教科書

大石裕(2022)『コミュニケーション研究(第5版)』慶應義塾大学出版会。

参考書

大石裕(2014)『メディアの中の政治』勁草書房。
大石裕(2022)『国家・メディア・コミュニティ』慶應義塾大学法学研究会。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業の質疑応答、およびレポート提出。

成績評価の方法

レポート50%、授業への貢献度50%

その他

科目ナンバー：(IC) COM551J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (ジャーナリズム論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(法学)		大石 裕

授業の概要・到達目標

国家・メディア・コミュニティの相互連関を中心に情報化の歴史的な変遷をたどりながら、戦後日本のジャーナリズム、ナショナリズム、歴史認識に関する諸問題を主に扱う。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 マス・コミュニケーションと近代国民国家
- 第3回 情報社会論再考——グローバル化との関連を中心に——
- 第4回 情報化の進展とコミュニティ(論)の変容——国民国家との関連から——
- 第5回 多様化・多層化するコミュニティとコミュニティ・メディア
- 第6回 戦後日本社会のメディア・ナショナリズム(1)
- 第7回 戦後日本社会のメディア・ナショナリズム(2)
- 第8回 日本のソフト・パワーの「歴史性」と「政治性」(1)
- 第9回 日本のソフト・パワーの「歴史性」と「政治性」(2)
- 第10回 「物語」としての政治と歴史認識(1)
- 第11回 「物語」としての政治と歴史認識(2)
- 第12回 ジャーナリズムと歴史認識(1)
- 第13回 ジャーナリズムと歴史認識(2)
- 第14回 沖縄地方紙と沖縄の「地方益」(1)
- 第15回 沖縄地方紙と沖縄の「地方益」(2)

履修上の注意

ジャーナリズムだけでなく、政治社会学や戦後日本の政治社会に関心を持ち、授業中は積極的に発言してください。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を読み、その概要に関して、少しでも理解しておくようにして下さい。

教科書

大石裕(2022)『国家・メディア・コミュニティ』慶應義塾大学法学研究会。

参考書

大石裕(1998)『政治コミュニケーション—理論と分析—』勁草書房。
大石裕(2022)『コミュニケーション研究(第5版)』慶應義塾大学出版会。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業の質疑応答、およびレポート提出。

成績評価の方法

レポート50%、授業への貢献度50%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(社会システム論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学) 赤堀 三郎		

授業の概要・到達目標

社会学者ニクラス・ルーマンに代表される社会学的システム理論の概要を学習した上で、同理論を用いた現代社会の捉え方の基礎について講義する。本授業では、基本的には「情報コミュニケーション学」を専攻する大学院生が対象であることを鑑みて、社会学的システム理論の体系をコミュニケーション論的・メディア論的観点から読み解くことに主眼を置く。社会学的システム理論を「使いこなせるようになる」ことが到達目標である。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨソ
 - 第2回 ニクラス・ルーマンについて
 - 第3回 ルーマンの理論体系
 - 第4回 社会システムとはどういウシステムカ
 - 第5回 サイバネティクスとコミュニケーション
 - 第6回 コミュニケーションの三極モデル
 - 第7回 コミュニケーションのオートポイエシス
 - 第8回 ダブル・コンテインジェンシー、複雑性の縮減
 - 第9回 「観察するシステム」、セカンド・オーダーの観察
 - 第10回 コミュニケーション・メディア
 - 第11回 進化
 - 第12回 社会の機能分化
 - 第13回 ルーマンのマスメディア論
 - 第14回 社会の自己記述(まとめ)
- 詳細は第1回の授業時に説明する。

履修上の注意

専門研究(社会システム論) IIもあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業中に言及した語句、学説、人物等については復習した上で次回の講義に臨んでもらいたい。

教科書

使用しない。授業の進行に応じて適宜レジюме・資料等を配布する場合もある。

参考書

ニクラス・ルーマン『社会の社会』(1・2)法政大学出版局、同『マスメディアのリアリティ』木鐸社、同『近代の観察』法政大学出版局。必要に応じてドイツ語原文、英訳版等を参照する。他に、赤堀三郎『社会学的システム理論の軌跡』春秋社。

成績評価の方法

授業への貢献度70%、口答試問30%

その他

履修者の人数、および個々の関心や理解度に応じて適宜スケジュールを変更することがある。

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究(社会システム論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学) 赤堀 三郎		

授業の概要・到達目標

社会学者ニクラス・ルーマンに代表される社会学的システム理論の概要を学習した上で、彼の歴史社会学・知識社会学の著作『社会構造とゼマンティック』シリーズの中から、受講生の関心に沿ったテーマをいくつか選んで講じる。このことを通じて、社会が変化するとはいかなる事態か、どのように社会の変化を研究できるかをシステム理論の立場から考える。ルーマンが歴史社会学・知識社会学を展開するにあたって用いたシステム理論の枠組を、各自が道具として「使いこなせるようになる」ことが目標である。ルーマンはメディアおよびコミュニケーションの概念と、社会の「意味論的」変化を関連づけて論じている。ゆえに、ルーマンのいう「ゼマンティック論」を学ぶことは、「情報コミュニケーション学」を専攻する大学院生にとって有意義であると考えられる。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨソ
 - 第2回 知識社会学・歴史社会学について
 - 第3回 意味の進化
 - 第4回 機能分化と人間像
 - 第5回 人格
 - 第6回 近代個人主義
 - 第7回 近代合理主義
 - 第8回 環境
 - 第9回 エコロジー問題
 - 第10回 近代的時間
 - 第11回 ルーマン『情熱としての愛』
 - 第12回 愛のゼマンティック研究 事例紹介
 - 第13回 ゼマンティック研究の実践(1) 実際にやってみる
 - 第14回 ゼマンティック研究の実践(2) 報告会
- 詳細は第1回の授業時に説明する。

履修上の注意

専門研究(社会システム論) Iを履修していることが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業中に言及した語句、学説、人物等については復習した上で次回の講義に臨んでいただきたい。

教科書

使用しない。授業の進行に応じて適宜レジюме・資料等を配布する。

参考書

ニクラス・ルーマン『社会の社会』(1・2)法政大学出版局、同『社会構造とゼマンティック』(1・2・3)法政大学出版局、同『情熱としての愛』木鐸社。必要に応じてドイツ語原文、英訳版等を参照する。

成績評価の方法

授業への貢献度70%、口答試問30%

その他

履修者の人数、および個々の関心や理解度に応じて適宜スケジュールを変更することがある。

科目ナンバー：(IC) STS531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (科学と社会) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(学術)	坂野 徹	

授業の概要・到達目標

本授業では、フィールド系の学問と社会との関係について、歴史的（科学史的）観点から検討する。より具体的には、文化/自然人類学、考古学、民俗学、地理学、生態学など、フィールドワークを重視する諸科学の歴史に着目し、フィールドワークという営みについて多角的に考えていく。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 テキスト講読および討論(1)
- 第3回 テキスト講読および討論(2)
- 第4回 テキスト講読および討論(3)
- 第5回 テキスト講読および討論(4)
- 第6回 テキスト講読および討論(5)
- 第7回 資料紹介および映像鑑賞
- 第8回 テキスト講読および討論(6)
- 第9回 テキスト講読および討論(7)
- 第10回 テキスト講読および討論(8)
- 第11回 テキスト講読および討論(9)
- 第12回 テキスト講読および討論(10)
- 第13回 テキスト講読および討論(11)
- 第14回 総括

履修上の注意

後期の専門研究 (科学と社会) II との同時履修が基本である。

準備学習 (予習・復習等) の内容

発表者は、次回の発表準備を行うこと。それ以外の者も、事前にテキストを熟読するとともに、授業で紹介した内容について、文献等で調べておくこと。

教科書

『帝国を調べる』坂野徹編 (勁草書房)、『フィールドワークの戦後史』坂野徹 (吉川弘文館)

参考書

『近代科学のリロケーション』カピル・ラジ (名古屋大学出版会)、『科学の地理学』デイヴィッド・リヴィングストン (法政大学出版局)

成績評価の方法

授業への参加度50%、授業への貢献度50%

その他

科目ナンバー：(IC) STS531J			
情報・社会系		備考	
科目名	専門研究 (科学と社会) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(学術)	坂野 徹	

授業の概要・到達目標

前期の「科学と社会 I」の履修を前提に、フィールド系の学問（文化/自然人類学、考古学、民俗学、地理学、生態学など）の歴史を検討する。後期は、後半で各履修者の興味関心に従って、かつて行われたフィールド調査や旅行記、ドキュメンタリーなどを具体的にに取り上げ、それについて発表してもらう予定である。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 テキスト講読および討論(1)
- 第3回 テキスト講読および討論(2)
- 第4回 テキスト講読および討論(3)
- 第5回 テキスト講読および討論(4)
- 第6回 テキスト講読および討論(5)
- 第7回 発表計画相談
- 第8回 文献の確認・指導
- 第9回 発表および討論(1)
- 第10回 発表および討論(2)
- 第11回 発表および討論(3)
- 第12回 発表および討論(4)
- 第13回 発表および討論(5)
- 第14回 総括

履修上の注意

前期の専門研究 (科学と社会) I との同時履修が基本である。

準備学習 (予習・復習等) の内容

発表者は、次回の発表準備を行うこと。それ以外の者も、事前にテキストを熟読するとともに、授業で紹介した内容について、文献等で調べておくこと。

教科書

『近代科学のリロケーション』カピル・ラジ (名古屋大学出版会)

参考書

『科学の地理学』デイヴィッド・リヴィングストン (法政大学出版局)

成績評価の方法

授業への参加度50%、授業への貢献度50%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(社会文化史) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

近世の政治文化、社会文化を原史料から考察する。方法論の勉強もします。

下記はあくまでも参考です。大学院のゼミなので、臨機応変で、テキストはメンバーで決定しましょう。

授業内容

授業テーマ：「実証的史料解釈のために(上)」

授業目的：自立した社会文化史・歴史学の能力を確立するために、活字史料の講読を通じて、実証的史料解釈の方法論を学ぶ。

上記の研究能力の確立には、共同研究方式が最も有効である。ゼミ員全員で社会文化史関連の活字史料を講読する。本年度は幕末関係史料と天狗党関係史料を扱う予定である。しかし、講読史料の選定はその時のゼミメンバーによって変化する。これは、まったくの予定である。

以下はあくまでも予定である。

1. 幕末関係史料講読(1)
2. 幕末関係史料講読(2)
3. 幕末関係史料講読(3)
4. 幕末関係史料講読(4)
5. 幕末関係史料講読(5)
6. 幕末関係史料講読(6)
7. 幕末関係史料講読(7)
8. 幕末関係史料講読(8)
9. 幕末関係史料講読(9)
10. 幕末関係史料講読(10)
11. 天狗党関係史料講読(1)
12. 天狗党関係史料講読(2)
13. 天狗党関係史料講読(3)
14. 天狗党関係史料講読(4)

履修上の注意

社会文化史・歴史学研究には史料の解析が必須であり、この能力を育成するためには共同研究方式が最も有効である。ゼミ員相互のコミュニケーションは欠かせない。

授業内容は、あくまでも予定であり、参加ゼミ生の意向により変容する。臨機応変に対応したい。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。史料は事前に読解しておくこと。

教科書

『吉田松陰全集』(岩波書店、1935年)

参考書

毎回指摘する。

成績評価の方法

プレゼン50%レポート20%議論30%。

その他

「真の学際的大学院」を意識した、「情コミ流儀」の歴史学のゼミとしたい。

科目ナンバー：(IC) CUL512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(社会文化史) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

古文書の読解を通じて、日本近世の社会文化を理解する。方法論の勉強もします。

下記はあくまでも参考です。大学院のゼミなので、臨機応変で、テキストはメンバーで決定しましょう。

授業内容

授業テーマ：「実証的史料解釈のために(下)」

授業目的：社会文化史 I (専門演習) では自立した社会文化史・歴史学の能力を確立するために、活字史料の講読を通じて実証的史料解釈の方法論を学んだ。これを前提に社会文化史 II (専門演習) では、古文書(原史料)の読解、解釈による実証的な社会文化史・歴史学研究の能力を会得することを目的とする。

上記の研究能力の確立には、共同研究方式が最も有効である。ゼミ員全員で社会文化史関連の古文書(原史料)を講読する。19世紀、の地域社会、明治維新に関連する在地史料を中心に講読する。古文書に描かれた地域の巡見踏査(フィールドワーク)、関係地域の史料調査を行い、自立した社会文化史研究のための知を広げる。これと平行して、修士論文作成のための研究テーマの選定を漸次行っていきたい。

しかし、講読史料は、ゼミ員によりセレクトする。以下はあくまでも予定である。

1. 明治維新関係史料講読(1)
2. 明治維新関係史料講読(2)
3. 明治維新関係史料講読(3)
4. 明治維新関係史料講読(4)
5. 明治維新関係史料講読(5)
6. 明治維新関係史料講読(6)
7. 明治維新関係史料講読(7)
8. 明治維新関係史料講読(8)
9. 明治維新関係史料講読(9)
10. 明治維新関係史料講読(10)
11. 埼玉県飯能市中村家文書講読(1)
12. 埼玉県飯能市中村家文書講読(2)
13. 埼玉県飯能市中村家文書講読(3)
14. 埼玉県飯能市中村家文書講読(4)

履修上の注意

歴史学研究には史料の解析が必要であり、この能力を育成するためには共同研究方式が最も有効である。ゼミ員相互のコミュニケーションは欠かせない。授業内容は、あくまでも予定であり、参加ゼミ生の意向により変容する。臨機応変に対応したい。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。史料は事前に読解しておくこと。

教科書

古文書の写真版を配布する。

参考書

『日本思想大系58 民衆思想の思想』(岩波書店、1970年)
 布川清司編『近世日本民衆思想史料集』(明石書店、2000年)
 林英夫監修『新編 古文書解読辞典』(柏書房、1993年)

成績評価の方法

プレゼン50%レポート20%議論30%。

その他

「真の学際的大学院」を意識した、「情コミ流儀」の歴史学のゼミとしたい。

科目ナンバー：(IC) CUL552J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(メディア社会史) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	江下 雅之	

授業の概要・到達目標

メディアのソーシャルな機能は個人間のコミュニケーションによって構築・維持され、そこでは社会と取り巻く情報環境が重要な意味を持っている。この授業では、事例分析をするにあたって必須の素養であるメディア史分野の基礎文献の読解を行い、基礎理論の習得を目指す。

授業内容

以下の4テーマに沿い、合計14回演習を進める。
 第1回 文献講読対象の文献の紹介と概要の説明
 第2～4回 映像メディアに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第5～7回 ジャーナリズムに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第8～10回 サブカルチャに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第11～13回 モバイルメディアに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第14回 文献の輪読を踏まえた問題設定のための議論
 なお、テーマに関しては受講者の研究領域を考慮したうえで変更する場合がある。

履修上の注意

この授業は教室におけるセミナー形式で実施する。基本的に各人が担当する文献あるいは論文の発表とディスカッションを中心に進行する。発表者はかならずgoogleドキュメントにおいてレジュメを作成すること。授業中にレジュメをその場で添削するので、受講者はgoogleドキュメントにアクセスできるように、パソコンあるいはタブレットを持参すること。
 なお、感染の流行や気象その他オンラインで実施した方が適切と判断できる場合は、例外的にメディア授業(リアルタイム型)で実施する場合がある。その際はZoomを使用する。アクセスのためのURLはOh-ol Meijiで連絡する。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業後は、輪読におけるディスカッションをまとめて輪読部分を整理しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

星名定雄『情報と通信の文化史』(法政大学出版局、2006)
 パトリス・フリッシー『メディアの近代史』(水声社、2006)
 神野由紀『百貨店で(趣味)を買う』(吉川弘文館、2015)
 倉田喜弘『日本レコード文化史』(岩波書店、2006)
 谷口文和ほか『音響メディア史』(ナカニシヤ出版、2015)
 その他、各人の研究テーマに沿った文献を随時紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

Oh-ol Meijiのレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオを活用して実施する。

成績評価の方法

文献講読において提出するレジュメ(4本)の内容に基づいて評価する(100%)。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL552J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(メディア社会史) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	江下 雅之	

授業の概要・到達目標

メディアと社会の相互作用的な関係の考察を深める土台として、都市におけるパーソナル・ネットワークの研究、インターネットの登場以前に個人が活用していたメディア(電話、ラジオ、アマチュア無線等)が築いた社会ネットワークの研究を理解する。これらから得られる知見を通じ、インターネットの登場以降に普及したSNSやコミュニケーション・ツールが果たしている機能に連なるコンテクストを理解する。

授業内容

以下の4テーマに沿い、合計14回演習を進める。
 第1回 文献講読対象の文献の紹介と概要の説明
 第2～4回 社会ネットワークに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第5～7回 雑誌史に関する文献・論文の発表とディスカッション
 第8～10回 画像メディアに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第11～13回 SNSに関する文献・論文の発表とディスカッション
 第14回 文献の輪読を踏まえた問題設定のための議論
 なお、テーマに関しては受講者の研究領域を考慮したうえで変更する場合がある。

履修上の注意

この授業は教室におけるセミナー形式で実施する。基本的に各人が担当する文献あるいは論文の発表とディスカッションを中心に進行する。発表者はかならずgoogleドキュメントにおいてレジュメを作成すること。授業中にレジュメをその場で添削するので、受講者はgoogleドキュメントにアクセスできるように、パソコンあるいはタブレットを持参すること。
 秋学期には各人が修論のテーマを具体化する必要があり、先行研究となりうる論文を受講者自身が積極的に検索し、発表する姿勢が求められる。
 なお、感染の流行や気象その他オンラインで実施した方が適切と判断できる場合は、例外的にメディア授業(リアルタイム型)で実施する場合がある。その際はZoomを使用する。アクセスのためのURLはOh-ol Meijiで連絡する。

準備学習(予習・復習等)の内容

参考書の指定箇所を事前に一読しておくこと。授業後は、輪読におけるディスカッションをまとめて輪読部分を整理しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

次の3冊を予定している。
 文献1: 森岡清志『都市社会のパーソナル・ネットワーク』東京大学出版会
 文献2: 森岡清志『パーソナル・ネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会
 文献3: 岡田朋之・松田美佐/編『ケータイ社会論』有斐閣
 その他、各人の研究テーマに沿った文献を随時紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

Oh-ol Meijiのレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオを活用して実施する。

成績評価の方法

文献講読において提出するレジュメ(4本)の内容に基づいて評価する(100%)。

その他

特になし。

科目ナンバー：(IC) CUL512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(表象文化論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

表象文化論(専門研究)では、舞踊学の全般的な動向を踏まえ、各自の研究テーマに即した先行研究(文献)の検討を行った。専門演習 I は、修士論文作成に向け、とくにフィールドワーク研究に必要な技法を扱う。
この授業(演習 I)では、インタビューにおける「語り」(芸談等) および舞踊教授時の指導言語の分析法を習得することを到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション～舞踊・身体表現におけるフィールドワークと「語り」～(授業の目的・内容・評価の方法)
- 第2回：『質的データ分析法—原理・方法・実践』(佐藤郁哉著)の輪読①
- 第3回：『質的データ分析法—原理・方法・実践』(佐藤郁哉著)の輪読②
- 第4回：『質的データ分析法—原理・方法・実践』(佐藤郁哉著)の輪読③
- 第5回：『質的データ分析法—原理・方法・実践』(佐藤郁哉著)の輪読④
- 第6回：舞踊学におけるオーラル・ヒストリー研究の検討①
- 第7回：舞踊学におけるオーラル・ヒストリー研究の検討②
- 第8回：舞踊学におけるオーラル・ヒストリー研究の検討③
- 第9回：舞踊学における教授法および指導言語研究の検討①
- 第10回：舞踊学における教授法および指導言語研究の検討②
- 第11回：舞踊学における教授法および指導言語研究の検討③
- 第12回：各自のテーマに即した「語り」(芸談)の分析実習①
- 第13回：各自のテーマに即した「語り」(芸談)の分析実習②
- 第14回：実習成果の報告とまとめ

履修上の注意

すでにフィールドワークで収集したインタビュー資料をもっている者は初回授業時に提示できるよう準備しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および受講生の研究テーマに即し、課題を指示する。

教科書

佐藤郁哉『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社

参考書

- 瀬戸邦弘・杉山千鶴・波照間永子編著『日本人の“からだ”再考』明和出版、2012
 - 生田久美子・北村勝朗編著『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会、2011
- 舞踊および身体表現に関する参考書は適宜授業中に提示する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

発表:50%、レポート:50%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(表象文化論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

「表象文化論(専門研究)」および「表象文化論(専門演習 I)」の内容を踏まえ、舞踊および身体表現に関する具体的な論文執筆のための課題を進める。とくにこの授業では、舞踊の主たる表現メディアである「身体動作」に着目し、「作品分析」および「動作分析」の演習を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回～第3回：先行研究における作家・作品研究の検討
- 第4回～第5回：自身の研究テーマと関連する「作品」の抽出、「作品リスト」の作成
- 第6回～第7回：分析対象とする「作品」の概要報告(時代背景・作者など)
- 第8回～第10回：「作品分析」演習(作品構成:衣装・身体技法・音楽・上演空間など)
- 第11回～第13回：身体技法の記録 「動作分析」演習
- 第14回：成果報告

履修上の注意

受講生の人数や理解度に応じて、授業内容は変更する可能性がある。
初回ガイダンス時に各自の研究課題を聴取し、詳細な授業計画を決定する。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および各自の研究テーマに即し、課題を提示する。

教科書

授業時に資料を配布する。

参考書

授業時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

発表:50%、レポート:50%

その他

科目ナンバー：(IC) GDR512J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(ジェンダー論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美		

授業の概要・到達目標

ジェンダーとポピュラーカルチャー(特にメディア)に関する研究を行う上で必要な知識とスキルの習得を目指す。問題設定、理論的枠組み、研究方法を検討し、研究計画を整えていく。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 研究テーマ、問題設定の検討(1)
- 第3回 研究テーマ、問題設定の検討(2)
- 第4回 理論的枠組みの検討(1)
- 第5回 理論的枠組みの検討(2)
- 第6回 理論的枠組みの検討(3)
- 第7回 理論的枠組みの検討(4)
- 第8回 研究方法の検討(1)
- 第9回 研究方法の検討(2)
- 第10回 研究方法の検討(3)
- 第11回 研究方法の検討(4)
- 第12回 研究計画の作成(文献リスト、タイムライン含む)(1)
- 第13回 研究計画の作成(文献リスト、タイムライン含む)(2)
- 第14回 研究計画の発表、まとめ

履修上の注意

専門研究(ジェンダー論)とあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

文献講読など事前に作業が伴う課題があるときは事前に準備の上、授業に臨むこと。
授業後は授業内容を振り返り、復習しておくこと。

教科書

受講生の研究内容に適した文献を扱う。

参考書

成績評価の方法

課題への取り組み(80%)、学期末レポート(20%)
*出席、授業態度は評価の前提です。

その他

科目ナンバー：(IC) GDR512J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(ジェンダー論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美		

授業の概要・到達目標

春学期に続き、ジェンダーとポピュラーカルチャー(特にメディア)の理論的・実証的研究を行う上で必要な知識とスキルの習得を目指す。秋学期は、春学期に作成した研究計画に基づき、関連文献を読み、理論的な知識を深め、修論研究の計画を仕上げる。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 文献講読と討論:テキストに関する研究(1)
- 第3回 文献講読と討論:テキストに関する研究(2)
- 第4回 文献講読と討論:テキストに関する研究(3)
- 第6回 文献講読と討論:プロダクションに関する研究(1)
- 第7回 文献講読と討論:プロダクションに関する研究(2)
- 第8回 文献講読と討論:プロダクションに関する研究(3)
- 第9回 文献講読と討論:オーディエンスに関する研究(1)
- 第10回 文献講読と討論:オーディエンスに関する研究(2)
- 第11回 文献講読と討論:オーディエンスに関する研究(3)
- 第12回 研究計画の再検討(1)
- 第13回 研究計画の再検討(2)
- 第14回 研究計画の最終発表、まとめ

履修上の注意

専門研究(ジェンダー論)とあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で扱う文献については精読の上、授業に臨むこと。

教科書

受講生の研究内容に適した文献を扱う。

参考書

成績評価の方法

課題への取り組み(80%)、学期末レポート(20%)
*出席、授業態度は評価の前提です。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL522J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(超域文化論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

本演習では、修士論文を書くにあたって、伝統的なメディアだけではなく、デジタルメディアなどが発達した現代社会のメディア環境で、トランスナショナルに重層的に展開し、形成、伝達、再編され続けている記号的表象としてのファッションといった文化産物に関する各受講者の問題、仮説、方法論、研究プランを明確にすることを到達目標とする。そのために、研究対象としての表象文化としての現代の都市文化、消費文化、ポピュラー・カルチャー、サブカルチャーにみられる超域文化的視点から見えてくる可能性と問題点を検証するための方法論、事例研究に関する先行研究を参考書として挙げたものを中心に批判的に精読、検証する。

授業内容

- 第一回 超域文化論についての説明
演習の進め方の説明
- 第二回 a文献講読1
b研究テーマ、問、仮説に関する討論1
- 第三回 a文献講読2
b研究テーマ、問、仮説に関する討論2
- 第四回 a文献講読3
b研究テーマ、問、仮説に関する討論3
- 第五回 a文献講読4
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論1
- 第六回 a文献講読5
b研究テーマ、問、仮説に関する討論4
- 第七回 a文献講読6
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論2
- 第八回 a文献講読7
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論3
- 第九回 a文献講読8
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論4
- 第十回 a文献講読9
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論5
- 第十一回 a文献講読10
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論6
- 第十二回 a文献講読11
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論7
- 第十三回 a文献講読12
b各自の研究テーマ、問、仮説に関する討論8
- 第十四回 各自 研究プラン(研究テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説、研究アプローチ)の発表

履修上の注意

受講生は自分の担当に関してはしっかり準備をしてくる。また他の受講者の発表に対してもコメントをだせるよう準備しておくこと。

また自分の関心領域の論文についても提案し議論する。講読する文献は、参考書に挙げたもののみならず、超域文化論に関わりかつ受講者の関心領域に関係する論考を講読することもある。

受講者の研究進度等により、授業内容は変更する可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に指定した日本語及び外国語の文献外国語の文献はきちんと読んでくること。講読した論考からさらに発展させて自分の研究関連の書籍を読むようにすること。

教科書

参考書

- 高木陽子・高馬京子『越境するファッションスタディーズ』ナカニシヤ出版 2021
- 石丸久美子・高馬京子共訳 ドミニクマングノー『コミュニケーションテキスト分析—フランス学派的言説分析への招待』ひつじ書房 2018

その他必要に応じてプリント等配布する。

課題に対するフィードバックの方法

都度授業等でコメントをフィードバックする。

成績評価の方法

平常点50点 試験(もしくはレポート) 50点

その他

科目ナンバー：(IC) CUL522J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(超域文化論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

春学期にまとめた研究プランに従い、各自の関連先行研究を批判的に読み込み、仮説を論証するための分析を行い、修士論文の研究プランの完成をめざす。

授業内容

- 第一回 研究プランの進捗状況の報告、確認、演習の進め方説明
- 第二回 各受講者の研究テーマに関連する論文の批判的読解：テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説の検証1
- 第三回 各受講者の研究テーマに関連する論文の批判的読解：テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説の検証2
- 第四回 各受講者の研究テーマに関連する論文の批判的読解：テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説の検証3
- 第五回 各受講者の研究テーマに関連する論文の批判的読解：テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説の検証4
- 第六回 各受講者の研究テーマに関連する論文の批判的読解：テーマ、問、方法論、理論的枠組み、仮説の検証5
- 第七回 仮説検証のための分析(メディアの異文化表象分析)1
- 第八回 仮説検証のための分析(メディアの異文化表象分析)2
- 第九回 仮説検証のための分析(メディアの異文化表象分析)3
- 第十回 仮説検証のための分析(メディアの異文化表象分析)4
- 第十一回 仮説検証のための分析
- 第十二回 研究プランの再考、今後の課題のまとめ
- 第十三回 発表
- 第十四回 テスト(レポート)

履修上の注意

受講生の研究テーマ、プランにそった論考を扱う。受講者の研究進度等により、授業内容は変更する可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業だけでは時間に限りがあるため、自分の担当のときに発表準備をするだけでなく、その前後も先行研究論文を批判的に読み、仮説検証のための分析準備、データ集めなどを予復習してしっかりすすめること。

教科書

受講生の研究テーマ、プランにそった論考を扱う。

参考書

- 高木陽子・高馬京子『越境するファッションスタディーズ』ナカニシヤ出版 2021
- 石丸久美子・高馬京子共訳 ドミニクマングノー『コミュニケーションテキスト分析—フランス学派的言説分析への招待』ひつじ書房 2018

課題に対するフィードバックの方法

都度課題に対してコメント、フィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点50% 発表、試験(レポート) 50%

その他

科目ナンバー：(IC) ARS512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(宗教と政治) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本演習は宗教および政治に関する研究を行う受講生を対象とし、基礎的文献を読み込むことで、当該テーマに関する必要最低限の知識を習得することを目的とする。昨今の国際情勢において、宗教と政治の関係は主要な問題の一つであり、宗教研究と政治研究の架橋が喫緊の課題である。本演習ではこうした研究テーマに関心を持つ学生に対して、研究の基礎固めとそれを踏まえた研究発展の達成を目指す。当該研究分野の現状を把握するとともに、先行研究批判に必要な知識を習得し、各受講生の関心に応じた研究計画を具体化する。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 修士論文執筆計画の立て方
- 第3回 研究論文における基本作法:引用と出典表記
- 第4回 研究における文献の読み方(1):研究論文
- 第5回 課題論文の発表(1)
- 第6回 課題論文の発表(2)
- 第7回 課題論文の発表(3)
- 第8回 研究における図書の読み方(1):研究図書
- 第9回 課題図書の発表(1)
- 第10回 課題図書の発表(2)
- 第11回 課題図書の発表(3)
- 第12回 先行研究批判の基礎
- 第13回 先行研究批判の発表
- 第14回 中間発表:研究計画案

履修上の注意

受講生の修士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。専門研究(宗教と政治)と合わせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、修士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

課題に対するフィードバックの方法

課題を課した次の回の授業において、口頭にて講評を伝える。最終回については、Oh-ol Meijiを利用してフィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) ARS512J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(宗教と政治) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本演習は宗教および政治に関する研究を行う受講生を対象とする。春学期で習得した文献分析の方法を踏まえ、当該テーマに関する先行研究を読み込むことで、問題設定の方法、および問題分析のための理論的枠組について具体的に検討する。同時に、最新の研究動向を知るとともに、受講生各自の研究テーマに即した分析枠組の構築方法についても検討する。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 ディシプリンと分析枠組
- 第3回 各受講生の文献リスト発表
- 第4回 分析枠組の検討(1)
- 第5回 分析枠組の検討(2)
- 第6回 分析枠組の検討(3)
- 第7回 実証研究の基礎
- 第8回 実証研究に関する発表(1)
- 第9回 実証研究に関する発表(2)
- 第10回 実証研究に関する発表(3)
- 第11回 課題文献の批判的考察:分析枠組と実証を中心に
- 第12回 研究計画の再検討(1)
- 第13回 研究計画の再検討(2)
- 第14回 最終発表:今後の修士論文執筆計画

履修上の注意

受講生の修士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。専門研究(宗教と政治)とあわせて履修することが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、修士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

課題に対するフィードバックの方法

課題を課した次の回の授業において、口頭にて講評を伝える。最終回については、Oh-ol Meijiを利用してフィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) ART532J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(演劇学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

1860年代から1910年頃に至るまでの時期に日本を訪れた外国人による歌舞伎の観劇記録を集成したLeiter, Samuel L., Meiji Kabuki, Lexington Books, 2023.の講読をおこない、日本社会の近代化の中で変化しつつあった歌舞伎が外国人の眼によってどのように捉えられたかを考察していく。観劇記録を読み解き、適切な文献を参照して記述の内容を検討し、過去の舞台について考察する能力を身につけることを目標とする。
秋学期の「専門研究(演劇学) II」を継続して履修することが望ましい。

授業内容

- 第1回 インTRODakション
- 第2回 Part I
- 第3回 Part II: The 1860s (1)
- 第4回 Part II: The 1860s (2)
- 第5回 Part II: The 1860s (3)
- 第6回 Part II: The 1860s (4)
- 第7回 Part III: The 1870s (1)
- 第8回 Part III: The 1870s (2)
- 第9回 Part III: The 1870s (3)
- 第10回 Part III: The 1870s (4)
- 第11回 Part IV: The 1880s (1)
- 第12回 Part IV: The 1880s (2)
- 第13回 Part IV: The 1880s (3)
- 第14回 まとめ

履修上の注意

必ず事前に予習をおこなった上で授業に参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

参加者は各回の授業で扱う箇所について事前に確認の上、疑問点等を明らかにしておく。
発表担当者は、担当箇所について仮訳を作成し、記された上演内容や固有名詞等について調査をおこない、報告する。

教科書

Leiter, Samuel L., Meiji Kabuki, Lexington Books, 2023.

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業における発表については、授業中にフィードバックをおこなう。

成績評価の方法

各回の授業中における発言等、授業への参加度40%、授業における担当箇所の発表60%。

その他

科目ナンバー：(IC) ART532J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門演習(演劇学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

1860年代から1910年頃に至るまでの時期に日本を訪れた外国人による歌舞伎の観劇記録を集成したLeiter, Samuel L., Meiji Kabuki, Lexington Books, 2023.の講読をおこない、日本社会の近代化の中で変化しつつあった歌舞伎が外国人の眼によってどのように捉えられたかを考察していく。観劇記録を読み解き、適切な文献を参照して記述の内容を検討し、過去の舞台について考察する能力を身につけることを目標とする。
春学期の「専門研究(演劇学) I」から継続して履修することが望ましい。

授業内容

- 第1回 インTRODakション
- 第2回 Part IV: The 1880s (1)
- 第3回 Part IV: The 1880s (2)
- 第4回 PartV: The 1890s(1)
- 第5回 PartV: The 1890s(2)
- 第6回 PartV: The 1890s(3)
- 第7回 PartV: The 1890s(4)
- 第8回 Part VI: The 1900s (1)
- 第9回 Part VI: The 1900s (2)
- 第10回 Part VI: The 1900s (3)
- 第11回 Part VI: The 1900s (4)
- 第12回 観劇記録と舞台(1)
- 第13回 観劇記録と舞台(2)
- 第14回 まとめ

履修上の注意

必ず事前に予習をおこなった上で授業に参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

参加者は各回の授業で扱う箇所について事前に確認の上、疑問点等を明らかにしておく。
発表担当者は、担当箇所について仮訳を作成し、記された上演内容や固有名詞等について調査をおこない、報告する。

教科書

Leiter, Samuel L., Meiji Kabuki, Lexington Books, 2023.

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業における発表については、授業中にフィードバックをおこなう。

成績評価の方法

各回の授業中における発言等、授業への参加度40%、授業における担当箇所の発表60%。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(社会文化史) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための能力を養成する。

授業内容

授業テーマ：「社会文化史修士論文作成のために(上)」

授業目的：日本近世・近代・現代を中心として社会文化史に関連する修士論文作成を目指す院生を対象として、自立した調査・研究を行なえる能力を獲得する。

専門演習(社会文化史) I、専門研究(社会文化史) Iの履修を前提とする。すでに、歴史認識の重要性、史料解釈の厳密さ等は学んだ。いよいよ修論執筆の準備に入る。いかに新機軸を出せるかを意識したテーマ設定能力の育成を目指す。

1. ゼミ員各自のテーマに関する先行研究の整理(1)
2. ゼミ員各自のテーマに関する先行研究の整理(2)
3. ゼミ員各自のテーマに関する先行研究の整理(3)
4. ゼミ員各自のテーマに関する先行研究の整理(4)
5. ゼミ員各自のテーマに関する先行研究の整理(5)
6. ゼミ員各自の修論構想報告(1)
7. ゼミ員各自の修論構想報告(2)
8. ゼミ員各自の修論構想報告(3)
9. ゼミ員各自の修論構想報告(4)
10. ゼミ員各自の修論構想報告(5)
11. ゼミ員各自の修論構想報告(6)
12. ゼミ員各自の修論構想報告(7)
13. ゼミ員各自の修論構想報告(8)
14. ゼミ員各自のテーマに該当する現地調査報告

履修上の注意

専門研究(社会文化史) I、専門演習(社会文化史) Iの履修を必須とする。修論作成のための準備期間であり、各自のテーマに基づいた報告(プレゼン)が中心となる。しかし、社会文化史・歴史学研究には、ゼミ員相互のコミュニケーションと相互協力は欠かせない。

授業内容は、あくまでも予定であり、参加ゼミ生の意向により変容する。臨機応変に対応したい。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。史料は事前に読解しておくこと。

教科書

その都度指摘する。

参考書

その都度指摘する。

成績評価の方法

プレゼン70%議論参加30%。

その他

修論作成にむけての準備であることを自覚したい。

科目ナンバー：(IC) CUL612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(社会文化史) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための総合力を養成する。

授業内容

授業テーマ：「社会文化史修士論文作成のために(下)」

授業目的：日本近世・近代・現代を中心として、社会文化史に関連する修士論文作成を目指す院生を対象として、自立した調査・研究をおこなえる能力を獲得する。

①先行研究の的確な整理 ②史料の厳密な解釈 ③論理の一貫性 ④他者への伝達の方法などを意識した研究指導となる。ゼミ員は具体的な修論執筆に入る。

1. ゼミ員各自のテーマに該当する現地調査報告(1)
2. ゼミ員各自のテーマに該当する現地調査報告(2)
3. ゼミ員各自のテーマに該当する現地調査報告(3)
4. ゼミ員各自のテーマに関連する史料収集成果報告(1)
5. ゼミ員各自のテーマに関連する史料収集成果報告(2)
6. ゼミ員各自のテーマに関連する史料収集成果報告(3)
7. ゼミ員各自の修論報告(1)
8. ゼミ員各自の修論報告(2)
9. ゼミ員各自の修論報告(3)
10. ゼミ員各自の修論報告(4)
11. ゼミ員各自の修論報告(5)
12. ゼミ員各自の修論報告(6)
13. ゼミ員各自の修論報告(7)
14. ゼミ員各自の修論報告(8)

履修上の注意

専門研究(社会文化史) II、専門演習(社会文化史) II、特論演習(社会文化史) Iの履修を必須とする。修論執筆のためのゼミであり、各自のテーマに基づいた報告(プレゼン)が中心となる。しかし、社会文化史・歴史学研究には、ゼミ員相互のコミュニケーションと相互協力は欠かせない。

授業内容は、あくまでも予定であり、参加ゼミ生の意向により変容する。臨機応変に対応したい。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。史料は事前に読解しておくこと。

教科書

その都度指摘する。

参考書

その都度指摘する。

成績評価の方法

修論の成果が全てである。

その他

修論の完成をめざすこと。

科目ナンバー：(IC) CUL652J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(メディア社会史) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	江下 雅之	

授業の概要・到達目標

本演習は、修士論文の執筆指導を目的とする。メディア社会史の視点にもとづく社会現象の解明を進めるため、この授業ではメディア史およびライフスタイル研究を概括し、メディアの社会的な役割の分析をめざす。またそれらの成果を踏まえ修士論文の執筆指導を行う(文献講読9回、個人研究報告4回を予定)。

授業内容

- 第1回 インTRODクッション及び基本文献講読状況の確認
- 第2回 個人研究報告(論文執筆指導)：先行研究の分析を中心に
- 第3回 文献講読1(和文・外国語論文)
- 第4回 文献講読2(和文・外国語論文)
- 第5回 文献講読3(和文論文)
- 第6回 個人研究報告(論文執筆指導)：論文の詳細な構成を中心に
- 第7回 文献講読4(和文・外国語論文)
- 第8回 文献講読5(和文・外国語論文)
- 第9回 文献講読6(和文・外国語論文)
- 第10回 個人研究報告(論文執筆指導)：分析手法の検討を中心に
- 第11回 文献講読7(和文・外国語論文)
- 第12回 文献講読8(和文・外国語論文)
- 第13回 文献講読9(和文・外国語論文)
- 第14回 個人研究報告(論文執筆指導)：仮説・検証の見直しを中心に

履修上の注意

メディア史・社会史の基本的な事項は既知とする。修論指導は原則的に「原稿の提出→それに対する講評」という形式で進める。原稿はOh-ol Meijiのレポートとして提出する。提出の形式および期限は、その都度連絡する。修論指導においては個別指導がしばしば必要となるため、本授業の時間以外に Zoom を用いたリアルタイム配信型による指導を随時実施する予定である。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に指定されたテーマのレジュメを作成しておくこと。授業後はディスカッション内容を再整理しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

原則として直近の修論指導の際に行うが、必要に応じて Oh-ol Meiji のレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオも活用する。

成績評価の方法

授業への参加姿勢に基づいて評価する(100%)。

その他

修論指導では臨機応変な対応が必要であるため、Zoom、Slack、LINEなどのツールを随時使用する。

科目ナンバー：(IC) CUL652J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(メディア社会史) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	江下 雅之	

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の執筆指導を目的とする。執筆に必要な論文等の文献講読を前半で集中的に行い、演習の後半は各自の研究報告を中心に運営する(研究報告8回、文献講読6回)。講読する文献については、基本的に、学生個々人が修士論文執筆に深く関連するものを事前に検索し、教員との相談のうえで決定するものとする。

授業内容

- 第1回 インTRODクッション及び論文進捗状況の確認
- 第2回 個人研究報告(論文執筆指導)：資料調査・インタビュー調査等の分析結果を中心に
- 第3回 文献講読1(和文・外国語論文)
- 第4回 文献講読2(和文・外国語論文)
- 第5回 文献講読3(和文・外国語論文)
- 第6回 個人研究報告(論文執筆指導)：仮説と検証を中心に
- 第7回 文献講読4(和文・外国語論文)
- 第8回 文献講読5(和文・外国語論文)
- 第9回 文献講読6(和文・外国語論文)
- 第10回 個人研究報告(論文執筆指導) 1
- 第11回 個人研究報告(論文執筆指導) 2
- 第12回 個人研究報告(論文執筆指導) 3
- 第13回 個人研究報告(論文執筆指導) 4
- 第14回 個人研究報告(論文執筆指導) 5

履修上の注意

メディア史・社会史の基本的な事項は既知とする。修論指導は原則的に「原稿の提出→それに対する講評」という形式で進める。原稿はOh-ol Meijiのレポートとして提出する。提出の形式および期限は、その都度連絡する。修論指導においては個別指導がしばしば必要となるため、本授業の時間以外に Zoom を用いたリアルタイム配信型による指導を随時実施する予定である。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に指定されたテーマのレジュメを作成しておくこと。授業後はディスカッション内容を再整理しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

使用しない。

課題に対するフィードバックの方法

原則として直近の修論指導の際に行うが、必要に応じて Oh-ol Meiji のレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオも活用する。

成績評価の方法

授業への参加姿勢に基づいて評価する(100%)。

その他

修論指導では臨機応変な対応が必要であるため、Zoom、Slack、LINEなどのツールを随時使用する。

科目ナンバー：(IC) CUL612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(表象文化論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

1. 舞踊および身体表現に関する修士論文を作成する。
2. 学内外で開催される研究会において修士論文の中間発表を行う。

授業内容

- 春学期は研究テーマに関する先行研究の講読
- 第1回：イントロダクション(論文作成の方法・注意点・評価の方法)
 - 第2回：先行研究の吟味①修論の全体構成デザイン
 - 第3回：先行研究の吟味②
 - 第4回：先行研究の吟味③
 - 第5回：先行研究の吟味④
 - 第6回：先行研究の吟味⑤研究動向に関するドラフト作成
 - 第7回：先行研究の吟味⑥研究動向に関するドラフト作成
 - 第8回：先行研究の吟味⑦研究動向に関するドラフト作成
 - 第9回：先行研究の分類・自身の研究の位置付け
 - 第10回：研究手法の検討
 - 第11回：研究結果の報告①舞踊学関連学会発表抄録の作成
 - 第12回：研究結果の報告②舞踊学関連学会発表抄録の作成
 - 第13回：研究結果の報告③舞踊学関連学会発表抄録の作成
 - 第14回：中間発表、今後の課題の提示

履修上の注意

修士論文の中間発表を、明治大学アジア太平洋パフォーマンス・アーツ研究所研究会にて報告する。
舞踊学会・比較舞踊学会等の研究会に積極的に参加し自身の論文作成の参考とすること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および各自の研究テーマに即し、課題を提示する。

教科書

特になし。

参考書

授業時に適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

平常点:30%、発表:35%、論文:35%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(表象文化論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

1. 舞踊および身体表現に関する修士論文を作成する。
2. 舞踊学会および比較舞踊学会にてその成果を公表する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(論文執筆の注意点・評価の方法)
- 第2回：論文の進捗状況報告
- 第3回：論文構成最終デザイン①
- 第4回：論文構成最終デザイン②
- 第5回：先行研究の整理と自身のテーマの位置付け
- 第6回：各章執筆・指導①、舞踊学会・比較舞踊学会発表の準備
- 第7回：各章執筆・指導②、舞踊学会・比較舞踊学会発表の準備
- 第8回：各章執筆・指導③、舞踊学会・比較舞踊学会発表の準備
- 第9回：各章執筆・指導④、舞踊学会・比較舞踊学会発表の準備
- 第10回：各章執筆・指導⑤
- 第11回：各章執筆・指導⑥
- 第12回：各章執筆・指導⑦
- 第13回：校正・推敲①
- 第14回：校正・推敲② 今後の課題の提示

11月～12月に実施される舞踊学会および比較舞踊学会で発表することを目標にして、論文を完成させること。学会前にはプレゼンテーションの準備を集中的に行う。

履修上の注意

授業内容に記した通り、11月～12月に開催される舞踊学関連学会で発表することを必須の課題とする。計画的かつ積極的に取り組むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および各自の研究テーマに即し、課題を提示する。

教科書

特になし。

参考書

授業時に適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

発表:50%、論文:50%

その他

科目ナンバー：(IC) GDR612J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習(ジェンダー論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美		

授業の概要・到達目標

本演習は修論研究指導のコアとなる授業である。修論研究を進め、論文執筆できる段階に到達することが目標である。実施することは、(1) 先行研究の整理を通じ、これまでの研究の成果と限界を明らかにすること、(2) その上で自らの研究テーマを絞り、問いを立て、適切な研究方法・分析枠組みを選び、作業することおである。春学期は、これらの作業に必要な、文献調査、調査方法の確認、調査の実施、調査結果の報告・検討を行う。

授業内容

- 第1回 インTRODakション、研究計画の確認
- 第2回 先行研究の整理1
- 第3回 先行研究の整理2
- 第4回 先行研究の整理3
- 第5回 問題設定1
- 第6回 問題設定2
- 第7回 研究方法の検討1
- 第8回 研究方法の検討2
- 第9回 実証研究・文献調査の実施1
- 第10回 実証研究・文献調査の実施2
- 第11回 結果の報告1
- 第12回 実証研究・文献調査の実施3
- 第13回 実証研究・文献調査の実施4
- 第14回 結果の報告2、今後の課題の確認

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文研究は授業だけでは完成できないため、予習・復習及び普段から自分の作業スケジュールに沿って計画的に取り組む必要がある。

教科書

受講生の研究内容に適した文献を扱う。

参考書

成績評価の方法

課題への取り組み(100%)
本演習でのアドバイスを踏まえて修士論文研究の作業ができていくかどうかで評価します。

その他

科目ナンバー：(IC) GDR612J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習(ジェンダー論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(社会学) 田中 洋美		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の作成指導のためのものである。従って履修する学生が最終的に修士論文を完成させることが目標である。春学期で行なった実証研究、文献調査の結果を考察し、既存の理論との関連で分析し、自らの研究がいかなる独自の知見をもたらしているのか、検討する。その知見の一般化や論文執筆による成果のまとめの作業を行えるよう、指導する予定である。

授業内容

- 第1回 インTRODakション：これまでの作業と今後の作業工程の確認
- 第2回 実証研究・文献調査の結果報告
- 第3回 結果の分析1
- 第4回 結果の分析2
- 第5回 結果の分析3
- 第6回 結果の理論的考察1
- 第7回 結果の理論的考察2
- 第8回 結果の理論的考察3
- 第9回 執筆作業1
- 第10回 執筆作業2
- 第11回 執筆作業3
- 第12回 執筆作業4
- 第13回 論文全体の確認1
- 第14回 論文全体の確認2

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

修論完成のためのコアとなる授業である。そのため予習、復習はもとより、普段からこの演習での指導を踏まえ、修論研究の作業スケジュールに沿って自主的に取り組むことは不可欠である。

教科書

参考書

成績評価の方法

課題への取り組み(100%)
修論完成に向けての姿勢、成果で評価します。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL622J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(超域文化論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

本演習では、現代メディアに表象される超域文化に関するテーマについて修士論文を書くための演習である。各自の研究テーマに関連する著作の批判的文献講読を行い、自らの研究テーマ、問、仮説、仮説論証のための分析方法、理論的枠組みを構築していく作業を行う。また研究プランに基づいたメディアの表象分析も行う。指導の下、学期中に受講者は修士論文成果発表を行う。

授業内容

- 第一回 演習内容の説明
- 第二回 研究計画、進捗状況、課題の報告
- 第三回 文献報告、批判的読解1
- 第四回 文献報告、批判的読解2
- 第五回 文献報告、批判的読解3
- 第六回 研究成果発表1
- 第七回 研究成果発表2
- 第八回 データ収集と分析報告1
- 第九回 データ収集と分析報告2
- 第十回 データ収集と分析報告3
- 第十一回 データ収集と分析報告4
- 第十二回 研究成果発表3
- 第十三回 研究成果発表4
- 第十四回 考査

履修上の注意

受講者の修士論文執筆準備の内容が進捗状況等によって変わることもある。
 受講者が報告する際は、そのテキストを配布すること。
 他の受講者の報告、発表に関しても意見を積極的に述べること。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講者は、しっかり準備をすること。報告は必ずそのままとめたテキストを配布し、授業で議論したことを元にさらに発展させ修士論文執筆完成を目指すこと。

教科書

参考書

受講者の研究テーマにそって指定する。

成績評価の方法

平常点(50%)、試験(レポート)(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) CUL622J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(超域文化論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

本演習では、現代メディアに表象されるファッションといった超域文化に関するテーマについての修士論文を書くための指導を行う。各自の研究テーマに関連する著作の批判的文献講読を行い、研究プランに基づいたメディアの表象分析からの考察を行い、研究結果の既存の研究枠組みへの位置づけや独自性などを検証する。これらをもとに指導の下、研究内容の文章化を進め、論理性など全体を確認しながら、修士論文完成を目指す。学期中に受講者は修士論文成果発表を行う。

授業内容

- 第一回 導入
- 第二回 研究計画及び進捗状況の報告
- 第三回 文献報告、研究結果分析1
- 第四回 文献報告、研究結果分析2
- 第五回 文献報告、研究結果分析3
- 第六回 研究結果の考察1
- 第七回 研究成果の考察2
- 第八回 研究成果発表
- 第九回 論文作成指導1
- 第十回 論文作成指導2
- 第十一回 論文作成指導3
- 第十二回 論文作成指導4
- 第十三回 論文作成指導5
- 第十四回 まとめ、論文完成への展望

履修上の注意

受講者の修士論文進捗状況にあわせ、授業内容を若干変更することもある。
 積極的に出席し、他の受講者の研究テーマに対する議論にも参加する。

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文執筆に向け、しっかりと準備をし、テキストを準備し報告すること。また授業での議論、指導に基づき、復習、今後の課題を常に確認しながら修士論文完成を目指すこと。

教科書

参考書

受講者の研究テーマに沿って指定する。

成績評価の方法

平常点(50%)、試験(レポート)(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ARS612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(宗教と政治) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本演習では、受講生の修士論文執筆のための研究指導が主な目的となる。到達目標は、①修士論文のテーマ設定、②修士論文執筆に必要な先行研究レビュー、③修士論文のリサーチクエスションの設定、④修士論文に必要なディシプリン／分析枠組の習得、である。

春学期においては、先行研究の批判的レビューの方法、それを踏まえたリサーチクエスションの立て方、ディシプリン／分析枠組の習得ののために、文献を読み込みを進めると同時に、論文執筆の基本的な作法を学ぶ。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション(aのみ)
- 第2回 修士論文のテーマ設定と執筆計画(確定版)発表
- 第3回 先行研究レビューの再検討
- 第4回 先行研究レビュー(1)
- 第5回 先行研究レビュー(2)
- 第6回 先行研究レビュー(3)
- 第7回 論文執筆の基礎:リサーチクエスションの立て方
- 第8回 リサーチクエスションの検討(1)
- 第9回 リサーチクエスションの検討(2)
- 第10回 リサーチクエスションの検討(3)
- 第11回 問題分析の方法:ディシプリン／分析枠組
- 第12回 分析方法の検討(1)
- 第13回 分析方法の検討(2)
- 第14回 中間発表、今後の計画

履修上の注意

受講生の修士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、修士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) ARS612J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(宗教と政治) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本演習では、受講生が実際に行う修士論文執筆への研究指導が主な目的である。具体的な到達目標は、受講生の修士論文の完成・提出である。春学期に習得した論文執筆のための手法に依拠し、教員の指導の下で論文執筆と進捗状況に応じて発表を行う。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション(aのみ)
- 第2回 研究計画および進捗状況の発表
- 第3回 論文構成:章立ての方法について
- 第4回 修士論文構成の確定と発表
- 第5回 執筆作業(1)
- 第6回 執筆作業(2)
- 第7回 研究報告(1)
- 第8回 執筆作業(3)
- 第9回 執筆作業(4)
- 第10回 研究報告(2)
- 第11回 執筆作業(5)
- 第12回 執筆作業(6)
- 第13回 研究報告(3)
- 第14回 最終発表

履修上の注意

受講生の修士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

修士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、修士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

参考書

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) ART632J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(演劇学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

演劇学分野の修士論文執筆に向けた準備および指導をおこなう。履修者の研究内容に応じた文献講読をおこない、演劇研究に求められる資料解釈等の能力を身につけるとともに、研究内容の報告をおこない、論文の完成を目指す。

授業内容

- 第1回 インTRODakション
- 第2回 修士論文中間報告(1)
- 第3回 文献講読(1)
- 第4回 文献講読(2)
- 第5回 文献講読(3)
- 第6回 文献講読(4)
- 第7回 修士論文中間報告(2)
- 第8回 文献講読(5)
- 第9回 文献講読(6)
- 第10回 文献講読(7)
- 第11回 文献講読(8)
- 第12回 文献講読(9)
- 第13回 修士論文中間報告(3)
- 第14回 春学期の総括

履修上の注意

必ず事前に授業で扱う文献に目を通し、必要に応じて調査等をおこなった上で授業に臨むこと。また、修士論文指導は草稿の提出と添削・講評を繰り返す形でおこない、必要に応じて授業時間外にも指導をおこなう。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に講読文献について調査をおこない、報告担当時には資料を用意すること。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

提出された論文草稿に対して、その都度、口頭およびメール、クラスウェブ等の手段を用いて添削を加え、コメントをおこなう。

成績評価の方法

授業への参加姿勢によって評価する(100%)。

その他

科目ナンバー：(IC) ART632J			
メディア・文化系	備考		
科目名	特論演習(演劇学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

演劇学分野の修士論文執筆に向けた準備および指導をおこなう。履修者の研究内容に応じた文献講読をおこない、演劇研究に求められる資料解釈等の能力を身につけるとともに、研究内容の報告をおこない、論文の完成を目指す。秋学期は特に論文の完成に向けた中間報告および草稿の添削・指導に重点を置く。

授業内容

- 第1回 インTRODakション
- 第2回 修士論文中間報告(1)
- 第3回 文献講読(1)
- 第4回 文献講読(2)
- 第5回 文献講読(3)
- 第6回 文献講読(4)
- 第7回 修士論文中間報告(2)
- 第8回 文献講読(5)
- 第9回 文献講読(6)
- 第10回 修士論文中間報告(3)
- 第11回 修士論文中間報告(4)
- 第12回 修士論文中間報告(5)
- 第13回 修士論文中間報告(6)
- 第14回 秋学期の総括

履修上の注意

必ず事前に授業で扱う文献に目を通し、必要に応じて調査等をおこなった上で授業に臨むこと。また、修士論文指導は草稿の提出と添削・講評を繰り返す形でおこない、必要に応じて授業時間外にも指導をおこなう。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に講読文献について調査をおこない、報告担当時には資料を用意すること。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

提出された論文草稿に対して、その都度、口頭およびメール、クラスウェブ等の手段を用いて添削を加え、コメントをおこなう。

成績評価の方法

授業への参加姿勢によって評価する(100%)。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(社会文化史) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

歴史認識確立するために、「戦後歴史学」の動向を考察します。方法論の勉強です。下記はあくまでも参考です。大学院のゼミなので、臨機応変で、テキストはメンバーで決定しましょう。

授業内容

授業テーマ：「歴史認識確立のために(上) — 『戦後歴史学』のなかにおける社会文化史—」

授業目的：1950年～86年までの学説史の解析を通じて、社会文化史の特性とその方法論を理解し、自立した研究に欠かせない歴史認識の確立をはかる。

1950年代、サンフランシスコ講和条約により「独立」した日本において、侵略・戦争、皇国史観への反省から、科学的歴史学を標榜する歴史学(のち「戦後歴史学」と呼称される)が立ち上がり、1989年、東欧革命が発生するまでの間、日本の歴史学研究において圧倒的な影響力を有した。戦後の政治・社会状況を踏まえ、この「戦後歴史学」というディシプリンの成り立ち・展開をトレースしつつ、そのなかで形成された社会文化史の特性を考察しつつ、歴史認識の形成のされ方を学ぶ。以下が講義予定である。ただし、その時のゼミメンバーによって変化する。最初の講義で議論したい。

1. 1950年代の政治・社会情勢：「独立」と「逆コース」のなかで(1)
2. 1950年代の政治・社会情勢：「独立」と「逆コース」のなかで(2)
3. 1950年代「戦後歴史学」の特性：国民的歴史学運動と民族の問題とは何か(1)
4. 1950年代「戦後歴史学」の特性：国民的歴史学運動と民族の問題とは何か(2)
5. 1960年代の政治・社会情勢：六〇年安保闘争と高度経済成長の影響
6. 1960年代「戦後歴史学」の特性：「近代化」論・「明治百年」祭りへの対抗(1)
7. 1960年代「戦後歴史学」の特性：「近代化」論・「明治百年」祭りへの対抗(2)
8. 1970年代の政治・社会情勢：田中角栄の登場と低迷する左翼運動(1)
9. 1970年代の政治・社会情勢：田中角栄の登場と低迷する左翼運動(2)
10. 1970年代「戦後歴史学」の特性：家永教科書裁判と社会史のインパクト(1)
11. 1970年代「戦後歴史学」の特性：家永教科書裁判と社会史のインパクト(2)
12. 1980年代の政治・社会情勢：未来予想図としての社会主義の終焉(1)
13. 1980年代の政治・社会情勢：未来予想図としての社会主義の終焉(2)
14. 1980年代「戦後歴史学」の特性：ポスト・モダニズムとニュー・ヒストリー

履修上の注意

講義形式であるが、院生の主体的な参加が重要である。また、上記「授業内容」はあくまで予定であり、参加院生を考慮して変化していく。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。資料は事前に読解しておくこと。

教科書

特になし。講義は毎回レジメを用意する。

参考書

須田努『アイコンの崩壊まで「戦後歴史学」のなかでの運動史研究』青木書店、2008年

成績評価の方法

プレゼン50%レポート30%議論20%。

その他

「真の学際的大学院」を意識した、「情コミ流儀」の歴史学のゼミとしたい。

科目ナンバー：(IC) CUL511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(社会文化史) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

歴史認識確立のため、「現代歴史学」の動と方法論を理解します。

下記はあくまでも参考です。大学院のゼミなので、臨機応変で、テキストはメンバーで決定しましょう。

授業内容

授業テーマ：「歴史認識確立のために(下) — 『現代歴史学』における社会文化史研究—」

授業目的：1990年以降の学説史の解析を通じて、社会文化史の特性とその方法論を理解し、自立した研究に欠かせない現実社会との接点を意識した歴史認識の確立をはかる。以下が講義予定である。ただし、その時のゼミメンバーによって変化する。最初の講義で議論したい。

I. 歴史学における言語論的転回 5回

1. ポスト構造主義の影響：M・フーコーを読む
2. ポスト構造主義の影響：P・ブルデューを読む(1)
3. ポスト構造主義の影響：P・ブルデューを読む(2)
4. カルチュラルスタディーズの影響：S・ホールを読む
5. メタ・ヒストリーの登場とその批判：H・ホワイトを読む

II. 国民国家論の登場 5回

1. B・アンダーソン『想像の共同体』のインパクト(1)
2. B・アンダーソン『想像の共同体』のインパクト(2)
3. 西川長男の国民国家論(1)
4. 西川長男の国民国家論(2)
5. 大門正克の国民国家論批判

III. 社会文化史研究 4回

1. 安丸良夫(日本近代史)の民衆史思想
2. 青木美智男(日本近世史)がはじめた「深読み」江戸文化
3. 成田龍一(日本近代史)によるメタ・ヒストリー
4. 安田常雄(日本現代史)が着目するサブカルチャー

履修上の注意

講義形式であるが、院生の主体的な参加が重要である。また、上記「授業内容」はあくまで予定であり、参加院生を考慮して変化していく。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。資料は事前に読解しておくこと。

教科書

講義は毎回レジメを用意する。

参考書

毎回指摘する。

成績評価の方法

プレゼン50%レポート30%議論20%。

その他

「真の学際的大学院」を意識した、「情コミ流儀」の歴史学の講義としたい。

科目ナンバー：(IC) CUL551J			
メディア・文化系		備考	
科目名	専門研究(メディア社会史) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 江下 雅之		

授業の概要・到達目標

この専門研究では、メディアと社会との相互作用的な関係を理解するために、メディア史、社会史、サブカルチャー史を総合的に分析した代表的な研究を紹介する。とりわけメディアがライフスタイルに及ぼした影響、ライフスタイル変化がメディアの変容を進めた経緯を理解し、近年のスマホに代表される情報環境の形成に至る過程とメカニズムを理解し、この分野が包括する研究領域と応用可能性を受講者が習得することを目指す。

授業内容

メディア社会史I・II全体を次の4パートに分け、各パートごとに6回の講義で構成する。春学期のメディア社会史IはPart.1とPart.2の内容を講義する。

- Part.1 印刷物とコミュニケーション
- Part.2 通信が媒介した社会
- Part.3 メディアとビジネス【メディア社会史IIの範囲】
- Part.4 メディアとコミュニティ【メディア社会史IIの範囲】

なお、受講者の関心領域によっては構成・順番・内容を変更する場合があります。

- 第1回 文献の紹介と全体の概要、基礎知識の解説[メディア授業(オンデマンド型)]
- 第2回 1.1 印刷物と知のネットワーク
- 第3回 1.2 近代国家における読者圏
- 第4回 1.3 新聞と近代ジャーナリズム
- 第5回 1.4 大衆娯楽雑誌の成立
- 第6回 1.5 雑誌が形成した読者共同体
- 第7回 1.6 雑誌とサブカルチャ
- 第8回 2.1 空間を超えた無線電波
- 第9回 2.2 放送とジャーナリズム
- 第10回 2.3 社会運動と自由ラジオ放送
- 第11回 2.4 放送と大衆娯楽
- 第12回 2.5 電話によるコミュニティ
- 第13回 2.6 深夜の解放区
- 第14回 最近のメディア史研究の成果の紹介[メディア授業(オンデマンド型)]

履修上の注意

講義を通じてさまざまな文献および論文を紹介する。講読を特に強制はしないが、各人の自発的な努力を期待する。この授業は教室における講義形式で実施するが、第1回および第14回の2回分のみはメディア授業(オンデマンド型)で実施する。映像は Oh-ol Meiji 経由で提供する。なお、感染の流行や気象その他オンラインで実施した方が適切と判断できる場合は、例外的にメディア授業(リアルタイム型)で実施する場合があります。その際はZoomを使用する。アクセスのためのURLはOh-ol Meijiで連絡する。

準備学習(予習・復習等)の内容

参考文献の指定箇所をあらかじめ一読しておくこと。授業で使用するスライドのダイジェスト版を事前に Oh-ol Meiji で公開するので、受講前にかかわらず確認しておくこと。また、関連資料も随時 Oh-ol Meiji で提供する。

教科書

使用しない。

参考書

- 吉見俊哉『声の資本主義』(河出書房新社、2012)
 - 水越伸『メディアの生成』(同文館出版、1993)
 - NHK『放送の五十年』(日本放送出版協会、1977)
 - 谷口文和ほか『音響のメディア史』(ナカニシヤ出版、2015)
 - 倉田喜弘『日本レコード文化史』(岩波書店、2006)
 - 飯田豊『テレビが見世物だったころ』(青弓社、2016)
 - 飯田豊ほか『現代メディア・イベント論』(勁草書房、2017)
- これら以外の参考文献は Oh-ol Meiji で随時紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

Oh-ol Meijiのレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオを活用して実施する。

成績評価の方法

各パートごとのレポートで評価する。それぞれのパートの配点は25点である。また、レポートは小論文課題と講義内容の要約の2テーマで構成し、前者の配点は15、後者は10とする。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL551J			
メディア・文化系		備考	
科目名	専門研究(メディア社会史) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 江下 雅之		

授業の概要・到達目標

この専門研究では、メディアと社会との相互作用的な関係を理解するために、メディア史、社会史、サブカルチャー史を総合的に分析した代表的な研究を紹介する。とりわけメディアがライフスタイルに及ぼした影響、ライフスタイル変化がメディアの変容を進めた経緯を理解し、近年のスマホに代表される情報環境の形成に至る過程とメカニズムを理解し、この分野が包括する研究領域と応用可能性を受講者が習得することを目指す。秋学期においては、雑誌、モバイル、インターネット等を中心に扱う。

授業内容

メディア社会史I・II全体を次の4パートに分け、各パートごとに6回の講義で構成する。秋学期のメディア社会史IIはPart.3とPart.4の内容を講義する。

- Part.1 印刷物とコミュニケーション【メディア社会史Iの範囲】
- Part.2 通信が媒介した社会【メディア社会史Iの範囲】
- Part.3 メディアとビジネス
- Part.4 メディアとコミュニティ

なお、受講者の関心領域によっては構成・順番・内容を変更する場合があります。

- 第1回 文献の紹介と概要の説明[メディア授業(オンデマンド型)]
- 第2回 3.1 映像ビジネスのコングロマリット化
- 第3回 3.2 映画の物語表現
- 第4回 3.3 複製された音楽
- 第5回 3.4 写真の社会的意味
- 第6回 3.5 ファッションとメディア
- 第7回 3.6 拡大するゲーム市場
- 第8回 4.1 電話の拡張サービスとポケベル
- 第9回 4.2 パソコン通信の誕生
- 第10回 4.3 インターネットとハッカー
- 第11回 4.4 ウェブ日記によるブーム
- 第12回 4.5 SNSの登場と発展
- 第13回 4.6 スマホ以前と以後
- 第14回 この分野における最新の研究動向と成果[メディア授業(オンデマンド型)]

履修上の注意

専門研究(メディア社会史)IIの履修が求められる。この授業は教室における講義形式で実施するが、第1回および第14回の2回分のみはメディア授業(オンデマンド型)で実施する。映像は Oh-ol Meiji 経由で提供する。なお、感染の流行や気象その他オンラインで実施した方が適切と判断できる場合は、例外的にメディア授業(リアルタイム型)で実施する場合があります。その際はZoomを使用する。アクセスのためのURLはOh-ol Meijiで連絡する。

準備学習(予習・復習等)の内容

参考文献の指定箇所をあらかじめ一読しておくこと。授業で使用するスライドのダイジェスト版を事前に Oh-ol Meiji で公開するので、受講前にかかわらず確認しておくこと。また、関連資料も随時 Oh-ol Meiji で提供する。

教科書

使用しない。

参考書

- 難波功士『族の系譜学』(青弓社、2007)
 - 長谷川晶一『ギャルと「僕ら」の20年史』(亜紀書房、2015)
 - 五十嵐太郎『ヤンキー文化論序説』(河出書房新社、2009)
 - 今田絵里香『「少女」の社会史』(勁草書房、2007)
 - 木村涼子『主婦の誕生』(吉川弘文館、2010)
 - 岡田朋之・松田美佐『ケータイ社会論』(有斐閣、2012)
 - 飯田豊ほか『メディア技術史』(北樹出版、改訂版2017)
 - 高野光平ほか『現代文化への社会学』(北樹出版、2018)
- これら以外の参考文献は Oh-ol Meiji で随時紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

Oh-ol Meijiのレポートにおけるコメント機能またはポートフォリオを活用して実施する。

成績評価の方法

各パートごとのレポートで評価する。それぞれのパートの配点は25点である。また、レポートは小論文課題と講義内容の要約の2テーマで構成し、前者の配点は15、後者は10とする。

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(比較文学・比較文化) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭		

授業の概要・到達目標

「オリエンタリズム」
 グローバル化が進んだ今日においても、様々な民族と言語の間で軋轢が絶えないのはなぜだろうか。その原因を歴史的に遡って考察していくと「オリエンタリズム」に行き当たる。オリエンタリズムとは要約すれば「オリエント(東洋)を支配し再構成し威圧するための西洋の様式」(サイード)となるが、こうした定義には取まりきれない様々な側面があり、多くの問題をはらんでいる。この授業では、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』を精読しながら、その歴史的背景を様々な角度から考察し、その知見を自分の研究に生かすことを目標とする。担当者は必ずしもこの分野のスペシャリストではなかったが、現在、深い関心と情熱をもってこのテーマと取り組んでおり、受講者諸君と切磋琢磨しながら自らも学んでいきたいと考えている。講読と並行して、担当者が取り組んでいるドイツ語圏のポストコロニアル文学の研究成果もその都度披露し、履修者とともに旧植民地問題などについて討論したい。

授業内容

エドワード・サイード『オリエンタリズム』(上・下)2巻を細部に至るまで丁寧に読みながら、オリエンタリズムに関する理解を深める。毎回発表者を決めて要約をしてもらい、それについて全員で意見や感想を述べあう。本書の精読と並行して、オリエンタリズムに関する作品(ゲーテ『西東詩集』、コンラッド『闇の奥』、キプリング『キム』)の一部や論文を読んでもらうこともある。また『ラストエンペラー』、『インドへの道』などのオリエンタリズムのテーマにかかわる映画の一部を鑑賞する時間も設けたい。さらに担当者はクラシック音楽をこよなく愛し、また研究とも結びつけている者である。音楽にも造詣が深いサイードの音楽論を紹介したり、彼が聞いていた音楽を紹介することもあると思う。サイードは比較文学者を本業としながら、音楽や政治、イスラム問題にも精通している典型的な世界的知識人である。この魅力ある知識人の全体像に受講者とともに迫っていききたいと思う。

第1回 序説——オリエンタリズムとは何か？
 第2回 第1章 オリエンタリズムの領域
 1-1 東洋人を知る
 第3回 1-2 心象地理とその諸表象
 第4回 1-3 プロジェクト
 第5回 1-4 危機
 第6回 第2章 オリエンタリズムの構成と再構成
 2-1 再設定された境界線・再定義された問題・世俗化された宗教
 第7回 2-2 シルヴェストル・ド・サシとエルネスト・ルナン
 2-3 オリエント在住とオリエントに関する学識
 第8回 2-4 巡礼者と巡礼行
 第9回 第3章 今日のオリエンタリズム
 3-1 潜在的オリエンタリズムと顕在的オリエンタリズム
 第10回 3-2 様式、専門的知識、ヴィジョン—オリエンタリズムの世俗性
 第11回 3-3 現代英仏オリエンタリズムの最盛期
 第12回 3-4 最新の局面
 第13回 オリエンタリズム再考
 第14回 まとめ

履修上の注意

特に文学を専門としない学生でも、異文化研究に関心がある学生、特に留学生の参加を歓迎する。読むテキストは日本語を原則とするが、部分的に英語のテキストを読むこともある。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回かなりの文献を読むことになるので、予習を欠かさないこと。

教科書

エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』(上・下)2巻 平凡社ライブラリー。受講者はこの版でテキストを用意しておくこと。

参考書

エドワード・E・サイード『文化と帝国主義 1・2』(大橋洋一訳)、『イスラム報道』(浅井信雄・佐藤成文・岡真理訳)、『音楽のエラボレーション』(大橋洋一訳)、『サイード音楽評論 1・2』(二本麻里訳)、バレンボイム/サイード『音楽と社会』(中野真紀子訳) 以上みすず書房、『サイード自身が語るサイード』(大橋洋一訳) 紀伊国屋書店他、サイードのすべての著作。

成績評価の方法

平常点+授業への貢献度50%、学期末レポート50%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(比較文学・比較文化) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学) 関口 裕昭		

授業の概要・到達目標

「世界文学と翻訳」
 現在、世界は急速なグローバル化の中にあり、情報だけでなく、文化や言語の中にも多くの異質なものが混じり合い、ぶつかり合い、刺激のかつ新しい現象を生み出しつつある。文学においても、「アメリカ文学」「フランス文学」「ドイツ文学」「日本文学」といった、単一の言語や文化の枠内に収まりきれない、様々な言語や文化を横断し、攪拌し、自由に往復する文学が新しい潮流となりつつある。一見ひとつの言語で書かれているように見えても、その奥底には様々な言語がざわめいているのだ。そして必然的に、創作と翻訳の距離は縮まり、両者が混然一体となった作品が現れるようになる。こうした文学を「世界文学」としてとらえなおし、翻訳の問題とも絡めて考察するのがこの授業のテーマである。理論的な著作を精読することと並行して、多和田葉子らの小説を読みながらその理解と考察を深めていきたい。文学や人文科学研究を志す院生だけでなく、その周辺の諸領域を学ぶ人の参加も歓迎する。

授業内容

この授業は前半の理論的な著作の精読と、後半の小説や詩の具体的な分析の二つの部分から構成される。現時点で考えている理論的なテキストは以下のとおりであり、後半は差し多和田葉子の創設を読むことにするが、履修者の希望に応じてテキストの変更もありうる。また毎回、日本語(もしくは履修者の母語)で書かれた短い詩とその英訳の比較も取り入れる。

第1回 イントロダクション(文献紹介と今日の世界文学の情勢を俯瞰する)
 第2回 ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』①+多和田葉子の短編①
 第3回 ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』②+多和田葉子の短編②
 第4回 ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』③+多和田葉子の短編③
 第5回 ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』④+多和田葉子の短編④
 第6回 エミリー・アダプター『翻訳地帯』①+多和田葉子の短編⑤
 第7回 エミリー・アダプター『翻訳地帯』②+多和田葉子の短編⑥
 第8回 エミリー・アダプター『翻訳地帯』③+中島敦の短編①
 第9回 エミリー・アダプター『翻訳地帯』④+中島敦の短編②
 第10回 アントワニス・ベルマン『他者という試練』①+中島敦の短編③
 第11回 アントワニス・ベルマン『他者という試練』②+中島敦の短編④
 第12回 アントワニス・ベルマン『他者という試練』③+詩の翻訳①
 第13回 アントワニス・ベルマン『他者という試練』④+詩の翻訳②
 第14回 まとめと討論

履修上の注意

文学を専門としない学生であっても異文化や翻訳の問題に関心を持つ学生、特に留学の参加を歓迎する。原則として日本語のテキストを用いるが、必要に応じて最小限の英語のテキストを使用することもある。履修者との話し合いの上、講読するテキストを変更することもありうる。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回かなりの文献を読むことになるので、予習を欠かさないこと。

教科書

現時点では、「授業内容」に記したテキストを用いるが、前もって購入する必要はない。必要な個所はコピーする。また講読するテキストの部分的な変更もありうる。

参考書

授業でその都度お知らせするが、次のようなものがある。
 ジェレミー・マンデイ(鳥飼玖美子監訳)『翻訳学入門』(みすず書房、2008年)
 エミリー・アダプター(秋草俊一郎ほか訳)『翻訳地帯』(慶應義塾大学出版会、2018年)
 アントワニス・ベルマン(藤田省一訳)『他者という試練 ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(みすず書房、2008年)
 秋草俊一郎『「世界文学」はつくられる 1827-2020』(東京大学出版会、2020年)

成績評価の方法

平常点+授業への貢献度50%、学期末レポート50%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(表象文化論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

さまざまな表象文化のなかでも、舞踊は、自らの「身体」を表現の媒体とする原初的な芸術である。この授業では、「舞踊および身体表現」に関する論文の講読を通して、舞踊学研究の実際を学ぶとともに、音楽学・芸能学・人類学・芸術学などの近接諸領域における「身体」を扱った研究の動向も視野に入れ表現行動の研究手法を検討する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(授業の目的・内容・評価方法)
- 第2回：舞踊学の体系、担当する論文の決定
- 第3回：舞踊美学・舞踊芸術学(芸術学的アプローチ)①
- 第4回：舞踊美学・舞踊芸術学(芸術学的アプローチ)②
- 第5回：舞踊美学・舞踊芸術学(芸術学的アプローチ)③
- 第6回：民族舞踊学・舞踊人類学(人類学的アプローチ)①
- 第7回：民族舞踊学・舞踊人類学(人類学的アプローチ)②
- 第8回：民族舞踊学・舞踊人類学(人類学的アプローチ)③
- 第9回：舞踊史(歴史学的アプローチ)①
- 第10回：舞踊史(歴史学的アプローチ)②
- 第11回：舞踊史(歴史学的アプローチ)③
- 第12回：近接諸領域における「身体」をテーマとする研究①
- 第13回：近接諸領域における「身体」をテーマとする研究②
- 第14回：近接諸領域における「身体」をテーマとする研究③

履修上の注意

担当する論文で扱われた「舞踊および身体表現」の映像をあらかじめ観察・吟味し、著者が提示した分析方法と結果を具体的に説明できるよう準備すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および各自の研究テーマに即し、課題を提示する。

教科書

初回授業時に文献リストを提示し、受講生の関心に即して担当する論文を決定する。なお、文献リストは、国内外の舞踊学・音楽学・芸能学関連学会の学術機関誌および図書より選定する。

参考書

初回の授業時に参考文献リストを配布する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

発表:50%、レポート(小論文):50%

その他

各自の研究テーマを「身体」という視点から捉えなおす契機にしてください。

科目ナンバー：(IC) CUL511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(表象文化論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

授業の概要

舞踊の研究に際し必須となる理論や方法について舞踊人類学的視点から学ぶ。具体的には、①身体技法および舞踊技法の基礎的理論、②様々な舞踊記譜法の特徴、③オーラル・ヒストリー研究の手法、④伝承の場で収集した「わざ言語」データの分析・分類の4点を扱う。

到達目標

舞踊人類学研究の国際的動向を踏まえ、技法研究の基礎的な理論と方法を習得する。

授業内容

- 舞踊学における舞踊人類学
- 第1回 ガイダンス(授業計画、各自の研究テーマ紹介)
- 第2回 舞踊人類学研究の展開
- 第3回 身体技法と舞踊技法
- 第4回 技法研究の事例
- 比較舞踊学
- 第5回 作品分析の方法
- 第6回 舞踊技法の国際比較
- 第7回 国際比較研究から共創へ
- 記録法
- 第8回 舞踊技法の記録
- 第9回 舞踊譜
- 第10回 動きの記録とテクノロジー
- 伝承
- 第11回 伝承組織
- 第12回 舞踊家オーラル・ヒストリー研究の動向と手法
- 第13回 「わざ言語」
- 第14回 まとめ

履修上の注意

シラバス記載の内容は、受講生の人数、関心や理解度に応じて変更する可能性がある。初回のガイダンス時に、各自の研究テーマを聴取した後、授業計画の詳細を決定するので必ず出席すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の内容および各自の研究テーマに即し、課題を提示する。

教科書

特定の教科書は使用しない。適宜、参考図書や論文を紹介する。また受講生各自が研究テーマに応じて文献を検索・収集する。

参考書

初回の授業時に提示する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、課題に対して丁寧にコメントし、次の課題を提示する。

成績評価の方法

発表:50%、レポート(小論文):50%

その他

表象文化論 I (春学期) もあわせて履修することが望ましい。

科目ナンバー：(IC) GDR511J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(ジェンダー論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会学)	田中 洋美	

授業の概要・到達目標

社会を特徴づけるジェンダー関係の社会構造についての理解を目指す。春学期は、ジェンダー論の基礎を学ぶ。まず履修者全員で自らのジェンダー知を確認する。学術的知識だけでなく、これまでの人生でどのようなジェンダー観を持つに至ったのかを振り返ってもらう。その上でジェンダー論の導入として身体に関わる社会現象について考える。一見「自然」で「所与」のものにみえる身体が社会・文化的構築物であり、その多くがジェンダー化されていることについて理解を深めていく。数々の事例研究を通して、ジェンダーがいかに社会構造に埋め込まれているのかを把握した上で、後半は、ジェンダー研究およびジェンダー概念の系譜について、その成立の背景も含めて学ぶ。最後の数回では、現在のジェンダー研究において重要な視座となっているグローバリゼーション論、インターセクショナルリティ論、クィア論を概観する。

授業内容

- 第1回 インTRODakション
 - 〈第I部 ジェンダーとは何か?〉
 - 第2回 ジェンダー知を振り返る
 - 第3回 身体とジェンダー
 - 第4回 セクシュアリティ
 - 第5回 美しさ
 - 第6回 商品化
 - 〈第II部 様々なジェンダー理論〉
 - 第7回 自然/文化としてのセックス/ジェンダー
 - 第8回 性役割論と社会化
 - 第9回 ジェンダー秩序と覇権的マスキュリニティ①
 - 第10回 ジェンダー秩序と覇権的マスキュリニティ②
 - 〈第III部 ジェンダー理論の現在〉
 - 第11回 インターセクショナルリティ
 - 第12回 クィア理論
 - 第13回 社会構築主義、ポスト構造主義、そして? : 近年の新たな展開
 - 第14回 まとめの議論
- * 講義内容は履修者数等により、変更することがある。

履修上の注意

本授業は文献講読に基づいている。従って授業前に十分な準備が必要である。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習: 疑問点や議論すべき点などを予め考えておく。予習をしっかりした上で授業に参加すること。
 復習: 毎回の授業内容を振り返り、メモしておく。メモは、学期末の発表の準備やレポートの執筆の際に役立つはずである。

教科書

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge (= 1993『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)
 Connell, R. W., 1987, *Gender and Power. The Society, the Person and the Sexual Politics*. Cambridge: Polity (= 1993『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会学』森重雄(ほか)訳、三交社)
 Connell, R. W., 2006, *Masculinities*. Cambridge: Polity, Second Edition.
 DeMello, Margo, 2014, *Body Studies: An Introduction*. London: Routledge (= 2017『ボディ・スタディーズ』見洋書房)
 井上俊他編、1995、『ジェンダーの社会学』岩波書店
 * その他、授業で指示する。

参考書

Connell, R., and Pearce, R., 2014, *Gender: In World Perspective*, 3rd Edition, Cambridge: Polity (初版邦訳: R・コンネル2008『ジェンダー学の最前線』社会思想社)
 Pilcher, J., and Whelahan, I., 2004, *50 Key Concepts in Gender Studies*. London: Sage (= 2009『ジェンダー・スタディーズ: キーコンセプト』新曜社)
 * その他、授業で紹介する。

成績評価の方法

授業態度、授業で議論への貢献(50%)および発表準備、レポート等課題への取り組み(50%)に基づいて評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) GDR511J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(ジェンダー論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(社会学)	田中 洋美	

授業の概要・到達目標

春学期は、ジェンダー研究の基礎となる知識を獲得するための文献講読を行う。秋学期では、その知識をもとにメディアや文化についてジェンダーの視点から考える。特にポピュラーカルチャーといった現代文化を論じる視座の獲得を目指す。初回に文献リストを持っていく。受講生のみなさんと相談しながら扱う文献を決めたい。なお本授業では、小規模のプロジェクトとしてジェンダーとメディアの研究を行ってもらう。その成果は授業で発表してもらう予定である。

授業内容

- 第1回 授業の全体像の説明
 - 第2回 「ジェンダー」と「メディア」: 二つの概念の検討
 - 第3回 ジェンダーとメディア研究(1): 学説史の概観
 - 第4回 ジェンダーとメディア研究(2): 主要概念とアプローチ
 - 第5回 メディアテキストとジェンダー (1)
 - 第6回 メディアテキストとジェンダー (2)
 - 第7回 メディアオーディエンスとジェンダー (1)
 - 第8回 メディアオーディエンスとジェンダー (2)
 - 第9回 メディア制作とジェンダー (1)
 - 第10回 メディア制作とジェンダー (2)
 - 第11回 メディアリテラシーとジェンダー
 - 第12回 成果発表(1)
 - 第13回 成果発表(2)
 - 第14回 まとめ
- * 講義内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

この授業では文献の輪読とそれに基づく議論を中心とする。従って授業前に十分な準備が必要である。予習をしっかりした上で授業に参加すること。また英語文献を扱うことがある。従って、ある程度英語で文献を読むことができ、またその意欲のある学生に履修してほしい。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習: 事前に課題についての自分の意見や疑問点を整理し、授業中には積極的に意見を述べるできるよう準備しておく。
 復習: 授業内容を振り返り、整理しておく。忘れないよう文章にしておくことよい。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

- ・授業態度、授業で議論への貢献(50%)
- ・発表、レポート等課題への取り組み(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(超域文化論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

伝統的なメディアだけではなく、発信者と受信者の境目を曖昧にしたデジタルメディアが発達した現代社会のメディア環境で、記号的表象としての文化産物は、今まで以上にトランスナショナルに重層的に展開し、形成、伝達、再編され続けている。本科目においては、トランスナショナルコミュニケーション空間で形成、伝達、再編され続ける表象文化としてのファッションとそれに付随するジェンダー表象を事例に、それぞれ「超域」「デジタル」をキーワードとするファッションに関する論考の批判的講読を通して、受講者が関心をもつ現代のポピュラー・カルチャーにみられる問題及びそれを分析する力をつけることを目的とする。

授業内容

- 第一回 a超域文化としてのファッション表象とジェンダー像についての概論
b授業の全体像の説明
Susan B. Kaiser, and Denise N. Green, Fashion and Cultural Studies (Bloomsbury2021)
- 第二回 Intersectional, Transnational Fashion Subjects
- 第三回 Fashioning the National Subject
- 第四回 Ethnicities and Racial Rearticulations
- 第五回 Religion, Fashion and Spirituality
- 第六回 Class Matters
- 第七回 Gendering Fashion, Fashioning Gender: Beyond Binary
- 第八回 Sexuality and Style-Fashion Dress
- 第九回 Dressed Embodiment
- 第十回 Bodies in Motion through Time and Space
- 第十一回 英語圏ファッションジャーナルの最新論文①
- 第十二回 英語圏ファッションジャーナルの最新論文②
- 第十三回 英語圏ファッションジャーナルの最新論文③
- 第十四回 越境するファッションについての発表

履修上の注意

状況により、内容を変更することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

超域文化としてのファッション表象を考える上での英語を中心とした文献をテキストに使うため、毎回講義前にその箇所をしっかりと予習、準備しておくこと、また復習として、講義を通じて学んだ内容を元に、超域文化論的観点からいかに自分の関心テーマを分析できるかを考えること。

教科書

Susan B. Kaiser, Denise N. Green, Fashion and Cultural Studies(2021) Bloomsbury
Critical Studies in Fashion and Beauty, Fashion Theory など最新のファッションジャーナルに掲載されたファッション、ジェンダー、メディアに関する論文

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業での課題に対する発表に対し、コメント、討論を行う。

成績評価の方法

平常点(50%)、テスト(レポート)(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(超域文化論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

伝統的なメディアだけではなく、発信者と受信者の境目を曖昧にしたデジタルメディアなどが発達した現代社会のメディア環境で、記号的表象としての文化産物は、今まで以上に様々な枠組みを越境し重層的に展開し、形成、伝達、再編され続けている。本科目において、トランスナショナルコミュニケーション空間で形成、伝達、再編され続ける表象文化としてのファッションとそれに付随するジェンダー表象を事例に、その表象を構築、伝達する言説をいかに分析するかを、問題の所在、方法論、課題について、伝統的なものから最新の研究まで先行研究を批判的かつ発展的に検討しながら、その応用方法を事例研究とともに考察し、受講者が自らの課題としてのファッションをめぐる言説分析、及びファッション記号論の可能性を検討する。本講義の到達目標としては、各受講者が自らの研究の間にアプローチするための言説分析、記号論分析の方法論を習得し、それらを発展的に考え、分析を実践する力を養うことをめざす。

授業内容

- 第一回 授業の説明 ファッションメディア、及びファッションディスコースアナリシスに関するイントロダクション
- 第二回 カルチュラルスタディーズの言説分析方法論の検証
- 第三回 ミシェル・フーコー、社会構築主義の立場からみる歴史的言説分析方法論の応用
- 第四回 ロラン・バルト『モードの体系』にみる記号学的ことばの分析方法論の検証 記号学的分析を乗り越える言説分析という手法
- 第五回 言説によるファッション内容の構築と伝達
- 第六回 ファッション言説と規範的ジェンダー像の関係
- 第七回 異文化間ステレオタイプとファッション
- 第八回 ファッションの専門用語の使われ方
- 第九回 ファッションの消費者の言説
- 第十回 芸術(アート、小説、映画)作品におけるファッションの言説
- 第十一回 デジタルメディア時代のファッションをめぐる言説
- 第十二回 デジタルメディア時代の越境する非西洋のファッションを構築・伝達する言説
- 第十三回 ファッション言説における伝達、説得方法の通史的考察
- 第十四回 まとめ、受講者のファッションに関する言説分析の発表

履修上の注意

内容が変更することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として授業で使う指定した文献(英語が中心)を批判的講読はしっかり行い、疑問点など準備をしておくこと。また、復習として取り上げた理論を批判的に発展させ、超域文化としてのファッション(ここではファッションとは衣服のメディアによる表象とする)の言説分析、記号論分析にとりくむ。

教科書

Critical Studies in Fashion and Beauty, Fashion Theory など最新のファッションジャーナルに掲載されたファッション、ジェンダー、メディアに関する論文

参考書

高木陽子・高馬京子『越境するファッションスタディーズ』ナカニシヤ出版 2021
石丸久美子・高馬京子共訳 ドミニクマンゲノー『コミュニケーションテキスト分析ーフランス学派的言説分析への招待』ひつじ書房 2018

課題に対するフィードバックの方法

授業中の課題についての発表に対し、コメント、また討論を行う。

成績評価の方法

平常点50%、テスト(レポート) 50%

その他

科目ナンバー：(IC) ARS511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(宗教と政治) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

昨今、世界各地において政治と宗教の関係(政教関係)をめぐる諸問題が大きな注目を集めている。中東におけるイスラーム過激派、欧州での移民増加に伴う宗教問題、インドにおけるヒンドゥー・ムスリム間対立など、枚挙にいとまがない。本講義では、政治学を出発点に宗教が関与する政治的事象について各国の諸事例を考察し、政治と宗教をめぐる問題について議論したい。春学期では、宗教と政治の関係に関する基本的文献の読み込みを行うことで、理論的枠組みの習得を目指す。授業に際しては、指定された教科書を読み進め、各受講生に発表を課す。また、関連する事例研究を適宜追加することで、現状分析の視点も涵養したい。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 政治と宗教の関係を考えるための基礎
- 第3回 比較政治学の理論(1)
- 第4回 比較政治学の理論(2)
- 第5回 比較政治学の理論(3)
- 第6回 比較政治学の理論(4)
- 第7回 宗教を分析するための基礎
- 第8回 宗教学の基礎(1)
- 第9回 宗教学の基礎(2)
- 第10回 宗教学の基礎(3)
- 第11回 宗教学の基礎(4)
- 第12回 政教問題の事例:課題文献発表(1)
- 第13回 政教問題の事例:課題文献発表(2)
- 第14回 授業総括と討論

履修上の注意

秋学期の「専門研究(宗教と政治)II」を受講することが望ましい。また、受講生には文献の読み込みに基づく発表を課す。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書の該当箇所を事前に周知するので予習をしてください。発表予定者は、指定時間での発表準備を行うこと。

教科書

末近浩太『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』岩波書店、2018年。
 高岡豊・溝渕正季編著『アラブの春』以後のイスラーム主義運動』ミネルヴァ書房、2019年。
 松本左保『バチカンと国際政治—宗教と国際機構の交錯』千倉書房、2019年。
 これらの他にも、適宜指示する。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

課題を課した次の回の授業において、口頭にて講評を伝える。最終回については、Oh-ol Meijiを利用してフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への貢献度50%、レポート50%

その他

受講生の研究関心に応じて、授業内容や教科書を変更する場合があります。

科目ナンバー：(IC) ARS511J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(宗教と政治) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(地域研究) 横田 貴之		

授業の概要・到達目標

昨今、世界各地において政治と宗教の関係(政教関係)をめぐる諸問題が大きな注目を集めている。中東におけるイスラーム過激派、欧州での移民増加に伴う宗教問題、インドにおけるヒンドゥー・ムスリム間対立など、枚挙にいとまがない。本講義では、政治学を出発点に宗教が関与する政治的事象について各国の諸事例を考察し、政治と宗教をめぐる問題について自ら分析できる能力の習得を目指す。

秋学期では、春学期で学んだ基礎知識を土台に、宗教と政治の関係に関する事例研究を読み込むことで、先行研究から具体的な実証分析の方法を学ぶ。授業に際しては、指定された教科書を読み進め、各受講生に発表を課す。また、関連する事例研究を適宜追加することで、現状分析の視点も涵養したい。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 政治と宗教に関する文献リストの発表
- 第3回 事例分析:中東(1)
- 第4回 事例分析:中東(2)
- 第5回 事例分析:欧州(1)
- 第6回 事例分析:欧州(2)
- 第7回 事例分析:東南アジア(1)
- 第8回 事例分析:東南アジア(2)
- 第9回 事例分析:南アジア(1)
- 第10回 事例分析:南アジア(2)
- 第11回 受講生の成果発表(1)
- 第12回 受講生の成果発表(2)
- 第13回 受講生の成果発表(3)
- 第14回 授業総括と討論

履修上の注意

春学期の「専門研究(宗教と政治)I」を受講することが望ましい。また、受講生には文献の読み込みに基づく発表を課す。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書の該当箇所を事前に周知するので予習をしてください。発表予定者は、指定時間での発表準備を行うこと。

教科書

末近浩太『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』岩波書店、2018年。
 高岡豊・溝渕正季編著『アラブの春』以後のイスラーム主義運動』ミネルヴァ書房、2019年。
 松本左保『バチカンと国際政治—宗教と国際機構の交錯』千倉書房、2019年。
 これらの他にも、授業内で受講生の関心に応じて適宜指示する。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

課題を課した次の回の授業において、口頭にて講評を伝える。最終回については、Oh-ol Meijiを利用してフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への貢献度50%、レポート50%

その他

受講生の研究関心に応じて、授業内容や教科書を変更する場合があります。

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(都市・空間論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授	南後 由和	

授業の概要・到達目標

近年、日本の都市には、ひとりカラオケ店、ひとり焼肉店などの(ひとり空間)が増殖している。その背景には、個人化、晩婚・非婚化などの進展に加え、スマートフォンやソーシャルメディアの普及が挙げられる。現代都市の(ひとり空間)は、物理空間とソーシャルメディアをはじめとする情報空間が交差するところに立ち現れている。また、コロナ禍によって(ひとり空間)のあり方はさらなる変化を遂げた。

本授業の前半では、文献輪読を通じて、(ひとり空間)を取りまくコミュニケーション、孤独、ジェンダー、パブリックとプライベートの境界などについての理解を深める。後半では、日本以外の事例を含む具体的な(ひとり空間)についての事例分析を通じて、日本と海外の都市の(ひとり空間)の共通点や差異について考察する。

授業内容

- 第1回 インTRODクダクシヨク
 - 第2回 講義:日本の都市の(ひとり空間)
 - 第3回 文献輪読(1)
 - 第4回 文献輪読(2)
 - 第5回 文献輪読(3)
 - 第6回 文献輪読(4)
 - 第7回 文献輪読(5)
 - 第8回 中間総括 文献輪読の振り返りと事例分析の選定
 - 第9回 事例分析(1)
 - 第10回 事例分析(2)
 - 第11回 事例分析(3)
 - 第12回 事例分析(4)
 - 第13回 事例分析(5)
 - 第14回 総括
- * 授業内容・配分は、履修者の問題関心や人数に応じて変更することがある。

履修上の注意

文献輪読と事例分析ともに、履修者による発表とディスカッションへの積極的な参加が求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

担当ではない文献輪読の文献も事前に精読しておくこと。具体的な(ひとり空間)の事例についての情報収集を行なっておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

- エリック・クライネンバーク『シングルトン』白川貴子訳(鳥影社) 2014年
- イライ・パリサー『フィルターバブル——インターネットが隠していること』井口耕二訳(早川書房) 2016年
- 南後由和『ひとり空間の都市論』(筑摩書房) 2018年
- ノリーナ・ハーツ『The Lonely Century——なぜ私たちは「孤独」なのか』藤原朝子訳(ダイヤモンド社) 2021年
- ウルリッヒ・ベック、エリーザベト・ベック＝ゲルンスハイム『個人化の社会学』中村好孝ほか訳(ミネルヴァ書房) 2022年
- レスリー・カーン『フェミニスト・シティ』東辻賢次郎訳(晶文社) 2022年
- フェイ・バウンド・アルバーティ『私たちはいつから「孤独」になったのか』神崎朗子訳(みすず書房) 2023年

課題に対するフィードバックの方法

授業中にコメントする。

成績評価の方法

授業への参加・貢献度40%、文献輪読の発表30%、事例分析の発表30%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC531J			
メディア・文化系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(都市・空間論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授	南後 由和	

授業の概要・到達目標

インターネットのウェブサイト、PCのデスクトップやウィンドウ、Zoomの待機室やブレイクアウトルームなど、私たちはさまざまなデジタルメディアを、空間や建築のアナロジーによって認識してきた。またメディア環境の変化によって、空間のあり方や経験のされ方が変化するように、空間とメディアは不可分な関係にある。

建築学、都市計画学、物理学などの分野と比べて、多くの人文科学や社会科学の分野では、空間は透明で自明のものとして扱われがちである。空間とは何であるか、空間が私たちの振舞いやコミュニケーションにどのような作用をもたらしているかについては十分に掘り下げて論じられてきたとは言い難い。そうはいうものの、1980年代後半以降の「空間論的転回」と呼ばれる動向以降、社会学や地理学などの分野では「空間」に関する研究が少なからず蓄積されてきている。

そこで本授業の前半では、文献輪読を通じて、社会学や地理学などの分野において「空間」がどのように論じられてきたのかに加え、メディア研究における「空間」からのアプローチについての理解を深める。後半では、同じく文献輪読を通じて、空間とメディアを横断する具体的なトピックについて考察する。

授業内容

- 第1回 インTRODクダクシヨク
 - 第2回 文献輪読(1):空間論(1)
 - 第3回 文献輪読(2):空間論(2)
 - 第4回 文献輪読(3):空間論(3)
 - 第5回 文献輪読(4):メディア論(1)
 - 第6回 文献輪読(5):メディア論(2)
 - 第7回 文献輪読(6):メディア論(3)
 - 第8回 中間総括
 - 第9回 文献輪読(7):ソーシャルメディア
 - 第10回 文献輪読(8):ビッグデータ
 - 第11回 文献輪読(9):メタバース
 - 第12回 文献輪読(10):デジタル地区
 - 第13回 文献輪読(11):スケール
 - 第14回 総括
- * 授業内容・配分は、履修者の問題関心や人数に応じて変更することがある。

履修上の注意

文献輪読では、履修者によるレジュメの作成および発表、ディスカッションへの積極的な参加が求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

担当ではない文献輪読の文献も事前に精読しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

- 納富信留・溝口孝司編『空間へのパースペクティブ』(九州大学出版会) 1999年
- 門林岳史・増田展大編『[クリティカル・ワード]メディア論——理論と歴史から(いま)が学べる』(フィルムアート社) 2021年

課題に対するフィードバックの方法

授業中にコメントする。

成績評価の方法

授業への参加・貢献度50%、文献輪読の発表50%

その他

科目ナンバー：(IC) ART531J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(演劇学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

クリストファー・バルミ『演劇の公共圏』(藤岡阿由未訳、春風社、2022年)の内容に添いつつ、主に近世～現代の日本における演劇と公共圏の関係について実例を挙げ、比較検討していく。

さまざまな時代・地域の公共圏において、メディアとしての演劇がいかなる役割を果たしてきたかを考えるとともに、他の芸術諸ジャンルに関しても同様の考察をおこなうことができる能力を身につける。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 序論～西洋と日本における「公共圏」について
- 第3回 第一章「演劇の公共圏を位置づける」(1)～教科書における議論の確認
- 第4回 第一章「演劇の公共圏を位置づける」(2)～日本演劇との比較・検討
- 第5回 第二章「互恵的な発信—プレイビルからブログまで」(1)～教科書における議論の確認
- 第6回 第二章「互恵的な発信—プレイビルからブログまで」(2)～日本演劇との比較・検討
- 第7回 第三章「開放と閉鎖—ピューリタンと晒し台」(1)～教科書における議論の確認
- 第8回 第三章「開放と閉鎖—ピューリタンと晒し台」(2)～日本演劇との比較・検討
- 第9回 第四章「舞台の預言者—演劇・宗教・越境する公共圏」(1)～教科書における議論の確認
- 第10回 第四章「舞台の預言者—演劇・宗教・越境する公共圏」(2)～日本演劇との比較・検討
- 第11回 第五章「スキヤングルの公表と寛容の境界」(1)～教科書における議論の確認
- 第12回 第五章「スキヤングルの公表と寛容の境界」(2)～日本演劇との比較・検討
- 第13回 第六章「演劇美学の分散とグローバルな公共圏」(1)～教科書における議論の確認
- 第14回 第六章「演劇美学の分散とグローバルな公共圏」(2)～日本演劇との比較・検討／まとめ

履修上の注意

受講者は必ず毎回の授業で扱う範囲について予習を行なった上で参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講者は事前に各回の授業で扱う範囲の本文を読み、内容を把握しておくほか、教員から指示のあった内容について調査を行っておくこと。

教科書

クリストファー・バルミ、藤岡阿由未訳『演劇の公共圏』(春風社、2022年)
 ※必要に応じてBalme, Christopher B, The Theatrical Public Sphere, Cambridge University Press, 2014.を参照する。

参考書

太田省吾・鴻英良責任編集『舞台芸術5 劇場と社会』月曜社、2004年

課題に対するフィードバックの方法

学期末に、個別にメールもしくはクラスウェブを通じてコメントをおこなう。

成績評価の方法

各回の授業に対するコメント等による評価50%、期末レポート50%。

その他

科目ナンバー：(IC) ART531J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(演劇学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(文学) 日置 貴之		

授業の概要・到達目標

明治期に書かれた歌舞伎の散切物について、作中に描かれた〈土地〉との関係性から内容を考察していく。

散切物では、明治初期の変革期の社会が描かれているが、特に鉄道や電信といった輸送・通信手段の登場によって生じたある土地と他の土地との関係性の変化や、鉄道施設や電信局の建設によって物理的に変貌していく都市のありさまに注目することで、この時期の演劇の特色について考えていきたい。

台本および周辺資料を適切に扱い、解釈し、過去に上演された舞台作品の内容を想定し、その内容について考察する能力を身につけることを目指す。

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 『月宴升菴栗』における〈土地〉と〈時間〉の不在
- 第3回 『東京日新聞』における箱根と上方
- 第4回 『明治年間東日記』における上野
- 第5回 『富士額男女繁山』における駿河台と上州
- 第6回 『勸善懲惡孝子誉』『人間万事金世中』における横浜(1)
- 第7回 『勸善懲惡孝子誉』『人間万事金世中』における横浜(2)
- 第8回 『綴合於伝仮名書』における新富町
- 第9回 『霜夜鐘十字辻笠』における上野
- 第10回 『木間星箱根鹿笛』における箱根
- 第11回 『島衛月白浪』における神楽坂・九段
- 第12回 『水天宮利生深川』『月梅薫籠夜』における浜町(1)
- 第13回 『水天宮利生深川』『月梅薫籠夜』における浜町(2)
- 第14回 まとめ

履修上の注意

受講者は必ず毎回の授業で扱う作品を事前に読んだ上で出席すること。テキスト(基本的に活字本を使用する)については初回授業で詳しく説明する。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講者は事前に各回の授業で扱う作品を読み、内容を把握しておくほか、教員から指示のあった内容について調査を行っておくこと。

教科書

指定しない

参考書

『黙阿弥全集』(全27巻)春陽堂、1924～26年

課題に対するフィードバックの方法

学期末に、個別にメールもしくはクラスウェブを通じてコメントをおこなう。

成績評価の方法

各回の授業に対するコメント等による評価50%、期末レポート50%。
 期末レポートは講読をおこなった作品に関して、各自で考察をおこなってもらう。詳細については授業内で指示する。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系		備考	
科目名	専門研究 (マルチ・カルチャリズム) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(人間科学) 時安 邦治		

授業の概要・到達目標

20世紀後半の多文化主義(multiculturalism)は、どちらかと言えば、先住民や国境内にいる少数民族をどのように平等に扱うかが問題の焦点であったのに対し、「グローバル化」によって人々の移動が急激に多くなっていく1990年代以降は、特に西側先進国においては、移民をどのように処遇するかが多文化主義の中心問題になってきている。従来の国民国家の枠組みと諸制度が国際移民の時代にそぐわなくなっており、特に移民との共生はシテイズンシップをめぐる問題として浮上してくる。

この授業では、移民について概括的に理解することを目標として、移民およびシテイズンシップをめぐる入門的文献(入門書ではあるが内容はそれほど簡単ではない)を日本語で講読する。そして、参加学生間での討論を通じて問題の理解を深め、多文化主義(または多文化共生)の現代的な意義と限界を考えていく。

テキストとするのはC. ハルツィヒ/D. ヘルダー/D. ガバッチャ『移民の歴史』(筑摩書房、2023年)とR. ベラミー『哲学がわかる シテイズンシップ』(岩波書店、2023年)である。

授業の到達目標は次の2点である。

1. 移民およびシテイズンシップに関する主要な論点を学び、現代の多文化主義政策の意義と問題点を説明できるようになる。
2. 多文化主義の観点から移民とシテイズンシップについての確かな意見を述べられるようになる。

授業内容

授業ではC. ハルツィヒほか『移民の歴史』とR. ベラミー『哲学がわかる シテイズンシップ』を講読する。授業内容は主に(1)参加学生による内容の報告と疑問点・問題点の指摘、(2)教員による解説、(3)参加者間での議論となる。

- 第1回 イントロダクション——移民とシテイズンシップ
- 第2～7回 『移民の歴史』を読む
- 第2回 第1章 はじめに 一般的な見方——学術的視点からの再概念化
 - 第3回 第2章 人間の歴史における移動——長期的視野から
 - 第4回 第3章 越境移動と文化的相互作用の理論
 - 第5回 第4章 移住者が辿る道への体系的なアプローチ
 - 第6回 第5章 研究への挑戦としての移民の実践
 - 第7回 第6章 二一世紀のはじめにみえてくるもの
- 第8回 中間討論
- 第9～13回 『哲学がわかる シテイズンシップ』を読む
- 第9回 第1章 シテイズンシップとは何か、そしてなぜそれが問題なのか?
 - 第10回 第2章 シテイズンシップの理論とその歴史
 - 第11回 第3章 成員資格と所属
 - 第12回 第4章 権利と「諸権利をもつ権利」
 - 第13回 第5章 参加とデモクラシー
- 第14回 総括討論

履修上の注意

履修する学生の関心によっては、学生と相談の上、授業内容を変更することがある。

準備学習(予習・復習等)の内容

学生には授業の最初にその週に扱う内容の概要を15分程度で口頭で発表してもらう。発表担当者だけでなく、他の受講者も予習として文献をしっかり読み、疑問点や問題点を整理し、インターネットや図書館で関連事項を調べるなど、十分に時間をかけて準備をして、議論に参加できるようにしておくこと。

教科書

『移民の歴史』、C. ハルツィヒ/D. ヘルダー/D. ガバッチャ(大井由紀訳)、筑摩書房、2023年。
『哲学がわかる シテイズンシップ——民主主義をいかに活用すべきか』、R. ベラミー(千野貴裕・大庭大訳)、岩波書店、2023年。

参考書

『国際移民の時代』[第4版]、S. カースルズ/M. J. ミラー(関根政美・関根薫監訳)、名古屋大学出版会、2011年。
『グローバルゼーション——移動から現代を読みとく』、伊豫谷登士翁、筑摩書房、2021年。
『移民をどう考えるか——グローバルに学ぶ入門書』、カリド・コーザー(是川夕監訳・平井和也訳)、勁草書房、2021年。

課題に対するフィードバックの方法

授業最終回に参加学生全員が講読した文献に関する意見発表を行う。この意見発表については、教員がその場でコメントをし、到達目標に対して個々の学生がどの程度の達成をしたかを自覚できるようにする。

成績評価の方法

特に学期末に試験やレポート試験は実施せず、授業での発表や発言により評価する。具体的には、発表内容(文献の理解度)、レジュメ(まとめの的確さ)、授業での発言内容(的確な質問、要を得た回答)、主体的な取り組み(積極性)などから判断する。

授業での発表:40%
討論での発言:40%
授業最終回での意見発表:20%

その他

授業のテーマに関心をもつ学生であれば、社会学の初心者も歓迎する。積極的に参加してほしい。

科目ナンバー：(IC) CUL521J			
メディア・文化系		備考	
科目名	専門研究 (マルチ・カルチャリズム) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(人間科学) 時安 邦治		

授業の概要・到達目標

一般に、ナショナリズムは移民の社会統合にとって障害となると考えられている。国家の境界と文化の境界が一致しなければならぬというナショナリズムの原理は、排外主義や民族的マイノリティの抑圧に転化しやすい。グローバル化とともにナショナリズムは弱まるどころか、むしろヘイトスピーチや排外主義となって顕在化しているようにも思われる。

国民国家という政治的共同体の形式は、グローバル化の時代において変容しながらも確固として存立している。ナショナリズムを問うことは、近代とは何かと同時に国民国家とは何かを問直すことでもある。そして、ナショナルなシテイズンシップ以外のシテイズンシップを構想できるかが多文化主義にとって重要なポイントになるのである。

この授業では、まず入門的な内容の文献を読んでナショナリズムをめぐる論点を整理し、その後、ナショナリズム論で著名なA. D. スミスの著書を講読する。そして、参加学生間での討論を通じて問題の理解を深め、現代のナショナリズムについて問題点と可能性を考えていく。

テキストとするのはL. グリーンフェルド『ナショナリズム入門』(慶應義塾大学出版会、2023年)とA. D. スミス『ナショナリズムとは何か』である。

授業の到達目標は次の2点である。

1. ナショナリズムとは何かを学び、その問題点と可能性を説明できるようになる。
2. 多文化主義の観点からナショナリズムについての確かな意見を述べられるようになる。

授業内容

授業ではL. グリーンフェルド『ナショナリズム入門』とA. D. スミス『ナショナリズムとは何か』を講読する。授業内容は主に(1)参加学生による内容の報告と疑問点・問題点の指摘、(2)教員による解説、(3)参加者間での議論となる。

- 第1回 イントロダクション——多文化主義とナショナリズム
- 第2～7回 『ナショナリズム入門』を読む
- 第2回 第1章 序論——ナショナリズムとモダニティ
 - 第3回 第2章 ナショナリズムはどこから来たのか
 - 第4回 第3章 政治イデオロギー化するナショナリズム
 - 第5回 第4章 ナショナリズムと近代経済
 - 第6回 第5章 ナショナリズムと近代のパスシオン
 - 第7回 第6章 結論——ナショナリズムのグローバルゼーション/中間討論
- 第8～13回 『ナショナリズムとは何か』を読む
- 第8回 第一章 概念
 - 第9回 第二章 イデオロギー
 - 第10回 第三章 パラダイム
 - 第11回 第四章 理論
 - 第12回 第五章 歴史
 - 第13回 第六章 将来展望
- 第14回 総括討論

履修上の注意

履修する学生の関心によっては、学生と相談の上、授業内容を変更することがある。

準備学習(予習・復習等)の内容

学生には授業の最初にその週に扱う内容の概要を15分程度で口頭で発表してもらう。発表担当者だけでなく、他の受講者も予習として文献をしっかり読み、疑問点や問題点を整理し、インターネットや図書館で関連事項を調べるなど、十分に時間をかけて準備をして、議論に参加できるようにしておくこと。

教科書

『ナショナリズム入門』、L. グリーンフェルド(小坂恵理訳)、慶應義塾大学出版会、2023年。
『ナショナリズムとは何か』、A. D. スミス(庄司信訳)、筑摩書房、2018年。

参考書

『民族とナショナリズム』、E. ゲルナー(加藤節監訳)、岩波書店、2000年。
『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』、B. アンダーソン(白石隆・白石さや訳)、書籍工房早山、2007年。
『ナショナリズムの歴史と現在』、E. J. ホブズボーム(浜林正夫ほか訳)、大月書店、2001年。
『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』、A. D. スミス(須山靖司ほか訳)、名古屋大学出版会、1999年。

課題に対するフィードバックの方法

授業最終回に参加学生全員が講読した文献に関する意見発表を行う。この意見発表については、教員がその場でコメントをし、到達目標に対して個々の学生がどの程度の達成をしたかを自覚できるようにする。

成績評価の方法

特に学期末に試験やレポート試験は実施せず、授業での発表や発言により評価する。具体的には、発表内容(文献の理解度)、レジュメ(まとめの的確さ)、授業での発言内容(的確な質問、要を得た回答)、主体的な取り組み(積極性)などから判断する。

授業での発表:40%
討論での発言:40%
授業最終回での意見発表:20%

その他

授業のテーマに関心をもつ学生であれば、社会学の初心者も歓迎する。積極的に参加してほしい。

科目ナンバー：(IC) STS531J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(科学史・科学哲学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 慎 蒼健		

授業の概要・到達目標

本授業の目標は、内容的には「科学の歴史」研究の世界に入門することである。また、学問的作法としてディスカッション力とエッセイ力を向上させることである。

- (1) テーマは、「感染症、パンデミック」である。この分野の歴史研究を紐解くために、基本的テキストを読もうと思う。アルフレッド・クロスビーと速水融のテキストがその対象となる。彼らのテキストを読み、研究方法、視点、対象などについて学んでいく。どの文献を読むかについて、教科書の欄に示しておく。
- (2) ただし、受講生と相談しながら読むべき文献を変更することもある。
- (3) 授業では報告者を決めて、その文献について議論を行う。したがって、事前に文献を読んでくれることが求められる。

授業内容

- 第1回 インTRODクダクシヨン:「感染症の歴史」研究の現在
授業全体のINTRODUCTIONを行う。詳細な文献リストを配布し、ゼミで読む文献を決定する。そのために、学生たちの問題関心についてヒアリングを行う。また、報告の仕方、レジュメの作成法などについても説明する。
- 第2回～第7回：アルフレッド・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ:忘れられたパンデミック』を読む
- 第8回～第14回：速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ:人類とウイルスの第一次世界大戦』を読む

履修上の注意

履修にあたって、特に注意すべきことはない。また、医学史だからとって、それらに関する知識は必要ない。感染症の歴史を政治史・経済史・医学史・社会史的な次元から考えてみたいという学生ならば、歓迎する。授業は一方的な講義ではなく、学生と文献を読みながら進めていくので、積極的な姿勢で臨んでほしい。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講生は毎回の必読文献を読んで授業に参加すること。また、学期末のタームペーパーに備えて、各回の論点をまとめておくこと。

教科書

基本文献としては、下記のテキストを読んでいく。
アルフレッド・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ:忘れられたパンデミック』みすず書房、2004年
速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ:人類とウイルスの第一次世界大戦』藤原書店、2006年
内務省衛生局編『流行性感冒:「スペイン風邪」大流行の記録』東洋文庫778、平凡社、2008年
ただし、受講生と相談して、文献を変更する場合もある。

参考書

授業中に紹介する。

成績評価の方法

参加状況(30%)と発表(70%)で総合的に評価する。

その他

歴史に関心のある院生はもちろんのこと、感染症と社会の関係に関心を持っている院生も歓迎する。授業の中心は学問的なディスカッションである。

科目ナンバー：(IC) STS531J			
メディア・文化系	備考		
科目名	専門研究(科学史・科学哲学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 慎 蒼健		

授業の概要・到達目標

- (1) 2024年は、科学史の古典を読みたい。近年翻訳本が刊行された2冊、『リヴァイアサンと空気ポンプ:ホップズ、ボイル、実験的生活』と『客観性』である。
- (2) ただし、受講生と相談しながら読むべき文献を変更することもある。
- (3) 授業では報告者を決めて、その文献について議論を行う。したがって、事前に文献を読んでくれることが求められる。

授業内容

- 第1回 INTRODUCTION:「科学史」研究の現在について
授業全体のINTRODUCTIONを行う。詳細な文献リストを配布し、ゼミで読む文献を決定する。そのために、学生たちの問題関心についてヒアリングを行う。また、報告の仕方、レジュメの作成法などについても説明する。
- 第2回～第7回：『リヴァイアサンと空気ポンプ:ホップズ、ボイル、実験的生活』
- 第8回～第14回：『客観性』

履修上の注意

履修にあたって、特に注意すべきことはない。また、科学史について全く知らない学生であっても、じっくりと読み考えてみたいという学生ならば、歓迎する。授業は一方的な講義ではなく、学生と文献を読みながら進めていくので、積極的な姿勢で臨んでほしい。

準備学習(予習・復習等)の内容

受講生は毎回の必読文献を読んで授業に参加すること。

教科書

○スティーヴン・シェイピン、サイモン・シャッフアー『リヴァイアサンと空気ポンプ:ホップズ、ボイル、実験的生活』名古屋大学出版会、2016年。
○ロレイン・ダストン、ピーター・ギャリソン『客観性』名古屋大学出版会、2021年。

参考書

授業中に紹介する。

成績評価の方法

参加状況(30%)と発表(70%)で総合的に評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM522J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習（組織コミュニケーション論）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口	生史

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要
 専門演習 I では、受講生の研究テーマに関して、これまでの研究における知見を文献調査により探索し、当該分野における自己の研究テーマの位置づけを理解することを目的とする。質の高い専門ジャーナルに掲載されている論文を読む。
 授業では、この分野の専門書と専門ジャーナルをいくつか紹介する。その中から自分のテーマに関係する文献やジャーナル掲載論文を自分で探して読むか、あるいは指導教員が指定した専門書や論文を読み、それらについて精読してもらう。そして、それらの論文における先行研究の文献調査内容、調査の方法、調査の結果、仮説検証または仮説生成、学術的インプリケーションについて発表してもらう。発表に基づき、討論を行い、必要に応じて解説をする。また、修士論文の研究課題の検討・設定の開始と専門演習 II で提出してもらうプロポーザルの準備を始めてもらう。
 II. 到達目標
 到達目標は、先行研究論文を読み、質的・量的研究のアプローチ、方法論などを理解すること、そして、自己の研究課題を設定することである。

授業内容

以下の内容と順序で授業を進めていく予定である（諸般の事情により変更の可能性はある）。
 第1回：(1)受講生の研究テーマに関して発表；(2)専門書と専門ジャーナルの紹介と先行研究のまとめ方
 第2回：研究の基本的アプローチについての解説
 第3回～第12回は、読んだ文献の内容、論文の場合は、調査の方法論、調査の結果、仮説検証または仮説生成、学術的インプリケーションについて発表と議論、そして解説
 第3回：文献・研究論文1の検討
 第4回：文献・研究論文2の検討
 第5回：文献・研究論文3の検討
 第6回：文献・研究論文4の検討
 第7回：文献・研究論文5の検討
 第8回：文献・研究論文6の検討
 第9回：文献・研究論文7の検討
 第10回：文献・研究論文8の検討
 第11回：文献・研究論文9の検討
 第12回：文献・研究論文10の検討
 第13回：修士論文の研究課題の検討(1)：研究テーマの当該分野での位置づけ
 第14回：修士論文の研究課題の検討(2)：研究アプローチの検討
 *受講生が一人の場合は、その受講生の研究テーマに関する研究論文を読む。受講生が二人以上の場合は、各自のテーマに関する文献・研究論文を人数分で平等・公平に回数配分する。

履修上の注意

毎週のアサイメントの提出は期日を厳守して欲しい。発表時には、ハンドアウトやレジュメを用意することが必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週、自分のテーマに関係する文献または先行研究の論文を読み、ペーパーを書いて提出することが求められる。

教科書

特に定めない予定であるが、必要に応じて専門書を指定する場合もある。

参考書

- [1]書籍
- 『組織のコミュニケーション論』、猪俣正雄、1992（中央経済社）
 - 『組織論』、桑田耕太郎・田尾雅夫、1998（有斐閣）
 - 『現代ミクロ組織論』、二村敏子、2004（有斐閣）
 - 『成果主義を活かす自己管理型チーム』、山口生史（編著）、2005（生産性出版）
 - 『ビジネス心理：マネジメント心理編』、山口生史・匠英一（監修）日本ビジネス心理学会（編）、2013（中央経済社）
 - 『新版・組織行動のマネジメント』ステファン・ロビンス（高木晴夫監訳、[2009]）（ダイヤモンド社）[Robbins, S. P. (1997) Essentials of Organizational Management, Prentice Hall]
 - Gary L. Kreps (1989) Organizational Communication: Theory and Practice, Allyn & Bacon
 - Gerald M Goldhaber (1993) Organizational Communication, Brown & Benchmark
 - Cynthia Stohl (1995) Organizational Communication: Connectedness in Action, Sage
 - Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory Research, and Methods, Sage
 - Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage
 - Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編) Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) 一、JAI Press
- [2]専門ジャーナル
- Human Communication Research
 - Human Relations
 - International Journal of Business Communication
 - Journal of Organizational Behavior
 - Academy of Management Journal
 - Academy of Management Review
 - 『日本コミュニケーション研究』
 - 『組織科学』
 - 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

提出課題のテーマに関して議論し、解説しながら、フィードバックする。

成績評価の方法

- (1)課題の提出:50%
- (2)ファイナルペーパー:50%

その他

研究計画を早めに立てることが必要である。

科目ナンバー：(IC) COM522J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習（組織コミュニケーション論）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口	生史

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要
 専門演習 II では、専門演習 I で行った文献調査を継続しながら、先行研究の知見を参考に、仮説検証型（量的）研究の場合は、自己の研究テーマに関する理論モデルおよび仮説の構築をめざし、仮説生成（質的）型研究の場合は、さまざまな手法と質的データ分析の仕方についての理解をめざす。前者に関しては、一般的研究課題から具体的研究課題へと発展させる過程の指導に重点を置き、後者に関しては、内容分析、事例分析、クラウンデッドセオリーなどのうちどのアプローチが自分のテーマに適合するかを判断できるように導きたい。また、このクラスの後半では、修士論文の研究テーマに関する調査の準備も始める。
 II. 到達目標
 到達目標は、調査の方法論を理解し、具体的な調査計画を策定することができるようになることである。

授業内容

以下の内容と順序で授業を進めていく予定である（諸般の事情により変更の可能性はある）。
 第1回：プロポーザル発表と提出とコメント
 第2回：文献調査（先行研究の知見）のクリティカルペーパー (1)
 第3回：文献調査（先行研究の知見）のクリティカルペーパー (2)
 第4回：文献調査（先行研究の知見）のクリティカルペーパー (3)
 第5回：一般的研究課題から具体的研究課題のための検討（量的研究）：質的研究の様々なアプローチの理解（質的研究）
 第6回：具体的研究課題の修正（量的研究）；自己の研究に適合する研究アプローチの検討（質的研究）
 第7回：具体的研究課題から仮説の構築の検討（量的研究）；自己の研究に適合する研究アプローチの選択（質的研究）
 第8回：仮説の修正（量的研究）；自己の研究に適合する研究アプローチの決定（質的研究）
 第9回：理論モデルの構築（量的研究）；質的データの分析方法（質的研究）
 第10回：概念の操作的定義（量的研究）；コーディングの手法（質的研究）
 第11回：質問票（量的研究）の検討；インタビューガイドの検討（質的研究）(1)
 第12回：質問票（量的研究）の検討；インタビューガイドの検討（質的研究）(2)
 第13回：調査計画の策定
 第14回：文献調査から調査計画までの発表

履修上の注意

求められたアサイメントの提出は期日を厳守して欲しい。発表の場合は、ハンドアウトやレジュメを用意することが必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

前半は、毎週、先行研究の論文を自分で探し、読み、クリティカルペーパーを書いてくる必要がある。後半は、仮説の構築あるいは具体的な研究課題設定のためのペーパーを毎週書いてくる必要がある。

教科書

特に定めない。

参考書

- [1]文献
- 『コミュニケーション・オーディット』、C. W.ダウンス、1988、(太田正孝監訳、1999)、(CAP出版)
 - 『ソーシャル・キャピタル』、ウェイン・バーカー、2000、(中島豊訳、2001)、(ダイヤモンド社)
 - 『ネットワーク分析』、安田雪、1997（新曜社）
 - 『組織の経営学』、R. F.ダフト、2001、(高木晴夫監訳、2002)、(ダイヤモンド社)
 - 『組織論』、桑田耕太郎・田尾雅夫、1998、(有斐閣)
 - 『ビジネス心理：マネジメント心理編』、山口生史・匠英一（監修）、日本ビジネス心理学会（編）、2013（中央経済社）
- [2]専門ジャーナル
- Human Communication Research
 - Human Relations
 - International Journal of Business Communication
 - Organization Studies
 - Journal of Organizational Behavior
 - Academy of Management Journal
 - Academy of Management Review
 - 『日本コミュニケーション研究』
 - 『組織科学』
 - 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

授業において、提出課題のテーマに関して議論し、解説しながらフィードバックを行う。

成績評価の方法

- (1)課題提出:50%
- (2)プロポーザル:50%

その他

研究計画の進捗状況を自己管理することが必要である。

科目ナンバー：(IC) INF532J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習（認知情報論）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

情報ネットワーク社会における人間の認知行動を論じる方法について講じる。

社会で流通可能な情報に関する技術的制約と、人間が把握・処理できる情報に関する生物・心理学的制約を認識したうえで、情報コミュニケーション学の基盤を論じる。

(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・人間行動の認知情報論的な理解を確立する
- ・現代の情報社会における具体的な研究テーマの設定法を身につける

授業内容

- 1) 認知科学とモデル研究
- 2) 計算原理と論理学
- 3) 創造性と暗黙知
- 4) 計算量の問題
- 5) 量子論
- 6) 生態学的世界観
- 7) 生物進化
- 8) 神経回路網
- 9) 脳研究と人工知能への応用
- 10) 心のモジュール構造
- 11) 意識の諸性質
- 12) 情報社会への適応
- 13) 信頼形成と協力
- 14) 情報コミュニケーション

履修上の注意

教科書がカバーする領域の基礎知識は履修済みであることを想定して授業をする。

準備学習（予習・復習等）の内容

学部時代に、この分野を未履修の者は、教科書をよく読んで下調べしたうえで授業に参加する必要がある。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

石川幹人『心と認知の情報学～ロボットをつくる・人間を知る』（勁草書房）

石川幹人『人間はどういう生物か～心・脳・意識のふしぎを解く』（ちくま新書）

参考書

長谷川寿一・長谷川真理子『進化と人間行動』（東京大学出版会）

ミズン『心の先史時代』（青土社）

ハンフリー『喪失と獲得～進化心理学からみた心と体』（紀伊国屋書店）

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポート報告を五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) INF532J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習（認知情報論）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

認知プロセスなどの心の研究を行なう場合の実証研究の基盤について、認知哲学者ダニエル・デネットの論にもとづいて講じる。

生物学的な進化原理は危険なまでに切れ味が鋭く、人間行動の多くの側面が説明可能であり、その議論は社会システムや倫理にまで及ぶ。進化原理が、情報社会における人間行動を論じる目的にも、大きな武器になることを論じる。(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・人間行動を社会環境に位置づけ、認知情報論的な議論を行う技能を確立する
- ・現代の情報社会における具体的な研究テーマの評価法を身につける

授業内容

- 1) 生物進化論
- 2) 進化アルゴリズム
- 3) 生物進化の階層
- 4) スカイフックとクレーン
- 5) 人工生命とシミュレーション
- 6) 意味の水準
- 7) 解釈学
- 8) 文化形成と情報の伝播
- 9) 進化心理学
- 10) 認知人類学
- 11) 計算論とコンピュータ
- 12) 社会生物学
- 13) 倫理の進化的意義
- 14) 事例：情報社会への応用

履修上の注意

生物学の基本が学習済みであることを想定して授業をする。

準備学習（予習・復習等）の内容

学部時代に当該分野を未履修の者は、高校の生物の教科書などで補いながら授業に参加する必要がある。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

ダニエル・デネット(石川幹人ほか訳)『ダーウィンの危険な思想～生命の意味と進化』（青土社）

参考書

デネット『『志向姿勢』の哲学～人は人の行動を読めるのか』（白揚社）

デネット『『解明される意識』（青土社）

デネット『『自由は進化する』（NTT出版）

デネット『『解明される宗教』（青土社）

デネット『『心の進化を解明する』（青土社）

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポート報告を五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) COM512J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(説得コミュニケーション論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

「アメリカの政治コミュニケーション」について学ぶ。春学期は、政治的社会化、イメージ戦略、世論調査、ニューメディアの影響に加え、TVディベート、民主主義の危機など大統領選キャンペーンに関する、大統領のレトリック分析の事例研究を読む。秋学期は、Richard Perloff. The Dynamics of Political Communication, 3rd ed.を教科書にして、ポスト・トランプ時代を中心としたデジタル・メディア時代の政治コミュニケーション論について学ぶ。

授業内容

- 春学期 第1回 イントロダクション
 第2回 政治レトリック1:
 (1) Gilmore, J., Sheets, P., & Rowling, C. (2016). Make no exception, save one: American exceptionalism, the American presidency, and the age of Obama;
 (2) Hollihan, T. A. & Klumpp, J. F. (2019). Rhetorical Criticism as Moral Action Revisited: Moral and Rhetorical Imperatives in a Nation Trumped.
 第3回 政治レトリック2:
 (1) Spielvogel, C. (2005). "You Know Where I Stand": Moral Framing of the War on Terrorism and the Iraq War in the 2004 Presidential Campaign; (2) Rowland, R. C. & Jones, J. M. (2007). Recasting the American Dream and American Politics: Barack Obama's Keynote Address to the 2004 Democratic National Convention.
 第4回 大統領選の歴史:
 (1) Murphy, J. M. (1998). Knowing the president: The dialogic evolution of the campaign history; (2) Zoppetti, J. (2019). Rhetorical Incivility in the Twittersphere: A Comparative Thematic Analysis of Clinton and Trump's Tweets During and After the 2016 Presidential Election.
 第5回 大統領選の理論1:
 (1) Hinck, S. et al. (2013). Thou Shalt Not Speak Ill of Any Fellow Republicans? Politeness Theory in the 2012 Republican Primary Debates; (2) Hinck, S. et al. (2018). A tale of two parties: comparing the intensity of face threats in the democratic and republican primary debates. Argumentation and Advocacy 54, 103-121.
 第6回 大統領選の理論2:
 (1) Benoit, W. L. (2018). Issue Ownership in the 2016 presidential debates. Argumentation and Advocacy 54, 95-103; (2) Glantz, M. et al. (2013). A Functional Argument of 2012 U.S. Presidential Primary Debate.
 第7回 大統領のレトリック:
 (1) Stucky, M. (2010). Rethinking the Rhetorical Presidency and Presidential Rhetoric; (2) Neville-Shepard, R. (2019). Post-presumption argumentation and the post-truth world: on the conspiracy rhetoric of Donald Trump.
 第8回 キャンペーン:
 (1) Gronbeck, B. E., (1992). Negative narrative in 1988 presidential campaign ads; (2) Scacco, J., & Coe, K. (2021). Securing the guardrails of democracy? Accountability and presidential communication in the 2020 election.
 第9回 予備選ディベート:
 (1) Rowland, R. C. (2018). Implicit standards of public argument in presidential debate: what the 2016 debates reveal about public deliberation; (2) Johnson, D. I. (2007). Feminine style in presidential debate discourse, 1960-2000.
 第10回 予備選:
 (1) Benoit, W. L. (1999). Acclaiming, attacking, and defending in presidential nominating acceptance addresses, 1960-1996; (2) Warnick, B. (1996). Argument Schemes and the Construction of Social Reality: John F. Kennedy's Address to the Houston Ministerial Association.
 第11回 ディベート:
 (1) McKinney, M., & Warner, B.R. (2013). Do Presidential Debates Matter? Examining a Decade of Campaign Debate Effects; (2) Benoit, W. L., & Currie, H. (2001). Inaccuracies in Media Coverage of the 1996 and 2000 Presidential Debates.
 第12回 投票結果:
 (1) Osisanwo, A. & Alugbin, M. (2019). Rhetoric of Defeat in American Presidential Concession Speeches; (2) McCormick, S. & Stucky, M. (2013). Presidential Disfluency: Literacy, Legibility, and Vocal Political Aesthetics in the Rhetorical Presidency.
 第13回 就任演説:
 (1) Jamieson, K. H. & Campbell, K. K. (2017). Rhetoric and Presidential Politics; (2) Beasley, V. B. (2001). The Rhetoric of Ideological Consensus in the United States: American Principles and American Prose in Presidential Inaugurals.
 第14回 Student Presentations

履修上の注意

毎回読む論文が英語なので、しっかり予習をして討論に参加できるように準備してこよう。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、担当者を決めて発表を行う。担当者は、レジメを作成すること。

教科書

コピーを配布する。その他、必要に応じて英語と日本語の資料を用いる。

参考書

授業中に紹介する。

成績評価の方法

評価方法：英文エッセーを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めて論文の内容を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) COM512J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(説得コミュニケーション論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

「アメリカの政治コミュニケーション」について学ぶ。春学期は、政治的社会化、イメージ戦略、世論調査、ニューメディアの影響に加え、TVディベート、民主主義の危機など大統領選キャンペーンに関する、大統領のレトリック分析の事例研究を読む。秋学期は、Richard Perloff. The Dynamics of Political Communication, 3rd ed.を教科書にして、ポスト・トランプ時代を中心としたデジタル・メディア時代の政治コミュニケーション論について学ぶ。

授業内容

- 秋学期 第1回 イントロダクション
 第2回 政治コミュニケーションとは何か (Read: Chapter 1 & 2)
 第3回 民主主義と政治 (Chapter 3)
 第4回 政治コミュニケーション研究 (Chapter 4)
 第5回 メディアと政治コミュニケーション (Chapter 5)
 第6回 政治的社会化 (Chapter 6)
 第7回 議題設定とフレーミング (Chapter 7 & 8)
 第8回 メディア効果 (Chapter 9)
 第9回 大統領のレトリック (Chapter 10)
 第10回 ニュースバイアスとジェンダーバイアス (Chapter 11 & 12)
 第11回 大統領選報道 (Chapter 13 & 14)
 第12回 選挙キャンペーン (Chapter 15)
 第13回 大統領ディベート (Chapter 16)
 第14回 Student Presentations

履修上の注意

教科書が英語なので、しっかり予習をして討論に参加できるように準備してこよう。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を事前に読んで、討論と発表の準備をしておくこと。

教科書

Richard M. Perloff. (2022). The Dynamics of Political Communication: Media and Politics in a Digital Age 3rd ed. London: Routledge.

参考書

授業中に紹介する。

成績評価の方法

評価方法：英語のエッセーを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めて論文の内容を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(家族社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

春学期はおもに受講生の問題意識を明確化する作業を行なう。具体的に研究テーマの検討、理論枠組みの検討、研究方法の検討、研究プランの検討を行ない、これからの2年間の研究設計を具体化していく。

授業内容

- 第1回：演習全体像の説明
- 第2回：研究テーマの検討(1)
- 第3回：研究テーマの検討(2)
- 第4回：理論枠組みの検討(1)
- 第5回：理論枠組みの検討(2)
- 第6回：理論枠組みの検討(3)
- 第7回：理論枠組みの検討(4)
- 第8回：研究方法の検討(1)
- 第9回：研究方法の検討(2)
- 第10回：研究方法の検討(3)
- 第11回：研究プランの検討(1)
- 第12回：研究プランの検討(2)
- 第13回：新たな研究設計の構築
- 第14回：まとめと総括

履修上の注意

授業前に指定資料と文献を予習しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で紹介した内容について、文献などで調べておくこと。

教科書

とくに定めない。

参考書

野々山久也編著2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
井上真理子編著2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)、「授業への参加度」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

なし。

科目ナンバー：(IC) SOC512J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(家族社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

秋学期は前期の問題意識の明確化につづき、新たな理論的枠組の構築を目指す。具体的に先行研究のレビュー、作業仮説の構築と仮説検証の試みを行なう。

授業内容

- 第1回：研究設計と後期演習の進行プランの確認
- 第2回：先行研究のレビュー—理論(1)
- 第3回：先行研究のレビュー—理論(2)
- 第4回：先行研究のレビュー—テーマ(1)
- 第5回：先行研究のレビュー—テーマ(2)
- 第6回：先行研究のレビュー—方法(1)
- 第7回：先行研究のレビュー—方法(2)
- 第8回：作業仮説の構築(1)
- 第9回：作業仮説の構築(2)
- 第10回：作業仮説の構築(3)
- 第11回：仮説検証の試み—試行的なインタビュー
- 第12回：仮説検証の試み—アンケート調査の設計と実施
- 第13回：仮説検証の試み—結果の検討
- 第14回：まとめと総括

履修上の注意

専門演習(家族社会学) I を事前に履修しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業前に指定資料と文献を予習しておくこと。

教科書

野々山久也・渡辺秀樹1999『家族社会学入門—家族研究の理論と技法』1文化書房博文社

参考書

野々山久也編著2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
井上真理子編著2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)、「授業への参加度」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM532J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(異文化間コミュニケーション) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

異文化間には、「国家」、「民族」、「地域」、「ジェンダー」、「世代」、「言語」などさまざまな関係が含まれるが、この授業ではそれら全ての前提になる「人間対人間」に関する理論を取り上げ、人が異文化においてどのような行動をとるのか、またなぜそのような行動をするのか等について学ぶ。

本授業では、異文化間コミュニケーション論の代表的な理論がどのように構築されたのか、理論を知識として理解することのみに留まらず、さまざまなケースを通じて理解を深めることを目指す。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：グローバル社会と異文化コミュニケーション
- 第3回：言語と非言語
- 第4回：異文化接触
- 第5回：メディアと文化
- 第6回：文化のポリティクス
- 第7回：コミュニケーション研究法1
- 第8回：コミュニケーション研究法2
- 第9回：量的研究法1
- 第10回：量的研究法2
- 第11回：質的研究法1
- 第12回：質的研究法2
- 第13回：質的研究法3
- 第14回：ミックス法

履修上の注意

特になし。

準備学習(予習・復習等)の内容

予め、授業で扱う内容を精読しておくこと。授業では全員が既読であることを前提に、ディスカッションを進める。

教科書

万城目正雄・川村 千鶴子(2020)『インタラクティブゼミナール 新しい多文化社会論: 共に拓く共創・協働の時代』東海大学出版部。

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子編(2011)『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ出版。

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

- 授業内課題(50%)
- 学期末レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM532J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(異文化間コミュニケーション) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

異文化間コミュニケーションに関連した修士論文に取り組むことを見据え、関連する専門的な文献を読みこなすことを目標とする。また、さまざまな調査方法を紹介する。特に、量的研究の場合、分析結果の理解には統計の基礎知識が必要となる。この授業では、この点に力を入れ、きちんと文献を読めるようになることにより、その後のテーマ設定へとつなげることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：文献の選び方
- 第3回：Literature reviewの読み方
- 第4回：調査法
- 第5回：量的調査主体の論文の読み方1
- 第6回：量的調査主体の論文の読み方2
- 第7回：質的調査主体の論文の読み方1
- 第8回：質的調査主体の論文の読み方2
- 第9回：フィールドワーク
- 第10回：研究テーマの設定
- 第11回：研究質問・仮説の設定
- 第12回：文献調査の進め方1
- 第13回：文献調査の進め方2
- 第14回：調査方法の選択

履修上の注意

「文化系列専門演習(異文化間コミュニケーション) I」を先行履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で扱う内容については、予め関連部分を精読し、授業に臨むこと。

また、自身の研究に関する論文を集め、授業外で読み進めること。

教科書

リーディングリストを配布する。

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

- 学期内レポート(50%)
- 期末レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) PHL552J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(生命論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩渕 輝	

授業の概要・到達目標

生命論および生命思想史に関する基礎的文献を講読し、参加者全員で議論しつつ、各自の研究を進める上で必要な基礎知識について学ぶ。

基礎的文献を読みつつ、各自の研究テーマを絞り込み、自分で研究を遂行できる基礎的な力をつけることを目標にする。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究の基礎知識
- 第3回：文献リストの作成指導
- 第4回：基礎的文献講読と議論A(1)前半
- 第5回：基礎的文献講読と議論A(2)後半
- 第6回：研究計画の立案
- 第7回：研究テーマの構想の報告
- 第8回：先行研究についての報告と議論(1)前半
- 第9回：先行研究についての報告と議論(2)後半
- 第10回：研究計画の再検討
- 第11回：基礎的文献講読と議論B(1)前半
- 第12回：基礎的文献講読と議論B(2)後半
- 第13回：研究テーマの再検討
- 第14回：aのみ:まとめ

履修上の注意

自分の研究テーマ以外にも広く関心をもち、他の発表者が発表する際にも、進んで議論して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者以外の者も、発表者のテーマに関する文献調査など、十分な準備をした上で、演習に臨むこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』岩渕輝(春秋社)、2014年。
- 『生命観の歴史』C. U. M.スミス(八杉龍一 訳)全2巻(岩波書店)、1981年。
- 『生命と物質』T. S.ホール(長野敬 訳)全2巻(平凡社)、1990年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

レポートおよび発表担当時の報告70%、議論30%の比率で評価する。

その他

第1回目のイントロダクションでは、演習全体を理解する上で必要な重要事項について話す。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) PHL552J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(生命論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩渕 輝	

授業の概要・到達目標

春学期に引き続き、生命論および生命思想史に関する基礎的文献を講読し、参加者全員で議論しつつ、各自の研究を進める上で必要な基礎知識について学ぶ。

基礎的文献を読みつつ、各自の研究テーマを絞り込み、自分で研究を遂行できる基礎的な力をつけることを目標にする。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究計画の再報告
- 第3回：基礎的文献講読と議論A(1)前半
- 第4回：基礎的文献講読と議論A(2)後半
- 第5回：先行研究についての報告と議論(1)前半
- 第6回：先行研究についての報告と議論(2)後半
- 第7回：研究計画修正案の報告
- 第8回：研究テーマ修正案の報告
- 第9回：文献の確認と指導
- 第10回：基礎的文献講読と議論B(1)前半
- 第11回：基礎的文献講読と議論B(2)後半
- 第12回：研究テーマの再確認と議論(1)前半
- 第13回：研究テーマの再確認と議論(2)後半
- 第14回：aのみ:まとめ

履修上の注意

自分の研究テーマ以外にも広く関心をもち、他の発表者が発表する際にも、進んで議論して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者以外の者も、発表者のテーマに関する文献調査など、十分な準備をした上で、演習に臨むこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』岩渕輝(春秋社)、2014年。
- 『生命観の歴史』C. U. M.スミス(八杉龍一 訳)全2巻(岩波書店)、1981年。
- 『生命と物質』T. S.ホール(長野敬 訳)全2巻(平凡社)、1990年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

レポートおよび発表担当時の報告70%、議論30%の比率で評価する。

その他

第1回目のイントロダクションでは、演習全体を理解する上で必要な重要事項について話す。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) ANT572J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(人類学と意識科学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この演習は、文化人類学・自然人類学と、意識科学・意識研究の分野で修士論文を作成する予定の学生に対して行うもので、1年次の前期に配当される。専門演習 I では、まず従来の人類学や意識科学の成果も踏まえながら、その境界領域となる新しい分野の中で、履修者の研究テーマと明らかにされるべき問題を具体的に明確化することを目的とした授業を行う。同時に該当分野における文献を網羅的に検索する作業から、それらの講読へと移行し、専門演習 II の内容につなげていく。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究計画の発表と検討(1)
- 第3回：研究計画の発表と検討(2)
- 第4回：研究計画の発表と検討(3)
- 第5回：研究計画の発表と検討(4)
- 第6回：研究計画の発表と検討(5)
- 第7回：研究計画の発表と検討(6)
- 第8回：研究計画の発表と検討(7)
- 第9回：研究計画の発表と検討(8)
- 第10回：研究計画の発表と検討(9)
- 第11回：研究計画の発表と検討(10)
- 第12回：研究計画の発表と検討(11)
- 第13回：研究計画の発表と検討(12)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習(予習・復習等)の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

課題に対するフィードバックの方法

演習形式の授業なので、授業中のディスカッションの中でフィードバックを行う。また、授業に連動したWEBサイトでも授業内容についてのコメントを随時更新していく。

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ANT572J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(人類学と意識科学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この専門演習 II では、履修者が自らの設定したテーマを研究していくにあたって、文化人類学・自然人類学や意識科学・意識研究、あるいは他の隣接分野においてどのような先行研究が行われていて、どのような知見が得られており、またどのような問題が未解決であるのかを学ぶように指導を行う。履修者が研究テーマとした領域における研究論文などの文献の講読とその内容の理解に重点を置いて演習を進め、また同時に自ら学術論文を書きすすめていくためのスキルの習得もできるように配慮する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究経過の発表と検討(1)
- 第3回：研究経過の発表と検討(2)
- 第4回：研究経過の発表と検討(3)
- 第5回：研究経過の発表と検討(4)
- 第6回：研究経過の発表と検討(5)
- 第7回：研究経過の発表と検討(6)
- 第8回：研究経過の発表と検討(7)
- 第9回：研究経過の発表と検討(8)
- 第10回：研究経過の発表と検討(9)
- 第11回：研究経過の発表と検討(10)
- 第12回：研究経過の発表と検討(11)
- 第13回：研究経過の発表と検討(12)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習(予習・復習等)の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

課題に対するフィードバックの方法

演習形式の授業なので、授業中のディスカッションの中でフィードバックを行う。また、授業に連動したWEBサイトでも授業内容についてのコメントを随時更新していく。

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC522J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(現代思想論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本演習では社会的な相互承認についての現代における議論をピックアップして、社会理論、社会批判という課題についての有効性を吟味する。テキストは基本的には教員が推薦するが、参加者の関心に応じて最初の授業で相談して決定する。

授業内容

- 第1回：導入
- 第2回：文献講読1-1
- 第3回：文献講読1-2
- 第4回：文献講読1-3
- 第5回：総合討論1
- 第6回：文献講読2-1
- 第7回：文献講読2-2
- 第8回：文献講読2-3
- 第9回：総合討論2
- 第10回：参加者による研究課題との関連での討議
- 第11回：文献講読3-1
- 第12回：文献講読3-2
- 第13回：総合討論・まとめ1
- 第14回：総合討論・まとめ2

履修上の注意

本演習は文献講読とその文献についての討論が主である。報告者のみならず、参加者すべての熟読と、検討を期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定されたテキストを発表者以外もしっかりと読み込んでくること。

教科書

A. R. ホックシールド『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店
 ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』みすず書房
 ロバート・D・パットナム『われらの子ども』創元社

参考書

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC522J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門演習(現代思想論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本演習では、社会運動や公共圏における異議申し立てのあり方について、最近の著作を手がかりに考えてゆく。グローバル化におけるシチズンシップ、コミュニケーション、コミュニティ、市民的不服従などについて、理解を深める。テキストは基本的には教員が推薦するが、参加者の関心に応じて最初の授業で相談して決定する。

授業内容

- 第1回：導入
- 第2回：文献講読1-1
- 第3回：文献講読1-2
- 第4回：文献講読1-3
- 第5回：総合討論1
- 第6回：文献講読2-1
- 第7回：文献講読2-2
- 第8回：文献講読2-3
- 第9回：総合討論2
- 第10回：参加者による研究課題との関連での討議
- 第11回：文献講読3-1
- 第12回：文献講読3-2
- 第13回：総合討論・まとめ1
- 第14回：総合討論・まとめ2

履修上の注意

本演習は文献講読とその文献についての討論が主である。報告者のみならず、参加者すべての熟読と、検討を期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定されたテキストを発表者以外もしっかりと読み込んでくること。

教科書

デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義—その歴史的展開と現在』作品社
 ヴォルフガング・シュトレック『資本主義はどう終わるのか』河出書房新社
 磯直紀『認識と反省性』法政大学出版局

参考書

授業で指示する。

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) PSY612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(社会心理学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

修士論文の計画作成に向けた準備作業を行う。輪読を通して社会心理学の代表的な理論を学ぶとともに、受講者の研究トピックがそれら理論からどのように理解できるかを検討していく。

授業内容

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：自己(1)
- 第3回：自己(2)
- 第4回：感情(1)
- 第5回：感情(2)
- 第6回：自尊感情(1)
- 第7回：自尊感情(2)
- 第8回：説得と態度(1)
- 第9回：説得と態度(2)
- 第10回：公正(1)
- 第11回：公正(2)
- 第12回：集団間関係(1)
- 第13回：集団間関係(2)
- 第14回：総括と研究計画の検討

授業内容ならびに順序は受講者の興味関心に応じて変更することがある。

履修上の注意

毎回輪読とディスカッションを行う。

準備学習（予習・復習等）の内容

輪読する文献は、発表者以外も事前に読んでおくこと。質問したい事項については予習して整理しておくこと。

教科書

特に定めない。

参考書

- ・池田 謙一・唐沢 穰・工藤 恵理子・村本 由紀子 (2019). 社会心理学 補訂版 有斐閣
- ・山本 真理子・外山 みどり・池上 知子・遠藤 由美・北村 英哉・宮本 聡介(編) (2001). 社会的認知ハンドブック 北大路書房
- ・安藤 清志・村田 光二・沼崎 誠(編) (2017). 社会心理学研究入門 (補訂新版) 東京大学出版会
- ・南風原朝和 (2002). 心理統計学の基礎：統合的理解のために 有斐閣
- ・南風原朝和 (2014). 続・心理統計学の基礎：統合的理解を広げ深める 有斐閣

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表と授業への取り組み(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) PSY612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門演習(社会心理学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

修士論文の計画を作成する。先行研究のレビューを行いながら必要な研究方法ならびに分析方法について学習するとともに、ディスカッションを通して研究計画を洗練させていく。

授業内容

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：受講者の研究テーマの先行研究レビューとディスカッション(1)
- 第3回：受講者の研究テーマの先行研究レビューとディスカッション(2)
- 第4回：受講者の研究テーマの先行研究レビューとディスカッション(3)
- 第5回：受講者の研究テーマの先行研究レビューとディスカッション(4)
- 第6回：受講者の研究テーマの先行研究レビューとディスカッション(5)
- 第7回：総合的レビューと仮説の検討(1)
- 第8回：総合的レビューと仮説の検討(2)
- 第9回：仮説検証のためのデザインの検討(1)
- 第10回：仮説検証のためのデザインの検討(2)
- 第11回：分析方法の演習(1)
- 第12回：分析方法の演習(2)
- 第13回：分析方法の演習(3)
- 第14回：研究計画の確認と再検討

授業内容ならびに順序は受講者の興味関心ならびに研究の進捗に応じて変更することがある。

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

質問したい事柄については授業前に整理しておくこと。授業後は、コメント内容を整理しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業ないで適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業内で行う。

成績評価の方法

発表ならびに授業への取り組み(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM622J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（組織コミュニケーション論）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口	生史

授業の概要・到達目標

特論演習 I では、研究目的に合致したリサーチデザインと調査方法に関して体系的な指導を行う。仮説検証型(量的)の研究に関しては、専門演習 I、II で構築した理論モデルと仮説を精緻化し、完成させ、実際にデータを収集して、分析を開始する予定である。仮説生成型(質的)の研究に関しては、質的データの収集を行い、文献調査を続け、仮説の再構築を繰り返す。量的調査を行う受講者には質問票を完成させ、データ収集のためのサンプリング作業を始めてもらい、質的調査を行う受講者にはインタビューガイドの作成を行い、データを収集する。それらに関して助言・指導する。調査の実施とデータ分析の開始が目標である。調査の手法およびデータ分析の理解を到達目標とする。

授業内容

- 以下の内容と順序で授業を進めていく予定である(諸般の事情により変更の可能性はある)。以下、量的研究と質的研究に分けて(並列して)記す。
- 第1回：理論モデル・仮説の確認と再検討(量的)あるいは調査手法の決定(質的)
 - 第2回：リサーチデザインの明確化と質問票あるいはインタビューガイドの作成
 - 第3回：質問票あるいはインタビューガイドの再検討
 - 第4回：質問票あるいはインタビューガイドの完成
 - 第5回：データ収集に伴う指導
 - 第6回：データ収集の開始
 - 第7回：量的研究-収集データの入力；質的研究-コーディング作業1
 - 第8回：量的研究-収集データの記述統計とデータクリーニング；質的研究-コーディング作業2
 - 第9回：量的研究-収集データの統計解析：因子分析；質的研究-コーディング作業3
 - 第10回：量的研究-収集データのデータの検定；質的研究-コーディング作業4
 - 第11回：量的研究-収集データの統計解析：仮説の検証1；質的研究-コーディングストラクチャーの再検討1
 - 第12回：量的研究-収集データの統計解析：仮説の検証2；質的研究-コーディングストラクチャーの再検討2
 - 第13回：量的研究-収集データの統計解析：仮説の検証3；質的研究-データ最終週の準備
 - 第14回：量的研究-仮説検証結果の発表；質的研究-調査の継続&新たなデータ収集

履修上の注意

求められたアサイメントの提出は期日を厳守して欲しい。発表の場合には、ハンドアウトやレジュメを用意する必要がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

上記授業内容に合わせて、それらについて毎週発表するためにペーパーを書き、提出する。

教科書

- ・専門分野に関しては、参考書欄リストから選択する可能性がある。
- ・社会調査および統計分析に関しては以下のとおり：
 1. 大谷真介・水戸崇二・後藤範章・小松洋・永野武(編著)『新・社会調査へのアプローチ：理論と方法』ミネルヴァ書房、2013
 2. 石村貞夫・石村光資朗『SPSSでやさしく学ぶ統計解析第3版』東京図書、2007
 3. 小塩真司『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析[第2版]』東京図書、2011

参考書

- [1]書籍
 1. 猪俣正雄(1992)『組織のコミュニケーション論』中央経済社
 2. 二村敏子(2004)『現代ミクロ組織論』有斐閣
 3. ウェイン・ペーカー (2000)『ソーシャル・キャピタル』(中島豊訳、2001)、ダイヤモンド社
 4. 安田雪『ネットワーク分析』(1997、新曜社)
 5. R. F. ダフト(2001)『組織の経営学』(高木晴夫監訳、2002)、ダイヤモンド社
 6. 桑田耕太郎・田尾雅夫(1998)『組織論』、有斐閣
 7. ステファン・ロビンス(高木春夫監訳、2009)『新版・組織行動のマネジメント』(ダイヤモンド社) [Robbins, S. P. Essentials of Organizational Management, Prentice-Hall]
 8. Keith F. Punch (2005) [河合隆男翻訳]『社会調査入門—量的調査と質的調査の活用』[Introduction to Social Research: Quantitative and Qualitative Approaches, 2005, Sage]
 9. Gary L. Kreps (1989) Organizational Communication: Theory and Practice, Allyn & Bacon
 10. Gerald M. Goldhaber (1993) Organizational Communication, Brown & Benchmark
 11. Cynthia Stohl (1995) Organizational Communication: Connectedness in Action, Sage
 12. Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research, and Methods, Sage
 13. Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage
 14. Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編)、Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) 一、JAI Press
- [2]専門ジャーナル
 1. Human Communication Research
 2. Human Relations
 3. Organization Science
 4. International Journal of Business Communication
 5. Journal of Organizational Behavior
 6. Academy of Management Journal
 7. Academy of Management Review
 8. 『日本コミュニケーション研究』
 9. 『組織科学』
 10. 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

授業において、事前に提出される仮説の課題および質問票やインタビューガイドのコメントを提示し、議論し、解説しながらフィードバックを行う。

成績評価の方法

- (1)アサイメント:50%
- (2)ファイナルペーパー:50%

その他

研究計画に沿って、進捗状況を自己管理することが望ましい。

科目ナンバー：(IC) COM622J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（組織コミュニケーション論）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口	生史

授業の概要・到達目標

仮説検証型(量的)の調査を行う場合は、データ分析の修正と完了、そして、結果(仮説検証)の考察を行い、それを論文としてまとめる指導をする。仮説生成型(質的)の調査を行う場合には、データ分析に基づき仮説を再生成するプロセスを継続し、最終仮説を生成し、論文としてまとめるための指導をする。クラスでは、毎週、修士論文を構成する各章を発表し、議論、批評、解説、コメントに基づいて、修正を繰り返し、研究論文の作成を進める。また、研究成果を論文にまとめる方法や参考文献提示のフォーマットに関しても同時に指導する。特に、単なる調査結果を提示するだけの報告書ではなく、学術論文として、研究結果における新たな発見、そしてそれが学術的および実践的にいかに貢献するか、いかなるインプリケーションがあるのかを提示できるように指導する。修士論文完成が到達目標である。

授業内容

- おおよそ、以下の予定とする(諸般の事情により変更の可能性はある)。
- 第1回：データ分析および結果の再検討
 - 第2回：第1章発表
 - 第3回：第1章修正発表
 - 第4回：第2章発表
 - 第5回：第2章修正発表
 - 第6回：第3章発表
 - 第7回：第3章修正発表
 - 第8回：第4章発表
 - 第9回：第4章修正発表
 - 第10回：第5章発表
 - 第11回：第5章修正発表
 - 第12回：全体修正(1)
 - 第13回：全体修正(2)
 - 第14回：修士論文完成

履修上の注意

毎週のアサイメント(ペーパー)は必ず提出すること。毎週の発表には、提出ペーパーの他に必要があればハンドアウトやレジュメを用意すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

上記授業内容に合わせて、毎週、ペーパーを書き提出するか(準備)、前週に修正を求められた場合は、修正ペーパーを提出する(復習)こと。データの分析は、授業に来る前に引き、その結果を授業で報告することが必要である。

教科書

- ・専門分野に関しては、参考書欄リストから選択する可能性がある。
- ・社会調査および統計分析に関しては以下のとおり：
 1. 小塩真司(2011)『SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析[第2版]』東京図書
 2. 石村貞夫(2005)『SPSSによる多変量データ解析の手順』東京図書

参考書

- [1]書籍
 1. 猪俣正雄(1992)『組織のコミュニケーション論』中央経済社
 2. 二村敏子(2004)『現代ミクロ組織論』有斐閣
 3. ウェイン・ペーカー (2000)『ソーシャル・キャピタル』(中島豊訳、2001)、ダイヤモンド社
 4. 安田雪(1997)『ネットワーク分析』、新曜社
 5. R. F. ダフト(2001)『組織の経営学』(高木晴夫監訳、2002)、ダイヤモンド社
 6. 桑田耕太郎・田尾雅夫(1998)『組織論』、有斐閣
 7. ステファン・ロビンス(高木春夫監訳、2009)『新版・組織行動のマネジメント』(ダイヤモンド社) [Robbins, S. P. Essentials of Organizational Management, Prentice-Hall]
 8. Keith F. Punch (2005) [河合隆男翻訳]『社会調査入門—量的調査と質的調査の活用』[Introduction to Social Research: Quantitative and Qualitative Approaches, 2005, Sage]
 9. Gary L. Kreps (1989) Organizational Communication: Theory and Practice, Allyn & Bacon
 10. Gerald M. Goldhaber (1993) Organizational Communication, Brown & Benchmark
 11. Cynthia Stohl (1995) Organizational Communication: Connectedness in Action, Sage
 12. Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research, and Methods, Sage
 13. Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage
 14. Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編)、Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) 一、JAI Press
- [2]専門ジャーナル
 1. Human Communication Research
 2. Human Relations
 3. Organization Science
 4. International Journal of Business Communication
 5. Journal of Organizational Behavior
 6. Academy of Management Journal
 7. Academy of Management Review
 8. 『日本コミュニケーション研究』
 9. 『組織科学』
 10. 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

授業内にて、事前に提出されるデータ分析の結果に対してクラス内で分析の仕方を確認し、修士論文の執筆に関しては、各章の事前提出文章にコメントをしたものの修正を検討する。

成績評価の方法

1. クラス発表&アサイメント:50%。
2. ファイナルペーパー (修士論文):50%

その他

文献調査は、継続して行うこと。文献調査は、専門ジャーナルを中心に行うことが望ましい。

科目ナンバー：(IC) INF632J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習（認知情報論）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（工学）	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

認知プロセスなどの心の研究を行なう場合の研究方法論について講じる。心の研究のように、明確な概念が確立していない対象を研究する場合、研究方法の検討が重要になる。その手がかりになる諸方法論、哲学、論理に関して学ぶ。(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・認知情報論の哲学的広がりを理解する
- ・研究テーマに合わせた研究方法の構築の仕方を身につける

授業内容

- 1) マインドサイエンス概論
- 2) 科学哲学
- 3) 知識論
- 4) 心の哲学
- 5) 世界観
- 6) 科学社会学
- 7) 科学心理学
- 8) 理論心理学
- 9) 公理と論証
- 10) 論理的体系
- 11) 科学理論とデータ
- 12) 理論の構築
- 13) 理論の拡充
- 14) 事例：人工知能への適用

履修上の注意

科学的方法論の基本が学習済みであることを想定して授業をする。

準備学習（予習・復習等）の内容

教科書による予習・復習が不可欠である。また、当該分野が未履修の者は、参考書にあげたような初歩的な文献で補習をしながら授業に参加する必要がある。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

石川幹人・渡辺恒夫編『入門・マインドサイエンスの思想～心の科学をめぐる現代哲学の論争』（新曜社）

クークラ『理論心理学の方法～論理・哲学的アプローチ』（北大路書房）

参考書

今田高俊編『社会学研究法～リアリティの捉え方』（有斐閣アルマ）

高野陽太郎・岡隆『心理学研究法～心を見つめる科学のまなざし』（有斐閣アルマ）

その他の研究方法論の書籍

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポート報告を五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) INF632J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習（認知情報論）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士（工学）	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

認知プロセスなどの心の研究を行なう場合には、還元主義や心身問題に関する哲学的素養が不可欠である。哲学的議論にもとづいて、新たな学際的な知見を引き出す可能性を模索する。

(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・認知情報論の哲学的討論が行える素養を確立する
- ・研究方法を吟味しながら究明をする技能を身につける

授業内容

- 1) 心のついで概念化
- 2) 還元による説明
- 3) 自然科学の枠組み
- 4) 自然主義的二元論
- 5) 現象判断
- 6) クオリアの取扱い
- 7) 意識と情報
- 8) 機械のうへの意識
- 9) 量子力学の解釈
- 10) 量子進化
- 11) 可能世界論
- 12) 同一性をめぐって
- 13) 神秘主義
- 14) 事例：心の科学の地平

履修上の注意

心の議論は、著者の哲学的スタンスで大きく違ってくるので、参考書で紹介するような文献で補って複眼的にとらえる必要がある。また、物理学的議論について拒否感を抱くことなく、取り組んでほしい。

準備学習（予習・復習等）の内容

教科書による予習・復習が不可欠である。また、当該分野が未履修の者は、参考書にあげたような文献で補習をしながら授業に参加する必要がある。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

ジョン・サル『マインド～心の哲学』（朝日出版社）

参考書

マッギン『意識の〈神秘〉は解明できるか』（青土社）

ペンローズ『心の影』（みすず書房）

チャーマーズ『意識する心～脳と精神の根本理論を求めて』（白揚社）

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポート報告を五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) COM612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(説得コミュニケーション論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

コミュニケーション批評 (Communication Criticism) について学ぶ。授業を通じて、(1)コミュニケーションの文献が読めるようになる、(2)イントロ、先行研究、方法論、分析と議論、まとめという論文の書き方を習得する、の2点を目標とする。春学期は、テキストとは何か、どのようなテキストを分析すべきか、どのような批判的方法論を当てはめるべきか、自分の解釈を議論として成立させるとはどういうことかを学ぶ。

授業内容

- 第1回：What is Rhetorical Analysis?
- 第2回：Close Textual Analysis (Read: Leff; Leff)
- 第3回：Dramatistic Criticism (Burke; Ling)
- 第4回：Fantasy Theme Analysis (Bormann; B, C & S)
- 第5回：Narrative Criticism (Fisher; Lewis)
- 第6回：Social Movement Criticism (Simons; Zaeske)
- 第7回：Generic Criticism (Campbell & Jamieson; Ware and Linkugel)
- 第8回：Ideological Criticism (McGee; Rushing & Frenzt)
- 第9回：Feminist Criticism (Campbell; Griffin)
- 第10回：Postmodern Criticism (B, J & P; Hyde)
- 第11回：Comparative Rhetoric (Foss & Foss; Kennedy)
- 第12回：Student Presentations on the Final Project 1
- 第13回：Student Presentations on the Final Project 2
- 第14回：まとめ

履修上の注意

履修生は、分担を決めて毎回教科書の内容をプレゼンテーションしてもらう。しっかり予習をして討論に参加できるように準備してくること。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を事前に読んで、討論と発表の準備をしておくこと。

教科書

Carl Burgchardt, (2000). Readings in Rhetorical Criticism. 2nd ed. Pennsylvania: Strata.

その他、コピーを配布する予定。その他、必要に応じて英語の資料を用いる。

参考書

参考書：河野哲也『レポート・論文の書き方入門』第3版、慶応義塾大学出版会、2002年

小笠原善康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2009年

戸田山和久『新盤 論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年

新堀聡『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』同文館出版、2002年

ハワード・ベッカー『ベッカー先生の論文教室』慶応義塾大学出版会、2012年

成績評価の方法

春学期秋学期共に、レポートを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めて教科書の内容を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) COM612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(説得コミュニケーション論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

コミュニケーション批評 (Communication Criticism) について学ぶ。授業を通じて、(1)コミュニケーションの文献が読めるようになる、(2)イントロ、先行研究、方法論、分析と議論、まとめという論文の書き方を習得する、の2点を目標とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 「テーマ」報告1
- 第3回 「テーマ」報告2
- 第4回 「リサーチ上の問題点」報告1
- 第5回 「リサーチ上の問題点」報告2
- 第6回 「先行研究のまとめ」報告1
- 第7回 「先行研究のまとめ」報告2
- 第8回 「研究方法論」報告1
- 第9回 「研究方法論」報告2
- 第10回 「本論」報告1
- 第11回 「本論」報告2
- 第12回 「本論」報告3
- 第13回 「結論」報告
- 第14回 まとめ

履修上の注意

しっかり予習をして討論に参加できるように準備してくること。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を事前に読んで、討論と発表の準備をしておくこと。

教科書

教科書：河野哲也『レポート・論文の書き方入門』第3版、慶応義塾大学出版会、2002年

参考書

参考書：ハワード・ベッカー『ベッカー先生の論文教室』慶応義塾大学出版会、2012年

小笠原善康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2009年

戸田山和久『新盤 論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年

新堀聡『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』同文館出版、2002年

成績評価の方法

学期末に、レポートを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めてリサーチの進行状況を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(家族社会学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

本演習では研究課題と方法論の具体化を目指し、設定された研究課題にかかわる先行研究を精査し、その現状と問題点を明らかにしたうえで、自らの研究テーマを絞り、適切な方法論を構築していく作業を行なう。

修士論文作成を念頭に前半は、主に先行研究の整理、作業仮説の構築と研究方法の検討を行なう。後半は具体的なテーマに絞り、実証または文献研究の実施を行ない、その分析結果をまとめ報告する作業を行なう予定である。

授業内容

- 第1回：演習内容の説明
- 第2回：先行研究の整理(1)
- 第3回：先行研究の整理(2)
- 第4回：先行研究の整理(3)
- 第5回：作業仮説の構築(1)
- 第6回：作業仮説の構築(2)
- 第7回：研究方法の検討(1)
- 第8回：研究方法の検討(2)
- 第9回：実証または文献研究の実施(1)
- 第10回：実証または文献研究の実施(2)
- 第11回：研究結果の報告(1)
- 第12回：実証または文献研究の実施(3)
- 第13回：実証または文献研究の実施(4)
- 第14回：研究結果の報告(2)

履修上の注意

とくになし。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に必要な文献などを予習しておくこと。

教科書

野々山久也・渡辺秀樹1999『家族社会学入門—家族研究の理論と技法』文化書房博文社

参考書

野々山久也編著2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
井上真理子編著2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)「授業への参加」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(家族社会学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

本演習は修士論文の作成を指導・援助することを目的とする。春学期で実施してきた実証または文献研究の結果を分析し、研究結果をこれまでの既存の研究枠組への位置づけや研究の独自性などを考察する。これらをもとにして、文章化する作業をし、随時に全体的な議論との整合性を考慮しながら、修士論文を作成するように、指導を行なう予定である。

授業内容

- 第1回：春学期演習内容の確認と秋学期演習内容の説明
- 第2回：実証または文献研究の結果報告
- 第3回：研究結果の分析(1)
- 第4回：研究結果の分析(2)
- 第5回：研究結果の分析(3)
- 第6回：研究結果の位置づけ(1)
- 第7回：研究結果の位置づけ(2)
- 第8回：研究結果の考察(1)
- 第9回：研究結果の考察(2)
- 第10回：研究結果の考察(3)
- 第11回：文章化作業(1)
- 第12回：文章化作業(2)
- 第13回：文章化作業(3)
- 第14回：全体像の点検

履修上の注意

特論演習(家族社会学) I を事前に履修しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で紹介した文献や必要な文献を調べておくこと。

教科書

野々山久也・渡辺秀樹1999『家族社会学入門—家族研究の理論と技法』文化書房博文社

参考書

野々山久也編著2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
井上真理子編著2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)「授業への参加」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM632J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(異文化間コミュニケーション) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

この授業では、異文化間コミュニケーションに関連した修士論文のテーマの検証と研究方法についてディスカッションを行いながら論文作成を進める。専門演習(異文化間コミュニケーション) IIで、受講生自身が設定したテーマについて、その意義と研究の可能性を再検討し、理論的仮説の構築、研究方法などについての知見を深めることを目標に、アドバイスを適宜行っていく。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：先行研究のまとめ1
- 第3回：先行研究のまとめ2
- 第4回：研究テーマの検証
- 第5回：研究テーマの修正
- 第6回：仮説の構築
- 第7回：仮説の修正
- 第8回：研究方法の設定
- 第9回：研究方法の検証と修正
- 第10回：クリティカル・ライティング:研究方法
- 第11回：フィードバック
- 第12回：調査準備1
- 第13回：調査準備2
- 第14回：調査準備3

履修上の注意

特になし。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業の進度に合わせ、修士論文を進めていくこと。

教科書

リーディングリストを授業内に配布する。

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

授業内課題(50%)
期末レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM632J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(異文化間コミュニケーション) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

特論演習(異文化間コミュニケーション) Iに続いて、異文化間コミュニケーションに関連した修士論文の完成を目指し、データの収集、分析、考察についてディスカッションとフィードバックを交えながら授業を進める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：データの収集:方法と実践
- 第3回：フィードバック1
- 第4回：データの分析:方法と実践
- 第5回：フィードバック2
- 第6回：分析結果の考察1
- 第7回：分析結果の考察2
- 第8回：クリティカル・ライティング1:分析結果
- 第9回：クリティカル・ライティング2:分析結果
- 第10回：フィードバック3
- 第11回：クリティカル・ライティング1:考察
- 第12回：クリティカル・ライティング2:考察
- 第13回：フィードバック4
- 第14回：全体の見直し

履修上の注意

特論演習(異文化間コミュニケーション) Iを先行履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業については、修士論文に取り組む中で必要となる情報やフィードバックを得る場と心得て、各自論文を進めること。

教科書

リーディングリストを授業内に配布する。

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

授業内課題(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) PHL652J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(生命論) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩渕 輝	

授業の概要・到達目標

生命論および生命思想史に関する専門的文献を講読し、参加者全員で議論する。また、修士論文の執筆に向けて、各自の研究テーマを掘り下げてもらう。
修士論文の執筆に必要な知識と技能を身につけることが目的である。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：修士論文の構想についての報告(1)前半
- 第3回：修士論文の構想についての報告(2)後半
- 第4回：専門的文献講読と議論A(1)前半
- 第5回：専門的文献講読と議論A(2)後半
- 第6回：研究テーマの再検討(1)前半
- 第7回：研究テーマの再検討(2)後半
- 第8回：学会発表に向けた準備(1)前半
- 第9回：学会発表に向けた準備(2)後半
- 第10回：専門的文献講読と議論B(1)前半
- 第11回：専門的文献講読と議論B(2)後半
- 第12回：研究中間報告(1)前半
- 第13回：研究中間報告(2)後半
- 第14回：aのみ:まとめ

履修上の注意

自分の研究テーマ以外にも広く関心を持ち、他の発表者が発表する際にも、進んで議論して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者以外の者も、発表者のテーマに関する文献調査など、十分な準備をした上で、演習に臨むこと。

教科書

使用しない。

参考書

『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』岩渕輝(春秋社)、2014年。
『生命観の歴史』C. U. M.スミス(八杉龍一 訳)全2巻(岩波書店)、1981年。
『生命と物質』T. S.ホール(長野敬 訳)全2巻(平凡社)、1990年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

レポートおよび発表担当時の報告70%、議論30%の比率で評価する。

その他

第1回目のイントロダクションでは、演習全体を理解する上で必要な重要事項を話すので、この回は、いつにもまして欠席しないよう注意すること。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) PHL652J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(生命論) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩渕 輝	

授業の概要・到達目標

春学期に引き続き、生命論および生命思想史に関する専門的文献を講読し、参加者全員で議論する。また、修士論文の執筆に向けて、各自の研究テーマを掘り下げてもらう。
修士論文の執筆に必要な知識と技能を身につけることが目的である。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：修士論文の構想についての再報告(1)前半
- 第3回：修士論文の構想についての再報告(2)後半
- 第4回：専門的文献講読と議論A(1)前半
- 第5回：専門的文献講読と議論A(2)後半
- 第6回：学会発表に向けた再準備(1)前半
- 第7回：学会発表に向けた再準備(2)後半
- 第8回：研究テーマ修正案の報告
- 第9回：専門的文献講読と議論B(1)前半
- 第10回：専門的文献講読と議論B(2)後半
- 第11回：修士論文の全体的構成と要旨の検討(1)前半
- 第12回：修士論文の全体的構成と要旨の検討(2)後半
- 第13回：研究をさらに発展させるための議論
- 第14回：aのみ:まとめ

履修上の注意

自分の研究テーマ以外にも広く関心を持ち、他の発表者が発表する際にも、進んで議論して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当者以外の者も、発表者のテーマに関する文献調査など、十分な準備をした上で、演習に臨むこと。

教科書

使用しない。

参考書

『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』岩渕輝(春秋社)、2014年。
『生命観の歴史』C. U. M.スミス(八杉龍一 訳)全2巻(岩波書店)、1981年。
『生命と物質』T. S.ホール(長野敬 訳)全2巻(平凡社)、1990年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

レポートおよび発表担当時の報告70%、議論30%の比率で評価する。

その他

第1回目のイントロダクションでは、演習全体を理解する上で必要な重要事項を話すので、この回は、いつにもまして欠席しないよう注意すること。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) ANT672J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(人類学と意識科学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この授業は1年次の専門演習に引き続き2年次の前期に配当されるもので、履修者は先行研究の成果を踏まえ、研究成果を修士論文という形にまとめていくことを視野に入れながら、自分自身の研究テーマに関する具体的な文献研究や調査・実験を進めていく。

調査や実験などの内容は履修者のテーマによって異なるが、心理学的な実験や質問紙調査とその分析、インタビュー調査や人類学的フィールドワークの実際など、履修者が各自のテーマに取り組む中で、研究の方法論自体についての理解も深められるように演習を進める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究成果の発表と検討(1)
- 第3回：研究成果の発表と検討(2)
- 第4回：研究成果の発表と検討(3)
- 第5回：研究成果の発表と検討(4)
- 第6回：研究成果の発表と検討(5)
- 第7回：研究成果の発表と検討(6)
- 第8回：研究成果の発表と検討(7)
- 第9回：研究成果の発表と検討(8)
- 第10回：研究成果の発表と検討(9)
- 第11回：研究成果の発表と検討(10)
- 第12回：研究成果の発表と検討(11)
- 第13回：研究成果の発表と検討(12)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習(予習・復習等)の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ANT672J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(人類学と意識科学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この授業は演習系の授業のまとめとして、修士論文という具体的な学術論文を執筆する作業を通じて、学術的な研究を行い、それを論文としてまとめ上げることを総合的に学べるように進められる。すなわち自らの設定したテーマにおける研究結果を先行研究の結果と照らしあわせて、どのように新しい知見が得られたのか、あるいは得られなかったのか、仮説は検証されたのか、反証されたのかを踏まえ、それらの議論を論理的に展開し、学術論文という形にまとめてあげていくための演習を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：論文執筆状況の報告と検討(1)
- 第3回：論文執筆状況の報告と検討(2)
- 第4回：論文執筆状況の報告と検討(3)
- 第5回：論文執筆状況の報告と検討(4)
- 第6回：論文執筆状況の報告と検討(5)
- 第7回：論文執筆状況の報告と検討(6)
- 第8回：論文執筆状況の報告と検討(7)
- 第9回：論文執筆状況の報告と検討(8)
- 第10回：論文執筆状況の報告と検討(9)
- 第11回：論文執筆状況の報告と検討(10)
- 第12回：論文執筆状況の報告と検討(11)
- 第13回：論文執筆状況の報告と検討(12)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習(予習・復習等)の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC622J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（現代思想論）I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本演習では、特に修士論文執筆者の指導を中心に、そのテーマと関連する著作の文献講読を行う。随時、参加者は成果報告を行い、それぞれのプロジェクトの進展を確認する。

授業内容

第1回 導入
 第2回 研究計画報告
 第3回 文献報告1
 第4回 文献報告2
 第5回 文献報告3
 第6回 研究成果発表1
 第7回 研究成果発表2
 第8回 文献報告4
 第9回 文献報告5
 第10回 文献報告6
 第11回 研究成果発表3
 第12回 文献報告7
 第13回 文献報告8
 第14回 まとめ・秋学期の課題確認と論文完成への展望

履修上の注意

すでに述べたように、本演習は参加者の論文執筆と文献の吟味のためにある。したがって、報告者は常に書かれた文章を用意し、到達点と以降の課題を明確にしておくこと。また、他の参加者も、積極的に報告者の成果に関わること。

準備学習（予習・復習等）の内容

指定されたテキストを発表者以外もしっかりと読み込んでくること。

教科書

特になし。

参考書

特になし。

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC622J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	特論演習（現代思想論）II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本演習では、特に修士論文執筆者の指導を中心に、そのテーマと関連する著作の文献講読を行う。随時、参加者は成果報告を行い、それぞれのプロジェクトの進展を確認する。

授業内容

第1回 導入
 第2回 研究計画報告
 第3回 文献報告1
 第4回 文献報告2
 第5回 文献報告3
 第6回 研究成果発表1
 第7回 研究成果発表2
 第8回 文献報告4
 第9回 文献報告5
 第10回 文献報告6
 第11回 研究成果発表3
 第12回 文献報告7
 第13回 文献報告8
 第14回 まとめ・論文完成への展望

履修上の注意

すでに述べたように、本演習は参加者の論文執筆と文献の吟味のためにある。したがって、報告者は常に書かれた文章を用意し、到達点と以降の課題を明確にしておくこと。また、他の参加者も、積極的に報告者の成果に関わること。

準備学習（予習・復習等）の内容

指定されたテキストを発表者以外もしっかりと読み込んでくること。

教科書

特になし。

参考書

特になし。

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) PSY612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(社会心理学) I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

本演習は実証研究の実施に向けた作業と、修士論文の執筆指導を行う。専門演習Ⅱで作成した研究計画に基づき実施計画の立案とチェックを行う。その作業と並行して文献講読で議論を深め、修士論文の問題と目的部分を洗練させる。

授業内容

- 第1回 インTRODクッションおよび研究の進捗の確認
 - 第2回 実施計画の策定にむけた議論(1)
 - 第3回 実施計画の策定にむけた議論(2)
 - 第4回 文献講読(1)
 - 第5回 文献講読(2)
 - 第6回 実施計画の発表、再確認
 - 第7回 文献講読(3)
 - 第8回 文献講読(4)
 - 第9回 研究報告(問題と目的草案の報告)
 - 第10回 実施計画の確定に向けた議論
 - 第11回 文献講読(5)
 - 第12回 実施計画の確定、研究実施
 - 第13回 研究報告(問題と目的の再確認、分析方針の共有)
 - 第14回 分析結果の報告・議論
- ※授業内容は受講者の作業進捗状況に応じて調整する。

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で指示された課題にはしっかり取り組むこと。質問等は授業前に整理しておくこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

授業内で適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

発表内容については授業内でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表ならびに授業への取り組み(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) PSY612J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	特論演習(社会心理学) II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

本演習では、修士論文を完成させるための指導を行う。

授業内容

- 第1回 インTRODクッションと進捗確認
 - 第2回 分析結果の確認と議論(1)
 - 第3回 分析結果の確認と議論(2)
 - 第4回 分析結果の確認と議論(3)
 - 第5回 結果セクションの執筆指導
 - 第6回 結果セクションの中間報告
 - 第7回 研究結果の考察と議論(1)
 - 第8回 研究結果の考察と議論(2)
 - 第9回 研究結果の考察と議論(3)
 - 第10回 研究結果の考察と議論(4)
 - 第11回 考察セクションの執筆指導
 - 第12回 考察セクションの中間報告
 - 第13回 論文全体の見直しとフィードバック(1)
 - 第14回 論文全体の見直しとフィードバック(2)
- ※授業内容は受講生の作業進捗状況に応じて変更する。

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

授業で指示された課題にはしっかり取り組むこと。質問等は授業前に整理しておくこと。

教科書

特に定めない。

参考書

授業内で適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

発表内容については授業の都度フィードバックを行う。

成績評価の方法

発表ならびに授業への取り組み(100%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM521J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(組織コミュニケーション論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 山口 生史		

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要

組織における対人コミュニケーション(リーダーの影響戦術研究やファシリテーションなど)と組織行動学(ミクロ組織論)のテーマ(リーダーシップ、動機づけ、コンフリクト・マネジメント、チーム・ワーク、組織公正、メンタルヘルスなど)との関係に焦点をあてた研究をする。組織メンバー間の相互作用というミクロ的視点からの組織コミュニケーション論である。「組織コミュニケーション学」の専門書と「組織行動学」の専門書からの重要な章を精読してもらい、それに関して講義する。また、いくつかのジャーナル掲載論文を精読してもらうこともあるだろう。それらを中心に下記講義テーマの解説を行う予定である。

II. 到達目標

(1) 組織メンバー間の対人コミュニケーションがメンバーの態度や組織行動にいかに関与するかを理解すること; (2) 専門書、ジャーナル論文を的確に読み、研究の観点からまとめて発表できるコンピテンスを習得すること。

授業内容

主要な講義テーマは以下の通りである(諸事情により変更の可能性はある)。

- 第1回: 組織コミュニケーション学の実証的発展と研究動向
- 第2回: 組織とコミュニケーション: 組織における対人コミュニケーションの機能
- 第3回: リーダーシップと組織コミュニケーション
- 第4回: 影響戦術のコミュニケーション
- 第5回: 動機づけと組織コミュニケーション
- 第6回: ケーススタディ(1)
- 第7回: ダイバーシティ・マネジメントとコンフリクト・コミュニケーション
- 第8回: コンフリクトにおける交渉コミュニケーション
- 第9回: ジェンダー・マネジメントと組織コミュニケーション
- 第10回: 組織公正と組織コミュニケーション
- 第11回: 組織の倫理とコミュニケーション
- 第12回: メンタルヘルスと組織コミュニケーション
- 第13回: ワーク・グループ、ワーク・チームのコミュニケーション
- 第14回: ケーススタディ(2)

履修上の注意

毎週のリーディングアサインメントをよく理解し、議論への積極的参加が望ましい。求められたアサインメントの提出は期日を厳守して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎週、事前リーディングのマテリアルを与えるか指定するので、必ず精読していただく必要がある。また、授業で配布した資料に関して質問がある場合は、自分で多少調べたうえで、次週質問をすること。

教科書

『新版・組織行動のマネジメント』、ステファン・ロビンス、([高木晴夫監訳、[2009]、(ダイヤモンド社) [Robbins, S. P. (2005)Essentials of Organizational Management (8th ed.), Prentice Hall.

参考書

[1]書籍

- 1. 『組織のコミュニケーション論』、猪俣正雄、1992 (中央経済社)
- 2. 『組織論』、桑田耕太郎・田尾雅夫、1998 (有斐閣)
- 3. 『現代ミクロ組織論』、三村敏子、2004 (有斐閣)
- 4. 『成果主義を活かす自己管理型チーム』、山口生史(編著)、2005 (生産性出版)
- 5. 『ビジネス心理: マネジメント心理編』、山口生史・匠英一(監修)、日本ビジネス心理学会(編)、2013 (中央経済社)
- 6. Gerald M Goldhaber (1993) Organizational Communication, Brown & Benchmark
- 7. Cynthia Stohl (1995) Organizational Communication: Connectedness in Action, Sage
- 8. Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research, and Methods, Sage
- 9. Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage
- 10. Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編)、Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) ー、JAI Press

[2]専門ジャーナル

- 1. Human Communication Research
- 2. Human Relations
- 3. International Journal of Business Communication
- 4. Journal of Organizational Behavior
- 5. Journal of Applied Psychology
- 6. Journal of Management Journal
- 7. Journal of Management Review
- 8. 『日本コミュニケーション研究』
- 9. 『組織科学』
- 10. 『産業・組織心理学会』

課題に対するフィードバックの方法

毎週の事前提出のサマリーペーパー等課題に関して、クラス内で解説をし、ディスカッションをすることでフィードバックをする。

成績評価の方法

- (1)課題:50%
- (2)ファイナルペーパー:50%

その他

授業内容に関して文献調査することが望ましい。

科目ナンバー：(IC) COM521J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(組織コミュニケーション論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 山口 生史		

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要

このクラスでは、組織構造とフォーマルおよびインフォーマルコミュニケーションの機能、コミュニケーション・オーデイト研究、組織内のコミュニケーション構造(ネットワーク理論および分析)、ソーシャルキャピタルの研究に焦点をあてた講義をする。その視点は、マクロあるいはメゾ組織論に基づくコミュニケーション研究である。コミュニケーション・オーデイト(Communication Audits)、「ネットワーク理論」、「ソーシャルキャピタル」、「マクロ組織論」の専門書、あるいはジャーナル掲載論文を精読してもらい、それらを中心に下記講義テーマの解説を行う予定である。

II. 到達目標

組織の中の構造としてのコミュニケーションの基本概念を理解してもらうことが目標である。

授業内容

主要な講義テーマは以下の通りである(諸事情により変更の可能性はある)。

- 第1回: マクロ的視点の組織コミュニケーション: マクロ組織論との接点
- 第2回: 組織構造とフォーマルコミュニケーション
- 第3回: インフォーマルコミュニケーションとそのネットワーク
- 第4回: コミュニケーション・オーデイト: 理論
- 第5回: コミュニケーション・オーデイト: 量的研究
- 第6回: コミュニケーション・オーデイト: 質的研究
- 第7回: ネットワーク理論とネットワーク分析
- 第8回: 弱い紐帯・強い紐帯(Granovetter, 1973) と組織コミュニケーション・ネットワーク
- 第9回: 空隙(構造の穴)理論(Burt, 1992) と組織コミュニケーション・ネットワーク
- 第10回: 関係的ソーシャルキャピタルと組織コミュニケーション: 信頼の概念
- 第11回: 組織コミュニケーションとソーシャルキャピタル
- 第12回: ソーシャルキャピタル発展のための組織コミュニケーション戦略
- 第13回: コミュニケーション・クライメット(風土)と組織文化
- 第14回: 組織の中の異文化コミュニケーション

履修上の注意

毎週のリーディングアサインメントをよく理解し、議論への積極的参加が望ましい。求められたアサインメントの提出は期日を厳守して欲しい。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎週、事前リーディングのマテリアルを与えるか指定するので、必ず精読していただく必要がある。また、授業で配布した資料に関して疑問があれば自分で多少調べたうえで、次週質問をすること。

教科書

特に指定しない。

参考書

[1]文献

- 1. 『コミュニケーション・オーデイト』、C. W. ダウンズ、1988、(太田正孝監訳、1999) (CAP出版)
- 2. 『ソーシャル・キャピタル』、ウェイン・ベーカー、2000 (中島豊訳、2001) (ダイヤモンド社)
- 3. 『競争の社会的構造: 構造的空隙の理論』、ロナルド・S・バート、1992 (安田雪訳、2006) (新曜社)
- 4. 『ネットワーク分析』、安田雪、1997 (新曜社)
- 5. 『組織の経営学』、R. F. ダフト、2001 (高木晴夫監訳、2002)、(ダイヤモンド社)
- 6. 『組織論』、桑田耕太郎・田尾雅夫、1998 (有斐閣)

[2]専門ジャーナル

- 1. Administrative Science Quarterly
- 2. Organization Science
- 3. Academy of Management Journal
- 4. Academy of Management Review
- 5. 『組織科学』

課題に対するフィードバックの方法

毎週の事前提出のサマリーペーパー等課題に関して、クラス内で解説をし、ディスカッションをすることでフィードバックをする。

成績評価の方法

- (1)課題:50%
- (2)ファイナルペーパー:50%

その他

授業内容に関して文献調査することが望ましい。

科目ナンバー：(IC) INF531J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(認知情報論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

情報社会における人間の認知行動のとらえ方について講じる。

情報コミュニケーションにまつわる構造的問題を解決する方法を、認知の傾向性を知ることによって探る。

さまざまな人間の感情や欲求をとりあげるが、たとえば道徳性の認知発達について論じる。

(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・認知行動の由来を、生物進化の歴史に位置付けて理解する
- ・現代の情報社会における人間の生得的問題を議論できる技能を身につける

授業内容

- 1) 生物進化と人類の誕生
- 2) 環境適応の心理的側面
- 3) 血縁びいきと仲間びいき
- 4) 認知発達の進化的影響
- 5) 二重過程理論
- 6) 感情と共通通貨
- 7) 意思決定と社会制度
- 8) 集団の規模の問題性
- 9) サイコパスなどの特異心理
- 10) 正義と公正の由来
- 11) 道徳の進化的獲得
- 12) 理性の役割
- 13) 可能世界論と想像性
- 14) 事例: コミュニケーションへの応用

履修上の注意

心理学の基礎知識は履修済みであることを想定して授業をする。未履修の者は、参考書を読んで下調べしたうえで授業に参加する必要がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書をもとに予習・復習をしたうえで、授業にのぞんでください。

分担して教科書の内容のレジメ作成を事前に行ったうえで、授業に参加する必要があります。

教科書

シナン・アラル『デマの影響力』(ダイヤモンド社)

参考書

- 石川幹人『だからフェイクにだまされる』(ちくま新書)
 - マイケル・トマセロ『コミュニケーションの起源を探る』(勁草書房)
 - ジョシュア・グリーン『モラル・トライブズ(上・下)』(岩波書店)
 - ジョナサン・ハイト『しあわせ仮説』(新曜社)
 - 平石界ほか『進化心理学を学びたいあなたへ』(東京大学出版会)
- その他の認知科学に関する本を授業で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポートを五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) INF531J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(認知情報論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

(概要)

認知プロセスなどの心の研究を行なう場合には、脳神経生理学と情報処理の素養が不可欠である。

両者を関連づける大著にもとづいて、新たな学際的な知見を引き出す手法を講じる。

(到達目標)

次の項目を目標とする。

- ・認知行動の源泉となる脳機能を、情報システム論の視点から理解する
- ・現代の情報社会における人間のあり方を議論する技能を身につける

授業内容

- 1) 計算する機械
- 2) 論理と限界
- 3) 複雑性と秩序
- 4) 情報理論
- 5) 意識と無意識
- 6) 結びつけ問題
- 7) 自由意志
- 8) 意識世界と時空間
- 9) 情報と宇宙論
- 10) 心の情報学
- 11) 人工知能論
- 12) 情報ネットワーク
- 13) メディアと身体
- 14) 事例: コミュニケーション技術への応用

履修上の注意

情報科学の基本が学習済みであることを想定して授業をする。未履修の者は参考書で紹介するような文献で補習をしながら授業に参加する必要がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書をもとに予習・復習をしたうえで、授業にのぞんでください。

分担して教科書の内容のレジメ作成を事前に行ったうえで、授業に参加する必要があります。

教科書

ノーレットランダーシュ『ユーザー・イリュージョン〜意識という幻想』(紀伊国屋書店)

参考書

- 西垣通『基礎情報学』(NTT出版)
- その他の参考書は授業で指定する。

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

授業への参画度合いとレポートを五分五分で評価する。

その他

履修者との協議で、授業内容や教科書を変更することがある。

科目ナンバー：(IC) COM511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(説得コミュニケーション論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

コミュニケーション批評 (Communication Criticism) について学ぶ。メディア批評の理論と実際及び、映画批評を中心にカルチュラル・スタディーズについても学ぶ。授業を通じて、(1) 英語のコミュニケーション批評の論文が読めるようになる、(2) イントロ、先行研究、方法論、分析と議論、まとめという論文の書き方を習得する、の2点を目標とする。

授業内容

- 第1回：Communication Criticism Today
- 第2回：Analyzing Texts
- 第3回：Writing Critical Essays
- 第4回：Accurate Interpretation: Verifying Representation and Interpretation
- 第5回：Formal Criticism: The Aesthetic Worth of a Message
- 第6回：Neoclassical Criticism: Communication as Persuasion
- 第7回：Semiotic Codes: Verbal, Visual, Acoustic, and Performed Texts
- 第8回：Social Criticism: Codes, Relationships, and Power
- 第9回：Value Analysis: Understanding Culture in Value Systems
- 第10回：Narrative Analysis: Reading Culture Through Stories
- 第11回：Psychoanalytic Criticism: The Interaction of the Conscious and the Unconscious
- 第12回：Ideological Criticism: Critiquing Institutions and Empowering Social Groups.
- 第13回：Student Presentations I
- 第14回：Student Presentations II

履修上の注意

教科書が英語なので、しっかり予習をして討論に参加できるように準備してくること。

準備学習(予習・復習等)の内容

割り当てられた教科書の章を読んでおくこと。

教科書

Malcolm Sillars & Bruce Gronbeck, Communication Criticism: Rhetoric, Social Codes, Cultural Studies. (Waveland Press, 2001).

参考書

(編) 鈴木健、岡部朗一『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』世界思想社、2008年

成績評価の方法

学期末に、英語のエッセーを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めて論文の内容を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) COM511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(説得コミュニケーション論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

ポストモダニズム (Postmodernism) について学ぶ。授業を通じて、(1)「近代」に対する批判の基礎文献を読めるようになること、(2) ポストモダニズムの社会学と政治学における貢献と限界に関する基礎を学ぶこと、の2点を目標とする。

授業内容

- 第1回 In Search of the Postmodern (第1章)
- 第2回 Foucault and the Critique of Modernity I (第2章前半)
- 第3回 Foucault and the Critique of Modernity II (第2章後半)
- 第4回 Deleuze and Guattari I (第3章前半)
- 第5回 Deleuze and Guattari II (第3章後半)
- 第6回 Baudrillard en route to Postmodernity I (第4章前半)
- 第7回 Baudrillard en route to Postmodernity II (第4章後半)
- 第8回 Lyotard and Postmodern Gaming I (第5章前半)
- 第9回 Lyotard and Postmodern Gaming II (第5章後半)
- 第10回 Marxism, Feminism, and Political Postmodernism I (第6章前半)
- 第11回 Marxism, Feminism, and Political Postmodernism II (第6章後半)
- 第12回 Critical Theory and Postmodern Theory I (第7章前半)
- 第13回 Critical Theory and Postmodern Theory II (第7章後半)
- 第14回 Toward the Reconstruction of Critical Social Theory (第8章)

履修上の注意

教科書が英語なので、しっかり予習をして討論に参加できるように準備してくること。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎週、割り当てられた教科書の章を読んで来ること。

教科書

Best, S., & Kellner, D. Postmodern Theory: Critical Interrogations. New York: The Guilford Press, 1991.

参考書

(編) 鈴木健、岡部朗一『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』世界思想社、2008年

成績評価の方法

学期末に、エッセーを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めて論文の内容を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(家族社会学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

家族という身近な集団を通して、家族形成をめぐる社会環境の変化からスタートし、結婚すること、子どもをもつことの現代的意義を問い、また日本家族のみに限らず、アジアの家族、欧米の家族の内実も検証する。最後に家族の抱える問題点や家族をめぐる社会政策まで取り上げる。春学期では主に家族形成・家族関係の多様性について学習し、主観的に捉えがちな家族を相対化するとともに、家族と外的環境とのダイナミックな力学を捉えられる視点の習得を目指す。

授業内容

授業は「Part 1 家族形成」「Part 2 家族関係」「Part 3 家族問題」「part 4 家族と社会政策」の4パートで構成される。
 第1回：序説 家族をめぐる社会経済的環境
 第2回：part 1.1 日本の恋愛・結婚事情
 第3回：part 1.2 非婚カップル
 第4回：part 1.3 国境を越えた結婚
 第5回：part 1.4 子どもをもつこと—少子化の真相
 第6回：patr 2.1 日本の家族関係(1)—性別役割分業の実態
 第7回：part 2.2 日本の家族関係(2)—高齢者の扶養と介護の実態
 第8回：part 2.3 アジアの家族関係
 第9回：part 2.4 欧米の家族関係
 第10回：part 3.1 家族問題
 第11回：part 3.2 離婚
 第12回：part 4.1 家族と社会政策—日本
 第13回：part 4.2 家族と社会政策—アジア諸国と欧米の動向
 第14回：まとめと総括

履修上の注意

家族社会学 I のみの受講を可とする。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業前に、指定資料と文献を予習しておくこと。

教科書

参考書

野々山久也編著 2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
 井上真理子編著 2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)「授業への参加」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(家族社会学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

家族という身近な集団を通して、戦後日本社会のあり方と変化のトレンドを把握し、社会や個人にとり、家族はどのような存在であったのか、また現在ではどのような機能を果しているかを理解する。秋学期では、主に家族の形成原理と戦後日本の家族・親族の在り方を学習し、家族を形成する原理を理解したうえで、家族や社会変動の真相を見極められる眼力の養成を目指す。

授業内容

授業は「Part 1 家族の形成原理」「Part 2 戦後家族変容の通説」「Part 3 戦後家族変容の真相」の3パートで構成される。
 第1回：授業の全体像の説明
 第2回：part 1.1 家族の定義
 第3回：part 1.2 家族の形成原理
 第4回：part 1.3 家族・親族制度
 第5回：part 1.4 日本の伝統的な家族・親族
 第6回：patr 2.1 データからみる戦後日本の家族・親族
 第7回：part 2.2 戦後家族・親族の変容(1)—家族社会学の2つの通説
 第8回：part 2.3 戦後家族・親族の変容(2)—家族社会学パラダイムの転換
 第9回：part 3.1 家族の持つ連続性・持続性
 第10回：part 3.2 今日の親子関係の実態
 第11回：part 3.3 親子関係の歴史的变化
 第12回：part 3.4 墓や祖先祭祀
 第13回：part 3.5 日本の特徴—中国や韓国との比較
 第14回：まとめと総括

履修上の注意

とくになし。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業前に、指定資料と文献を予習しておくこと。

教科書

施利平 2012『戦後日本の親族関係—核家族化と双系化の検証』勁草書房

参考書

野々山久也編著 2009『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社
 井上真理子編著 2010『家族社会学を学ぶ人のために』世界思想社

成績評価の方法

「授業への貢献度」(30%)「授業への参加」(30%)「授業への取り組みの積極性」(40%)

その他

家族社会学 I を事前に受講しておくことが望ましい。

科目ナンバー：(IC) COM531J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(異文化間コミュニケーション) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

異文化間コミュニケーション研究 I・II を通し、「異文化間コミュニケーションの理論と実践」をテーマに、異文化接触時に当事者間に起きる心理的、社会的過程をコミュニケーションに焦点を当てて授業を進める。異文化間コミュニケーションの基礎的な資料を日米のテキストから選び、比較しながら読み進める（I では日本語を II では英語のテキストを用いる）。扱うトピックについて、単に文献を読むのではなく、事例研究や関連アクティビティを通して、理解を深める。

授業内容

- 第1回：異文化コミュニケーションを学ぶということ
- 第2回：国民国家とシティズンシップの変容
- 第3回：トランスナショナルな移民ネットワーク
- 第4回：労働市場と外国人労働者の受け入れ
- 第5回：階層構造のなかの移民、マイノリティ
- 第6回：グローバル化のなかの福祉社会
- 第7回：移民・外国人の子どもたちと多文化教育 1
- 第8回：移民・外国人の子どもたちと多文化教育 2
- 第9回：人の国際移動とジェンダー
- 第10回：途上社会の貧困・開発・公正
- 第11回：在日朝鮮人のジェンダーとアイデンティティ
- 第12回：ヒスパニックを通してみるアメリカ社会
- 第13回：フランス移民第二世代のアイデンティティと教育
- 第14回：まとめとふりかえり

履修上の注意

特になし。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う内容については予めよく読んで授業に臨むこと。

教科書

宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂編(2015)『国際社会学』有斐閣

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

授業での討議参加(40%)
Paper (60%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM531J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(異文化間コミュニケーション) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

「専門研究(異文化間コミュニケーション) I」に続き、異文化接触時に起こる心理的、社会的過程をコミュニケーションに焦点を当てて授業を進める。特に、本年度は Transnational Chinese Students を対象に、日本を含む海外で生活する彼らが留学生から市民に変容していく過程に関して理解を深める。また、英語の文献を精読することで、関連概念や定義を英語で理解できるようにする。

授業内容

- 第1回：Introduction to class
- 第2回：Foreign residents in Japan
- 第3回：How and why Chinese people decide to study abroad
- 第4回：A century of Chinese student migration to Japan
- 第5回：Discussion 1
- 第6回：Student migration life in Japan
- 第7回：Careers in Japan
- 第8回：Discussion 2
- 第9回：Dilemmas of education, work, and marriage abroad
- 第10回：Freedom won and lost
- 第11回：Discussion 3
- 第12回：Decisions about returning
- 第13回：Life spanned across borders
- 第14回：Discussion & Wrap-up

履修上の注意

「専門研究(異文化間コミュニケーション) I」を先行履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で取り上げる章は、授業前に予めよく読んでおくこと。読んであることを前提に授業を進める。

教科書

Liu-Farrer, G. (2011). Labour migration from China to Japan. Routledge.

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

授業討議への積極的な参加(50%)、授業内課題(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) PHL551J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(生命論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩淵 輝	

授業の概要・到達目標

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナー(1801-1887)は、独特の生命思想を残したことで知られている。現代では、文科系と理科系の研究者の間でときに対話不能になることがあるが、哲学者であり自然科学者でもあったフェヒナーの生命思想を探ることは、文科系・理科系双方の研究者が生命思想について対話する可能性を開くための手がかりになると思われる。

フェヒナーは、自然科学の研究者の道を歩みながら、宗教哲学的な生命思想の書を公にした。後年は、精神物理学や実験美学を創始したが、それらの中にも独自の生命思想がこぼれ見える。そこで、フェヒナーの生命思想を深く理解するためには、フェヒナーの自然科学、とくに精神物理学と実験美学について学ぶ必要がある。

春学期『生命論 I』では、フェヒナーの自然哲学・キリスト教思想・精神物理学を中心にフェヒナーの生命思想を解説する。

本講義の目的は、精神物理学や実験美学など一見、生命思想とは無関係にみえるフェヒナーの遺産を探りつつ、フェヒナーの生命思想を深く理解すること、および、文科系/理科系の枠組みに囚われない自分独自の生命観を掘り下げていただくことにある。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：19世紀ドイツの学問界
- 第3回：フェヒナーの生涯(1)前期
- 第4回：フェヒナーの生涯(2)中期
- 第5回：フェヒナーの生涯(3)後期
- 第6回：フェヒナーとキリスト教
- 第7回：フェヒナー以前の自然哲学
- 第8回：フェヒナーの自然哲学
- 第9回：唯物論と物質主義の流行
- 第10回：フェヒナーの精神物理学
- 第11回：フェヒナーと心身問題
- 第12回：〈ゼーレ〉の問題について
- 第13回：精神物理学の生命思想
- 第14回：aのみ:まとめ

なお、講義内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

教科書として用いる英語の専門書は総ページ数446ページの大作であり、内容も哲学・宗教学から物理学・心理学・美学など極めて多岐にわたっている。そこで、これら幅広い学問分野に関心があり、かつ、英語を大量に読む覚悟のある者の参加が望まれる。毎回当番を決め、講義内容に関する重要事項を予習・復習した結果を発表していただく。少人数の講義であるため当番の回数は多くなるが予想される。意欲的な学生の参加を期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎時間、事前に教科書を精読し、さらに前回および次回の講義内容と関係する事柄について各種文献を調べた上で授業に臨むこと。

教科書

Nature from within: Gustav Theodor Fechner and his psychophysical worldview. Michael Heidelberger. Translated by Cynthia Klohr. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2004.

参考書

『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯―』岩淵輝(春秋社)、2014年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

試験は行なわない。発表当番時の発表内容と、学期末に課すレポート課題を中心に成績評価を行なう。具体的には、発表内容(60%)、学期末レポート(20%)、平常点(20%)を目安に成績をつける。

その他

第1回目のイントロダクションでは、講義全体を理解する上で必要な重要事項について話す。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) PHL551J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(生命論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(薬学)	岩淵 輝	

授業の概要・到達目標

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナー(1801-1887)は、独特の生命思想を残したことで知られている。現代では、文科系と理科系の研究者の間でときに対話不能になることがあるが、哲学者であり自然科学者でもあったフェヒナーの生命思想を探ることは、文科系・理科系双方の研究者が生命思想について対話する可能性を開くための手がかりになると思われる。

フェヒナーは、自然科学の研究者の道を歩みながら、宗教哲学的な生命思想の書を公にした。後年は、精神物理学や実験美学を創始したが、それらの中にも独自の生命思想がこぼれ見える。そこで、フェヒナーの生命思想を深く理解するためには、フェヒナーの自然科学、とくに精神物理学と実験美学について学ぶ必要がある。

秋学期『生命論 II』では、フェヒナーの実験美学・無意識概念・死生観を中心にフェヒナーの生命思想を解説する。

本講義の目的は、精神物理学や実験美学など一見、生命思想とは無関係にみえるフェヒナーの遺産を探りつつ、フェヒナーの生命思想を深く理解すること、および、文科系/理科系の枠組みに囚われない自分独自の生命観を掘り下げていただくことにある。

授業内容

各回のテーマは次の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：機械論の躍進
- 第3回：ダーウィン進化論の影響
- 第4回：フェヒナーの進化論
- 第5回：フェヒナー以前の美学(1)古代・中世
- 第6回：フェヒナー以前の美学(2)近代
- 第7回：フェヒナーの実験美学
- 第8回：フェヒナー以降の美学
- 第9回：フェヒナーの無意識概念
- 第10回：フェヒナーの死生観
- 第11回：フェヒナーの〈光の世界観〉
- 第12回：わが国におけるフェヒナーの生命思想の受容
- 第13回：生命思想に関する現代の諸問題
- 第14回：aのみ:まとめ

なお、講義内容は必要に応じて変更することがある。

履修上の注意

教科書として用いる英語の専門書は総ページ数446ページの大作であり、内容も哲学・宗教学から物理学・心理学・美学など極めて多岐にわたっている。そこで、これら幅広い学問分野に関心があり、かつ、英語を大量に読む覚悟のある者の参加が望まれる。毎回当番を決め、講義内容に関する重要事項を予習・復習した結果を発表していただく。少人数の講義であるため当番の回数は多くなるが予想される。意欲的な学生の参加を期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎時間、事前に教科書を精読し、さらに前回および次回の講義内容と関係する事柄について各種文献を調べた上で授業に臨むこと。

教科書

Nature from within: Gustav Theodor Fechner and his psychophysical worldview. Michael Heidelberger. Translated by Cynthia Klohr. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2004.

参考書

『生命(ゼーレ)の哲学 一知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯―』岩淵輝(春秋社)、2014年。

課題に対するフィードバックの方法

最終授業日に課題の解説と講評を行なう。

成績評価の方法

試験は行なわない。発表当番時の発表内容と、学期末に課すレポート課題を中心に成績評価を行なう。具体的には、発表内容(60%)、学期末レポート(20%)、平常点(20%)を目安に成績をつける。

その他

第1回目のイントロダクションでは、講義全体を理解する上で必要な重要事項について話す。

指導テーマ

19世紀ドイツのグスタフ・フェヒナーの生命思想、古代から現代までの生命観の変遷史。

科目ナンバー：(IC) ANT571J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(人類学と意識科学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この授業では、人類学と意識科学・意識研究の境界領域を学ぶことを目的に、基礎的な文献(主に英文)の輪読とディスカッションを行う。前期の「人類学と意識科学Ⅰ」では、どちらかという心理学的、意識科学的な側面を扱う。

具体的には、意識と無意識の神経生理学、意識の諸状態、夢と睡眠の生理心理学、その他、瞑想、精神展開(サイケデリック)体験、臨死体験などの特殊な意識状態と心理学、超心理学論争、意識研究における科学と疑似科学などのテーマを扱った文献を講読する。

毎週、担当者を決め、要旨の発表とそれにもとづく議論を行う。少人数の授業になることが予想されるため、実際に輪読する文献は、教科書としてリストアップした本の中から、履修者の関心領域に応じて選ぶ予定。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：講読文献の決定
- 第3回：基礎となる生理学・心理学(1)
- 第4回：基礎となる生理学・心理学(2)
- 第5回：基礎となる生理学・心理学(3)
- 第6回：基礎となる生理学・心理学(4)
- 第7回：意識の諸状態(1)
- 第8回：意識の諸状態(2)
- 第9回：意識の諸状態(3)
- 第10回：意識の諸状態(4)
- 第11回：意識研究の現状(1)
- 第12回：意識研究の現状(2)
- 第13回：意識研究の現状(3)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

授業は履修者による発表と議論を中心にして進めていく。履修者の積極的な参加が望まれる。

準備学習(予習・復習等)の内容

講読文献などの予定を決めながら進めていくので、事前に予習をしておくことが必須である。

教科書

例として下記の書籍を挙げておけるが、実際には履修者の関心領域を聞いて議論した上で選択する。基本的に英文の書籍だが、履修者の負担を軽減するため、できるだけ日本語訳を参考にできる文献をとりあげる。

Blackmore, S., Troscianko, E. T. (2018). *Consciousness: An Introduction (3rd. Edition)*, Routledge.
(和訳なし)
Godwin, M. (1994). *The Lucid Dreamer: A Waking Guide for the Traveler Between Worlds*, Element Books.
(ゴドウィン, M., 大瀧啓裕(訳)(1997).『夢の劇場—明晰夢の世界』青土社.)
Grinspoon, L., Bakalar, J. B. (1979, 1997). *Psychedelic Drug Reconsidered (2nd. Edition)*.
(グリンズプーン, L., バカラー, J. B., 杵渕幸子・妙木浩之(訳)(2000).『サイケデリック・ドラッグ—向精神物質の科学と文化』工作舎)
Lilienfeld, S. O., Lynn, S. J., Lohr, J. M. (2015). *Science and Pseudoscience in Clinical Psychology, 2nd Edition*.
(リリエンフェルド, S. O., リン, S. J., ロー, J. M., 巖島行雄・横田正夫・齋藤雅英(訳)(2007).『臨床心理学における科学と疑似科学』北大路書房.)

参考書

『彼岸の時間—〈意識〉の人類学—』蛭川立(春秋社)2002年(新装版は2009年)

課題に対するフィードバックの方法

演習形式の授業なので、授業中のディスカッションの中で随時、フィードバックを行う。また、授業に連動したWEBサイトでも授業内容についてのコメントを更新していく。

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) ANT571J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(人類学と意識科学)Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

この授業では、人類学と意識科学・意識研究の境界領域を学ぶことを目的に、基礎的な文献(主に英文)の講読とディスカッションを行う。

秋学期の「人類学と意識科学Ⅱ」では、どちらかという文化的、人類学的な側面を扱う。

具体的には、神話の構造人類学、呪術・宗教的文化の社会人類学、シャーマニズムの人類学と心理学、東洋思想のコスモロジー、精神文化の認知考古学などのテーマを扱った文献を講読する。

毎週、担当者を決め、要旨の発表とそれにもとづく議論を行う。少人数の授業になることが予想されるため、実際に輪読する文献は、教科書としてリストアップした本の中から、履修者の関心領域に応じて選ぶ予定。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：講読文献の決定
- 第3回：基礎となる人類学(1)
- 第4回：基礎となる人類学(2)
- 第5回：基礎となる人類学(3)
- 第6回：基礎となる人類学(4)
- 第7回：人類学と心理学の境界領域(1)
- 第8回：人類学と心理学の境界領域(2)
- 第9回：人類学と心理学の境界領域(3)
- 第10回：人類学と心理学の境界領域(4)
- 第11回：人類学と東洋思想の境界領域(1)
- 第12回：人類学と東洋思想の境界領域(2)
- 第13回：人類学と東洋思想の境界領域(3)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

少人数での演習になると予想されるので、内容は履修者の具体的な研究テーマに応じて調整したい。

準備学習(予習・復習等)の内容

講読文献などの予定を決めながら進めていくので、事前に予習をしておくことが必須である。

教科書

下記の書籍を例として挙げておけるが、実際には履修者の関心領域を考慮して調整する。専門的な議論を英文で読めるようになることは研究のための「必要悪」だが、履修者の負担を軽減するため、できるだけ日本語訳が出版されている文献をとりあげる。

Bateson, G. (1972). *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology*. University of Chicago Press.
(ベイトソン, G., 佐藤良明(訳)(2000).『精神の生態学』新思泉社.)
Campbell, J. (1997). *The Mythic Image*. Princeton University Press.
(キャンベル, J., 青木義孝(訳)(1991).『神話のイメージ』大修館書店.)
Scotton, B. W. et al. (1996). *Textbook of Transpersonal Psychiatry and Psychology*, Basic Books.
(安藤治他(訳)(1999).『テキスト トランスパーソナル心理学・精神医学』日本評論社.)
Leach, E. (1989). *Claude Levi-Strauss*, Penguin Books.
(リーチ, E., 吉田禎吾(訳)(2000).『レヴィ=ストロース』筑摩書房.)

参考書

『彼岸の時間—〈意識〉の人類学—』蛭川立(春秋社)2002年(新装版は2009年)

成績評価の方法

授業中の発表(50%)と議論(50%)を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC521J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(現代思想論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本講義のねらいは二つある。つまり、第一には大学院の科目として専門知識を身につけることであるが、二つ目はこうした知識を生かして個人としての身の周りの出来事や、われわれが現在直面している問題を「社会哲学的に考える」その態度を身につけることにある。

近代という時代には幕開けとともにすでに懐疑がよせられていた。人間性の進歩への期待とは裏腹に、理性が人間の自由の喪失と、欲望への従属をも同時に解放することを最初に嗅ぎ取ったのはルソーである。その前史を彼が文明批判として開始して以来、社会哲学は社会診断という課題を含む理論的試みとして営まれている。つまり社会哲学は、社会の展開と、それに伴う誤った動向を分析することをみずからに課してきたのだ。本講義では、この課題への社会理論の取り組みを現代にいたるまで辿ってみたい。ここで私はわれわれが日常的に社会について感じる具体的な不自由さや窮屈さ、理不尽さが、社会哲学的に語れることを示してみたい。そして最後に私は、理性への懐疑に落ち込まない思考法を模索したい。最終的には受講者とともに「われわれが生きる社会とは、どのような社会なのか」について考えたい。

授業内容

- 第1回：社会の現在と社会哲学の現在
- 第2回：社会学前史Ⅰー人間性と文明化ールソー
- 第3回：社会学前史Ⅰー人間性と文明化ーホップズ
- 第4回：社会学前史Ⅲー市民社会の分裂と物象化ーヘーゲル
- 第5回：社会学前史Ⅳー市民社会の分裂と物象化ーマルクス
- 第6回：世界像の呪術からの解放ー合理化過程の貫徹と鋼鉄の檻ーヴェーバーの同時代分析
- 第7回：合理化の弁証法ー理性の野蛮への退行ーフランクフルト学派とニーチェの影
- 第8回：知と権力の密かな同盟ーフーコーの理性批判(教育の規範、学校と刑務所、異性愛を「ノーマル」とする価値の成立)
- 第9回：社会の合理化のための二つの観点ー社会システム理論
- 第10回：社会の合理化のための二つの観点ーコミュニケーション的行為の理論
- 第11回：生活世界の合理化ーコミュニケーション的理性
- 第12回：情報メディアと社会の変容
- 第13回：現代社会の諸現象ー情報化、私化、グローバル化
- 第14回：現代における世論形成

履修上の注意

すでに述べたように、本演習は参加者の論文執筆と文献の吟味のためにある。したがって、報告者は常に書かれた文章を用意し、到達点と以降の課題を明確にしておくこと。また、他の参加者も、積極的に報告者の成果に関わること。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定されたテキストがある場合、しっかりと読み込み、問題点を各自明らかにしておくこと。

教科書

アクセル・ホネット著『正義の他者』法政大学出版社

参考書

講義中に指定する。

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) SOC521J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	専門研究(現代思想論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

本専門研究では、現代社会の批判のための視座を得るという目的から、ユルゲン・ハーバーマスの『イデオロギーとしての技術と科学』を再考する。すでに社会学の古典ともなった本著作の吟味をつうじて、今日における科学技術のあり方を検討するための概念を精査する。

授業内容

- 第1回：導入
- 第2回：労働と相互行為1
- 第3回：労働と相互行為2
- 第4回：イデオロギーとしての技術と科学1
- 第5回：イデオロギーとしての技術と科学2
- 第6回：技術の進歩と社会的な生活世界1
- 第7回：技術の進歩と社会的な生活世界2
- 第8回：政治の科学化と世論1
- 第9回：政治の科学化と世論2
- 第10回：認識と関心1
- 第11回：認識と関心2
- 第12回：共同討議1
- 第13回：共同討議2
- 第14回：科学社会学の現在

履修上の注意

本講は、参加者によるコメントと議論によって成り立っている。特に指定されたテキストの講読は不可欠である。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定されたテキストがある場合、しっかりと読み込み、問題点を各自明らかにしておくこと。

教科書

ユルゲン・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社

ユルゲン・ハーバーマス『認識と関心』未來社

参考書

特になし。

成績評価の方法

試験(またはレポート)が70%、平常点が30%

その他

科目ナンバー：(IC) PSY511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(社会心理学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

人は公正さを希求するが、社会には様々な格差が存在する。システム正当化理論に基づく研究は、人がしばしばそれらの格差を是正して公正さを回復するよりも、格差の存在を合理化して世界を公正な場所だと信じ、心理的安寧を得ようとしてしまうことを示している。さらに、そのような合理化を行うのは優位にある人々ばかりではないことも示されている。

研究論文の輪読とディスカッションを通して、格差を合理化する心理的メカニズムについての知識を得るとともに、社会心理学の研究パラダイムについて知ることが到達目標である。

授業内容

- 第1回 授業概要の説明
 - 第2回 システム正当化理論の概要
 - 第3回 権力と階層の正当化
 - 第4回 学歴社会とシステム正当化
 - 第5回 相補的ジェンダー・ステレオタイプ
 - 第6回 平等主義が育児支援を阻む
 - 第7回 集合行為の抑制
 - 第8回 裕福な人と貧しい人に対する相補的ステレオタイプ
 - 第9回 宗教性とシステム正当化
 - 第10回 気候変動に対する動機づけられた懐疑主義
 - 第11回 相対的剥奪感とギャンプル
 - 第12回 集団間地位と集団同一視
 - 第13回 被害者非難
 - 第14回 システム正当化理論の展望
- ※授業内容は受講者の興味関心に応じて変更することがある。

履修上の注意

心理学を専門としない履修者が多いことを想定して授業を構成するが、基礎的な用語については参考書等で確認すること。
輪読する論文は英語が中心である。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、発表者以外の受講者も論文を熟読してから講義に参加すること。

教科書

特に指定しない。
講読する論文のリストはガイダンス時に公開する。
受講者自身が選んだ論文を講読することも可能である。

参考書

- ・ジョン・T・ジョスト(北村英哉・池上知子・沼崎誠監訳) システム正当化理論 ちとせプレス
- ・池上知子 格差と序列の心理学：平等主義のパラドックス ミネルヴァ書房

課題に対するフィードバックの方法

発表に対して毎時間フィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点(50%)とプレゼンテーション(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) PSY511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(社会心理学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(教育学) 脇本 竜太郎		

授業の概要・到達目標

社会心理学領域の学術誌(英文誌を含む)の輪読とディスカッションを行いながら、社会心理学のアプローチや分析手法について学びを深める。社会的認知などマクロなトピックから集団間関係などマクロなトピックまで幅広く扱う。各自の専攻分野やトピックと結びつけながら、社会心理学研究の知見や方法論を批判的に検討する視点を修得することを到達目標とする。

授業内容

- 第1回 授業概要の説明
 - 第2回 対人認知
 - 第3回 ステレオタイプ
 - 第4回 偏見と差別
 - 第5回 説得
 - 第6回 ジェンダー態度とダイバーシティ
 - 第7回 格差の合理化
 - 第8回 対人関係
 - 第9回 親密な関係
 - 第10回 受容と排斥
 - 第11回 消費行動
 - 第12回 マスメディアへの信頼
 - 第13回 政治参加
 - 第14回 Web調査の陥穽
- ※受講者の興味関心に応じて内容を変更することがある。

履修上の注意

学部レベルの社会心理学並びに統計学の知識を前提に授業を進める。
履修していない場合は参考書等で学習しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表者だけでなく全参加者が各回の論文を読み、ディスカッションに参加すること。

教科書

特に指定しない。
講読候補の論文リストはガイダンス時に配布する。

参考書

- 社会心理学
・池田 謙一・唐沢 穰・工藤 恵理子・村本 由紀子(2019). 社会心理学 補訂版 有斐閣
- ・山本 真理子・外山 みどり・池上 知子・遠藤 由美・北村 英哉・宮本 聡介(編)(2001). 社会的認知ハンドブック 北大路書房
- 社会心理学研究法
・安藤 清志・村田 光二・沼崎 誠(編)(2017). 社会心理学研究入門(補訂新版) 東京大学出版会

統計学

- ・南風原朝和(2002). 心理統計学の基礎：統合的理解のために 有斐閣
- ・南風原朝和(2014). 統・心理統計学の基礎：統合的理解を広げ深める 有斐閣

課題に対するフィードバックの方法

毎回発表に対してフィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点(50%)とプレゼンテーション(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) LIN511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(言語学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 Ph.D.	坂本 祐太	

授業の概要・到達目標

専門研究(言語学) I・IIを通して、言語学の中でも特に統語論(文法)分野に焦点を当てて講義を行う。例えば日本語において「学生が3人酒を飲んだ」は文法的であるが、「学生が酒を3人飲んだ」は文法的ではない。母語に関して誰から教わることもなく、なぜ我々はとある文が文法的であるか否かを判断できるのか?なぜ日本語と英語のように表層的に異なった言語が共通の文法規則に従うのか?このような疑問に答えるべく、生成文法理論の枠組みに基づいた教科書(洋書)を軸に、我々人間が日常的に無意識に扱う「ことば」の規則性について講義を行う予定である。

<到達目標>

- ・言語学の文法の仕組みを扱う分野(統語論)の基本的な用語及び概念を理解する。
- ・文が持つ階層構造の重要性を理解し、階層構造に基づいて基本的な言語データを分析できるようになる。
- ・生成文法理論及びその文法モデルを理解する。

授業内容

- 第1回：生成文法理論とは
- 第2回：統語範疇
- 第3回：構成素
- 第4回：構造関係
- 第5回：束縛理論
- 第6回：Xバー理論<1>
- 第7回：Xバー理論<2>
- 第8回：Xバー理論の拡張
- 第9回：θ理論
- 第10回：主要部移動
- 第11回：名詞句移動
- 第12回：wh移動
- 第13回：繰り上げとコントロール
- 第14回：省略

履修上の注意

算数や数学のように積み重ねが必要な学問なので、毎週予習・復習をした上で参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎週練習問題を課すので、講義の前に予め解いてくること。また、指定された教科書の部分は事前に読んでくること。

教科書

Carnie, Andrew. 2021. Syntax: A Generative Introduction. Blackwell.

参考書

Radford, Andrew. 1988. Transformational Grammar. Cambridge University Press.
Haegeman, Liliane. 1994. Introduction to Government and Binding Theory. Blackwell.

課題に対するフィードバックの方法

練習問題に関しては講義の中でフィードバックを行う。期末課題に関しては、個人的に課題を添削するなどしてフィードバックを行う。

成績評価の方法

練習問題:5% × 10回 = 50% 期末課題:50%

その他

特になし。

科目ナンバー：(IC) LIN511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(言語学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 Ph.D.	坂本 祐太	

授業の概要・到達目標

専門研究(言語学) I・IIを通して、言語学の中でも特に統語論(文法)分野に焦点を当てて講義を行う。例えば日本語において「学生が3人酒を飲んだ」は文法的であるが、「学生が酒を3人飲んだ」は文法的ではない。母語に関して誰から教わることもなく、なぜ我々はとある文が文法的であるか否かを判断できるのか?なぜ日本語と英語のように表層的に異なった言語が共通の文法規則に従うのか?このような疑問に答えるべく、生成文法理論の枠組みに基づいた教科書(洋書)を軸に、我々人間が日常的に無意識に扱う「ことば」の規則性について講義を行う予定である。

秋学期は、春学期の専門研究(言語学) I で学習した統語論の基本的な理論を、日本語(及び韓国語や中国語)などの言語データに適用し、比較統語論の手法を身につけることを目的とする。

<到達目標>

- ・言語学の文法の仕組みを扱う分野(統語論)の基本的な用語及び概念を理解する。
- ・文が持つ階層構造の重要性を理解し、階層構造に基づいて基本的な言語データを分析できるようになる。
- ・生成文法理論及びその文法モデルを理解する。

授業内容

- 第1回：専門研究(言語学) I の復習
- 第2回：階層構造<1>
- 第3回：階層構造<2>
- 第4回：語順と移動(かき混ぜ)<1>
- 第5回：語順と移動(かき混ぜ)<2>
- 第6回：主要部移動
- 第7回：受動態
- 第8回：使役
- 第9回：関係節
- 第10回：束縛理論<1>
- 第11回：束縛理論<2>
- 第12回：省略<1>
- 第13回：省略<2>
- 第14回：省略<3>

履修上の注意

算数や数学のように積み重ねが必要な学問なので、毎週予習・復習をした上で参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎週練習問題を課すので、講義の前に予め解いてくること。また、指定された教科書の部分は事前に読んでくること。

教科書

特になし。教員の用意した資料を配布する。

参考書

Radford, Andrew. 1988. Transformational Grammar. Cambridge University Press.
Haegeman, Liliane. 1994. Introduction to Government and Binding Theory. Blackwell.
Carnie, Andrew. 2021. Syntax: A Generative Introduction. Blackwell.
Miyagawa, Shigeru, and Mamoru Saito. 2012. Oxford Handbook of Japanese Linguistics. Blackwell.
Tsujiyama, Natsuko. 2013. An Introduction to Japanese Linguistics. Blackwell.
Kishimoto, Hideki. 2020. Analyzing Japanese Syntax. Hitsuji Shobo.
渡辺明. 2009. 生成文法. 東京大学出版.

課題に対するフィードバックの方法

練習問題に関しては講義の中でフィードバックを行う。期末課題に関しては、個人的に課題を添削するなどしてフィードバックを行う。

成績評価の方法

練習問題:5% × 10回 = 50% 期末課題:50%

その他

特になし。

科目ナンバー：(IC) PSY511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究 (社会的人間論) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学) 出口 剛司		

授業の概要・到達目標

本年度の社会的人間論 I では、大学院における研究の基礎となる社会学の基本的な考え方と近年の研究動向について検討する。人文社会学系の学問のなかで比較的歴史の新しい社会学は、さまざまな学問領域の成果に学びつつ、それらを相互に媒介する役割を果たしてきた。本授業でも、現代における複雑で多様な社会現象がどのような論理で相互に結びついているのか、その現代的・歴史的仕組みを考慮に入れつつ、明らかにしていく。修士1年の院生にとっては広い意味での現代社会論 (あるいは社会学概論) に相当するし、修士論文の執筆をめざす院生にとっては、自らの問題設定のアクチュアリティを確認する場となろう。また海外からの留学生にとっては、母国と比較しながら、現代日本が抱える社会病理 (社会問題) について深く理解する機会になるようにしたい。また授業のなかで受講生が各自の研究テーマに即した報告をする機会を設け、修士論文の課題設定や構想を振り返る機会を設ける。最終的には、受講者との議論や個々のテーマの考察を通して、日本の戦後社会や東アジア社会の地政学的変化についても理解を深めていく。

授業内容

授業では以下のテーマを取り上げる予定である (受講者の理解度、問題関心に応じて変更することがある)。

- 第1回 授業の概要
- 第2回 行政組織と官僚制
- 第3回 自治と政治
- 第4回 産業と雇用の実態
- 第5回 現代と若者
- 第6回 学歴社会
- 第7回 家族とライフコース
- 第8回 福祉と国家
- 第9回 マスコミュニケーションとメディア
- 第10回 IT革命
- 第11回 環境と環境問題
- 第12回 災害と情報
- 第13回 グローバル化と国民国家
- 第14回 転換期の現代社会

履修上の注意

社会的人間論 II を合わせて履修することを推奨する。

準備学習 (予習・復習等) の内容

教科書の該当箇所を熟読した上で、授業に参加すること。不明な専門用語等については、社会学事典などを使ってあらかじめ調べておくこと。

教科書

松野弘編著『現代社会論』(ミネルヴァ書房)

参考書

テーマに応じて、適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内容と各自の研究テーマを加味した学期末レポートを課題とするが、授業内でその概要を報告してもらい、その場でフィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点(30%)とレポート(70%)

その他

科目ナンバー：(IC) PSY511J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究 (社会的人間論) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学) 出口 剛司		

授業の概要・到達目標

社会的人間論 I に引き続き、現代社会が抱える諸問題について、社会学理論を援用しつつ面的な分析を加える。とくに II は、各自の研究課題と授業のテーマを関連付けて、議論を展開する能力を養うことを目標とする。専門的能力とは、自分自身の専門分野にのみかかわるだけでなく、それを基点として、他分野との接点を見出す能力を意味する。本授業ではそうした意味でのコミュニケーション能力を養うことをめざす。また各自が学位論文の執筆や学会報告を行う際に、現代社会の構造と変動をよりよく理解することを通して、テーマ決定及びリサーチクエストの設定の助けとなるような授業をめざしている。

授業内容

本授業で取り扱う社会学、社会現象は以下のとおりである (受講者の研究テーマに応じて変更する可能性がある)。

- 第1回 行為とパーソナリティ形成/ 行為・相互行為・社会関係
- 第2回 地位・役割/ 集団・組織
- 第3回 コミュニケーション/ 社会化と逸脱
- 第4回 権力と支配/ 社会的コンフリクト
- 第5回 研究報告
- 第6回 行為者とネットワーク/ 記号とメディア
- 第7回 科学・技術/ 芸術
- 第8回 価値と規範/ 宗教
- 第9回 研究報告
- 第10回 グローバルメディアと大衆文化製品/ グローバル経済と格差
- 第11回 グローバル・レベルの人権と社会的公正
- 第12回 グローバル化とリスク社会/ グローバル化とナショナリズム
- 第13回 グローバル化とマイノリティ問題
- 第14回 研究報告

履修上の注意

本授業は社会的人間論 I の応用発展であり、社会的人間論 I をあらかじめ履修することを推奨する (本授業のみの受講も可とする)。

準備学習 (予習・復習等) の内容

教科書の該当箇所を熟読した上で、授業に参加すること。不明な専門用語等については、社会学事典などを使ってあらかじめ調べておくこと。

教科書

丸山哲夫編著『現代の社会学』(ミネルヴァ書房)

参考書

各テーマごとに適宜講義中に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内容と各自の研究テーマを加味した学期末レポートを課題とするが、授業内でその概要を報告してもらい、その場でフィードバックを行う。

成績評価の方法

平常点(30%)とレポート(70%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM591J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(公共圏・親密圏コミュニケーション) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学)	横山	陸

授業の概要・到達目標

本年度の「公共圏・親密圏のコミュニケーション I」では、ドイツの哲学者ハンナ・アーレント(1906-1975)の政治哲学をとりあげ、民主主義社会における「公共」の意味と意義について考えます。アーレントはユダヤ系の女性哲学者で、ナチズムに追われてアメリカに亡命した後、同地にとどまり『全体主義の起原』や『人間の条件』において独自の政治哲学を展開しました。講義では、アーレントの著作『人間の条件』の内容を毎回、少しずつ解説しながら、彼女の政治思想について紹介していきます。

アーレントの政治哲学の基本的な枠組みを理解し、それに基づいて民主主義社会における「公共」の意味と意義について考えられることを到達目標とします。

授業内容

※参加者の人数や関心・理解度に応じて、内容や進捗度は変更する場合があります。

- 第01回 オリエンテーション(人間の条件とは?)
- 第02回 人間は「社会的動物」か「政治的動物」か?
- 第03回 公的領域と私的領域
- 第04回 人間の様々な活動
- 第05回 労働と生命活動
- 第06回 労働と仕事の違い
- 第07回 消費と社会
- 第08回 世界の耐久性
- 第09回 世界の永続性
- 第10回 言語的「行為」について
- 第11回 「行為」の代替としての「制作」
- 第12回 言語的行為としての許しと約束
- 第13回 世界からの疎外
- 第14回 「労働する動物」の勝利

履修上の注意

人文科学一般に関する基礎的な知識は前提としますが、哲学(社会哲学)・社会学(社会理論)などを専門としない学生の参加も歓迎します。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定したテキストやレジュメを事前に読んでくること。

教科書

ハンナ・アーレント『人間の条件』牧野雅彦訳、講談社(学術文庫)、2023年、ISBN4065314275

参考書

ハンナ・アーレント『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015年、ISBN4622078805

課題に対するフィードバックの方法

授業内の議論を通じてフィードバックします。

成績評価の方法

期末テスト。正当な理由のない欠席は3回まで。それ以上の欠席があった場合には成績評価は行いません(不可となります。)

その他

科目ナンバー：(IC) COM591J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(公共圏・親密圏コミュニケーション) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(社会学)	横山	陸

授業の概要・到達目標

本年度の「公共圏・親密圏のコミュニケーション II」では、ドイツの哲学者マックス・シェーラー(1874-1928)の人格論をとりあげ、人間存在における「親密圏」と「公共圏」の意味と意義について考えます。シェーラーは価値や感情の現象学的研究や哲学的人間学の構想で知られる哲学者ですが、その著『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』の第二部(日本語翻訳では下巻)において、のちの「親密圏」「公共圏」の議論の先駆けとなるような哲学的人格論を展開しています。講義では、シェーラーの同書の第二部の内容を毎回、少しずつ解説しながら、シェーラーの人格論について紹介していきます。シェーラーの哲学的な人格論の基本的な枠組みを理解し、それに基づいて民主主義社会における「親密圏」と「公共圏」の意味と意義について考えられることを到達目標とします。

授業内容

※参加者の人数や関心・理解度に応じて、内容や進捗度は変更する場合があります。

- 第01回 オリエンテーション(人格とは?)
- 第02回 人格と理性
- 第03回 人格と作用
- 第04回 身体と環境
- 第05回 身体と自我
- 第06回 説明心理学と哲学
- 第07回 説明心理学と哲学(続き)
- 第08回 人格と倫理
- 第09回 人格の自律
- 第10回 人格の自己価値
- 第11回 人格の親密圏と公共圏
- 第12回 人格の親密圏と公共圏(続き)
- 第13回 人格のエートス論
- 第14回 人格の類型論

履修上の注意

人文科学一般に関する基礎的な知識は前提としますが、哲学(社会哲学)・社会学(社会理論)などを専門としない学生の参加も歓迎します。

準備学習(予習・復習等)の内容

指定したテキストやレジュメを事前に読んでくること。

教科書

なし。毎回、レジュメを配布します。

参考書

マックス・シェーラー『シェーラー著作集3：倫理学における形式主義と実質的価値倫理学(下)』小倉志祥訳、白水社、1980年(2003年新装版) ISBN4560020272

課題に対するフィードバックの方法

授業内の議論を通じてフィードバックします。

成績評価の方法

期末テスト。正当な理由のない欠席は3回まで。それ以上の欠席があった場合には成績評価は行いません(不可となります。)

その他

科目ナンバー：(IC) PHL561J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(心理学の哲学) I		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(学術)	田中 彰吾	

授業の概要・到達目標

心理学の哲学 I では、現象学と心の科学の接点にある問題系を扱う。目標は、「自己」および「自己アイデンティティ」について再考することである。具体的に取り上げるのは、ラバーハンド錯覚のように特殊な体性感覚をともなう現象、鏡像認知や道具使用など日常生活で経験される現象、離人症や統合失調症といった精神疾患における症状などである。これらは脈絡なく並べられているように映るかもしれないが、近年の認知科学や神経科学の進展にともなって、身体性に着目する文脈で研究上の知見が多く蓄積されてきた現象である。その一方で、そこでもたらされた知見は、直接経験に遡って問題を検討することを重視するフッサール以来の現象学の伝統にも、少なからず刺激を与えてきている。授業で取り上げるトピックは、誰もが経験する身近な現象から特殊で経験しがたい現象までを含むが、ここでは、「それが当人にとってどのように経験されているのか」という側面に踏み込んで理解することを重視する。科学的に見た場合の因果関係や相関関係に沿って現象を説明することも重要ではあるが、この授業にとっては二次的な重要性しか持たない。問題となる経験を自らたどり直すことができるくらい密着して理解を試みた場合に、身体の経験、また、自己とアイデンティティの経験について何が言えるのか、現象学的に考察することがこの授業の課題である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(心理学の哲学、身体性、現象学をめぐって)
- 第2回：身体性1:身体と物体
- 第3回：身体性2:自己の身体と他者の身体
- 第4回：身体性3:鏡に映る身体
- 第5回：身体性4:身体性から見た自己アイデンティティ
- 第6回：意識1:意識・夢・現実
- 第7回：意識2:脳と機械を接続する
- 第8回：意識3:共感覚
- 第9回：意識4:脳の活動から見た意識
- 第10回：他者1:問題としての他者
- 第11回：他者2:心の科学と他者問題
- 第12回：他者3:他者理解を身体化する
- 第13回：他者4:直接知覚と相互作用
- 第14回：研究発表(受講生自身による考察の発表)

履修上の注意

科学的な知識と哲学的な考察の両方が求められる授業なので、柔軟な発想をもって授業に望んでもらいたい。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、具体的な現象を取り上げて論じることになるので、事前に関連する先行研究について調べておくことが求められる。

教科書

田中彰吾『生きられた(私)をもとめてー身体・意識・他者』北大路書房、2017年。

参考書

S・コイファー、A・チェメロ『現象学入門ー新しい心の科学と哲学のために』(田中彰吾・宮原克典訳)勁草書房、2018年。その他、関連する論文の情報および書籍を各回の授業時に提供する。

成績評価の方法

授業時のディスカッションへの参加と発言(50%)、レポート作成と発表(50%)

その他

この授業は、心の諸科学(心理学、認知科学、神経科学、精神医学等)と現象学の接点に関心のある学生たちに受講を進めます。予備知識がなくても問題ありませんが、開かれた関心をもって授業に臨んでください。

科目ナンバー：(IC) PHL561J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	専門研究(心理学の哲学) II		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(学術)	田中 彰吾	

授業の概要・到達目標

心理学の哲学 II では、I に続いて現象学と心の科学の接点にある問題系を扱う。目標は、自己と他者について、身体性の観点から考察を深めることである。「身体」という言葉を構成する「身」という文字がもともと妊婦の姿を象ったものであることから示唆される通り、ひとの身体は、もともと個々に独立した「個体」ではなく、他者の身体と相互に絡み合った存在である。このような観点を踏まえると、自己と他者はそれぞれ独立した主体として考えられる側面はあるものの、身体性の次元で潜在的に深く結びついた存在として理解する必要がある。この授業では、前半で「自己の身体性」について理解を深める。運動学習、道具使用、幻肢、体外離脱などのトピックについて神経科学や認知科学の知見を取り入れ、「自己」という現象が改めて身体性と切り離し得ないことを理解する。後半では、「自己と他者の関係」について、発達心理学の知見を取り入れながら考察を進める。新生児模倣、共同注意、ふり遊び、鏡像認知などのトピックを検討すると、自己と他者が身体性を介して絡み合って発達を遂げることが理解できるだろう。以上のトピックは、たんに経験科学の知見に閉じているわけではなく、現象学的に見てきわめて興味深い洞察を含むものである。心の科学の成果を踏まえながら、改めて、フッサールやメルロ＝ポンティが自己と他者について残した現象学的な論考を考え直してみたい。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(心理学の哲学、身体性、自己と他者をめぐって)
- 第2回：身体性と自己1-身体図式とは何か
- 第3回：身体性と自己2-運動学習と身体図式・身体イメージ
- 第4回：身体性と自己3-実験的に引き起こされる身体錯覚
- 第5回：身体性と自己4-身体錯覚と拡張した自己
- 第6回：身体性と自己5-幻肢はどのような経験なのか
- 第7回：身体性と自己6-身体と自己の発生的な起源
- 第8回：自己と他者1-共鳴する乳幼児
- 第9回：自己と他者2-自己と他者のあいだで創発するもの
- 第10回：自己と他者3-客体としての身体
- 第11回：自己と他者4-身体的経験としての共感と不安
- 第12回：自己と他者5-共同注意、ふり遊び、ナラティブ能力
- 第13回：自己と他者6-ミニマル・セルフからナラティブ・セルフへ

第14回：研究発表(受講生自身による考察の発表)

履修上の注意

科学的な知識と哲学的な考察の両方が求められる授業なので、柔軟な発想をもって授業に望んでもらいたい。なお、「心理学の哲学 I」と内容上の関連はあるが、この授業のみの履修も可能である。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、事前に教科書の該当範囲を指定するので、必ず読んで授業に臨むこと。担当者は内容を要約・報告することが求められる。

教科書

田中彰吾『自己と他者ー身体性のパースペクティヴから』東京大学出版会、2022年。

参考書

S・コイファー、A・チェメロ『現象学入門ー新しい心の科学と哲学のために』(田中彰吾・宮原克典訳)勁草書房、2018年。その他、関連する論文の情報および書籍を各回の授業時に提供する。

成績評価の方法

授業時のディスカッションへの参加と発言(50%)、レポート作成と発表(50%)

その他

この授業は、心の諸科学(心理学、認知科学、神経科学、精神医学等)と現象学の接点に関心のある学生たちに受講を進めます。予備知識がなくても問題ありませんが、開かれた関心をもって授業に臨んでください。

科目ナンバー：(IC) LAN526N			
研究サポート演習	備考	2024年度開講せず	
科目名	集約型外国文献講読Ⅰ(ドイツ語)〔M〕		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

ドイツ語中級レベルの知識を確認するとともに、ドイツ語の読解力を養成する。また、この授業はメディア授業の形態で行うので、詳細についてはOh-o! Meijiからの案内に注意すること。

授業内容

一見して平易に見えるドイツ語の日常的な文章を精確に読む能力は、哲学、社会学、思想のテキストに含まれた細かな、しかしながら重要なニュアンスをつかむことを助けてくれる。

- 第1週 ドイツ語文法の確認1〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第2週 ドイツ語文法の確認2〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第3週 ドイツ語文法の確認3〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第4週 ドイツ語文法の確認4〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第5週 ドイツ語文法の確認5〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第6週 ドイツ語文法の確認6〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第7週 ドイツ語文法の確認7〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第8週 ドイツ語文法の確認8〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第9週 ドイツ語文法の確認9〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第10週 ドイツ語文法の確認10〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第11週 ドイツ語基礎文献の読解1〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第12週 ドイツ語基礎文献の読解2〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第13週 ドイツ語基礎文献の読解3〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第14週 ドイツ語基礎文献の読解4〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕

履修上の注意

大学院生ともなれば、辞書も選んでもらいたい。小学館の『独和大辞典』の購入をすすめる。既修者であることが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

分からない単語などはしっかりと辞書で調べ、自分なりの解釈を確定しておくこと。
指定されたテキストは、しっかりと読み込み、問題点を各自明らかにしておくこと。

教科書

特になし。

参考書

そのつど、指示する。

成績評価の方法

そのつどの発表が8割、授業態度、貢献具合など平常点の2割で判断する。なお、特別な理由がない限り欠席が著しい場合には、受講を拒否する。

その他

科目ナンバー：(IC) LAN526N			
研究サポート演習	備考	2024年度開講せず	
科目名	集約型外国文献講読Ⅱ(ドイツ語)〔M〕		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

ドイツ語文法中級レベルの既修者を対象として、ドイツ語文献の講読を行う。辞書があれば、ドイツ語の新聞程度は読める程度のレベルをめざす。また、この授業はメディア授業の形態で行うので、詳細についてはOh-o! Meijiからの案内に注意すること。

授業内容

前期の内容を受け継ぎつつ、ドイツ語で書かれた比較的やさしい社会哲学、社会学の専門導入書を取り上げる。ドイツ語のニュアンスを正確に理解し、テキストのメッセージの深みを受け取れるよう心がけたい。授業は基本的に輪読形式をとる。

- 第1週 ドイツ語文献の講読1〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第2週 ドイツ語文献の講読2〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第3週 ドイツ語文献の講読3〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第4週 ドイツ語文献の講読4〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第5週 ドイツ語文献の講読5〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第6週 ドイツ語文献の講読6〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第7週 ドイツ語文献の講読7〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第8週 ドイツ語文献の講読8〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第9週 ドイツ語文献の講読9〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第10週 ドイツ語文献の講読10〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第11週 ドイツ語文献の講読11〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第12週 ドイツ語文献の講読12〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第13週 ドイツ語文献の講読13〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕
- 第14週 ドイツ語文献の講読14〔メディア授業(リアルタイム配信型)〕

履修上の注意

前期の集約型外国文献講読Ⅰ(ドイツ語)を履修しておくことが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

分からない単語などはしっかりと辞書で調べ、自分なりの解釈を確定しておくこと。
指定されたテキストは、しっかりと読み込み、問題点を各自明らかにしておくこと。

教科書

特になし。独和辞典は必ず携行すること。

参考書

適宜紹介する。

成績評価の方法

そのつどの発表が8割、授業態度、貢献具合など平常点の2割で判断する。なお、特別な理由がない限り欠席が著しい場合には、受講を拒否する。

その他

Ⅱのみの履修を可とする。

科目ナンバー：(IC) LAN532N			
研究サポート演習	備考	2024年度開講せず	
科目名	集約型外国文献講読Ⅰ(フランス語)		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

フランス語で書かれた論文を丁寧に読む力を養う。書かれた内容を理解する力をつけるだけでなく、その内容の文脈的情報も調べ批判的にそれを読み込み、自らそれを批判的に考察する力をつけることを目的とする。

授業内容

第一回	フランス語の復習、授業の進め方、担当箇所の決定
第二回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論1
第三回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論2
第四回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論3
第五回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論4
第六回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論5
第七回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論6
第八回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論7
第九回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論8
第十回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論9
第十一回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論10
第十二回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論11
第十三回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論12
第十四回	まとめ、確認テスト

履修上の注意

中辞典以上のフランス語辞書も使用すること。必要に応じ仏辞書も含む複数のフランス語辞書を使用し訳を準備すること。

また、自分の研究関連分野に関するフランス語の論考なども提案が可能である。

受講生の興味、レベルに合わせ、内容を変更、調整することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

担当者はレジュメを作成し、テキストを読んだだけではわからない文化的事象については調べ合わせて報告すること。また論文を批判的に読んだ意見を提示すること。発表にあたってない学生も授業で扱う論文は一読し、討論できるよう準備しておくこと。

教科書

Identités numériques- Expressions et traçabilité, sous la direction de Jean-Paul Formentraux (CNRS Editions 2015)

受講者の興味やレベルに合わせ、内容を変更、調整したり、補足資料を配布することもある。

参考書

授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

受講者の翻訳に対して、適宜指導、コメントを行う。

成績評価の方法

平常点50% テスト50%

その他

科目ナンバー：(IC) LAN532N			
研究サポート演習	備考	2024年度開講せず	
科目名	集約型外国文献講読Ⅱ(フランス語)		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

フランス語で書かれた論文を丁寧に読む力を養う。書かれた内容を理解する力をつけるだけでなく、その内容の文脈的情報も調べ批判的にそれを読み込み、自らそれを批判的に考察する力をつけることを目的とする。

授業内容

第一回	フランス語の復習、授業の進め方、担当箇所の決定
第二回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論1
第三回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論2
第四回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論3
第五回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論4
第六回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論5
第七回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論6
第八回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論7
第九回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論8
第十回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論9
第十一回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論10
第十二回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論11
第十三回	論文精読、批判的読解の提示、フランス語文法の確認、討論12
第十四回	まとめ、確認テスト

履修上の注意

中辞典以上のフランス語辞書も使用すること。必要に応じ仏辞書も含む複数のフランス語辞書を使用し訳を準備すること。

また、自分の研究関連分野に関するフランス語の論考なども提案が可能である。

受講生の興味、レベルに合わせ、内容を変更、調整することもある。

準備学習(予習・復習等)の内容

担当者はレジュメを作成し、テキストを読んだだけではわからない文化的事象については調べ合わせて報告すること。また論文を批判的に読んだ意見を提示すること。発表にあたってない学生も授業で扱う論文は一読し、討論できるよう準備しておくこと。

教科書

La vie des femmes. La presse féminine aux XIXe et XXe siècles, sous la direction de Hélène Eck et Claire Blandin, Université Panthéon-Assas, 2010を読む。

受講者の興味やレベルに合わせ、内容を変更、調整したり、補足資料を配布することもある。

参考書

授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

受講者の翻訳に対して、適宜指導、コメントを行う。

成績評価の方法

平常点50% テスト50%

その他

科目ナンバー：(IC) ANT572J			
研究サポート演習	備考		
科目名	フィールド・アプローチI		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	兼任講師 佐藤 壮広		

授業の概要・到達目標

本講義の目的は、広く人文学におけるフィールドワークの方法およびアウトプットのスタイルを学び、これらの基礎的技法を身につけることです。講義で実施するのは、主に次の3点です。

1. 研究調査のためのコミュニケーション・スキル向上の訓練
 2. データ収集と分析(仮説立てと検証)の演習
 3. 各自の視点に沿った過不足のない文章化の訓練
- また、受講生の研究テーマに沿った、フィールドワーク手法の応用とデータの生成・文章化の道筋なども具体的に検討する機会をもちます。

授業内容

■以下のキーワードを押さえながら、フィールドワークからレポート・論文作成への流れを検討し、実作業を通してそのスキルを身につけます。

■キーワード

1. コミュニケーション・スキル
2. インタビュー
3. テキスト
4. エスノグラフィー
5. パフォーマンス

■各回の内容は概ね以下のとおり。

- 第1回：イントロダクション：なぜ「フィールドワーク」か
- 第2回：量的データと質的データ：相互補完的データ解釈
- 第3回：観察することの意味：課題の発見と展望
- 第4回：観察と視点：見えるものと見えないもの
- 第5回：観察記録文の生成：メモとノート
- 第6回：観察記録文の実際(1)：日常の行動や生活空間のテキスト化
- 第7回：観察記録文の実際(2)：テキスト化された内容の解釈と再現
- 第8回：インタビュー：コミュニケーションと情報収集の技
- 第9回：インタビューの実際(1)：フォーカスとツッコミ
- 第10回：インタビューの実際(2)：メモの再構成と厚い記述
- 第11回：個別研究の報告と検討(教員と履修者による研究報告とコメント)
- 第12回：個別研究の報告と検討1
- 第13回：個別研究の報告と検討2
- 第14回：まとめ：フィールドワークの生き方

履修上の注意

講義の場それ自身がフィールドだという意識を持って、どうぞ楽しみながら受講してください。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回の授業時に指示する。

教科書

特に用いません。

参考書

- 麻生武 著『見ると書くとの出会いーフィールド観察学入門』新曜社
 R.エマーソン他 著『方法としてのフィールドノート』新曜社
 桜井厚・小林多寿子 著『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房
 小田博志 著『エスノグラフィー入門』春秋社

成績評価の方法

講義の議論・対話の場における積極性(70%)、授業内に課す小課題の成果(30%)などを総合して評価します。

その他

フィールドワーク経験の有無を問わず受講を歓迎します。

科目ナンバー：(IC) ANT572J			
研究サポート演習	備考		
科目名	フィールド・アプローチI		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	兼任講師 博士(ジャーナリズム)永井 健太郎		

授業の概要・到達目標

本科目では、メディア・コンテンツの分析方法を学びます。現代社会には様々なメディアが存在しています。新聞やテレビといったいわゆるマスメディアから始まり、書籍や雑誌、映画、漫画、ウェブサイトなど、多様な媒体が存在しています。そして、それらの媒体にはさらに多様なコンテンツが含まれ、情報コミュニケーションに必要な媒体となっています。

情報社会におけるコミュニケーションを理解するためには、メディアのコンテンツを分析することがかかせません。なぜならば、皆さんの社会認識はメディアから提供される情報によって作られているからです。実際、個人の生活空間は皆さんが思っているよりも限定的です。例えば、学生の皆さんは自宅、大学、バイト先、サークルといった空間でしか生活していません。それらの空間の外で発生している様々な出来事を直接体験することはほとんどないのです。そのかわりに、メディアを通して自分が直接見聞きできないことに関する多くの情報を入手しています。つまり、メディアにどのような情報が掲載されているかによって、皆さんの社会に対する認識は枠づけられているのです。

この科目の前半では、メディア・コンテンツの分析方法をテキストの輪読を通して理解しつつ、その分析方法を理解していきます。後半は、自身でメディア・コンテンツ分析を行い、結果を報告します。

【到達目標】

1. 内容分析の方法を理解する
2. 内容分析をデザインすることができる
3. 分析のための測定方法、サンプリング、信頼性、妥当性を理解し、分析で実践できる

授業内容

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 マスコミュニケーション研究と内容分析
- 第3回 内容分析のデザイン
- 第4回 測定：コンテンツと観察単位、分析単位、尺度レベル
- 第5回 サンプリング
- 第6回 信頼性
- 第7回 妥当性
- 第8回 中間報告会
- 第9回 レポートの作成：背景
- 第10回 レポートの作成：問題意識
- 第11回 レポートの作成：分析方法とデータ
- 第12回 レポートの作成：分析と結果
- 第13回 最終報告会その1
- 第14回 最終報告会その2

履修上の注意

受講条件ではないが、一部で統計を扱うことから、統計学やICT統計解析、社会調査法などの授業を履修しておくとう理解が深まるだろう。各自、分析する題材を用意し、積極的に参加することが望まれる。

準備学習(予習・復習等)の内容

輪読でのレジュメの準備、分析題材の用意、リサーチ・デザイン的设计、分析作業の実施など

教科書

「内容分析の進め方ーメディア・メッセージを読み解く」ダニエル・リフ他、勁草書房。

参考書

適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に適宜コメントを返す。

成績評価の方法

発表[輪読](20%)、演習での貢献度(30%)、最終報告およびレポート(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) ANT572J			
研究サポート演習	備考		
科目名	フィールド・アプローチII		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

フィールドワークそれ自体は調査の技法であって特定の研究分野とは独立であるが、とくに文化人類学を特徴づける研究方法論として発展してきた歴史的経緯がある。この授業では、その典型的なモデルとして、都市であるか村落であるかを問わず、研究対象となる人々のコミュニティに住み込んで調査を行うというフィールドワークの方法論を中心に、受講者の希望調査地域を踏まえつつ、教員自身の体験も交えて、少人数での授業を進める。

フィールドワークというのはきわめて実際的な方法であって、演繹的に構成された方法論というよりは、細かい具体的なノウハウの集大成という色彩が強い。理論的な基礎については「フィールド・アプローチI」でも扱うので、この授業ではより応用的な実用性を重視するという観点から、敢えて細かい具体的な技術を題材にとりながら、随時、抽象的な一般論にも触れていくことにしたい。少人数での授業になると予想されるので、内容は履修者の調査対象や具体的な研究テーマに応じて調整したい。

授業内容

- 第1回：調査の目的とビザ、調査許可の取得
- 第2回：訪問時期(季節、訪問先の暦法と祭日など)
- 第3回：移動手段(飛行機、船、列車、バス、タクシー、三輪タクシー、自転車、徒歩)
- 第4回：政情と治安(戦争、テロ、その他の犯罪、軍隊や警察との関係)
- 第5回：衛生状態(食事、風土病、予防接種、医薬品、保険と病院)
- 第6回：言語(現地語、公用語、英語、日本語)、ガイドと通訳
- 第7回：持って行くものと現地調達するもの
- 第8回：どこに滞在するか(借家、ホテル、ホームステイ、集会所など)、どれぐらいの期間滞在するか
- 第9回：信頼関係を築く方法、謝礼と土産
- 第10回：調査方法(参与観察、聞き取り、質問紙など)
- 第11回：記録のための機材(ノート、カメラなど)
- 第12回：調査する側とされる側の年齢・性別・社会的地位などをめぐる関係
- 第13回：禁忌(聞いてはいけない事柄、行ってはいけない場所、撮影してはいけない事物など)への対応、祭礼・儀礼等への参加
- 第14回：約束の不確かさ(借りたものを返さない、約束の時間に遅れるなど)、その他のトラブル(人間関係、金銭面など)への対応

履修上の注意

この授業は、実際に特定の地域(とくに、日本のように政情、治安や衛生状態が他地域に比べて非常に良い社会以外の地域)でのフィールド調査を予定している諸君に対して、各々の対象地域に対応した実際的な技術を伝えることを主たる目的としているので、そのような具体的な調査の予定がない諸君が漫然と聴講するようには計画されていない。なお、担当教員である蛭川が比較的詳しい地域には偏りがあり、教員一人で全世界のすべての地域について詳しい体験的知識を持っているわけではない。

準備学習(予習・復習等)の内容

作成中

教科書

なし

参考書

なし

課題に対するフィードバックの方法

演習形式の授業なので、授業中のディスカッションの中でフィードバックを行う。また、授業に連動したWEBサイトでも授業内容についてのコメントを随時更新していく。

成績評価の方法

授業への積極的な参加によって評価する

その他

とくになし

科目ナンバー：(IC) LAN582J			
研究サポート演習	備考		
科目名	アカデミック・ライティングI		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	兼任講師	清水 瑞久	

授業の概要・到達目標

アカデミック・ライティングIでは、文章作成上の基本的なルールを確認するなどしながら、受講生一人ひとりの論文作成能力を高め、磨きをかけてことを到達目標とする。特にそれぞれの修士論文の作成に向けて、自分の論述主題を明確に見定め、その執筆に何が必要なかを見直し、計画的に準備することができるようにサポートしていく。

授業では毎講義時に、受講者が特定テーマについて作成した小論文を持ち寄り、全員でその小論文の表現や内容や他の論述可能性等について検討を行う。担当講師一人が添削指導を行うというよりは、その場の複数の参加者に意見やアドバイスをもらう。

本講座は「サポート」という位置づけになるが、まさしく受講生の修士論文作成に向けてのサポートを念頭においた授業になる。常に、自分がどのようなテーマやアプローチで修士論文を作成するのか、ということを見直しながらの授業展開になるだろう。

なお、履修時点ではまだ、修士論文の構想が曖昧である、文章表現力に自信がないということもあるかもしれない。むしろ、そうした方にこそ、本講座は開かれている。

授業内容

授業では、受講生の論文作成の技法の育成と向上を目指して、基礎的なリテラシー能力を確かなものとするために、実践的な指導を行う。

初回時に、授業内容を説明する。また受講生の修士論文テーマを共有し、また、本講座でのおおよそのスケジュールや報告の順番などを確認する。研究サポート科目であるため、参加者の人数や問題関心に柔軟に対応していく。第2～4講では自己紹介を兼ねて、少なくとも一度は、自分が執筆しようとする修士論文の全体像の簡単な構想を報告してもらう。第5～7講では最初の報告内容を修正・発展させるかたちでの再チャレンジを行ってもらう。第8～10講では修士論文の全体像の中から特に気になる部分について集中的に報告してもらう。第11～13講ではさらに磨きかけるためのポイント等について確認していく。最終講で、アカデミック論文作成のための最終確認を行う予定である。

この数年の授業参加者の人数は4～8名。年度によって、日本人学生のみ、留学生のみということもある。授業方針や速度は、参加者の人数や日本語リテラシー能力や修士論文予定テーマに応じる。以下の授業スケジュールは、参加者が3名の場合を想定してのもの。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 修士論文の全体像の確認(一人目)
- 第3回 修士論文の全体像の確認(二人目)
- 第4回 修士論文の全体像の確認(三人目)
- 第5回 全体像の再確認(一人目)
- 第6回 全体像の再確認(二人目)
- 第7回 全体像の再確認(三人目)
- 第8回 特定テーマをめぐる実践(一人目)
- 第9回 特定テーマをめぐる実践(二人目)
- 第10回 特定テーマをめぐる実践(三人目)
- 第11回 特定テーマに関するブラッシュアップ(一人目)
- 第12回 特定テーマに関するブラッシュアップ(二人目)
- 第13回 特定テーマに関するブラッシュアップ(三人目)
- 第14回 まとめ

履修上の注意

基本的には授業ごとに報告者を一人決める。報告者は各自の修士論文指導教官ともよく話し合い、自分の修士論文テーマの方向性や関連学問分野への広い関心のもと、論文を事前に作成し、授業当日に報告する。また、報告者以外の参加者は注意深く当該論文を検討し、アドバイスをするというかたちで授業に貢献して頂きたい。

準備学習(予習・復習等)の内容

全14回の期間中に、複数回にわたる論文(1000字程度)の作成を求める。授業時間内での学習のために、時間外学習として検討対象の論文を予め用意することになる。それには相当の時間と労力が必要となるが、自分の考えを表現することに拘りをもち、文体に工夫を凝らし、かつ、その作業を楽しむ力量をもって履修して頂きたい。

教科書

特になし。

参考書

特になし。

成績評価の方法

提出された論文や授業時の発言内容や貢献度に応じて評価する。論文50%、貢献度50%。

その他

科目ナンバー：(IC) LAN582J			
研究サポート演習	備考		
科目名	アカデミック・ライティングⅡ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	兼任講師	清水 瑞久	

授業の概要・到達目標

アカデミック・ライティングⅡは、基本的にはアカデミック・ライティングⅠの続編であると位置づけられる。文章作成上の基本的なルールを確認するなどしながら、受講生一人ひとりの論文作成能力を高め、磨きをかけて到達目標とする。特にそれぞれの修士論文の作成に向けて、自分の論述主題を明確に見定め、その執筆に何が必要なのかを見直し、計画的に準備することができるようサポートしていく。

授業では毎講義時に、受講者が特定テーマについて作成した小論文を持ち寄り、全員でその小論文の表現や内容や他の論述可能性等について検討を行う。担当講師一人が添削指導を行うというよりは、その場の複数の参加者に意見やアドバイスを出してもらう。

本講座は「サポート」という位置づけになるが、まさしく受講生の修士論文作成に向けてのサポートを念頭においた授業になる。常に、自分がどのようなテーマやアプローチで修士論文を作成するのか、ということを実感しながらの授業展開になるだろう。

なお、履修時点ではまだ、修士論文の構想が曖昧である、文章表現力に自信がないということもあるかもしれない。むしろ、そうした方にこそ、本講座は開かれている。

授業内容

授業では、受講生の論文作成の技法の育成と向上を目指して、基礎的なリテラシー能力を確かなものとするために、実践的な指導を行う。

初回時に、授業内容を説明する。また受講生の修士論文テーマを共有し、また、本講座でのおおよそのスケジュールや報告の順番などを確認する。研究サポート科目であるため、参加者の人数や問題関心に柔軟に対応していく。第2～4講では自己紹介を兼ねて、少なくとも一度は、自分が執筆しようとする修士論文の全体像の簡単な構想を報告してもらう。第5～7講では最初の報告内容を修正・発展させるかたちでの再チャレンジを行ってもらう。第8～10講では修士論文の全体像の中から特に気になる部分について集中的に報告してもらう。第11～13講ではさらに磨きをかけてするためのポイント等について確認していく。最終講で、アカデミックな論文作成のための最終確認を行う予定である。

本年度から本講座の担当教員が変更になった。授業方針や速度は、参加者の人数や日本語リテラシー能力や修士論文予定テーマに応じる。以下の授業スケジュールは、参加者が3名の場合を想定してのもの。

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 修士論文の全体像の確認(一人目)
- 第3回 修士論文の全体像の確認(二人目)
- 第4回 修士論文の全体像の確認(三人目)
- 第5回 全体像の再確認(一人目)
- 第6回 全体像の再確認(二人目)
- 第7回 全体像の再確認(三人目)
- 第8回 特定テーマをめぐる実践(一人目)
- 第9回 特定テーマをめぐる実践(二人目)
- 第10回 特定テーマをめぐる実践(三人目)
- 第11回 特定テーマに関するブラッシュアップ(一人目)
- 第12回 特定テーマに関するブラッシュアップ(二人目)
- 第13回 特定テーマに関するブラッシュアップ(三人目)
- 第14回 まとめ

履修上の注意

基本的には授業ごとに報告者を一人決める。報告者は各自の修士論文指導教官ともよく話し合い、自分の修士論文テーマの方向性や関連学問分野への広い関心のもと、論文を事前に作成し、授業当日に報告する。また、報告者以外の参加者は注意深く当該論文を検討し、アドバイスをするというかたちで授業に貢献して頂きたい。

準備学習(予習・復習等)の内容

全14回の期間中に、複数回にわたる論文(1000字程度)の作成を求める。授業時間内での学習のために、時間外学習として検討対象の論文を予め用意することになる。それには相当の時間と努力が必要となるが、自分の考えを表現することに拘りをもち、文体に工夫を凝らし、かつ、その作業を楽しむ力量をもって履修して頂きたい。

教科書

特にない。

参考書

特にない。

成績評価の方法

提出された論文や授業時の発言内容や貢献度に応じて評価する。論文50%、貢献度50%。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC552J			
研究サポート演習	備考		
科目名	専門社会調査A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	兼任講師	小山 慎治	

授業の概要・到達目標

この授業では、社会調査における量的調査について学ぶ。量的調査の企画および実施、レポート作成の一連のプロセスを一人で行う実践的な力を身につけることが到達目標である。授業では、社会調査の基本的知識を得るとともに、実際に量的調査を行う。調査の企画・設計、調査票の作成、調査の実施、データ整理、データ分析、レポート作成に取り組むことにより、社会調査に関する一連の技術の習得を目指す。また、量的調査の役割、その意義と限界、調査倫理などについても触れる。

授業内容

- 第1回：イントロダクシヨ 授業の目的、社会調査について
- 第2回：社会調査の目的と倫理
- 第3回：調査と研究の進め方(基本仮説と調査仮説)
- 第4回：調査票の作成時の注意点(ワーディングと構成)
- 第5回：調査テーマの検討
- 第6回：先行研究の検討と仮説の設定
- 第7回：調査項目の設定
- 第8回：調査票の作成
- 第9回：実査の準備
- 第10回：データの整理とエディティング・コーディング
- 第11回：データの入力フォーマットの作成とデータのクリーニング
- 第12回：データ分析1
- 第13回：データ分析2
- 第14回：分析報告

履修上の注意

原則として、秋学期開講の「専門社会調査B」と併せて履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業は受講生の発表と討論を中心に展開する。発表担当者にレジュメ作成が求められるのはもちろんのこと、受講生全員が必ず事前にテキストを読んでくることも求める。また、先行研究の探索、調査の実施、データ入力など、課題が多くなるので、真面目に授業に取り組むこと。

教科書

初回の授業時に指定する。

参考書

適宜、授業内に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパー等の課題について、翌週の授業冒頭で講評を行う。

成績評価の方法

平常点(50%)と最終レポート(50%)で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC552J			
研究サポート演習	備考		
科目名	専門社会調査B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	兼任講師 小山 慎治		

授業の概要・到達目標

この授業では、情報コミュニケーション研究に必要な分析手法について、多変量解析を中心に学ぶ。到達目標は、①統計的手法(特に多変量解析)を用いた論文を適切に理解できるようになる、②実際に量的データを分析し、レポートを作成できるようになる、の2点である。授業では、基本的な数学や統計学の復習を兼ねて、分析手法に関するテキストを講読し、多変量解析について理解を深める。また、統計解析のソフトウェアを用いて、既存の調査データを実際に分析する(二次分析)。こうして得た理論的知識と分析技術を用いて、統計的手法を用いた論文を読み、実際に自分でレポート執筆することで、統計的手法に関する理論と実践力を身につけていく。

授業内容

- 第1回：イントロダクション：授業の目的、統計分析の目的と多変量解析について
- 第2回：社会調査とデータアーカイブについて、二次分析とは何か
- 第3回：統計分析の基礎：基礎統計量について
- 第4回：クロス表と独立性の検定
- 第5回：平均値の差の検定と分散分析
- 第6回：単回帰分析
- 第7回：相関と偏相関
- 第8回：重回帰分析
- 第9回：パス解析
- 第10回：変数の合成と主成分分析
- 第11回：因子分析
- 第12回：クラスター分析
- 第13回：ログリニア分析
- 第14回：分析報告

履修上の注意

「専門社会調査B」の履修には、春学期開講「専門社会調査A」を既に履修していることが必須条件となる。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業は受講生の発表と討論を中心に展開する。発表担当者にレジュメ作成が求められるのはもちろんのこと、受講生全員が必ず事前にテキストを読んでくることも求める。また、先行研究の探索、調査の実施、データ入力など、課題が多くなるので、真面目に授業に取り組むこと。

教科書

初回の授業時に指定する。

参考書

適宜、授業内に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパー等の課題について、翌週の授業冒頭で講評を行う。

成績評価の方法

平常点(50%)と最終レポート(50%)で評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC552J			
研究サポート演習	備考		
科目名	専門社会調査C		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	兼任講師 博士(人間科学) 鶴若 麻理		

授業の概要・到達目標

本授業では、新聞・雑誌記事、資料文書等の質的データの分析法(内容分析等)を習得すると共に、様々な質的調査法(聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、グループインタビュー、など)に関する基本的知識をふまえ、質的調査の計画をし、調査、分析、報告書の作成を行うことにより質的調査の実践的能力を習得することを目的とする。
質的調査については、質的調査による研究論文を読むことを通してその実態を学ぶ。

授業内容

授業は以下のような内容で進めていく。調査の進捗によって変更が生じることもある。
本授業ではオンラインも6回取り入れて授業を行っていく。
現時点で考えている、対面、オンラインの別を示す。
調査実施と分析の進捗状況によっては、変更の生じる場合があるが、その場合は、履修生とあらかじめ相談していく

- 第1回：コースイントロダクション：質的調査研究の意義と限界(対面)
- 第2回：研究論文を通して質的調査の実際を学ぶ(1)―ドキュメント分析(対面)
- 第3回：研究論文を通して質的調査の実際を学ぶ(2)―聞き取り調査法・参与観察法・グループインタビュー(オンデマンド)
- 第4回：研究論文を通して質的調査の実際を学ぶ(3)―KJ法・質的帰納的手法(対面)
- 第5回：研究論文を通して質的調査の実際を学ぶ(4)―グループで質的調査の計画検討(対面)
- 第6回：質的調査の計画(1)―グループで質的調査の計画を立案(対面)
- 第7回：質的調査の計画(2)―研究計画書の作成・発表・提出(対面)
- 第8回：質的調査の実施(1)(オンライン)
- 第9回：質的調査の実施(2)(オンライン)
- 第10回：質的調査の結果をふまえてディスカッション―中間発表(オンライン)
- 第11回：質的調査の分析(1)(オンライン)
- 第12回：質的調査の分析(2)(オンライン)
- 第13回：調査報告書の作成(対面)
- 第14回：最終発表および報告書の提出(対面)

履修上の注意

本授業では、講義をふまえた質的調査の実習が中心となるので、積極的な参加を期待します。また質的調査を実施するという授業の性格上、授業時間以外にも作業が必要になる場合があります。
各受講生の社会調査法の習得状況をふまえてグループにわけ、ドキュメント分析による調査等を行っています。たとえば、「若年層の恋愛におけるメールの役割」「付録つき女性ファッション誌の付録の値ごろ感に関する考察」「動画共有サイトのコメント欄における人のコミュニケーション行動に関する一考察」「中国人留學生のアルバイトにおける被差別感」「好感度CMのどこに視聴者は注目しているか：CM動画へのコメント欄の分析を通して」「インターネット上における疑似科学を通じたコミュニケーションの分析」「中国人民大学生の日本での就職活動に対する不安」「日中女性雑誌viviにおけるレイアウト、色、広告の違いについての考察」「日本の待機児童問題に関する研究」「フリマアプリ「メルカリ」ユーザーの利用を始めた動機における人物像」「女性美を巡る言説の考察―講談社『VoCE』第一特集のタイトル分析を通して―」、「中国人留學生の帰国意識」「中国女性ユーザーの自撮りアプリ使用により求める美意識に関する調査」「洋画ポスターの日本版と原作版のデザイン違いに関する考察」「エスカレーター片側開けに関する日本人の価値観」「中国人留學生の帰国意識と伝統的家族観との関係についての研究」、「留學生の留学前後での対日イメージの変化とその要因」などです。

準備学習(予習・復習等)の内容

本授業では、講義をふまえて質的調査の計画立案から実施、報告書の作成を行います。そのため、1-5回目までは、各回の授業後に、授業で紹介した内容について文献などを用いて復習しておくこと。6回目以降は、各グループで質的調査を立案し実施していくので、次の授業までの課題をグループで検討し、学習しておくこと。

教科書

適宜、プリントして配布予定。
大谷信介(著)、後藤範章(著)、小松洋(著)、木下栄二(著)新・社会調査へのアプローチ―論理と方法 2013 ミネルヴァ書房を使いますが、図書館にあるため、購入しなくてもよいですが、この本にそって授業を行います。

参考書

萱間真美『質的研究実践ノート』医学書院、2007
田垣正晋『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』中央法規、2008
グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方』医歯薬出版、2011

課題に対するフィードバックの方法

本授業は、質的調査をグループで立案し、調査を実施、分析、報告書作成します。それに伴う、課題があります。課題については、授業内、およびシステムを通してコメントします。

成績評価の方法

最終報告書(40%)、質的調査の計画および実施のプロセス(40%)、授業内での発表、ディスカッションへの参加(20%)

その他

情報コミュニケーション研究科

博士後期課程

(授業科目・担当者及び履修方法)

I 修了要件

1. 学位論文作成のため、指導教員による必要な研究指導を受けなければならない。
2. 研究論文指導Ⅰ・Ⅱ（各2単位）及び情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ・Ⅱ（各2単位）を毎年次履修することとし、あわせて24単位を必修とする。
3. 指導教員が研究指導上必要と認めた場合は、博士前期課程設置科目、他研究科設置科目及び研究科間共通科目を履修することができる。
4. 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科博士学位取得のためのガイドラインを確認すること。

II 学位請求までのプロセス

1. 1年次はじめに、博士学位請求論文作成のための3カ年の研究計画書を提出する。なお、研究計画書に基づいて指導教員の指導のもと、学際研究プロジェクトへ参加することができる。
2. 希望があれば、指導教員の指導のもと、2名以内の副指導教員を選定することができる。
3. 2年次はじめに、指導教員の許可を受けた「博士論文作成計画書」を提出する。この計画書には、博士論文のテーマ、問題設定とアプローチ方法、論文執筆に向けた作業工程等を記載するものとする。また、指導教員の許可を受けた「研究計画中間報告書」を提出する。
4. 2年次に、国内外の先行研究動向を概観しつつ、学外の査読付学術雑誌、本研究科の『情報コミュニケーション研究論集』などに論文を投稿する。
5. 第3年次（留籍者含む）
 - ① 博士学位請求予定者は、学年はじめの所定の時期までに「博士学位請求予備登録票」および「研究計画最終報告書」を指導教員の許可を受け本研究科に毎年次提出する。
 - ② 当該年度に博士学位の請求をしない者は、学年はじめの所定の時期までに「博士論文執筆計画書」を指導教員の許可を受け本研究科に提出する。同計画書には、博士論文のテーマ、問題設定とアプローチ方法、論文執筆に向けた作業工程等を記載するものとする。
 - ③ 博士学位請求予定者は、所定の時期に実施される事前報告会で、学位請求論文内容を報告する。
 - ④ 博士論文提出資格を承認された学生は、所定の時期までに、学位請求論文を提出することができる。

2018年度以降入学

授業科目及び担当者

※〔M〕はメディア授業科目

【博士後期課程】

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
情報・社会系						
研究論文指導Ⅰ	演2	—		○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅱ	演2		—	○	専任教授 大黒岳彦	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学) 今村哲也	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学) 今村哲也	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学) 清原聖子	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学) 清原聖子	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(経済学) 塚原康博	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(経済学) 塚原康博	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(法学) 阿部力也	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(法学) 阿部力也	
研究論文指導Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(政治学) 鈴木健人	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(政治学) 鈴木健人	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 島田剛	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 島田剛	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 竹中克久	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 竹中克久	
情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ〔M〕	講2	○			大黒岳彦、今村哲也、清原聖子、塚原康博、阿部力也、鈴木健人、島田剛、竹中克久、須田努、波照間永子、高馬京子、横田貴之、山口生史、石川幹人、鈴木健、施利平、根橋玲子、宮本真也、蛭川立	
情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ〔M〕	講2		○			
メディア・文化系						
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(文学) 須田努	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(文学) 須田努	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(学術) 波照間永子	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(学術) 波照間永子	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 ^{博士} _(言語文化学) 高馬京子	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 ^{博士} _(言語文化学) 高馬京子	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 ^{博士} _(地域研究) 横田貴之	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 ^{博士} _(地域研究) 横田貴之	
情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ〔M〕	講2	○			大黒岳彦、今村哲也、清原聖子、塚原康博、阿部力也、鈴木健人、島田剛、竹中克久、須田努、波照間永子、高馬京子、横田貴之、山口生史、石川幹人、鈴木健、施利平、根橋玲子、宮本真也、蛭川立	
情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ〔M〕	講2		○			
人間・コミュニケーション系						
研究論文指導Ⅰ	演2	—		○	専任教授 博士(学術) 山口生史	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅱ	演2		—	○	専任教授 博士(学術) 山口生史	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(工学) 石川幹人	

科目名	単位	春学期	秋学期	研究指導	担当教員	備考
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(工学) 石川 幹人	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 鈴木 健	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 鈴木 健	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 博士(人間科学) 施利平	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 博士(人間科学) 施利平	
研究論文指導Ⅰ	演2	○		○	専任教授 Ph.D. 根橋 玲子	
研究論文指導Ⅱ	演2		○	○	専任教授 Ph.D. 根橋 玲子	
研究論文指導Ⅰ	演2	—		○	専任教授 宮本 真也	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅱ	演2		—	○	専任教授 宮本 真也	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅰ	演2	—		○	専任准教授 蛭川 立	2024年度開講せず
研究論文指導Ⅱ	演2		—	○	専任准教授 蛭川 立	2024年度開講せず
情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ〔M〕	講2	○			大黒岳彦、今村哲也、清原聖子、塚原康博、阿部力也、鈴木健人、島田剛、竹中克久、須田努、波照間永子、高馬京子、横田貴之、山口生史、石川幹人、鈴木健、施利平、根橋玲子、宮本真也、蛭川立	
情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ〔M〕	講2		○			

博士後期課程

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 1 博士論文に関連する先行研究整理 その1
- 2 博士論文に関連する先行研究整理 その2
- 3 博士論文作成に関する主要関連文献リストの作成
- 4 主要関連文献の講読 その1
- 5 主要関連文献の講読 その2
- 6 主要関連文献の講読 その3
- 7 主要関連文献の講読 その4
- 8 主要関連文献の講読 その5
- 9 博士論文作成に関する資料の検討 その1
- 10 博士論文作成に関する資料の検討 その2
- 11 方法論に関する関連文献の講読 その1
- 12 方法論に関する関連文献の講読 その2
- 13 方法論に関する関連文献の講読 その3
- 14 総括

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々々の指示に従ってください。

教科書

参考書

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	大黒 岳彦	

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 1 博士論文執筆に関する心構え
- 2 博士論文作成に関する指導 その1
- 3 博士論文作成に関する指導 その2
- 4 博士論文作成に関する指導 その3
- 5 博士論文作成に関する指導 その4
- 6 博士論文作成に関する指導 その5
- 7 博士論文中間報告 その1
- 8 博士論文中間報告 その2
- 9 博士論文執筆に関する注意 その他 その1
- 10 博士論文執筆に関する注意 その他 その2
- 11 博士論文執筆最終報告 その1
- 12 博士論文執筆最終報告 その2
- 13 総括 その1
- 14 総括 その2

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

その時々々の指示に従ってください。

教科書

参考書

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

本演習では、知的財産法のさまざまな分野のなかで、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。各院生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究方法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ インTRODクシヨン
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読4
- 第7回 文献講読5
- 第8回 文献講読6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の討議
- 第11回 文献研究の検証1
- 第12回 文献研究の検証2
- 第13回 文献研究の検証3
- 第14回 総合討論3

*授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。報告担当以外の学生も、討論に参加する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。その際、報告資料は、事前に提出する。報告する学生は十分に準備をする必要があるとともに、報告担当以外の学生も、討論のために、報告資料を読み込む必要がある。

教科書

とくに指定しない。

参考書

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	今村 哲也	

授業の概要・到達目標

本演習では、知的財産法のさまざまな分野のなかで、受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。各院生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究方法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ インTRODクシヨン
- 第2回 文献講読1
- 第3回 文献講読2
- 第4回 文献講読3
- 第5回 総合討論1
- 第6回 文献講読4
- 第7回 文献講読5
- 第8回 文献講読6
- 第9回 総合討論2
- 第10回 研究課題の討議
- 第11回 文献研究の検証1
- 第12回 文献研究の検証2
- 第13回 文献研究の検証3
- 第14回 総合討論3

*授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。報告担当以外の学生も、討論に参加する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各院生の問題関心にしたがってテーマを選択し、その研究内容を報告してもらう。その際、報告資料は、事前に提出する。報告する学生は十分に準備をする必要があるとともに、報告担当以外の学生も、討論のために、報告資料を読み込む必要がある。

教科書

とくに指定しない。

参考書

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本授業では、博士論文を執筆するにあたり必要な研究方法の指導や個別の論文指導を中心に行う。各履修生は、それぞれの研究計画に必要な先行研究や資料を読み、担当教員からフィードバックを受け、他の大学院生や研究者と研究計画について議論をすることが重要である。最終的に履修者各自のテーマで博士論文を執筆するために必要な知見を深めることを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ、イントロダクション
- 第2回 博士論文のテーマと研究計画について報告
- 第3回 博士論文に関連する文献講読1
- 第4回 博士論文に関連する文献講読2
- 第5回 博士論文に関連する文献講読3
- 第6回 博士論文に関連する文献講読4
- 第7回 博士論文の研究計画について報告1
- 第8回 博士論文に関連する文献講読5
- 第9回 博士論文に関連する文献講読6
- 第10回 博士論文に関連する文献講読7
- 第11回 方法論に関連する文献の講読1
- 第12回 方法論に関連する文献の講読2
- 第13回 博士論文の研究計画について報告2
- 第14回 総合討論、まとめ

履修上の注意

履修生の進捗状況により、調整する。無断欠席をしないこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

博士論文の執筆に向けた授業であるため、各自が文献を読み、十分なディスカッションを行えるだけの事前準備をしておく必要がある。

教科書

授業中に指示する。

参考書

授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(30%)、授業での報告・発表(50%)、博士論文のプロポーザル(20%)

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	清原 聖子	

授業の概要・到達目標

本授業では、博士論文を執筆するにあたり必要な研究方法の指導や個別の論文指導を中心に行う。各履修生は、それぞれの研究計画に必要な先行研究や資料を読み、担当教員からフィードバックを受け、他の大学院生や研究者と研究計画について議論をすることが重要である。最終的に履修者各自のテーマで博士論文を執筆するために必要な知見を深めることを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ、イントロダクション
- 第2回 博士論文の研究計画について報告1
- 第3回 博士論文に関連する文献の講読1
- 第4回 博士論文に関連する文献の講読2
- 第5回 方法論に関連する文献の講読1
- 第6回 方法論に関連する文献の講読2
- 第7回 博士論文の研究計画について報告2
- 第8回 博士論文に関連する文献の講読3
- 第9回 博士論文に関連する文献の講読4
- 第10回 リサーチペーパーについて発表1
- 第11回 リサーチペーパーについて発表2
- 第12回 リサーチペーパーについて発表3
- 第13回 リサーチペーパーについて発表4
- 第14回 総合討論、まとめ

履修上の注意

履修生の進捗状況により、調整する。無断欠席をしないこと。博士論文の研究計画に基づき、春学期の授業を踏まえて、1年間の集大成としてリサーチペーパーを執筆する。

準備学習（予習・復習等）の内容

博士論文の執筆に向けた授業であるため、各自が文献を読み、十分なディスカッションを行えるだけの事前準備をしておく必要がある。

教科書

授業中に指示する。

参考書

授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加(30%)、授業での報告・発表(30%)、リサーチペーパー(40%)

その他

特になし

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習は、博士論文の作成に備えた準備段階と位置づけられる。とりわけ、本演習では、先行研究のサーベイを重視し、研究テーマ、研究の方法、研究の流れを確定させる。

本演習の目的は、博士論文の作成に当たり、問題意識は適切か、研究の意義は何か、既存の研究に比べた新たな研究の貢献は何か、使用する研究方法は適切かを学生に考えてもらうことである。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究テーマの検討1
- 第3回：研究テーマの検討2
- 第4回：研究方法の検討1
- 第5回：研究方法の検討2
- 第6回：研究の流れの検討1
- 第7回：研究の流れの検討2
- 第8回：先行研究のサーベイ1
- 第9回：先行研究のサーベイ2
- 第10回：先行研究のサーベイ3
- 第11回：先行研究のサーベイ4
- 第12回：先行研究のサーベイ5
- 第13回：研究テーマの再検討
- 第14回：研究方法の再検討

履修上の注意

研究に対する関心と強い研究意欲が要求される。

準備学習（予習・復習等）の内容

前回の授業で教員が指示したこと（先行研究のサーベイなど）を行っておくこと。また、授業を受けてわからない点は参考書等で調べたり、教員への質問により解決しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『SPSSでやさしく学ぶ統計解析』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSでやさしく学ぶアンケート処理』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる統計処理の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる多変量データ解析の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『問題解決のコミュニケーション』鈴木健人・鈴木健・塚原康博編著(白桃書房)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏝田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

平常点（先行研究や分析結果の報告と質疑応答）により100%評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 塚原 康博		

授業の概要・到達目標

本演習では、博士論文で取り上げる研究テーマ、研究方法、研究の流れを完全に確定させ、調査で使用する質問票を作成し、その回答を統計学的手法を使って解析して修士論文を作成させる。

本演習を通じ、論文作成に不可欠な要素、すなわち、問題意識、研究の意義、研究の貢献、研究方法、論理一貫性、注の付け方や参考文献のあげ方などを学生に身につけてもらう。

授業内容

具体的な授業内容は以下のとおりである。

- 第1回：研究テーマの決定
- 第2回：研究方法の決定
- 第3回：研究の流れの決定
- 第4回：調査対象の確定
- 第5回：質問票の作成1
- 第6回：質問票の作成2
- 第7回：データの解析と検証1
- 第8回：データの解析と検証2
- 第9回：データの解析と検証3
- 第10回：データの解析と検証4
- 第11回：論文の作成指導1
- 第12回：論文の作成指導2
- 第13回：論文の作成指導3
- 第14回：論文の作成指導4

履修上の注意

研究に対する関心と強い研究意欲が要求される。

準備学習（予習・復習等）の内容

前回の授業で教員が指示したこと（データの解析、論文の作成など）を行っておくこと。また、授業を受けてわからない点は参考書等で調べたり、教員への質問により解決しておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

- 『SPSSでやさしく学ぶ統計解析』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSでやさしく学ぶアンケート処理』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる統計処理の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『SPSSによる多変量データ解析の手順』石村貞夫他(東京図書)。
- 『問題解決のコミュニケーション』鈴木健人・鈴木健・塚原康博編著(白桃書房)。
- 『エレメンタル現代経済学』金子邦彦編(晃洋書房)。
- 『公共経済学(第2版)』ジョセフ・スティグリッツ著・藪下史郎訳(東洋経済新報社)。
- 『公共経済学』麻生良文(有斐閣)。
- 『入門現代経済学要論』青木孝子・鏝田亨・安藤潤・塚原康博(白桃書房)。
- 『日本人と日本社会』塚原康博(文真堂)。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対するレポートは、次週までに提出してもらい、次週の授業中に課題に対する質疑応答を行う。

成績評価の方法

平常点（質問票の作成、統計解析、論文作成）により100%評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	阿部 力也	

授業の概要・到達目標

この講義では、刑事法学のさまざまな分野から受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。受講生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究手法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ イン트로ダクション
 - 第2回 文献講読1
 - 第3回 文献講読2
 - 第4回 文献講読3
 - 第5回 総合討論1
 - 第6回 文献講読4
 - 第7回 文献講読5
 - 第8回 文献講読6
 - 第9回 総合討論2
 - 第10回 研究課題の討議
 - 第11回 文献研究の検証1
 - 第12回 文献研究の検証2
 - 第13回 文献研究の検証3
 - 第14回 総合討論3
- *授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

受講生の問題関心に従ってテーマを選択し、そのテーマに沿った研究内容を報告してもらう。また適宜、各自のテーマに沿った外国文献を参照しながら討論を重ねる予定である。なお報告担当以外の学生も討論に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

受講生にはテーマを選択しその研究内容を報告してもらう。その際の報告資料は事前に提出すること。報告する学生は十分に準備をする必要がある。報告担当以外の受講生も討論のために報告資料を読み込むこと。

教科書

とくに指定しない。

参考書

各自のテーマに沿った外国文献を随時指示する。

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(法学)	阿部 力也	

授業の概要・到達目標

この講義では、刑事法学のさまざまな分野から受講生がこれから研究しようとするテーマについて指導することを内容とする。受講生の研究の現状報告のなかで、先行研究調査の状況や問題把握の的確性、研究の意義、研究手法の選択、研究内容などについての要点を指摘して、研究能力を涵養することを目標とする。

授業内容

- 第1回 aのみ イン트로ダクション
 - 第2回 文献講読1
 - 第3回 文献講読2
 - 第4回 文献講読3
 - 第5回 総合討論1
 - 第6回 文献講読4
 - 第7回 文献講読5
 - 第8回 文献講読6
 - 第9回 総合討論2
 - 第10回 研究課題の討議
 - 第11回 文献研究の検証1
 - 第12回 文献研究の検証2
 - 第13回 文献研究の検証3
 - 第14回 総合討論3
- *授業内容は必要に応じて変更する場合がある。

履修上の注意

受講生の問題関心に従ってテーマを選択し、そのテーマに沿った研究内容を報告してもらう。また適宜、各自のテーマに沿った外国文献を参照しながら討論を重ねる予定である。なお報告担当以外の学生も討論に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

受講生にはテーマを選択しその研究内容を報告してもらう。その際の報告資料は事前に提出すること。報告する学生は十分に準備をする必要がある。報告担当以外の受講生も討論のために報告資料を読み込むこと。

教科書

とくに指定しない。

参考書

各自のテーマに沿った外国文献を随時指示する。

成績評価の方法

報告(50%)、討論等(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

博士論文を執筆し完成させるための準備と方法について授業を行う。

具体的には、(1)テーマの設定の仕方、(2)研究方法、(3)資料または史料の調査と収集の方法、について考察する。

博士後期課程1年次の学生が、研究テーマを絞り込むことができるまでを目標とする。

授業内容

- 第1講 博士論文執筆にあたっての全般的指導。
- 第2講 同上
- 第3講 テーマの設定について
- 第4講 研究史のまとめ
- 第5講 同上
- 第6講 研究の方法論について
- 第7講 同上
- 第8講 同上
- 第9講 国際関係史と外交史の違い
- 第10講 アメリカ外交史の研究手法
- 第11講 同上
- 第12講 イギリス外交史の研究手法
- 第13講 同上
- 第14講 まとめ

履修上の注意

英文を多数読解するので、十分な英語力を備えていること。非英語圏からの学生についても、英語の読解を求めるので、英文を読んでその内容を日本語で表現できる能力を持っていないといけない。

準備学習（予習・復習等）の内容

150ページから200ページ程度の英語の単行本、またはその分量と同等の英文の論文を数本読んでおくこと。

本や論文のテーマは、政治学か国際関係論、または国際関係史、外交史のものであること。

教科書

特に指定しない。適宜指示する。

参考書

特に指定しない。適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業の際に、直接フィードバックする。

成績評価の方法

成績評価は以下の基準で行う。

- (1) 適切なテーマを選んでいること。またはいくつかの研究テーマを設定できていること。30%
- (2) 研究上の方法論を十分理解し、その方法を実際に運用できること。40%
- (3) アメリカ又はイギリスの外交史研究に取り組める予備知識を獲得すること。30%

その他

研究テーマの設定に当たっては、各自が真に興味のあるテーマを選択できるよう、学生とコミュニケーションを取りながら進めて行く。従って、学生は自分が是非とも研究したいテーマを選択するよう、忌憚のない意見を教員に表明すること。

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(政治学) 鈴木 健人		

授業の概要・到達目標

博士論文を執筆し完成させるための準備と方法について授業を行う。

具体的には、(1)テーマの設定の仕方、(2)研究方法、(3)資料または史料の調査と収集の方法、について考察する。

博士後期課程1年次の秋学期には、仮のものでも良いので、ある程度まで研究テーマを絞り込むことができるまでを目標とする。

授業内容

- 第1講 博士論文執筆にあたっての全般的指導。
- 第2講 同上
- 第3講 仮テーマの設定について
- 第4講 仮テーマに基づいて研究史のまとめ
- 第5講 同上
- 第6講 仮テーマに基づく研究の方法論について
- 第7講 同上
- 第8講 同上
- 第9講 具体例として冷戦史研究の現状と方法
- 第10講 冷戦史の研究手法
- 第11講 同上
- 第12講 国際冷戦史研究プロジェクトについて
- 第13講 同上
- 第14講 まとめ

履修上の注意

英文を多数読解するので、十分な英語力を備えていること。非英語圏からの学生についても、英語の読解を求めるので、英文を読んでその内容を日本語で表現できる能力を持っていないといけない。

秋学期には一次史料も読むので、引き続き英文の読解能力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

春学期に取り上げた英語の書籍や論文を再読し、内容をよく確認しておくこと。

教科書

特に指定しない。適宜指示する。

参考書

特に指定しない。適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業の際に、直接フィードバックする。

成績評価の方法

成績評価は以下の基準で行う。

- (1) 適切なテーマを選んでいること。またはいくつかの研究テーマを設定できていること。30%
- (2) 研究上の方法論を十分理解し、その方法を実際に運用できること。40%
- (3) 冷戦史研究に取り組める予備知識を獲得すること。30%

その他

研究テーマの設定に当たっては、各自が真に興味のあるテーマを選択できるよう、学生とコミュニケーションを取りながら進めて行く。従って、学生は自分が是非とも研究したいテーマを選択するよう、忌憚のない意見を教員に表明すること。

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

この授業は開発経済学の実証研究による博士論文の準備と完成を目的としている。授業では博士論文のための既存の研究のレビュー (Literature review) を行い、それに基づき論文執筆の指導を行う。

授業内容

- 1 研究計画の作成 1
- 2 研究計画の作成 2
- 3 既存研究調査 その1
- 4 既存研究調査 その2
- 5 主要関連文献のレビュー (Literature review) その1
- 6 主要関連文献のレビュー (Literature review) その2
- 7 主要関連文献のレビュー (Literature review) その3
- 8 主要関連文献のレビュー (Literature review) その4
- 9 主要関連文献のレビュー (Literature review) その5
- 10 Research gap その1
- 11 Research gap その2
- 12 研究方法の検討 その1
- 13 研究方法の検討 その2
- 14 まとめと今後の計画の検討

(履修者の博士論文準備の進捗状況により変更の可能性はある。)

履修上の注意

論文執筆の進行に伴い方法論、研究内容の再検討をしていく。

準備学習 (予習・復習等) の内容

毎回、履修者は報告資料を作成する。この報告資料が基本的には博士論文の内容になるよう計画をすることが大切。

教科書

博士論文のテーマに関連した文献をとりあげる。

参考書

授業内で指示する。博士論文のテーマに関連した文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

論文、発表等に対して都度フィードバックをおこなう。

成績評価の方法

それぞれの課題と博士論文に向けた進捗度合で成績評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	島田 剛	

授業の概要・到達目標

この授業は開発経済学の実証研究による博士論文の準備と完成を目的としている。授業では博士論文のための既存の研究のレビュー (Literature review) を行い、それに基づき論文執筆の指導を行う。

授業内容

- 1 研究計画の作成 1
- 2 研究計画の作成 2
- 3 既存研究調査 その1
- 4 既存研究調査 その2
- 5 主要関連文献のレビュー (Literature review) その1
- 6 主要関連文献のレビュー (Literature review) その2
- 7 主要関連文献のレビュー (Literature review) その3
- 8 主要関連文献のレビュー (Literature review) その4
- 9 主要関連文献のレビュー (Literature review) その5
- 10 Research gap その1
- 11 Research gap その2
- 12 研究方法の検討 その1
- 13 研究方法の検討 その2
- 14 まとめと今後の計画の検討

(履修者の博士論文準備の進捗状況により変更の可能性はある。)

履修上の注意

論文執筆の進行に伴い方法論、研究内容の再検討をしていく。

準備学習 (予習・復習等) の内容

毎回、履修者は報告資料を作成する。この報告資料が基本的には博士論文の内容になるよう計画をすることが大切。

教科書

博士論文のテーマに関連した文献をとりあげる。

参考書

授業内で指示する。博士論文のテーマに関連した文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

論文、発表等に対して都度フィードバックをおこなう。

成績評価の方法

それぞれの課題と博士論文に向けた進捗度合で成績評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

博士論文執筆のため、先行研究の調査・精読、研究のアウトライン、独自の分析手法を模索する。

各学期ごとに、最低10000字以上の執筆を続けること。

授業内容

- 第1回 (aのみ) イントロダクション
- 第2回 研究テーマの再設定Ⅰ
- 第3回 研究テーマの再設定Ⅱ
- 第4回 先行研究の調査Ⅰ
- 第5回 先行研究の調査Ⅱ
- 第6回 先行研究の調査Ⅲ
- 第7回 先行研究の調査Ⅳ
- 第8回 中間報告
- 第9回 分析手法の再検討Ⅰ
- 第10回 分析手法の再検討Ⅱ
- 第11回 独創性の確立Ⅰ
- 第12回 独創性の確立Ⅱ
- 第13回 最終報告
- 第14回 今期の振り返りと次期への検討

履修上の注意

先行研究を徹底的に重視・尊重すること。我々は「先人の肩に乗って」物事を見ているに過ぎないことを強く自覚して執筆にとりかかること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、少しずつの積み重ねが博士論文完成につながる。必ず、前回の教員の指示を実行して、ゼミに臨むこと。

教科書

教員側からは指定しない。

参考書

教員側からは指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の教員とのディスカッションによる。

成績評価の方法

毎回の研究発表(50%)、最終成果物(50%)

その他

科目ナンバー：(IC) SOC732J			
情報・社会系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 竹中 克久		

授業の概要・到達目標

博士論文執筆のため、先行研究の調査・精読、研究のアウトライン、独自の分析手法を模索する。

各学期ごとに、最低10000字以上の執筆を続けること。また、最終期には150000字程度の博士論文を完成させること。

授業内容

- 第1回 (aのみ) 博士論文作成に向けて
- 第2回 博士論文構成についてⅠ
- 第3回 博士論文構成についてⅡ
- 第4回 各章の文章化・推敲Ⅰ
- 第5回 各章の文章化・推敲Ⅱ
- 第6回 各章の文章化・推敲Ⅲ
- 第7回 各章の文章化・推敲Ⅳ
- 第8回 中間報告
- 第9回 独創性の再検討Ⅰ
- 第10回 独創性の再検討Ⅱ
- 第11回 論理的整合性の検証Ⅰ
- 第12回 論理的総合性の検証Ⅱ
- 第13回 各章のつながりの検証
- 第14回 最終成果物の発表・博士論文の完成

履修上の注意

先行研究を徹底的に重視・尊重すること。我々は「先人の肩に乗って」物事を見ているに過ぎないことを強く自覚して執筆にとりかかること。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、少しずつの積み重ねが博士論文完成につながる。必ず、前回の教員の指示を実行して、ゼミに臨むこと。

教科書

教員側からは指定しない。

参考書

教員側からは指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の教員とのディスカッションによる。

成績評価の方法

最終成果物(100%)

その他

博士後期課程

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

博士論文執筆の基礎知識を獲得する。

授業内容

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

1. 博士という社会的立場
2. 大系的学問形成のために その1
3. 大系的学問形成のために その2
4. 博士論文執筆のために その1
5. 博士論文執筆のために その2
6. 調査研究上の注意
7. フィールドワークでの注意
8. 近世史料読解について 武家文書 その1
9. 近世史料読解について 武家文書 その2
10. 近世史料読解について 文化史関連 その1
11. 近世史料読解について 文化史関係 その2
12. 近世史料読解について 地方文書 その1
13. 近世史料読解について 地方文書 その2
14. 博物館・資料館利用について

履修上の注意

博士論文執筆のための必要事項をまなぶ。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回指摘することについて復習を実行する。

教科書

そのつど指摘する。

参考書

そのつど指摘する。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系		備考	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	須田 努	

授業の概要・到達目標

博士論文を執筆する。

授業内容

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

1. 博士論文執筆のために その1
2. 博士論文執筆のために その2
3. 博士論文執筆進捗状況確認 その1
4. 博士論文執筆進捗状況確認 その2
5. 博士論文執筆進捗状況確認 その3
6. 博士論文執筆報告 その1
7. 博士論文執筆報告 その2
8. 博士論文執筆報告 その3
9. 博士論文使用史料報告 その1
10. 博士論文使用史料報告 その2
11. 博士論文使用史料報告 その3
12. 博士論文執筆最終確認
13. 総括 その1
14. 総括 その2

履修上の注意

博士論文を執筆する。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回指摘することについて復習を実行する。

教科書

そのつど指摘する。

参考書

そのつど指摘する。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

博士論文の作成を到達目標とする。そのための下作業として、各自が所属する舞踊学関連学術機関誌へ投稿し、受理されるべく基礎力の蓄積をはかる。

授業内容

国内外の舞踊学関連学会の開催時期および投稿期日に即してスケジュールを構築する。

- 第1回：ガイダンス(博士論文執筆に向けて諸注意)
- 第2回：これまでの研究内容と今後の課題を報告①
- 第3回：これまでの研究内容と今後の課題を報告②
- 第4回：これまでの研究内容と今後の課題を報告③
- 第5回：先行研究の吟味・自身の課題の位置付け①
- 第6回：先行研究の吟味・自身の課題の位置付け②
- 第7回：先行研究の吟味・自身の課題の位置付け③
- 第8回：各自の進捗報告①
- 第9回：各自の進捗報告②
- 第10回：各自の進捗報告③
- 第11回：舞踊学関連学会発表準備①
- 第12回：舞踊学関連学会発表準備②
- 第13回：舞踊学関連学会発表抄録の検討①
- 第14回：舞踊学関連学会発表抄録の検討②

(注)舞踊学会および比較舞踊学会の発表抄録締切は8～9月である。

海外の学会発表締切については各自で確認のこと。DSA・ICTMなど。

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

受講生の研究の進捗状況に応じ、課題を提示する。

教科書

なし

参考書

各自のテーマに応じて適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、提出・発表した課題について丁寧にコメントする。

成績評価の方法

発表:50%、レポート・学会抄録原稿:50%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術) 波照間 永子		

授業の概要・到達目標

博士論文の作成を到達目標とする。そのための下作業として、各自が所属する舞踊学関連学術機関誌へ投稿し、受理されるべく基礎力の蓄積をはかる。

授業内容

春学期の研究論文指導Ⅰでは、舞踊学関連学会への口頭発表の抄録作成をゴールとした。

秋学期は、口頭発表および同学会の学術機関誌投稿に向けて指導する。

- 第1回：ガイダンス(学術機関誌論文投稿に向けて)
- 第2回：博士論文全体構成における学術機関誌投稿論文の位置付け報告①
- 第3回：博士論文全体構成における学術機関誌投稿論文の位置付け報告②
- 第4回：博士論文全体構成における学術機関誌投稿論文の位置付け報告③
- 第5回：研究発表演習・指導①
- 第6回：研究発表演習・指導②
- 第7回：研究発表演習・指導③
- 第8回：学会誌投稿論文作成・指導①
- 第9回：学会誌投稿論文作成・指導②
- 第10回：学会誌投稿論文作成・指導③
- 第11回：学会誌投稿論文作成・指導④
- 第12回：学会誌投稿論文作成・指導⑤
- 第13回：学会誌投稿論文作成・指導⑥
- 第14回：次年度に向けて各自の課題報告

(注)舞踊学会および比較舞踊学会の論文投稿締切は3月・9月である。

履修上の注意

準備学習(予習・復習等)の内容

受講生の研究の進捗状況に即し、課題を提示する。

教科書

なし

参考書

各自のテーマに応じて適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業時に、提出・発表した課題について丁寧にコメントする。

成績評価の方法

発表:50%、レポート・学術機関誌投稿論文作成に向けた進捗状況:50%

その他

博士後期課程

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 第一回 インTRODクシヨン 博士論文執筆に関する心構え
- 第二回 博士論文に関連する先行研究整理 その1
- 第三回 博士論文に関連する先行研究整理 その2
- 第四回 博士論文作成に関する主要関連文献リストの作成
- 第五回 主要関連文献の講読 その1
- 第六回 主要関連文献の講読 その2
- 第七回 主要関連文献の講読 その3
- 第八回 主要関連文献の講読 その4
- 第九回 主要関連文献の講読 その5
- 第十回 博士論文作成に関する資料の検討 その1
- 第十一回 博士論文作成に関する資料の検討 その2
- 第十二回 方法論に関する関連文献の講読 その1
- 第十三回 方法論に関する関連文献の講読 その2
- 第十四回 方法論に関する関連文献の講読 その3・総括

学生の博士論文準備進捗状況により、授業内容は変更することもある。

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で紹介した内容については、文献等で調べておくことと自発的かつ計画的に博士論文執筆の準備スケジュールを立てて実行していくこと。

教科書

特になし。

参考書

高木陽子・高馬京子『越境するファッションスタディーズ』ナカニシヤ出版 2021
石丸久美子・高馬京子共訳 ドミニクマングノー『コミュニケーションテキスト分析—フランス学派の言説分析への招待』ひつじ書房 2018
その他適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

作成した論文などに対し、都度コメント、フィードバックを行う。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(言語文化学) 高馬 京子		

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 第一回 博士論文執筆に関する心構え
- 第二回 博士論文作成に関する指導 その1
- 第三回 博士論文作成に関する指導 その2
- 第四回 博士論文作成に関する指導 その3
- 第五回 博士論文作成に関する指導 その4
- 第六回 博士論文作成に関する指導 その5
- 第七回 博士論文中間報告 その1
- 第八回 博士論文中間報告 その2
- 第九回 博士論文執筆に関する注意 その他 その1
- 第十回 博士論文執筆に関する注意 その他 その2
- 第十一回 博士論文執筆最終報告 その1
- 第十二回 博士論文執筆最終報告 その2
- 第十三回 総括 その1
- 第十四回 総括 その2

(履修者の博士論文準備の進捗状況など、諸般の事情により変更の可能性はある。)

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

各自、計画的かつ自発的にプランを立て、自分のペースで執筆すること。こまめに進捗状況を報告することが望ましい。

教科書

それぞれのテーマにそった内容で選定する。

参考書

高木陽子・高馬京子『越境するファッションスタディーズ』ナカニシヤ出版 2021
石丸久美子・高馬京子共訳 ドミニクマングノー『コミュニケーションテキスト分析—フランス学派の言説分析への招待』ひつじ書房 2018
その他授業内で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

論文、発表等に対して都度フィードバックをおこなう。

成績評価の方法

授業内レポート(30) 論文ドラフト(70)

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究)横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本演習では、受講生の博士論文執筆のための研究指導が主な目的となる。到達目標は、①博士論文のテーマ設定、②修士論文執筆に必要な先行研究レビュー、③修士論文のリサーチクエスションの設定、④修士論文に必要なディシプリン／分析枠組の習得、である。

春学期においては、先行研究の批判的レビューの方法、それを踏まえたリサーチクエスションの立て方、ディシプリン／分析枠組の習得のために、文献を読み込みを進めると同時に、論文執筆の基本的な作法を学ぶ。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 博士論文のテーマ設定と執筆計画(確定版)発表
- 第3回 先行研究レビューの再検討
- 第4回 先行研究レビュー(1)
- 第5回 先行研究レビュー(2)
- 第6回 先行研究レビュー(3)
- 第7回 論文執筆の基礎:リサーチクエスションの立て方
- 第8回 リサーチクエスションの検討(1)
- 第9回 リサーチクエスションの検討(2)
- 第10回 リサーチクエスションの検討(3)
- 第11回 問題分析の方法:ディシプリン／分析枠組
- 第12回 分析方法の検討(1)
- 第13回 分析方法の検討(2)
- 第14回 中間発表、今後の計画

履修上の注意

受講生の博士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

博士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、博士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) CUL712J			
メディア・文化系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(地域研究)横田 貴之		

授業の概要・到達目標

本授業では、受講生の博士論文執筆のための研究指導が主な目的となる。到達目標は、①博士論文のテーマ設定、②修士論文執筆に必要な先行研究レビュー、③修士論文のリサーチクエスションの設定、④修士論文に必要なディシプリン／分析枠組の習得、である。

秋学期においては、春学期における基礎的能力の修得を踏まえ、博士論文執筆の実践的な作法を学ぶ。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(aのみ)
- 第2回 博士論文のテーマと執筆計画の再確認と調整
- 第3回 リサーチクエスションと仮説の検討
- 第4回 分析枠組みの再検討
- 第5回 研究事例の確認・選定(1)
- 第6回 研究事例の確認・選定(2)
- 第7回 研究事例の調査分析方法の検討・確認(1)
- 第8回 研究事例の調査分析方法の検討・確認(2)
- 第9回 研究事例の調査分析方法の検討・確認(3)
- 第10回 事例分析の実践(1)
- 第11回 事例分析の実践(2)
- 第12回 事例分析の実践(3)
- 第13回 博士論文構成の確定
- 第14回 最終発表、今後の計画の再検討

履修上の注意

受講生の博士論文の内容や執筆準備の進捗状況によって、授業内容が変わる可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

博士論文執筆には、授業以外にも自ら研究を進める努力が必要です。授業内で出された課題は必ず期限内に済ませ、授業に臨むこと。授業で習得した成果をもとに、博士論文執筆作業を自発的に進めること。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

平常点40%、課題への取り組み60%

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口 生史	

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要
このクラスでは、組織コミュニケーション関連および受講生の研究テーマに関する専門書および専門誌(ジャーナル)の研究論文を読み、議論、指導を行うとともに、調査方法の指導と調査準備を行う。専門ジャーナルを数多く読み、当該分野の最新の研究の動向や知見を確認し、文献調査の意義、理論構築のあり方、調査の方法、当該分野における各研究結果の意義や学術的寄与(academic contribution)の提示の仕方を理解することを目指す。このような論文執筆の基本を、専門ジャーナル論文を読みながら、理解することを目指し、博士論文につながる指導をする。

II. 到達目標
到達目標は、博士論文の研究課題の設定やリサーチデザインの構築をすることである。

授業内容

以下の内容と順序で授業を進めていく予定である(諸般の事情により変更の可能性はある)。

- 第1回：研究テーマの着想
- 第2回：研究テーマの検討
- 第3回：研究テーマに関するリーディングアサシメント1に基づきディスカッションおよびコメント
- 第4回：研究テーマに関するリーディングアサシメント2に基づきディスカッションおよびコメント
- 第5回：研究テーマに関するリーディングアサシメント3に基づきディスカッションおよびコメント
- 第6回：研究テーマに関するリーディングアサシメント4に基づきディスカッションおよびコメント
- 第7回：研究テーマに関するリーディングアサシメント5に基づきディスカッションおよびコメント
- 第8回：研究課題の検討(1)
- 第9回：研究課題の検討(2)
- 第10回：リサーチデザインの理解
- 第11回：リサーチデザインの検討(1)
- 第12回：リサーチデザインの検討(2)
- 第13回：調査方法の理解:質的調査
- 第14回：調査方法の理解:量的調査

履修上の注意

課題などの提出物は、期日を守ってほしい。リーディングアサシメントは必ず行うことが必要である。

準備学習(予習・復習等)の内容

前半は、毎週、リーディングアサシメントとして専門ジャーナルを中心に先行研究の論文を自分で探し、読み、クリティカルペーパーを書き提出してもらう。後半は、自分の研究テーマに関して、上記授業内容に即して、毎週ペーパーを書き、提出してもらう。

教科書

特に定めない。

参考書

- [1]書籍
1. 『組織のコミュニケーション論』、猪俣正雄、1992 (中央経済社)
2. 『現代ミクロ組織論』、二村敏子、2004 (有斐閣)
3. 『組織の経営学』、R. F.ダフト著、2001 (高木晴夫監訳、2002)、ダイヤモンド社
4. 桑田耕太郎・田尾雅夫著『組織論』(1998、有斐閣)
5. 『新版・組織行動のマネジメント』、ステファン・ロビンズ(高木春夫監訳、[2009])『ダイヤモンド社』[Robbins, S. P. Essentials of Organizational Management (8th ed.)、2005、Prentice-Hall]
6. 『ビジネス心理: マネジメント心理編』、山口生史・匠英一(監修)、日本ビジネス心理学会(編)(中央経済社)
7. Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research, and Methods, Sage
8. Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage.
9. Owen Hargie & Dennis Tourish (ed). (2000) Handbook of Communication Audits for Organizations, Routledge.
10. Cal W. Downs & Allyson D. Adrian (2004) Assessing organizational communication, Guilford.
11. Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編)、Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) ー、JAI Press.
12. Keith F. Punch (1998) Introduction to social research: Quantitative and Qualitative Approaches. (川合隆男監訳 [2005] 『社会調査入門: 量的調査と質的調査の活用』慶應義塾大学出版会)
- [2]専門ジャーナル
1. Human Communication Research
2. Human Relations
3. Organization Science
4. International Journal of Business Communication
5. Journal of Organizational Behavior
6. Administrative Science Quarterly
7. Academy of Management Journal
8. Academy of Management Review
9. 『日本コミュニケーション研究』
10. 『組織科学』
11. 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

授業において、事前提出課題(クリティカルペーパー)のテーマに関して議論し、解説しながらフィードバックを行う。

成績評価の方法

1. 課題提出:50%
2. ファイナルペーパー:50%

その他

研究計画を早めに立てることが必要である。

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	山口 生史	

授業の概要・到達目標

I. 授業の概要
このクラスでは、研究論文指導Ⅰに続き、多くの文献調査(先行研究のリビュー)を行う。また、研究論文指導Ⅰで検討したリサーチデザインに基づき、調査方法の検討を始める予定である。質的調査の場合は、インタビュー調査などの方法論を学び、事例分析、内容分析、グラウンデッドセオリーなどのアプローチを研究する。量的調査の場合は、知見に基づき研究課題からより具体的な仮説を構築する。また、サンプリングやデータ分析の方法論も学ぶ。

II. 到達目標
到達目標は、知見の蓄積をすること、研究アプローチを理解すること、仮説を構築あるいは生成すること、方法論を理解することである。

授業内容

以下の内容と順序で授業を進めていく予定である(諸般の事情により変更の可能性はある)。

- 第1回：研究テーマの現状報告とコメント
- 第2回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(1)
- 第3回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(2)
- 第4回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(3)
- 第5回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(4)
- 第6回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(5)
- 第7回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(6)
- 第8回：文献調査とリーディングアサシメントの発表(7)
- 第9回：リサーチデザインの確認
- 第10回：質的研究:方法論(1):量的研究:仮説構築の検討(1)
- 第11回：質的研究:方法論(2):量的研究:仮説構築の検討(2)
- 第12回：質的研究:方法論(3):量的研究:仮説構築の検討(3)
- 第13回：質的研究:方法論(4):量的研究:方法論
- 第14回：発表

履修上の注意

課題などの提出物は、期日を守ってほしい。アサシメントは必ず行うことが必要である。

準備学習(予習・復習等)の内容

前半は、自分の研究テーマに関連する先行研究を専門ジャーナルを中心に探し、読み、クリティカルペーパーとして書き、提出してもらう。後半は、仮説あるいは具体的な研究課題についてのペーパーを毎週書いてきて提出してもらう。

教科書

特に定めない。

参考書

- [1]書籍
1. 『組織のコミュニケーション論』、猪俣正雄、1992 (中央経済社)
2. 二村敏子(2004)『現代ミクロ組織論』有斐閣
3. 『組織の経営学』、R. F.ダフト、2001 (高木晴夫監訳、2002)、ダイヤモンド社
4. 『組織論』、桑田耕太郎・田尾雅夫著、1998 (有斐閣)
5. 『ビジネス心理: マネジメント心理編』、山口生史・匠英一(監修)、日本ビジネス心理学会(編)(中央経済社)
6. 『新版・組織行動のマネジメント』、ステファン・ロビンズ(高木春夫監訳、[2009])『ダイヤモンド社』[Robbins, S. P. Essentials of Organizational Management (8th ed.)、2005、Prentice-Hall]
7. Fredric M. Jablin & Linda L. Putnam (編) (2000) The New Handbook of Organizational Communication: Advances in Theory, Research, and Methods, Sage
8. Frederic M. Jablin (1987) Handbook of Organizational Communication: An Interdisciplinary Perspective, Sage.
9. Owen Hargie & Dennis Tourish (ed). (2000) Handbook of Communication Audits for Organizations, Routledge.
10. Cal W. Downs & Allyson D. Adrian (2004) Assessing organizational communication, Guilford.
11. Barry M. Staw & Larry L. Cummings (編)、Research in Organizational Behavior, Vol. 1 (1979) ー、JAI Press.
12. Keith F. Punch (1998) Introduction to social research: Quantitative and Qualitative Approaches. (川合隆男監訳 [2005] 『社会調査入門: 量的調査と質的調査の活用』慶應義塾大学出版会)
- [2]専門ジャーナル
1. Human Communication Research
2. Human Relations
3. Organization Science
4. International Journal of Business Communication
5. Journal of Organizational Behavior
6. Administrative Science Quarterly
7. Academy of Management Journal
8. Academy of Management Review
9. 『日本コミュニケーション研究』
10. 『組織科学』
11. 『産業・組織心理学研究』

課題に対するフィードバックの方法

クラスにて、事前提出のクリティカルペーパー、研究課題(Research Questions)、仮説等に関して、議論し、解説しながらフィードバックをする。

成績評価の方法

1. 課題提出:50%
2. ファイナルペーパー:50%

その他

研究計画の着実な進捗とその管理が必要である。

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

博士論文に向けた研究指導を行なう。とくに研究方法論を身につけることを重視する。

研究を積み重ね、論文発表を経験し、3年間で独自の研究をまとめて、博士論文を書き上げることを目標とする。

授業内容

1. 研究とは何か、その社会的目的
2. 研究者の資質や倫理について
3. 研究者の社会と仕組み
4. 研究テーマの掘り起こし
5. 研究テーマの吟味
6. 研究方法論とは
7. 学際的研究の姿勢
8. 研究方法の決定
9. 先行研究の調査
10. 研究スタイルの形成
11. 行き詰まりとスランプ
12. メンタルトレーニング
13. 発見的方法
14. 研究者ネットワーク

履修上の注意

学年進行に伴い内容は高度化する。

準備学習（予習・復習等）の内容

博士論文に関する調査・実験・発表に並行して取り組むこと。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

博士論文に関連した文献をとりあげる。

参考書

博士論文に関連した文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(工学)	石川 幹人	

授業の概要・到達目標

博士論文に向けた研究指導を行なう。とくに学会活動への取り組み方を重視する。

研究を積み重ね、論文発表を経験し、3年間で独自の研究をまとめて、博士論文を書き上げることを目標とする。

授業内容

1. 研究論文とは何か、その社会的意義
2. 研究論文にまつわる事件について
3. 著作権と研究者の尊重すべきもの
4. 研究結果のまとめ方
5. 研究結果の表現
6. 研究の区切り方
7. 研究チームの形成
8. 学会の吟味
9. 学会活動への参加
10. 論文のスタイル
11. 論文の投稿と査読
12. 研究費の取得
13. 研究費使用と倫理
14. 研究の教育へのフィードバック

履修上の注意

学年進行に伴い内容は高度化する。

準備学習（予習・復習等）の内容

博士論文に関連した調査・実験・発表に並行して取り組むこと。

授業内では、実験や調査の企画、分析、論文作成を指導するので、事前に先行研究のレジメや実施したデータを準備する必要がある。

教科書

博士論文に関連した文献をとりあげる。

参考書

博士論文に関連した文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

毎時間にフィードバックをおこなう。それでも足りない場合は、メールを使っておこなう。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

授業を通じて、(1)コミュニケーション研究(Communication Studies)の領域を知る、(2)コミュニケーション研究の主要理論を知る、の2点を目標とする。具体的には、(1)コミュニケーター、(2)メッセージ、(3)会話、(4)関係性、(5)集団、(6)組織、(7)メディア、(8)文化と社会の順番に、コミュニケーションの小さいユニットからだんだんと大きなユニットに研究対象を広げていく。将来、学際系や社会学系の研究者を目指すための準備と訓練を目指している。また、英語の教科書用いることで、外国語の文献を渉猟し、読みこなす能力の養成も目指している。

授業内容

- 第1回 イントロダクション (Littlejohn & Foss, Chapter 1: Communication Theory and Scholarship)
- 第2回 The Idea of Theory (Chapter 2)
- 第3回 The Traditions of Communication Theory (Chapter 3)
- 第4回 The Communicator (Chapter 4)
- 第5回 The Message (Chapter 5)
- 第6回 The Conversation (Chapter 6)
- 第7回 The Relationship (Chapter 7)
- 第8回 The Group (Chapter 8)
- 第9回 The Organization (Chapter 9)
- 第10回 The Media (Chapter 10)
- 第11回 Culture and Society (Chapter 11)
- 第12回 Student Presentation I
- 第13回 Student Presentation II
- 第14回 まとめと総括

履修上の注意

毎回の目標をしっかりと理解して、授業に参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

討論に参加できるように、事前準備をしっかりとしておくこと。

教科書

Littlejohn and Foss, Theories of Human Communication 10th ed. Long Grove, IL: Waveland Press, 2011.

参考書

- ハワード・ベッカー 『ベッカー先生の論文教室』慶応義塾大学出版会、2012年
- 小笠原善康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2009年
- 戸田山和久『新盤 論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年
- 新堀聡『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』同文館出版、2002年

成績評価の方法

学期末に、レポートを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めてリサーチの進行状況を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。河野哲也『レポート・論文の書き方入門』第3版、慶応義塾大学出版会、2002年

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	鈴木 健	

授業の概要・到達目標

授業を通じて、(1)テレビ研究の基礎文献を読む、(2)映画研究の基礎文献を読む、の2点を目標とする。具体的にメディア批評において、現代社会を考察する上で重要な分野であるテレビ分析と映画分析の方法論、理論、問題への取り込み方を学ぶ。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 イデオロギー分析
- 第3回 作家主義
- 第4回 ジャンル分析
- 第5回 記号論と構造主義
- 第6回 精神分析と国家装置
- 第7回 フェミニズム
- 第8回 ポストモダニズム
- 第9回 カルチュラル・スタディーズ
- 第10回 人種、ジェンダー、セクシュアリティ
- 第11回 Dick, Chapter 1 & 5
- 第12回 Dick, Chapter 6 & 7
- 第13回 Dick, Chapter 8 & 10
- 第14回 まとめと総括

履修上の注意

しっかり予習をして討論に参加できるように準備しておくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書を事前に読んで、討論と発表の準備をしておくこと。

教科書

Harry Benshoff, Film and Television Analysis: An Introduction to Methods, Theories, and Approaches. London: Routledge, 2015.
Bernard Dick, Anatomy of Film 6th ed. NY: Bedford, 2009.

参考書

- ハワード・ベッカー 『ベッカー先生の論文教室』慶応義塾大学出版会、2012年
- 小笠原善康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2009年
- 戸田山和久『新盤 論文の教室—レポートから卒論まで』NHKブックス、2012年
- 新堀聡『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』同文館出版、2002年

成績評価の方法

学期末に、レポートを提出してもらう(50%)。毎週、発表者を決めてリサーチの進行状況を報告する(25%)。ただし、討論には全員が参加すること(25%)。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

博士論文の作成にあたり、必要な文献を講読し、レビューを行うとともに、実証研究の方法を検討する。

授業内容

- 1 博士論文に関連する先行研究整理 その1
- 2 博士論文に関連する先行研究整理 その2
- 3 博士論文作成に関する主要関連文献リストの作成
- 4 主要関連文献の講読 その1
- 5 主要関連文献の講読 その2
- 6 主要関連文献の講読 その3
- 7 主要関連文献の講読 その4
- 8 主要関連文献の講読 その5
- 9 博士論文作成に関する資料の検討 その1
- 10 博士論文作成に関する資料の検討 その2
- 11 方法論に関する関連文献の講読 その1
- 12 方法論に関する関連文献の講読 その2
- 13 方法論に関する関連文献の講読 その3
- 14 総括

履修上の注意

受講生の進捗状況により、調整する。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業前に、指定資料と文献を予習しておくこと。

教科書

授業中に指示する。

参考書

授業中に指示する。

成績評価の方法

学習態度(50%)とパフォーマンス(50%)により、総合的に評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(人間科学) 施 利平		

授業の概要・到達目標

博士論文の作成にあたり、必要な文献を講読しレビューをするとともに、実証研究を行い、分析する。

授業内容

以下の内容と順序で授業を進めていく予定である（諸般の事情により変更の可能性はある）。

- 1 博士論文執筆に関する心構え
- 2 博士論文作成に関する指導 その1
- 3 博士論文作成に関する指導 その2
- 4 博士論文作成に関する指導 その3
- 5 博士論文作成に関する指導 その4
- 6 博士論文作成に関する指導 その5
- 7 博士論文中間報告 その1
- 8 博士論文中間報告 その2
- 9 博士論文執筆に関する注意 その他 その1
- 10 博士論文執筆に関する注意 その他 その2
- 11 博士論文執筆最終報告 その1
- 12 博士論文執筆最終報告 その2
- 13 総括 その1
- 14 総括 その2

履修上の注意

受講生の進捗状況により、調整する。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業前に、指定資料と文献を予習しておくこと。

教科書

授業中に指示する。

参考書

授業中に指示する。

成績評価の方法

学習態度(50%)とパフォーマンス(50%)により、総合的に評価する。

その他

博士後期課程

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

この授業では、異文化間コミュニケーションに関連した博士論文のテーマの検証と研究方法についてディスカッションを行いながら論文指導を行う。受講生自身が設定したテーマについて、その意義と研究の可能性を再検討し、理論的仮説の構築、研究方法などについての知見を深めることを目標に、アドバイスをを行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：博士論文に関する先行研究のまとめ1
- 第3回：博士論文に関する先行研究のまとめ2
- 第4回：主要関連文献の講読1
- 第5回：主要関連文献の講読2
- 第6回：主要関連文献の講読3
- 第7回：研究テーマの検証と修正1
- 第8回：研究テーマの検証と修正2
- 第9回：フィードバック
- 第10回：研究方法に関する文献の講読1
- 第11回：研究方法に関する文献の講読2
- 第12回：研究方法の検証1
- 第13回：研究方法の検証2
- 第14回：フィードバックとまとめ

履修上の注意

特になし。

準備学習（予習・復習等）の内容

この授業は、あくまでも博士論文を執筆するにあたって、ペースを作る役割であり、実際は各自が論文を進めるよりほかない。こまめに進捗状況を報告すること。

教科書

それぞれのテーマにそった内容で選定する。

参考書

授業中に紹介する。

成績評価の方法

授業内レポート(30%)論文プロポーザル(70%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	根橋 玲子	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅱでは、研究論文指導Ⅰで検証したテーマおよび設定した研究デザインを基に、博士論文の進め方について指導する。具体的には、論文完成およびその先のキャリア選択を見据えた一連の流れの中で、どのようにペースを配分しながら論文に取り組むのかについてディスカッションを行ったり、アドバイスをを行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：博士論文の進捗状況確認1
- 第3回：博士論文に関する指導1
- 第4回：博士論文に関する指導2
- 第5回：博士論文の進捗状況確認2
- 第6回：博士論文に関する指導3
- 第7回：博士論文に関する指導4
- 第8回：博士論文の進捗状況確認3
- 第9回：博士論文のドラフト作成について1
- 第10回：博士論文のドラフト作成について2
- 第11回：博士論文のドラフト作成について3
- 第12回：フィードバック
- 第13回：博士論文のドラフト修正1
- 第14回：博士論文のドラフト修正2とまとめ

履修上の注意

特になし。

準備学習（予習・復習等）の内容

各自、自分のペースで執筆すること。こまめに進捗状況を報告することが望ましい。

教科書

それぞれのテーマにそった内容で選定する。

参考書

授業内で紹介する。

成績評価の方法

授業内レポート(30%)論文ドラフト(70%)

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

この授業は社会理論、社会哲学、思想を専門分野とする博士論文の準備と完成のための指導のために開講される。したがって、授業では論文のための文献紹介と講読、文章の作成とそれに対する評価と指導という、包括的な内容を含んでいる。

最終的には、博士論文の完成を目的とするが、それまでの中間段階として諸学会の年報などへの執筆と投稿の準備も行う。

授業内容

- 1 研究計画の吟味と方向性の確認 その1
- 2 研究計画の吟味と方向性の確認 その2
- 3 博士論文に関連する先行研究調査 その1
- 4 博士論文に関連する先行研究調査 その2
- 5 主要関連文献の講読 その1
- 6 主要関連文献の講読 その2
- 7 主要関連文献の講読 その3
- 8 主要関連文献の講読 その4
- 9 主要関連文献の講読 その5
- 10 主要関連文献の講読 その6
- 11 主要関連文献の講読 その7
- 12 研究計画の再検討 その1
- 13 研究計画の再検討 その2
- 14 まとめと今後の計画の検討

履修上の注意

おもに文献調査と講読を積み重ねていながら、研究計画をたしかなものにしていく。
それと同時に、論文の執筆と指導を重ねる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、資料を作成して、報告する形を取る。

教科書

個人のテーマにそった内容で選定する。

参考書

授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

基本的に授業時間内で行うが、場合によってはOh-o! Meijiを用いて行う。

成績評価の方法

それぞれの課題と博士論文に向けた進捗度合で成績評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 真也	

授業の概要・到達目標

この授業は社会理論、社会哲学、思想を専門分野とする博士論文の準備と完成のための指導のために開講される。したがって、授業では論文のための文献紹介と講読、文章の作成とそれに対する評価と指導という、包括的な内容を含んでいる。

最終的には、博士論文の完成を目的とするが、それまでの中間段階として諸学会の年報などへの執筆と投稿の準備も行う。

授業内容

- 1 研究計画の吟味と方向性の確認 その1
- 2 研究計画の吟味と方向性の確認 その2
- 3 博士論文に関連する先行研究調査 その1
- 4 博士論文に関連する先行研究調査 その2
- 5 主要関連文献の講読 その1
- 6 主要関連文献の講読 その2
- 7 主要関連文献の講読 その3
- 8 主要関連文献の講読 その4
- 9 主要関連文献の講読 その5
- 10 主要関連文献の講読 その6
- 11 主要関連文献の講読 その7
- 12 研究計画の再検討 その1
- 13 研究計画の再検討 その2
- 14 まとめと今後の計画の検討

履修上の注意

おもに文献調査と講読を積み重ねていながら、研究計画をたしかなものにしていく。
それと同時に、論文の執筆と指導を重ねる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、資料を作成して、報告する形を取る。

教科書

個人のテーマにそった内容で選定する。

参考書

授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

基本的に授業時間内で行うが、場合によってはOh-o! Meijiを用いて行う。

成績評価の方法

それぞれの課題と博士論文に向けた進捗度合で成績評価する。

その他

博士後期課程

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 第1回：博士論文に関連する先行研究整理 その1
- 第2回：博士論文に関連する先行研究整理 その2
- 第3回：博士論文作成に関する主要関連文献リストの作成
- 第4回：主要関連文献の講読 その1
- 第5回：主要関連文献の講読 その2
- 第6回：主要関連文献の講読 その3
- 第7回：主要関連文献の講読 その4
- 第8回：博士論文作成に関する資料の検討 その1
- 第9回：博士論文作成に関する資料の検討 その2
- 第10回：方法論に関する関連文献の講読 その1
- 第11回：方法論に関する関連文献の講読 その2
- 第12回：方法論に関する関連文献の講読 その3
- 第13回：総括 その1
- 第14回：総括 その2

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) COM722J			
人間・コミュニケーション系	備考	2024年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授		蛭川 立

授業の概要・到達目標

博士前期課程の指導体制を継承し、「情報・社会」「メディア・文化」「人間・コミュニケーション」の3つのテーマ・カテゴリーが協働した学域横断的な指導体制と、「研究プロジェクト」を軸とする協働・創発型の研究体制をとる。「情報コミュニケーション学」という視座で、多面的なアプローチを行いながら、博士論文提出に主眼を置いた研究指導を行う。

また、博士後期課程においては前期課程にもまして「情報コミュニケーション学」というディシプリンの確立への協働的貢献が求められる。すなわち学生は、1つには現行の諸プロジェクトへのコアメンバーとしての積極的な参加という形で、また1つには自らの新規プロジェクトの立ち上げという形で「情報コミュニケーション学」の発展に寄与することとなる。

授業内容

- 第1回：博士論文執筆に関する心構え
- 第2回：博士論文作成に関する指導 その1
- 第3回：博士論文作成に関する指導 その2
- 第4回：博士論文作成に関する指導 その3
- 第5回：博士論文作成に関する指導 その4
- 第6回：博士論文中間報告 その1
- 第7回：博士論文中間報告 その2
- 第8回：博士論文執筆に関する注意 その他 その1
- 第9回：博士論文執筆に関する注意 その他 その2
- 第10回：博士論文執筆最終報告 その1
- 第11回：博士論文執筆最終報告 その2
- 第12回：総括 その1
- 第13回：総括 その2
- 第14回：今後の課題

履修上の注意

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究を進め、論文にまとめていくためには、つねに履修者自身の問題意識を明確にするように努めなければならない。

教科書

特に定めない。

参考書

特に定めない。

成績評価の方法

博士論文に向けた進捗度合を評価する。

その他

科目ナンバー：(IC) IND716J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ〔M〕		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	大黒岳彦、今村哲也、清原聖子、塚原康博、阿部力也、鈴木健人、島田剛、竹中克久、須田 努、波照間永子、高馬京子、横田貴之、山口生史、石川幹人、鈴木 健、施利平、根橋玲子、宮本真也、蛭川 立		

授業の概要・到達目標

本授業は博士後期課程在學生を対象とする。授業の到達目標は、博士論文作成および、学外の学会において学際的研究を展開できる能力を養成することである。

授業内容

情報コミュニケーション研究科の特性を活かした講義とカンファレンスとする。学際性を学ぶのはもちろんのこと、欧州・米国で展開されている情報コミュニケーション学の視座を識るとともに、新しい研究方法を幅広く学び、さらに論文を作成するうえでの倫理規範、研究を進めるうえでの資金獲得など、研究者としてのキャリアを形成するうえで不可欠な実践的な知見を獲得することを目指す。

1. オリエンテーション (リアルタイム配信)
2. 当該分野の専門家による講座Part.1 (1) (リアルタイム配信)
3. 当該分野の専門家による講座Part.1 (2) (リアルタイム配信)
4. 当該分野の専門家による講座Part.1 (3) (リアルタイム配信)
5. 当該分野の専門家による講座Part.2 (1) (リアルタイム配信)
6. 当該分野の専門家による講座Part.2 (2) (リアルタイム配信)
7. 当該分野の専門家による講座Part.2 (3) (リアルタイム配信)
8. 当該分野の専門家による講座Part.3 (1) (リアルタイム配信)
9. 当該分野の専門家による講座Part.3 (2) (リアルタイム配信)
10. 当該分野の専門家による講座Part.3 (3) (リアルタイム配信)
11. 当該分野の専門家による講座Part.4 (1) (リアルタイム配信)
12. 当該分野の専門家による講座Part.4 (2) (リアルタイム配信)
13. 当該分野の専門家による講座Part.4 (3) (リアルタイム配信)
14. まとめ (リアルタイム配信)

ただし、各パートの回数および構成は変更される場合がある。具体的なスケジュールはオリエンテーション等で提示する。

履修上の注意

授業形態は、毎月第2・第4金曜日の5時限と6時限の連続講義とする。専門分野が異なる学際研究であるが、議論を深化させるため、報告予定者(教員・院生)は報告1週間前に報告概要(400字程度)を出席者全員に配布しなければならない。以上は、あくまでも予定であり、メンバー人数、構成によって変化する。

本授業は、メディア授業であり、Zoomによるリアルタイム配信で行われる。Zoomのミーティング情報はOh-ol Meijiのグループで通知するので、確認すること。教員への質問・相談窓口として、専用メールアドレスを履修者に通知する。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。Zoomのレコーディング機能により、動画も活用できるため、復習に役立ててほしい。報告内容は事前に連絡すること。

教科書

その都度紹介する。

参考書

その都度紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

院生の報告内容と議論への参加を教員全員で評価する。(プレゼン50% カンファレンス企画20% 議論参加30%)

その他

科目ナンバー：(IC) IND716J			
人間・コミュニケーション系	備考		
科目名	情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ〔M〕		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	大黒岳彦、今村哲也、清原聖子、塚原康博、阿部力也、鈴木健人、島田剛、竹中克久、須田 努、波照間永子、高馬京子、横田貴之、山口生史、石川幹人、鈴木 健、施利平、根橋玲子、宮本真也、蛭川 立		

授業の概要・到達目標

本授業は博士後期課程在學生を対象とする。授業の到達目標は、博士論文作成および、学外の学会において学際的研究を展開できる能力を養成することである。

授業内容

情報コミュニケーション研究科の特性を活かした講義とカンファレンスとする。学際性を学ぶのはもちろんのこと、欧州・米国で展開されている情報コミュニケーション学の視座を識るとともに、新しい研究方法を幅広く学び、さらに論文を作成するうえでの倫理規範、研究を進めるうえでの資金獲得など、研究者としてのキャリアを形成するうえで不可欠な実践的な知見を獲得することを目指す。

1. オリエンテーション (リアルタイム配信)
2. 当該分野の専門家による講座Part.1 (1) (リアルタイム配信)
3. 当該分野の専門家による講座Part.1 (2) (リアルタイム配信)
4. 当該分野の専門家による講座Part.1 (3) (リアルタイム配信)
5. 当該分野の専門家による講座Part.2 (1) (リアルタイム配信)
6. 当該分野の専門家による講座Part.2 (2) (リアルタイム配信)
7. 当該分野の専門家による講座Part.2 (3) (リアルタイム配信)
8. 当該分野の専門家による講座Part.3 (1) (リアルタイム配信)
9. 当該分野の専門家による講座Part.3 (2) (リアルタイム配信)
10. 当該分野の専門家による講座Part.3 (3) (リアルタイム配信)
11. 当該分野の専門家による講座Part.4 (1) (リアルタイム配信)
12. 当該分野の専門家による講座Part.4 (2) (リアルタイム配信)
13. 当該分野の専門家による講座Part.4 (3) (リアルタイム配信)
14. まとめ (リアルタイム配信)

ただし、各パートの回数および構成は変更される場合がある。具体的なスケジュールはオリエンテーション等で提示する。

履修上の注意

授業形態は、毎月第2・第4金曜日の5時限と6時限の連続講義とする。専門分野が異なる学際研究であるが、議論を深化させるため、報告予定者(教員・院生)は報告1週間前に報告概要(400字程度)を出席者全員に配布しなければならない。以上は、あくまでも予定であり、メンバー人数、構成によって変化する。

本授業は、メディア授業であり、Zoomによるリアルタイム配信で行われる。Zoomのミーティング情報はOh-ol Meijiのグループで通知するので、確認すること。教員への質問・相談窓口として、専用メールアドレスを履修者に通知する。

準備学習(予習・復習等)の内容

指摘した内容につき復習を行うこと。Zoomのレコーディング機能により、動画も活用できるため、復習に役立ててほしい。報告内容は事前に連絡すること。

教科書

その都度紹介する。

参考書

その都度紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内にフィードバックを行う。

成績評価の方法

院生の報告内容と議論への参加を教員全員で評価する。(プレゼン50% カンファレンス企画20% 議論参加30%)

その他

交通遅延発生時の授業等の措置について

	<p>緊急時には、Oh-o! Meiji システム又は本学ホームページ等でお知らせを配信しますので、必ず確認するようにしてください。</p>
1 悪天候等により大規模な交通遅延が予想される場合	<p>悪天候等により、授業日に大規模な交通遅延が予想され、授業の臨時休講等の特別な措置を講じる場合には、当該授業開始時間の3時間前までを目途に、本学ホームページ・Oh-o! Meijiシステムを通じてお知らせします。</p>
2 本学への通学における主要交通機関に遅延が生じた場合	<p>本学の各キャンパスへの通学における主要路線に大規模な遅れや運休が生じた場合は、急遽特別な措置を講じる場合があります。その場合には、本学ホームページ・Oh-o! Meijiシステムを通じてお知らせします。</p> <p>なお、自身が利用する交通機関の遅延により、授業を遅刻または欠席せざるを得なかった場合は、交通機関にて遅延証明書等を入手したうえで、各授業担当教員にご相談ください。</p>

大規模地震等災害発生時の対応について

1 大規模地震発生時の行動	<p>授業中に大規模地震が発生した場合は、あわてず次のような安全行動をとり、館内放送の指示に従ってください。本学の建物は耐震建築又は耐震補強がなされており、容易に倒壊することはないと想定しています。</p> <p>(1) 地震発生時の行動</p> <p>身の安全を図り、揺れがおさまるまで次の事項に留意し、冷静に行動してください。(大きな地震でも1～2分で揺れはおさまります。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机の下に隠れる、衣類や鞆等で頭を覆う等の安全行動をはかり、落下物から身を守ってください。 ・自動販売機、ロッカー等は倒れたり、窓ガラスが割れたりすることでケガをする恐れがあるため、近寄らないでください。 <p>(2) 地震直後の行動</p> <p>大きな地震の後には、必ず余震が来るとおぼやかしてください。余震を念頭におきながら、次の事項に留意し、冷静に行動してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・余震に注意し、避難口を確保してください。避難口確保の際は、各教室に備え付けのドアストッパーを利用してください。あわてて外に出るとかえって危険な場合があります。 ・ガスの元栓・コンセント等、火の元を確認してください。出火した場合は、消火器等を利用した初期消火活動を行うとともに、最寄りの防災センター・守衛所に連絡してください。 ・教室内の安全を確認してください。 <p>(3) 地震後の行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傷病者がいる場合、最寄りの防災センター・守衛所に連絡してください。 ・教室内の安全の再確認及び周囲の状況の確認をしてください。
---------------	--

(4) 避難行動

- ・地震が発生しても身近に危険がなければ避難する必要はありません。しかし、館内や近隣での火災、壁に大きな亀裂が入るなど躯体への影響が懸念される場合、薬品漏出、実験機器転倒の恐れ等がある場合には、屋外へ避難することになります。その際は、館内放送の指示に従い、教員・職員の誘導により、各建物ごとに指定された「一時集合場所」へ移動してください。
- ・授業中の場合は、授業の受講者単位で移動してください。
- ・傷病者や身体障がい者の避難をサポートしてください。
- ・屋外に避難する時は、衣類や持ち物で頭を覆い、落下物から身を守ってください。地面の亀裂や陥没、隆起及び塀や電柱の倒壊に注意してください。
- ・避難には必ず階段を利用し、エレベーター及びエスカレーターは使用しないでください。
- ・各キャンパスの一時集合場所は、明治大学HP内にある「明治大学防災ガイド」(<https://www.meiji.ac.jp/koho/disaster/guide/index.html>)を確認してください。

(5) 帰宅困難対策について

大規模地震が発生した場合、交通機関が麻痺し帰宅困難となる場合があります。無理に帰宅せず、大学施設等の安全な場所に留まるようにしてください。なお、大学では、非常用の食料等を備蓄しています。

2 火災発生時の対応

(1) 火災を発見した場合の行動

- ・大声で「火事だ」と叫び、周りの人に知らせてください。
- ・最寄りの防災センター・守衛所・事務室に連絡してください。
- ・消火栓の火災報知器ボタンを押してください。
- ・消火できそうな火災は、消火器等を利用して初期消火にあたってください。

(2) 初期消火のポイント

- ・炎や煙に惑わされず、燃えているものを確かめてください。
- ・燃えているものに適した消火器等を使用し、適切な距離(3~5m)から消火してください。
- ・出来るだけ多くの人で消火器等を集めて、一気に消火してください。
- ・2か所以上から同時に出火していたら、人命に影響を及ぼす場所の消火を優先してください。

(3) 避難行動

- ・煙が発生した場合には、姿勢を低くし、ハンカチを口と鼻にあてるなどして煙を吸わないようにしてください。
- ・建物内で火災が発生した場合、その煙・熱等で感知器が作動し、自動で防火戸・防火シャッターが閉鎖します。避難する前に防火戸が閉まった場合は、避難方向に出られるよう開けられます。
- ・防火戸・防火シャッターが自動で閉鎖しない場合は、煙の拡散を防ぐために必ず手動で閉めるようにしてください。
- ・避難には必ず階段を利用し、エレベーター及びエスカレーターは使用しないでください。

3 災害発生時の連絡方法

- (1) 非常時には、電話線の切断、故障、電話パニック等のため、電話がつながりにくくなります。また、大学では家族から学生の安否の問い合わせがあっても、個別の確認には即座に対応できないことがあります。普段から、非常時の連絡方法について、家族、友人又はクラス・ゼミ単位で話し合っておいてください。(遠方の親戚や友人を安否確認の中継点にする・伝言ダイヤル・災害用伝言板・Google パーソンファインダー、J-anpi 等を利用するなど。)
- (2) 大学からの情報の伝達・安否確認については地震発生後、体制が整い次第、HP 及び所属の学部事務室等から「Oh-o! Meiji システム」を通じてお知らせしますので、その指示に従ってください。

また、補助的手段として、Twitter からも情報発信を行います。以下の大学のアカウントをフォローしておくことをお勧めします。

明治大学公式アカウント (@Meiji_Univ_PR)

《参考》

・災害発生時の公衆電話・

災害が発生し、加入電話の発信が規制されると、緊急通報(119)も含めて電話がかかりにくくなります。そうした時は、比較的公衆電話がつながるようです。あらかじめ公衆電話がどこにあるか確かめておきましょう。災害救助法が適用される規模の災害が発生した際に運用されますが、電力会社からの送電が止まっても、NTT回線がつながっていれば、無料で電話がかけられます。

4 平常時の備え

- (1) 大学HPに掲出の「明治大学防災ガイド」には避難マニュアル、避難場所、備蓄品、帰宅困難時の対応、応急手当など災害時に必要な情報が載っています。必ず確認をしてください。
- (2) 非常時に備え、避難経路、避難先等を確認しておいてください。避難路(通路、階段等)には物を置かないようにし、出入口周辺のロッカー、戸棚等の転倒防止などを実施してください。また、落下物防止の観点から、ロッカー、戸棚等の上には物を置かないようにしてください。
- (3) 火災の発生に備え、消火器・消火栓の位置、使用方法を確認しておいてください。
- (4) 実験室や研究室では化学薬品や発火物等の危険物の安全対策を施してください。
- (5) 応急手当の方法を身につけてください。また、機会を見つけて防災訓練、救急救命訓練等に参加してください。

大規模地震発生時の避難マニュアル (駿河台キャンパス) 【学生用】

大規模地震発生時の初動マニュアル

地震発生時の行動

- (1) **身の安全の確保！(落下物に注意)**
机の下などへ！書棚・ロッカー等の備品から離れる。

地震直後の行動

- (1) **余震に注意**
天吊りプロジェクターやガラスからは離れる。
- (2) **火の元確認。初期消火！**
出火した時は、落ち着いて消火活動と各建物の防災センター／守衛所に通報する。
- (3) **避難口の確保、避難場所の確認**
出入口等を開け、逃げ道を確保する。
あわてて外部に出るとかえって危険な場合がある。
- (4) **館内放送に注意、その指示に従う。**
- (5) **教室の安全を確認**
声をかける、傷病人がいないか確認する。

地震後の行動

- (1) **館内放送の指示に従う。**
- (2) **教室の安全を再確認**
傷病人がいないか再度確認し、いた場合は、各建物の防災センター／守衛所に通報する。
- (3) **周囲の状況を確認する。**
火の元を確認する。

以下、大規模地震発生時の避難フローへ

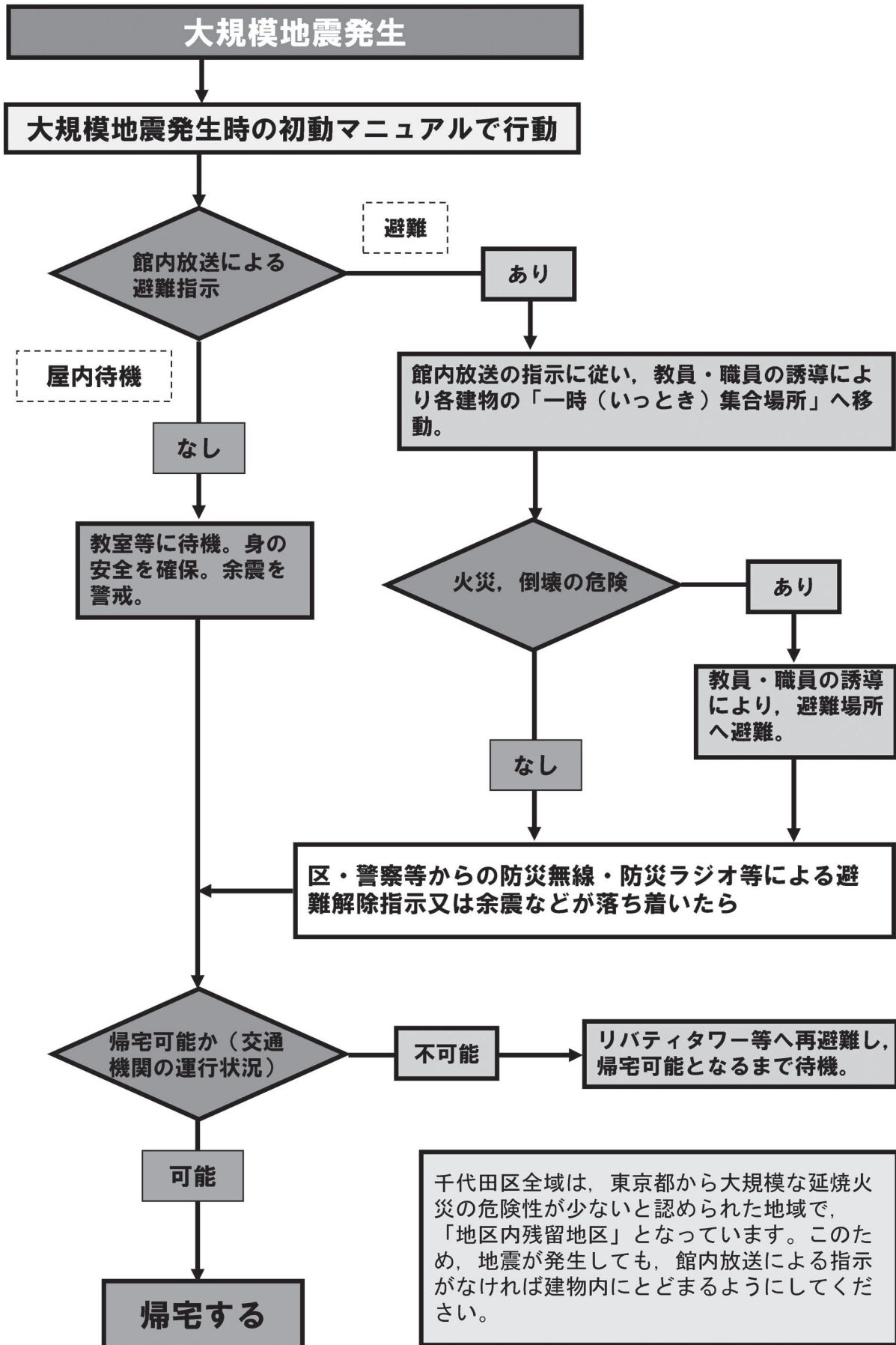
緊急連絡先：

リバティタワー防災センター (03-3296-4445)

アカデミーコモン防災センター (03-3296-4498)



大規模地震発生時の避難フロー



大規模地震発生時にはこうしよう

【日常的な備え】

教室内に、①大地震・火災が発生した場合の対応、②避難経路図を掲出していますので確認してください。リビティタワーやアカデミーコモンの非常用エレベーター付近の消火栓扉内には、防災センターに通じる非常電話を設置しています。教室内の電話と併せて確認してください。

【地震時の心構え】—落ち着いて行動—

地震時の生命の危険性は、発生した瞬間とその後に起こる火事にあると言われています。大きな揺れでも1～2分です。まずは、身の安全を確保して、落ち着いて行動をしてください。本学の建物は、耐震建築又は耐震補強がなされており、建物が容易に倒壊するということはないと想定しています。

【地震発生時の行動】—身の安全確保— <自助>

落下物や転倒物から身の安全を確保するため、机の下に隠れたり、天吊りプロジェクター、窓ガラス、自動販売機、ロッカーなどから離れるようにしてください。

【地震直後の行動】—避難口の確保と火の始末—

小さな揺れのおきや大きな揺れがおさまったときに、出入口を開けて避難口を確保するとともに、速やかに火の始末を行ってください。

【地震後の行動】—状況確認と救出・消火— <共助>

余震に注意しながら、周りの状況を確認し、傷病人等助けを必要とする人や、火災を発見したら、周りの人と協力して対応するとともに、最寄りの事務室や防災センター／守衛所にも連絡をしてください。（事務室等から119番通報します。）消火の際は、身の安全を第一に考え、消火器では消えないような火災のときは、無理に消そうとせず、直ちに避難してください。

【エレベーター】

大きな地震の時は最寄り階に止まるように設定されていますが、乗っているときに地震に気づいた際は、全ての階のボタンを押して、停止した階で降りてください。また、万が一、降りられなくなったら、エレベーター内の非常ボタンを数秒間押して警備員に連絡した後、エレベーター保守業者による救助を待ってください。（閉じ込めの発生しているエレベーターは業者の最優先対応となります。）

【屋外避難】

地震が発生しても、身近に危険がなければ避難する必要はありません。しかし、館内や近隣の火災や、壁に大きな亀裂が走るなど躯体への影響が懸念される場合には、屋外へ避難することになります。その際は、館内放送の指示に従い、教員・職員の誘導により各建物で指定する「一時（いっとき）集合場所」へ移動してください。その後、千代田区指定の避難場所へ移動します。なお、授業中に地震が発生した場合は、授業単位で避難するようにしてください。

※駿河台キャンパスでは、原則、大きな揺れがあった際は、各建物の防災センター／守衛所から館内放送を行います。（なお、猿楽町第五校舎は館内放送設備がないためハンドマイク等で対応します。）

【本学の一時（いっとき）集合場所の指定】

各建物の一時集合場所は、原則として次のように指定します。ただし、状況に応じて変更することもありますので、館内放送に注意してください。

- リビティタワー、研究棟、大学会館、12号館、紫紺館、10号館
⇒リビティタワー（低層階教室）
- アカデミーコモン⇒A1～A6会議室（2階）
- グローバルフロント⇒グローバルホール、多目的室（1階）
- 14号館、猿楽町校舎⇒猿楽町第一校舎グラウンド

【千代田区内の避難場所】

千代田区は、全域が東京都の調査により建物の不燃化が進み、大規模な延焼火災の危険性が少ないと認められた地域のため、「地区内残留地区」となっています。このため、地震発生の際はすぐに避難を開始するのではなく、建物内にとどまり、被災状況を把握し、万が一危険を感じた場合は、に避難することとなっています。

本学では、千代田区内で指定された、「災害時退避場所」のうち、次の場所を「避難場所」とします。

- ①北の丸公園、②皇居東御苑、③皇居外苑

※避難時には、①～③のいずれかを指定し、館内放送、避難誘導により周知します。

【大学からの情報の伝達・安否確認】

地震発生後、体制が整い次第、大学HP及び所属の学部事務室から「Oh-o!Meiji システム」を通じてお知らせします。その際に大学への安否連絡方法もお知らせしますので、その指示に従って御連絡ください。Twitter(公式アカウント@Meiji_Univ_PR)でも情報発信を行います。

一時集場所

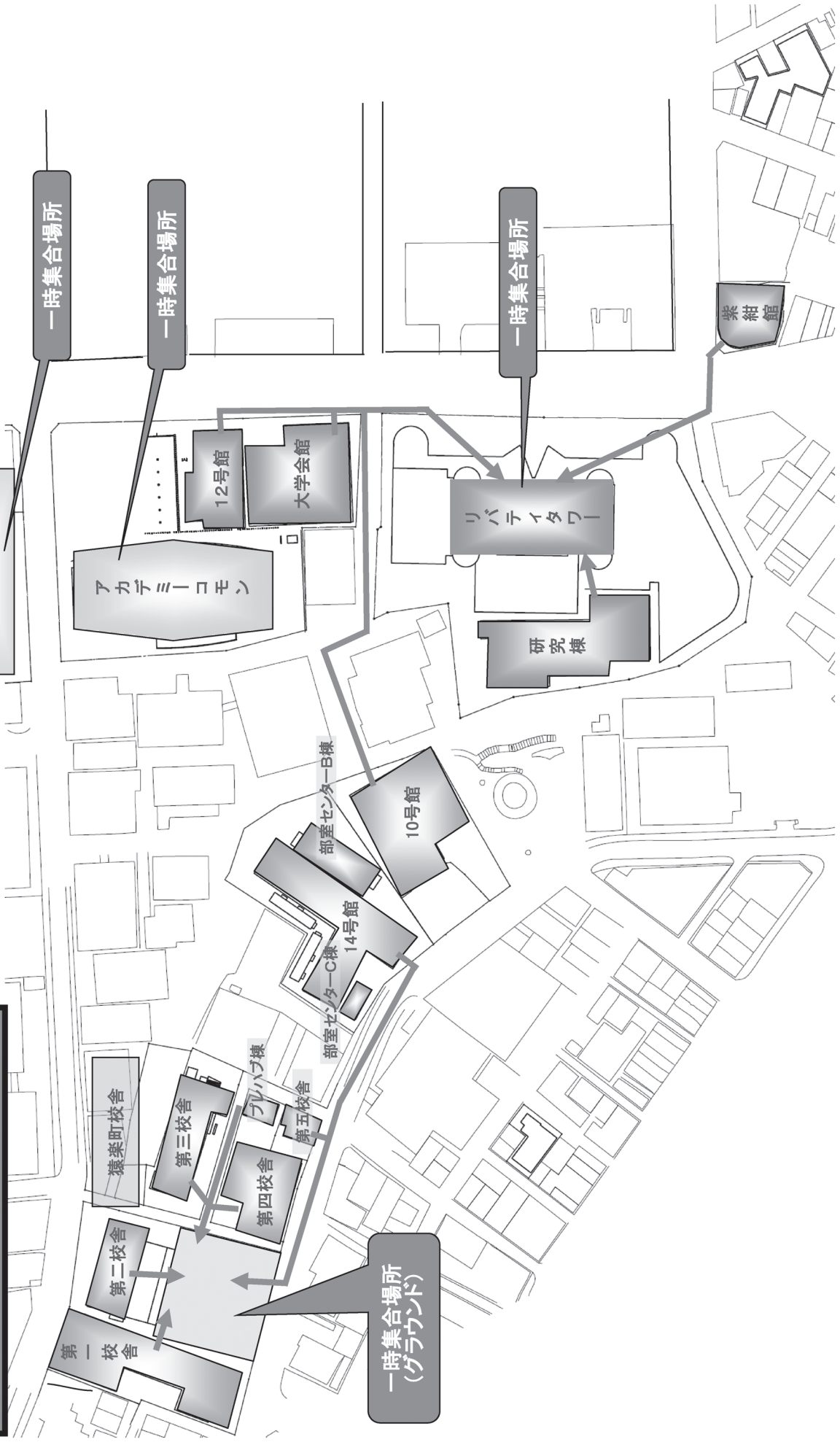
グローバルフロント

一時集場所

一時集場所

一時集場所

一時集場所
(グラウンド)



明治大学大学院
情報コミュニケーション研究科 ☎03-3296-4285

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1
明治大学大学院事務室